志木市遺跡調査会調査報告第4集

城山遺跡発掘調査報告書

1988

埼玉県志木市遺跡調査会

航空写真（北より）

はじめに

志木市遺跡調査会
会長　金子庄三

志木市は埼玉県の南東部に位置し、首都圏まで25km以内という距離にあるため、住宅建設をはじめとした開発行為が非常に多い地となっています。

ところで、市域を流れる荒川・新河岸川・柳瀬川に面した台地縁辺上には、埋蔵文化財の包蔵地が少なからず存在し、様々な開発行為により消滅の危機にさらされており、これを保護することが文化財行政の急務となっています。

今回、ここに報告する城山遺跡の発掘調査も、このような開発行為に対処するための記録保存を目的として実施されたもので、古墳時代後期の住居址群や「柏の城」の外堀と思われる遺構の検出をはじめとして多大な成果をあげることができました。

さて、本発掘調査は志木市遺跡調査会としてははじめてのことであり、経験不足のため事前協議の段階から発掘調査の終了まで、様々な問題に遭遇し何とかそれに対処してきたというような調査でした。今後この経験を十分に生かして埋蔵文化財の保護にあたっていきたいと考えています。

ともあれ、ここに城山遺跡の発掘調査報告書を刊行できましたのは、多くの方々のご援助があったからに外なりません。特になにかとご指導いただいた埼玉県教育局指導部文化財保護課・志木市文化財保護委員会、長い期間ご協力をいただいた名鉄不動産株式会社・株式会社長谷川工務店、調査に深いご理解を示していただいた近隣住民の皆様には深く感謝する次第です。

最後に、本書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、郷土の歴史研究のために活用されることができましたら幸いに思います。

例　　言

1．本書は、埼玉県志木市柏町3丁目に所在する城山遺跡（No.09－3）の発掘調査報告書である。

2．本遺跡は、当初中世の城館址といわれる『柏の城』を遺跡名とした。しかし、遺跡が縄文・弥生・古墳・平安の各時代を含む複合遺跡であることや、遺跡の範囲が『柏の城』跡外にも広がっている点など、その実状と遺跡名との間に異同が生じてきた。そのため、今後城館址も含めた遺跡全体を、小字名である『城山』の名を冠して遺跡名とする。

3．発掘調査は、志木市教育委員会の斡旋により、名鉄不動産株式会社から志木市遺跡調査会が委託を受け、昭和60年4月13日から同年11月30日まで実施した（昭和58年委保第5の1286号）。

4．調査地点の地番及び面積は、以下のとおりである。

地番　埼玉県志木市柏町3丁目2648の1・2648の8～12・2649・2652・2653。

面積　4964.39㎡。

5．本書の作成・編集は志木市遺跡調査会で行い、執筆は以下の者があたった。また、中・近世の陶磁器については、浅野晴樹氏の玉稿を賜った。

第Ⅰ章　佐々木保俊

第Ⅱ章第1節　佐々木・尾形則敏、第2～4節　尾形

第Ⅲ章第1・3～5節　佐々木、第2節　尾形　第6節　神山健吉

6．挿図版の作成は佐々木・尾形が行ったが、小俣暁子・竹内順子・深井恵子・宮澤ゆかりが加わった。

7．本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版・附図の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水糸レベルは、海抜標高を示す。また、ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。

○遺構挿図版中のドットは、遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

H＝住居址、D＝土坑、W＝井戸址、M＝溝址

8．発掘調査から調査報告書作成までには、以下の諸機関・諸氏にご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局指導部文化財保護課・志木市教育委員会・志木市史編さん室・志木市立郷土資料館・志木市文化財保護委員会・志木市立志木第三小学校・中央航業株式会社（航空写真提供）

会田　明・浅野晴樹・浅野光洋・麻生　優・荒井幹夫・飯田充晴・市毛　勲・井上洋一・岩瀬譲・梅沢太久夫・小野義信・大石　謙・岡本東三・織笠　昭・片平雅俊・金子直行・栗島義明・栗原文蔵・小出輝雄・小久保徹・小滝　勉・小渕良樹・小宮恒雄・後藤和民・肥沼正和・斉藤　稔・斉藤祐司・坂爪久純・笹森健一・斯波　治・塩野　博・白石浩之・実川順一・鈴木加津子・鈴木重信・田代　隆・田中英司・高橋　敦・谷井　彪・坪田幹男・戸倉茂行・中島岐視生

中村倉司・並木　隆・根本　靖・早川　泉・細野高伯・増田逸朗・松本富雄・宮崎朝雄

9．調査組織

役　員　会　長　金子庄三（志木市教育委員会教育長）

副会長　市之瀬昭太郎（志木市教育委員会事務局長）（～昭和59年9月）

斉藤昭吉（志木市教育委員会事務局次長）（昭和59年10月～）

理　事　萩元家義（志木市文化財保護委員会委員長）（～昭和61年3月）

神山健吉（　　〃　　）（昭和61年4月～）

井上国夫（志木市文化財保護委員会副委員長）

根岸正文（志木市文化財保護委員）

宮野和明（　　〃　　）

尾崎征男（　　〃　　）（昭和61年4月～）

理事兼事務局長　大熊謙次（志木市教育委員会社会教育課長）（～昭和59年3月）

内田喜久男（　　〃　　）（～昭和60年9月）

白砂正明（　　〃　　）（昭和60年10月～）

監　事　田中義二（志木市教育委員会社会教育指導員）

服部一次（志木市立郷土資料館長）（～昭和62年3月）

新井昭一（　　〃　　）（昭和62年4月～）

事務局　清水孝平（社会教育課長補佐）（～昭和62年3月）

鈴木重光（社会教育課主査）（～昭和61年3月）

山中政市（社会教育係長）（昭和62年4月～）

下阿辺信行（社会教育課）（昭和61年4月～）

佐々木保俊（　　〃　　）（昭和61年4月～）

岩崎香代子（　　〃　　）

尾形則敏（　　〃　　）（昭和62年4月～）

10．発掘調査及び整理作業参加者

発掘調査補助員

真保昌弘

発掘調査協力員

秋葉典子・厚沢邦子・新井潤子・荒井信行・荒田昭恵・五十嵐泉・石塚祐子・池田久枝・伊東敏美・井上始子・伊野部三千子・今井久子・岩崎司郎・岩本宣人・牛木金四郎・内田　一・内田八重子・遠藤清造・大井よし子・大熊茂広・大滝喜久江・岡崎夢代・荻原和江・小沢八重子・忍　幹夫・笠原博子・加藤弥生・金井静子・金田光子・川島一浩・川村順一郎・川畑弘司・菊地美智子・岸福次郎・北嶋節子・木村恵美子・黒川洋子・小池佳文・小庄まゆみ・小林由起子・小林由美・小俣暁子・小室美津子・金野照子・斉藤栄美子・斉藤三代子・桜井陽子・佐藤　厚佐藤小夜子・清水加代・清水むつき・庄村利枝子・鈴木あや子・高田輝子・高野　優・高橋典子・高橋ひとみ・高橋弘子・高橋平作・田久正子・竹内順子・竹内ゆかり・田本鎮庫・筒井砂

知子・内藤郷子実・中尾信子・中川恵美子・中村則子・奈良真佐代・西田良子・日東明子・二瓶正信・萩元勝子・蜂谷志津子・服部あやの・東浦久美子・土方カツ・深井恵子・福士純子・藤田良子・藤村良子・藤原芳子・細村瑞恵・堀内美貴・堀口千恵子・本間和枝・松橋きみ・松本恒子・三浦ミサ子・三谷仁明・宮澤ゆかり、宮地和樹・村井京子・本橋枝美子・矢澤芳郎・屋代時子・矢部久三郎・山内五一・山口　浩・山科美智・山本裕崇・吉川武一・吉田勝江・吉田紀子

整理作業協力員

菊地美智子・木村恵美子・小庄まゆみ・小俣晩子・金野照子・竹内順子・田中弥生・東浦久美子・深井恵子・村井京子・宮澤ゆかり

目　　次

巻頭図版
はじめに
例　　言
目　　次
図版目次
挿図目次
附　　図
第Ⅰ章　調査の経緯……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　遺跡の立地と環境……1
　第3節　発掘調査の経過……3
第Ⅱ章　検出された遺構と遺物……5
　第1節　住居址……5
　第2節　土　坑……133
　第3節　井戸址……151
　第4節　溝　址……158
第Ⅲ章　まとめ……167
　第1節　古墳時代後期の住居址……167
　第2節　古墳時代後期の土器……171
　第3節　土坑……197
　第4節　溝址……198
　第5節　「柏の城」について……199
　第6節　宮原家から発見された尾張家御鷹場境杭について……204

図版目次

図版1　航空写真
図版2　発掘風景
図版3　（上）1・21号住居址　（下）1号住居址遺物出土状態
図版4　（上）3号住居址　（下）6号住居址
図版5　（上）14号住居址　（下）15号住居址
図版6　（上）18・19号住居址　（下）19号住居址遺物出土状態
図版7　（上）23号住居址　（下）24号住居址
図版8　（上）31・32号住居址　（下）36号住居址
図版9　（上）37号住居址　（下）38号住居址
図版10　（上）41号住居址　（下）42・43号住居址
図版11　（上）45号住居址　（下）47号住居址
図版12　（上）48・51号住居址　（下）48号住居址遺物出土状態
図版13　（上）49号住居址　（下）54号住居址
図版14　（上）56号住居址　（下）56号住居址遺物出土状態
図版15　（上）57号住居址　（下）60号住居址
図版16　（上）1号土坑　（下）10号土坑
図版17　（上）16号土坑　（下）17号土坑
図版18　（上）18号土坑　（下）19号土坑
図版19　（上）20号土坑　（下）20号土坑主体部
図版20　（上）21号土坑　（下）27号土坑
図版21　（上）28号土坑　（下）31号土坑
図版22　（上）1号井戸址　（下）2号井戸址
図版23　（上）1号溝址（E—3グリッド）　（下）1号溝址（E—10グリッド）
図版24　（上）3号溝址　（下）3号溝址
図版25　1号住居址出土遺物
図版26　3・5～9号住居址出土遺物
図版27　11・12号住居址出土遺物
図版28　14～17号住居址出土遺物
図版29　18・19住居址出土遺物
図版30　19号住居址出土遺物
図版31　20～23号住居址出土遺物
図版32　24・25・29～32号住居址出土遺物
図版33　34・35・37・38・41号住居址出土遺物

図版34　42～44号住居址出土遺物
図版35　45～48号住居址出土遺物
図版36　48～50号住居址出土遺物
図版37　51・53号住居址出土遺物
図版38　54・56号住居址出土遺物
図版39　56・58～60号住居址出土遺物
図版40　15・18・24・37・43・54号住居址出土遺物
図版41　1・19・20・28号土坑、1号井戸址、1・5号溝址出土遺物
図版42　3・10・20・28号土坑、2号井戸址出土遺物
図版43　3・4・6・7・9号井戸址出土遺物
図版44　1・3・5号溝址出土遺物
図版45　17・27・31号土坑、1号溝址出土遺物
図版46　19号土坑、1・6・7号井戸址、1号溝址出土遺物
図版47　18・28号土坑出土遺物
図版48　御鷹場境杭及び石柱

挿図目次

第1図　周辺の遺跡（1/30000）……2
第2図　発掘地点と周辺の地形（1/5000）…3
第3図　1号住居址（1/60）……7
第4図　1号住居址出土遺物1（1/4）……9
第5図　1号住居址出土遺物2（1/4）……11
第6図　3号住居址（1/60）……13
第7図　3号住居址出土遺物1（1/4）……15
第8図　3号住居址出土遺物2（1/4）……16
第9図　5・7号住居址（1/60）……17
第10図　5号住居址出土遺物（1/4）……18
第11図　6号住居址（1/60）……19
第12図　6号住居址出土遺物（1/4）……22
第13図　7号住居址出土遺物（1/4）……22
第14図　8・28号住居址（1/60）……23
第15図　8号住居址出土遺物（1/4）……24
第16図　9号住居址（1/60）……25
第17図　9号住居址出土遺物（1/4）……25
第18図　10・11・20号住居址、2～5号土坑
　　2号溝址（1/60）……27
第19図　11号住居址出土遺物（1/4）……29
第20図　12号住居址（1/60）……30
第21図　12号住居址出土遺物（1/4）……31
第22図　13号住居址（1/60）……32
第23図　14号住居址（1/60）……33
第24図　14号住居址出土遺物（1/4）……34
第25図　15号住居址（1/60）……35
第26図　15号住居址出土遺物1（1/4）……36
第27図　15号住居址出土遺物2（1/3）……36
第28図　16号住居址（1/60）……38
第29図　16号住居址出土遺物（1/4）……39
第30図　17号住居址（1/60）……41
第31図　17号住居址出土遺物（1/4）……43
第32図　18号住居址、7号土坑（1/60）……44
第33図　18号住居址出土遺物1（1/4）……45
第34図　18号住居址出土遺物2（1/4）……46
第35図　19号住居址（1/60）……47

第36図　19号住居址出土遺物1（1/4）……48
第37図　19号住居址出土遺物2（1/4）……49
第38図　19号住居址出土遺物3（1/4）……50
第39図　20号住居址出土遺物（1/4）……54
第40図　21号住居址（1/60）……55
第41図　21号住居址出土遺物1（1/4）……56
第42図　21号住居址出土遺物2（1/4）……57
第43図　22号住居址（1/60）……59
第44図　22号住居址出土遺物（1/4）……60
第45図　23号住居址（1/60）……61
第46図　23号住居址出土遺物（1/4）……64
第47図　24号住居址（1/60）……65
第48図　24号住居址出土遺物（1/4）……68
第49図　25号住居址（1/60）……69
第50図　25号住居址出土遺物（1/4）……69
第51図　29号住居址（1/60）……70
第52図　29号住居址出土遺物（1/4）……71
第53図　30号住居址、28号土坑（1/60）……72
第54図　30号住居址出土遺物（1/4）……73
第55図　31号住居址（1/60）……74
第56図　31号住居址出土遺物（1/4）……75
第57図　32号住居址、8号井戸址(1/60)……76
第58図　32号住居址出土遺物（1/4）……77
第59図　33号住居址（1/60）……78
第60図　33号住居址出土遺物（1/4）……78
第61図　34号住居址（1/60）……79
第62図　34号住居址出土遺物（1/4）……80
第63図　35号住居址（1/60）……81
第64図　35号住居址出土遺物（1/4）……82
第65図　36号住居址（1/60）……83
第66図　36号住居址出土遺物（1/4）……85
第67図　37号住居址（1/60）……86
第68図　37号住居址出土遺物（1/4）……86
第69図　38号住居址（1/60）……87
第70図　38号住居址出土遺物（1/4）……87
第71図　40号住居址（1/60）……88
第72図　40号住居址出土遺物（1/4）……88
第73図　41号住居址（1/60）……89
第74図　41号住居址出土遺物（1/4）……92
第75図　42・43号住居址（1/60）……95
第76図　42号住居址出土遺物1（1/4）……97
第77図　42号住居址出土遺物2（1/4）……98
第78図　43号住居址出土遺物（1/4）……100
第79図　44号住居址（1/60）……102
第80図　44号住居址出土遺物（1/4）……102
第81図　45号住居址（1/60）……103
第82図　45号住居址出土遺物（1/4）……103
第83図　46号住居址（1/60）……104
第84図　46号住居址出土遺物（1/4）……105
第85図　47号住居址、29号土坑（1/60）……106
第86図　47号住居址出土遺物（1/4）……106
第87図　48・51号住居址（1/60）……107
第88図　48号住居址出土遺物1（1/4）……108
第89図　48号住居址出土遺物2（1/4）……109
第90図　49号住居址（1/60）……112
第91図　49号住居址出土遺物（1/4）……113
第92図　50号住居址（1/60）……115
第93図　50号住居址出土遺物（1/4）……115
第94図　51号住居址出土遺物（1/4）……117
第95図　53号住居址（1/60）……118
第96図　53号住居址出土遺物（1/4）……119
第97図　54号住居址（1/60）……120
第98図　54号住居址出土遺物1（1/4）……121
第99図　54号住居址出土遺物2（1/4）……122
第100図　56号住居址（1/60）……125
第101図　56号住居址出土遺物（1/4）……126
第102図　57号住居址（1/60）……127
第103図　58・59号住居址（1/60）……128
第104図　58号住居址出土遺物（1/4）……129
第105図　59号住居址出土遺物（1/4）……129
第106図　60号住居址（1/60）……130
第107図　60号住居址出土遺物（1/4）……131

第108図　土・石・鉄製品（1/3）…… 132
第109図　1・9～11号土坑（1/60）……134
第110図　12・19・21号土坑（1/60）……137
第111図　16号土坑（1/60）……138
第112図　17号土坑
　　5号井戸址（1/60）……139
第113図　18号土坑（1/60）……140
第114図　20号土坑（1/60）……143
第115図　20号土坑第1号主体部の
　　内部付属施設略図……145
第116図　22～26号土坑（1/60）……147
第117図　30号土坑（1/60）……148
第118図　31号土坑（1/60）……149
第119図　1号井戸址（1/60）……152
第120図　2号井戸址（1/60）……153
第121図　3号井戸址（1/60）……154
第122図　4号井戸址（1/60）……155
第123図　6号井戸址（1/60）……156
第124図　7号井戸址（1/60）……157
第125図　9号井戸址（1/60）……158
第126図　1・5号溝址（1/60）……159
第127図　1・3号溝址（1/60）……161
第128図　土坑・井戸址・
　　溝址出土遺物（1/4）……162
第129図　土坑出土遺物（4/5）……163
第130図　土坑・井戸址・
　　溝址出土遺物（1/3）……164
第131図　土坑出土遺物（1/4）……165
第132図　住居址の規模模式図……167
第133図　住居址群の変遷1……169
第134図　住居址群の変遷2……170
第135図　坏形土器の変遷（1/8）……172
第136図　甑形土器の変遷（1/8）……173
第137図　甕形土器の変遷（1/8）……177
第138図　甕形土器の変遷（概念図）……192
第139図　柏の城城郭図……198
第140図　1・3号溝址想定図……199
第141図　尾張家御鷹場境杭……204
第142図　石柱模式図（単位cm）……205
第143図　石柱銘文……205
第144図　武蔵野開を中心とした
　　境杭の位置関係……206

附図　遺構分布図（1/300）

表　目　次

表1　調査進行表……4
表2　住居址の規模……167
表3　柱穴間・壁一柱穴間距離……168
表4　坏にみる調整技法の推移……187
表5　甑にみる調整技法の推移……190
表6　甕にみる調整技法の推移……190

第Ⅰ章　調査の経緯

第1節　調査に至る経過

昭和56年6月、名鉄不動産株式会社（施行　株式会社長谷川工務店）から、志木市柏町3丁目2652番地他の土地の開発計画（マンション建設）に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて、志木市教育委員会（以下、教育委員会）に照会があった。

当該地域は、志木市№3遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地であり、教育委員会では開発主体者に保存措置が必要である旨を回答した。

その後、両者間で協議を行い、記録保存のための発掘調査を実施することに決定し、調査期間・調査費用などの点について合意に達した段階で、教育委員会では開発主体者に対して発掘調査にあたる組織として志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。

昭和58年9月、名鉄不動産株式会社より埋蔵文化財発掘届が提出されたため、遺跡調査会では委託契約書を取り交した後、埋蔵文化財発掘調査届を文化庁長官宛に提出した。

ところで、当該開発計画については近隣住民の反対運動があり、教育委員会ではその問題の解決を持って発掘調査を行うということで開発主体者に対し協力を要請した。

昭和60年2月、開発行為の許可がおり、同年3月には開発主体者と近隣住民との協議もほぼ合意に達したこともあり、ここに発掘調査開始の体勢が整い、4月に入り埋蔵文化財発掘調査届を再提出し、同月13日から発掘調査を開始した。

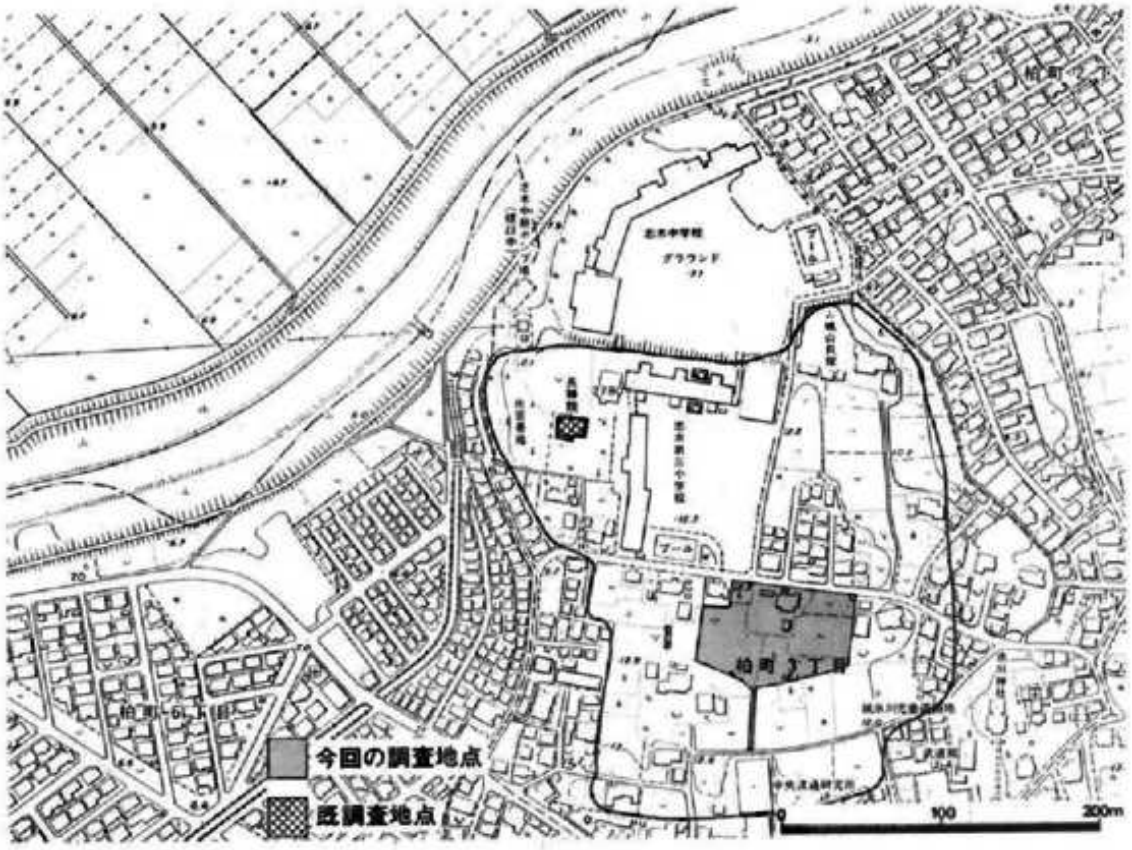
第2節　遺跡の立地と環境

志木市は埼玉県の南部に位置する。市域の地理的景観は、荒川（旧入間川水系）の形成した沖積地と洪積台地とに大きく二分される。より詳しくみると、市の北東部には南東流する荒川があり、その沖積地は市の面積の約1/2を占める。また、市の北西部には北東流する柳瀬川があり、荒川と並行して流れている新河岸川に合流する。市の南部は、荒川・柳瀬川の沖積地に挟まれるように台地が舌状に突出する。この台地は武蔵野台地の野火止支台に属し、北東方向に伸びる舌状台地の先端部にあたり、標高は奥部で19m前後、先端部で9m前後を測る。

城山遺跡は、柳瀬川を北西に臨む台地上にある。遺跡の北東には柳瀬川に直交するように浅い谷が入り込んでおり、遺跡のある部分は小規模な舌状台地となっている。遺跡を載せる台地上の標高は約12m、沖積地との比高差約5mを測る。遺跡の現況は宅地化が進んでいるが、畑地・山林を部分的に残している。

本遺跡は、過去4度の発掘調査が行われており、縄文時代前期の集落址・貝塚、弥生時代後期、古墳時代前・後期、平安時代の集落址、中世の城館址を含む複合遺跡であることが知られている（志木市史編さん室　1984・1986、佐々木　1987）。

第1図　周辺の遺跡（1/3000）



第2図　発掘地点と周辺の地形（1/5000）

ところで、発掘調査などである程度内容が明らかになっている市内の他の遺跡に目を向けてみると、柳瀬川上流域には西原大塚・新邸・中道の3遺跡がある。西原大塚遺跡は縄文時代中期、弥生時代後期の大集落址と考えられ、4地点の調査が行われている（谷井・宮野他　1975、志木市史編さん室　1984、佐々木・尾形　1985・1987）。新邸遺跡は2地点の調査が行われており、縄文時代前期及び古墳時代前期の住居址などが検出されている（佐々木・尾形　1986・1987）。中道遺跡は昭和62年に発掘調査が行われており、旧石器時代の石器集中分布地点、縄文時代中期、古墳時代後期の住居址などが発見されている。柳瀬川下流域の中野遺跡では弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代の住居址が調査されている（佐々木・尾形　1985）。

荒川の広大な沖積地を臨む台地上には富士前遺跡があるが、古くから開発が進んでいたため大部分が宅地化している。ここからは発掘調査によったものではないが、弥生時代後期の土器が一括出土している（志木市史編さん室　1984）。

第3節　発掘調査の経過

発掘調査は、昭和60年4月13日から開始した。排土置き場の関係から調査区を南北に二分し、北半から調査を始めることとした。表土削ぎは、バックホー及びブルドーザーを使用し、併行して遺構確認作業を行った。

4月15日には、（B－5）グリッドで明治時代頃まであったといわれる民家の囲炉裏跡から、江戸時代の鷹場の境杭とそれを保管するに至った経緯を記した石柱が出土した。

各遺構の調査は4月22日から開始したが重複が著しく、住居址・土坑・井戸址・溝址などが複雑に切りあっていた。住居址の大部分は鬼高式期のものであり、他の遺構は中・近世の所産であることが判明した。

8月5日からは、調査区南半の表土剝ぎにかかり、併せて（G－5）グリッド以南の道路部分の調査も開始した。住居址などの遺構は減少したが、調査区の境界にほぼ一致するように「柏の城」の外堀と思われる大規模な溝址が検出された。

11月30日には埋め戻しも完了し、発掘調査を終えた。なお、調査の進行状況は以下の表のとおりである。

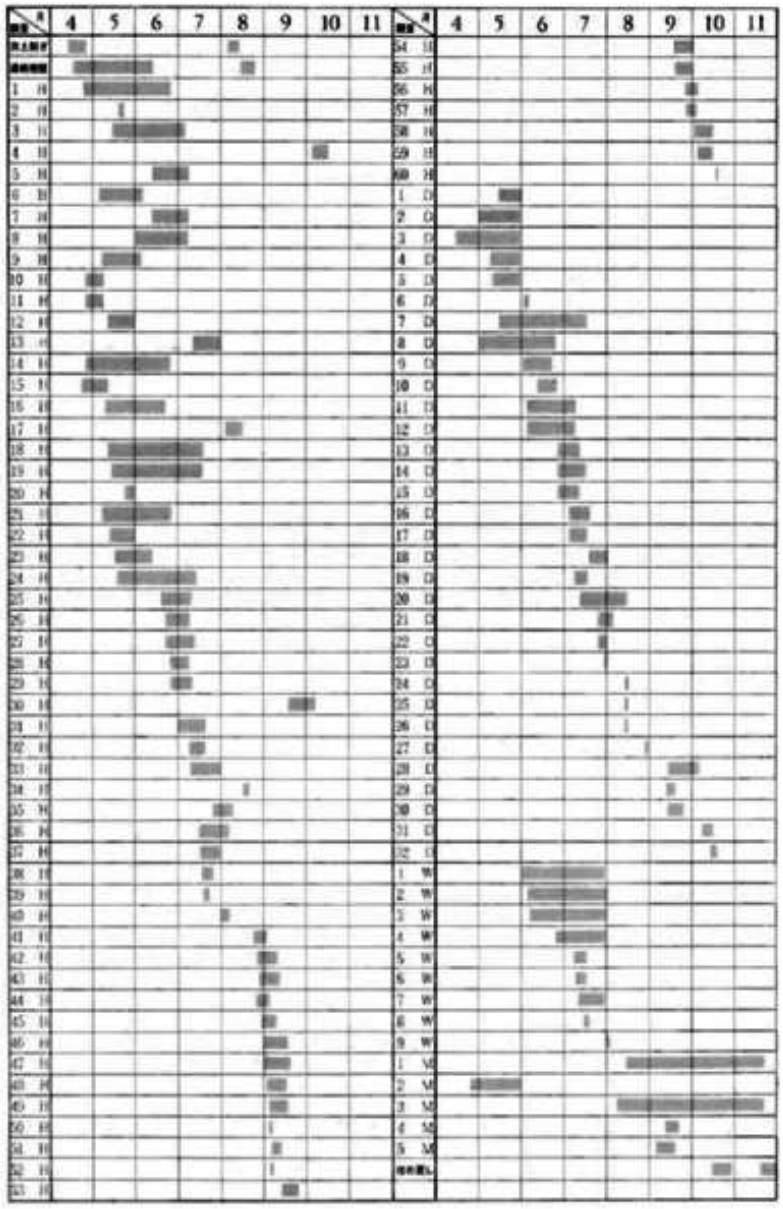


表1　調査進行表

第II章　検出された遺構と遺物

第1節　住　居　址

1号住居址（第3図）

〔位置〕（B－6）G。

〔住居構造〕3・6・14号住居址を切り、21号住居址に切られる。（平面形）正方形。（規模）6.9×6.8ｍ。（壁高）35cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁構）上幅20cm・下幅10cm・深さ10cm前後を測り、カマド部分を除いて全周する。（床面）南側及び東側に一部硬化部分があるが、大部分は21号住居址に切られていて不明。（カマド）北壁中央から僅かに西に偏って位置する。方位はN－16°－W。長さ・幅は130cmを測り、天井部・袖部は灰褐色粘土で構築される。（柱穴）主柱穴は対角線上に位置する4本である。他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）カマド左側にある。100×56cmの長方形を呈し、深さ90cmを測る。（覆土）自然堆積状態を示し、ローム粒子を含む茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕カマド・貯蔵穴付近から多く出土した。

〔時期〕鬼高式期。

1号住居址出土遺物（第4・5図）

土師器坏・塊形土器（1～11）

1は体部上半が内傾ぎみに直立し、頸部が外屈する。口頸部内外面は横ナデされる。体部外面はヘラ削りの後磨きが施される。内面はナデられる。内面及び口頸部外面は赤彩される。貯蔵穴西側の床面上出土で、口頸部1/4程度を欠損する。

2・3は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に僅かな稜をもち、口縁部は直立ぎみに外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下は外面ヘラナデ、内面ナデられるが、底部外面にはヘラ削り痕を残す。2はカマド右横の床面上出土、3は東壁下南寄りの床面上出土で、共に口頸部の一部を欠く。

4は平底ぎみの底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられるが、底部外面はヘラ削りされる。南東コーナー付近の床面上出土で、口頸部を一部欠損する。

5は丸底の土器で、頸部に稜をもち、口縁部は僅かに外反する。外面は口頸部横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、底部にはヘラ削り痕を残す。内面は口頸部横ナデ、以下ナデられる。東壁下中央付近の床面上出土で、1/2程の遺存度。

6は頸部が僅かに内屈し、口縁部は直線的に開く。外面は口頸部横ナデ、それ以下はヘラ削りの後ヘラナデ。内面は口頸部横ナデ、以下ナデられる。東壁下南寄りの床面上出土で、口頸部の一部を欠く。

7は口頸部が僅かに外反し、底部は平底ぎみとなる。器面が荒れて不鮮明であるが、口頸部内外

面は横ナデされる。カマド前面の床面上出土で、口頸部を1/3程度欠損する。

8は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデ体部外面はヘラ削り後ヘラナデ、体部内面はナデられる。床面上の出土で、4/5程の遺存度。

9は頸部が内屈し、口縁部が直線的に開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、底面はヘラ削りのため平底ぎみとなる。東壁下南寄りの床面上出土で、口頸部を1/2程欠く。

10は平底の土器で、頸部に稜をもち、口縁部は僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、底面にはヘラ削り痕を残す。貯蔵穴西側の床面上出土で、1/2の遺存度。

11はやや大形の土器で、頸部に僅かな稜をもち、口頸部は直線的に開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデ。東壁下南寄りの床面上出土で、口頸部の一部を欠損する。

土師高坏形土器（12・13）

12は埦状の坏部をもつと思われる土器で、脚台部は徐々に開く。坏部内外面・脚台部外面はていねいにヘラナデされ赤彩される。カマド前面の床面上出土で、坏部の大部分と脚台部下半を欠く。

13は埦状の坏部をもつ土器で、脚台部は坏部との接合部から徐々に開き、裾部は大きく屈曲して広がる。坏部内外面はていねいにナデられる。脚台部外面はヘラナデされる。坏部内外面・脚台部外面は赤彩される。北西コーナー付近の床面上出土で、坏部の過半と裾部を欠く。

土師器鉢形土器（14～19）

14～16は非常に薄手の土器で、平底の底部から内湾しながら開き、口唇部は尖頭状を呈する。内外面ともヘラナデされる。14・16は東壁下南寄り、15は南壁下中央の床面上出土で、14は底部を欠損、15・16は完形である。

17は平底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に稜をもち、口縁部が外反する洗面器状の器形をもつ。外面口頸部は横ナデ、体部はヘラ削り後ヘラナデされる。内面口頸部は横ナデ、体部はナデられる。貯蔵穴西側の床面上出土で、1/2程の遺存度。

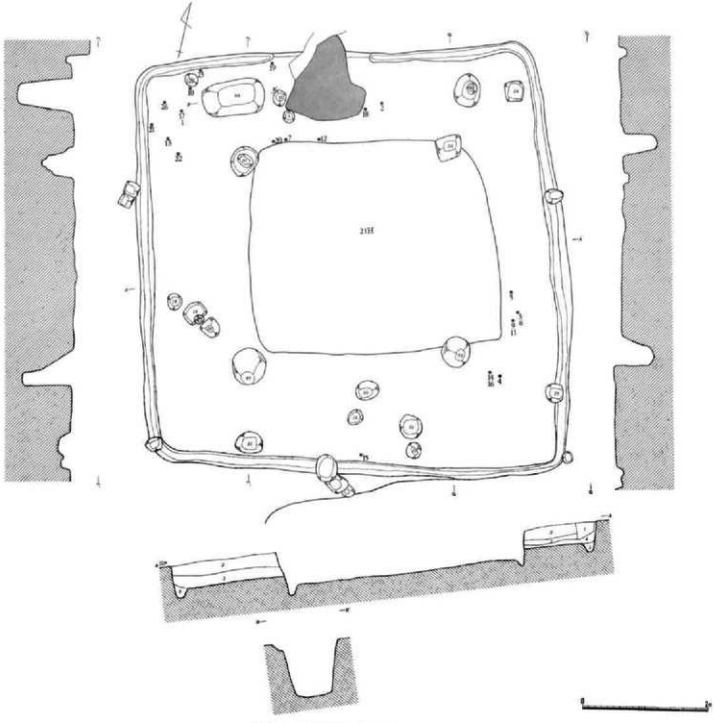
18・19は大小の差はあるが相似た器形の土器である。平底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部は外屈し、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。18はカマド右側の床面上出土で、4/5程の遺存度。19はカマド左側、北壁直下の床面上出土で、4/5遺存。

土師器甑形土器（21・22）

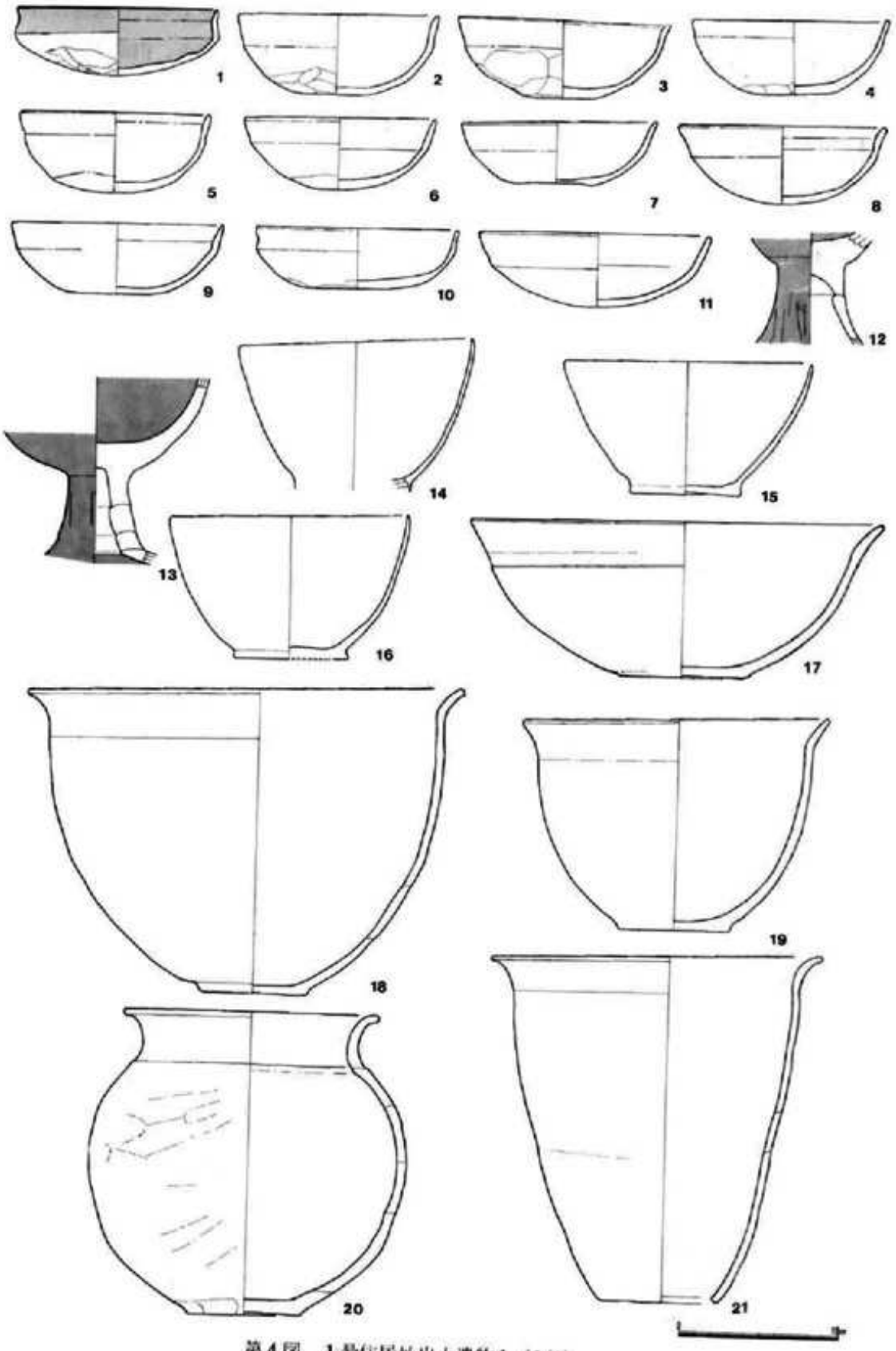
大小の差はあるが相似た器形の土器である。胴部からゆるやかに頸部に移行し、口縁部は外反する。最大径は口縁部にある。底部は筒抜け状を呈する。21は口頸部内外面横ナデ、胴部外面はナデられるが、下半はヘラナデされる。内面はヘラナデ後、縦位の磨きが加えられる。完形である。22は口頸部内外面横ナデ、胴部外面はナデられるが、下半はヘラ削り痕を顕著に残す。内面はヘラナデ後、縦方向の細長い磨きが交差するように施される。口頸部を若干欠く。いずれも北西コーナー付近の床面上の出土。

土師器甕形土器（20・23～26）

20は平底の底部から球状の胴部に至り、頸部に若干稜をもち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、以下外面はナデられるが、僅かにヘラ削り痕を残す。内面はヘラナデされる。カマド前面の床面上出土で、2/5程の遺存度。



第3図　1号住居址（1/60）



第4図　1号住居址出土遺物1（1/4）

23は平底の底部から大きな卵形状の胴部に至り、頸部に横ナデによる稜をもち、口縁部は外湾する。最大径は胴部中位にある。口頸部内外面は横ナデ、胴部外面はナデられる。内面はヘラナデされる。北西コーナー付近、北壁直下の床面上出土で、4/5程の遺存度。

24は平底の底部から直線的な細長い胴部に至り、胴部中位を境にやや内湾し、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、胴部外面はナデられるが、下半はヘラ削り痕を顕著に残す。内面はナデられる。カマド掛け口付近の出土で、2/3程の遺存度。

25は24に比べ、胴部から頸部への移行はスムーズである。最大径は口縁部にある。口頸部内外面は横ナデされる。胴部外面はナデ、内面はヘラナデされる。カマド掛け口付近の出土で、1/2程の遺存度。

26は24とほぼ同形に近い。口頸部内外面は横ナデされる。胴部外面はハケ状工具を用いた調整痕を残すが、下端では若干消されている。内面でも同様な調整痕を残す。なお、内外面にみる調整痕は、それを意図的に行ったかどうかは疑問である。北西コーナー付近の床面上出土で、2/3程の遺存度。

3号住居址（6図）

〔位置〕（C－6）G。

〔住居構造〕1号住居址に切られる。（平面形）正方形。（規模）7.4×7.2m。（壁高）16～24cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）上幅16cm・下幅10cm・深さ12cm前後を測り、カマド部分を除いて全周する。（床面）コーナー付近を除いてよく踏み固められている。（カマド）北壁中央から僅かに東に偏って位置する。方位はN－29°－W。大部分を1号住居址に破壊されている。（柱穴）深さ80cm前後の4本が主柱穴で、他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）カマド右横に2基検出された。いずれも平面形は長方形を呈し、北側のものは84×50cm・深さ84cm、南側のものは80×52cm・深さ62cmを測る。

〔遺物〕覆土中・床面上から多く出土した。

〔時期〕鬼高式期。

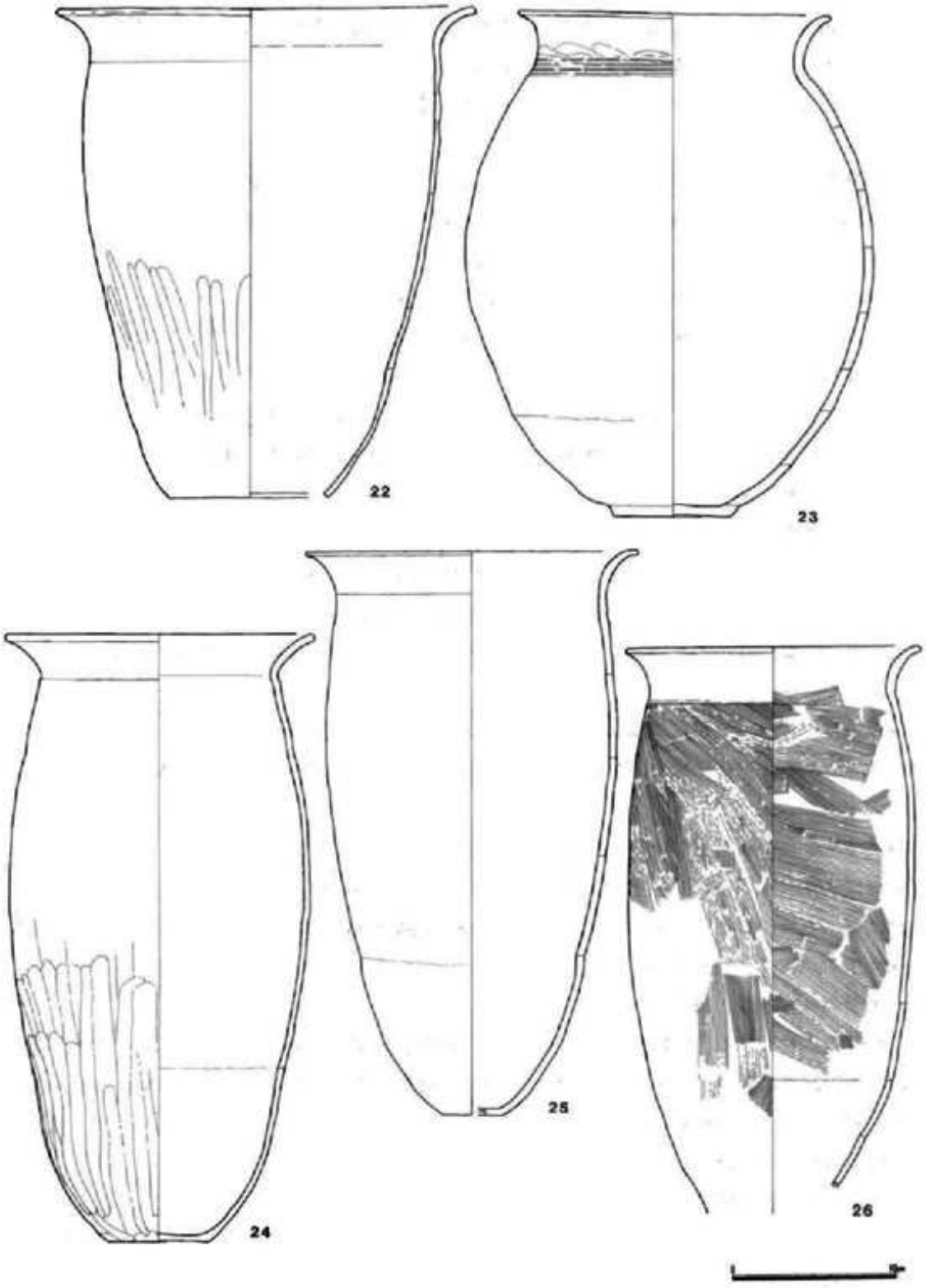
3号住居址出土遺物（第7・8図）

土師器坏・埦形土器（1～11）

1は体部上半が内傾ぎみに直立し、口縁部は外反する。内面口唇部直下に1条の沈線が巡る。外面は口頸部横ナデ、体部はヘラ削り後磨かれる。内面は横ナデされる。内面及び口頸部外面は赤彩される。西壁中央に近い床面上の出土で、ほぼ完形である。

2は体部から口頸部への移行に稜を有し、口縁部は直立ぎみにやや外反する。外面は口頸部が横ナデ、体部はヘラ削り後ナデられる。内面は横ナデがなされる。南西コーナー付近、南壁直下の床面上の出土で、ほぼ完形である。

3は外面横ナデの範囲により口頸部と体部を意識している。体部から頸部への移行はゆるやかで、口縁部は大きく外反する。外面は口頸部横ナデ、体部はヘラ削り後若干ナデられる。内面は口頸部横ナデ、以下ヘラナデがなされる。北側の2本の柱穴を結ぶ線上中央のやや南に偏った床面上から



第5図　1号住居址出土遺物2（1/4）

出土した。ほぼ完形である。

4は頸部でやや内湾し、口縁部は直立する。底部付近はヘラ削りにより平底ぎみになっている。外面は口頸部が横ナデ、体部はヘラ削り後ナデられる。内面は横ナデ後放射状に7本の暗文が施される。北東コーナーの柱穴付近の出土で、完形である。

5は2に比べて、口頸部の範囲が下方に下がり、器高が増している。外面は口頸部横ナデ、体部はヘラ削り後若干ナデられる。内面は横ナデがなされる。覆土中の出土で、1/2程度の遺存度である。

6は体部から口頸部への移行はゆるやかに内湾しながら開き、口縁部に至り直立している。外面は口頸部横ナデ、体部はヘラ削り後若干ナデられる。内面は横ナデ後底部付近でヘラナデがなされる。北壁中央寄り、床面上の出土で、完形である。

7は6に比べ、体部に丸味をもつ。外面底部に木葉痕がみられるが、ヘラ削りにより大部分消されている。貯蔵穴の南の床面上の出土で、ほぼ完形である。

8は平底の底部からほぼ垂直に立ち上がり、そのまま口縁部に移行する小型のものである。外面口縁部から体部は横ナデ、底部付近はヘラ削り後若干ナデられる。内面は横ナデがなされる。外面底部に木葉痕がみられるが、ヘラ削りにより底縁付近は消されている。南西コーナー付近の床面上の出土で、完形である。

9は8に器形は近いが、横ナデ及びヘラ削りの範囲により口頸部と体部を意識している。若干窪みをもつ底部から短かい体部に至り、頸部でやや内湾ぎみに直立し、口縁部でやや外反する。外面口頸部は横ナデ、体部はヘラ削り後若干ナデられる。内面は横ナデ後、棒状工具のようなもので「十」字に凹線が施されている。外面底部に木葉痕がみられる。南西コーナー付近の床面上の出土で、完形である。

10は丸味をもつ体部から頸部に至りややくびれて、口縁部は直立する。外面口頸部は横ナデ、体部はナデられる。内面は横ナデが施される。外面底部に木葉痕がみられる。南西コーナー付近の床面上の出土で、完形である。

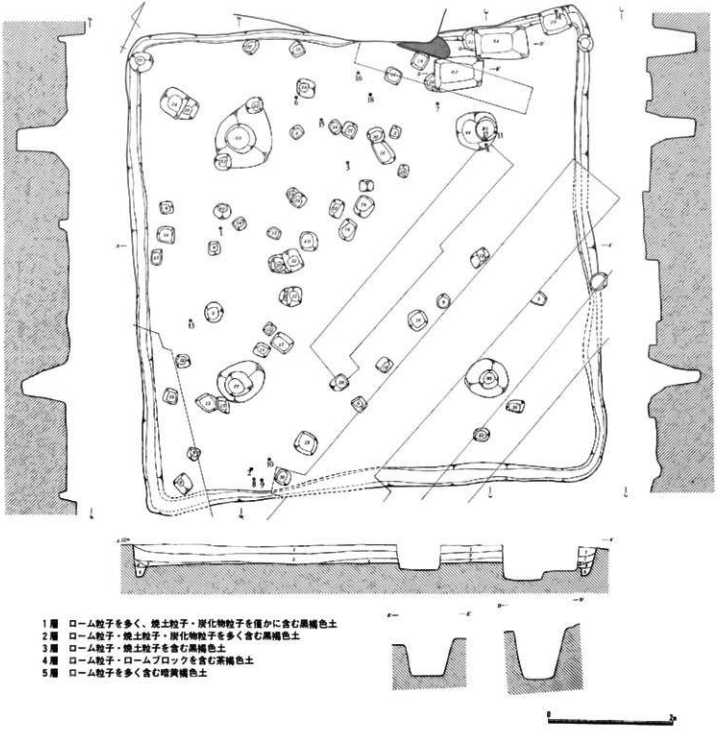
11はやや平底の観をもつ底部から丸味をもつ体部・頸部に至り、口縁部はやや外反する。横ナデの範囲により口頸部と体部を意識している。外面口頸部は横ナデ、以下ヘラ削り後若干ナデられる。内面は横ナデ後、棒状工具のようなもので「十」字に凹線が施されている。北西コーナーの柱穴付近の床面上の出土で、完形である。

土師器高坏形土器（12）

脚台部のみ残存する。脚柱部は裾部へ向かって開き、裾部への移行は外屈し、短く大きく開く。外面は脚柱部が縦方向のナデ、裾部は横ナデされ、その後赤彩される。内面は上部にヘラ削り痕を残し、裾部は横ナデされる。覆土中の出土。

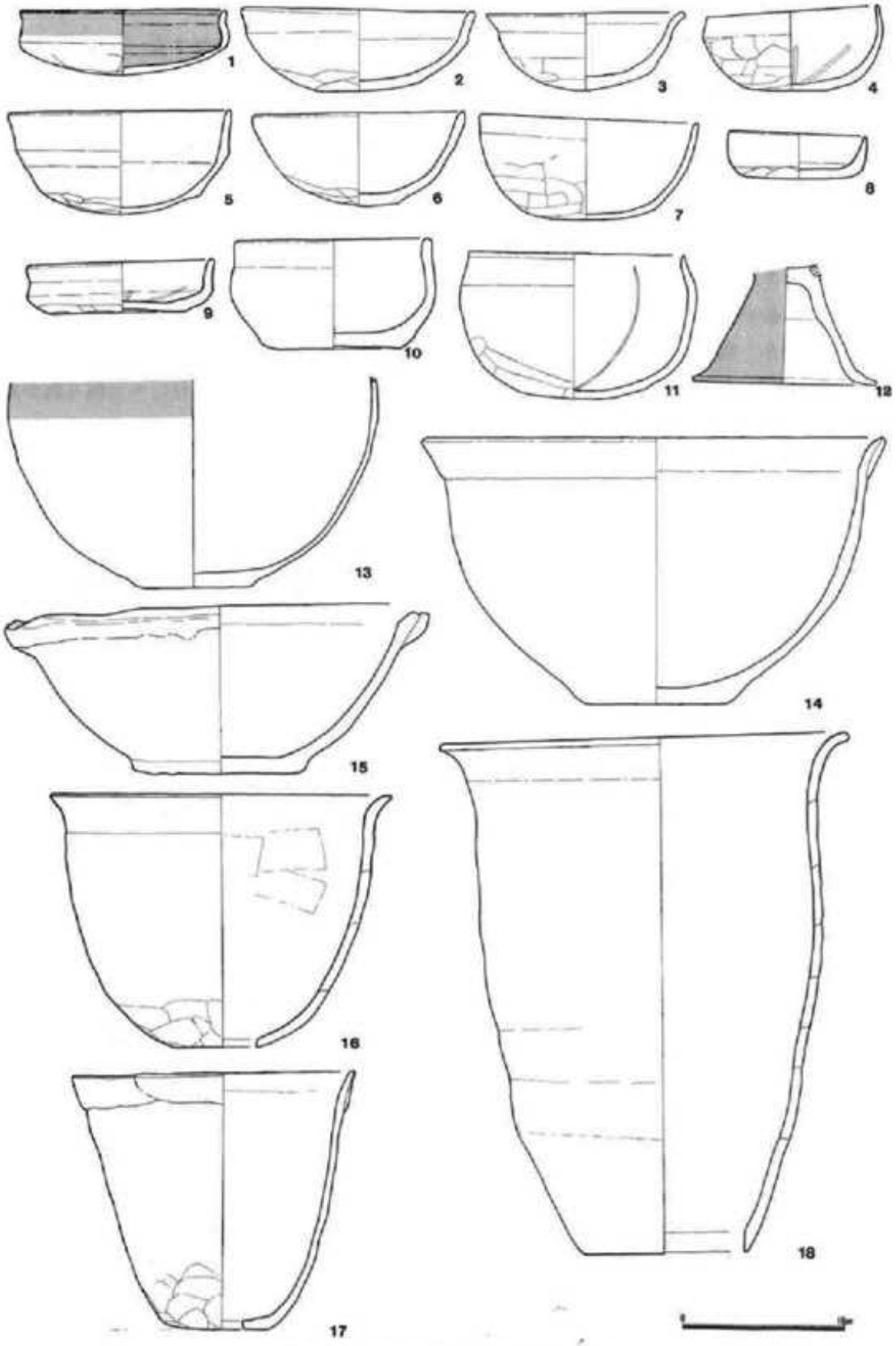
土師器壺形土器（13）

胴部中位以上を欠損し、しかも残存部自体1/3程度の遺存度である。胴部中位に最大径をもち、球胴状になるものと思われる。外面・底面はヘラナデ、内面はナデ調整が施される。外面胴部中位以上は赤彩されるようである。器形的には甕形土器と区別できないが、赤彩されていることから一応壺形土器としておく。西壁下南寄りの床面上の出土である。



1層　ローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土
2層　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む黒褐色土
3層　ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土
4層　ローム粒子・ロームブロックを含む茶褐色土
5層　ローム粒子を多く含む暗黄褐色土

第6図　3号住居址（1/60）



第7図　3号住居址出土遺物1（1/4）

土師器鉢形土器（14・15）

14は底部から内湾しながら立ち上がり、頸部で外屈し口縁部は僅かに外反する。口縁部は複合口縁となる。口縁部内外面横ナデ、以下はヘラナデされる。北東コーナー床面上の出土で、1/3程度遺存する。

15は平底の底部から内湾しながら大きく開き口縁部に至る。口縁部は複合口縁となるが、下端は押捺により消されている。口縁部内外面横ナデ、外面は以下ナデられる。内面は横方向のナデが施される。北壁中央寄りの床面上の出土で、ほぼ完形である。

土師器甑形土器（16～18）

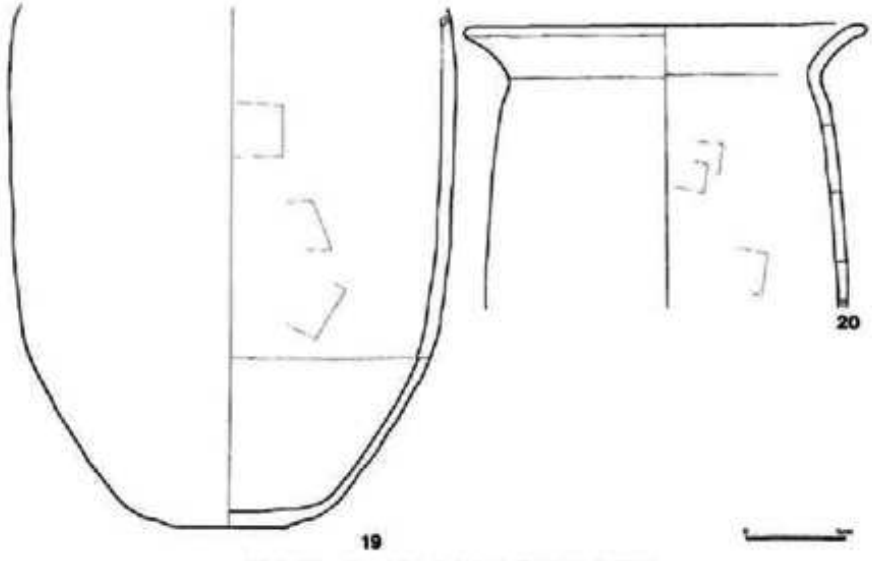
16は4×3.4cmを測る楕円形の単孔を穿つ小型のものである。胴部下半で丸味をもち、上半でほぼ垂直に立ち上がり、頸部から口縁部に至り外反する。口頸部内外面横ナデ、外面は以下若干ナデられるが、胴部上半から中位にかけては縦位に、下半から底部にかけては横・斜位にヘラ削り痕が残る。内面はヘラナデがなされる。カマド南の北壁中央寄りの床面上の出土で、ほぼ完形である。

17は平底の底部に径2cmの大略円形の単孔を穿つ小型のものである。胴部は16に比べ直線的であり、口縁部は粘土帯貼付けによる複合口縁となる。口縁部内外面横ナデ、外面は以下ヘラ削り後ナデられる。内面はヘラナデが施される。覆土中の出土で、4/5程度の遺存度である。

18はほぼ直立した胴部から頸部へはゆるやかに移行し、口縁部に至り外反する。最大径は口縁部にある。底部は筒抜け状を呈する。口頸部内外面横ナデ、外面は以下ヘラ削り後ナデられる。内面は横方向のヘラナデ後縦方向に磨きが巡っている。カマド南の北壁中央寄りの床面上の出土で、4/5程度の遺存度である。

土師器甕形土器（19・20）

19は胴部上半以下が残存する。平底の底部からやや丸味をもつ胴部下半に至り、それ以上ではほぼ垂直に立ち上がり、上半でややくびれている。外面は遺存状態が悪く荒れているが、ナデられて



第8図　3号住居址出土遺物2（1/4）

いるようである。内面は横方向のヘラナデが施される。カマド中出土である。

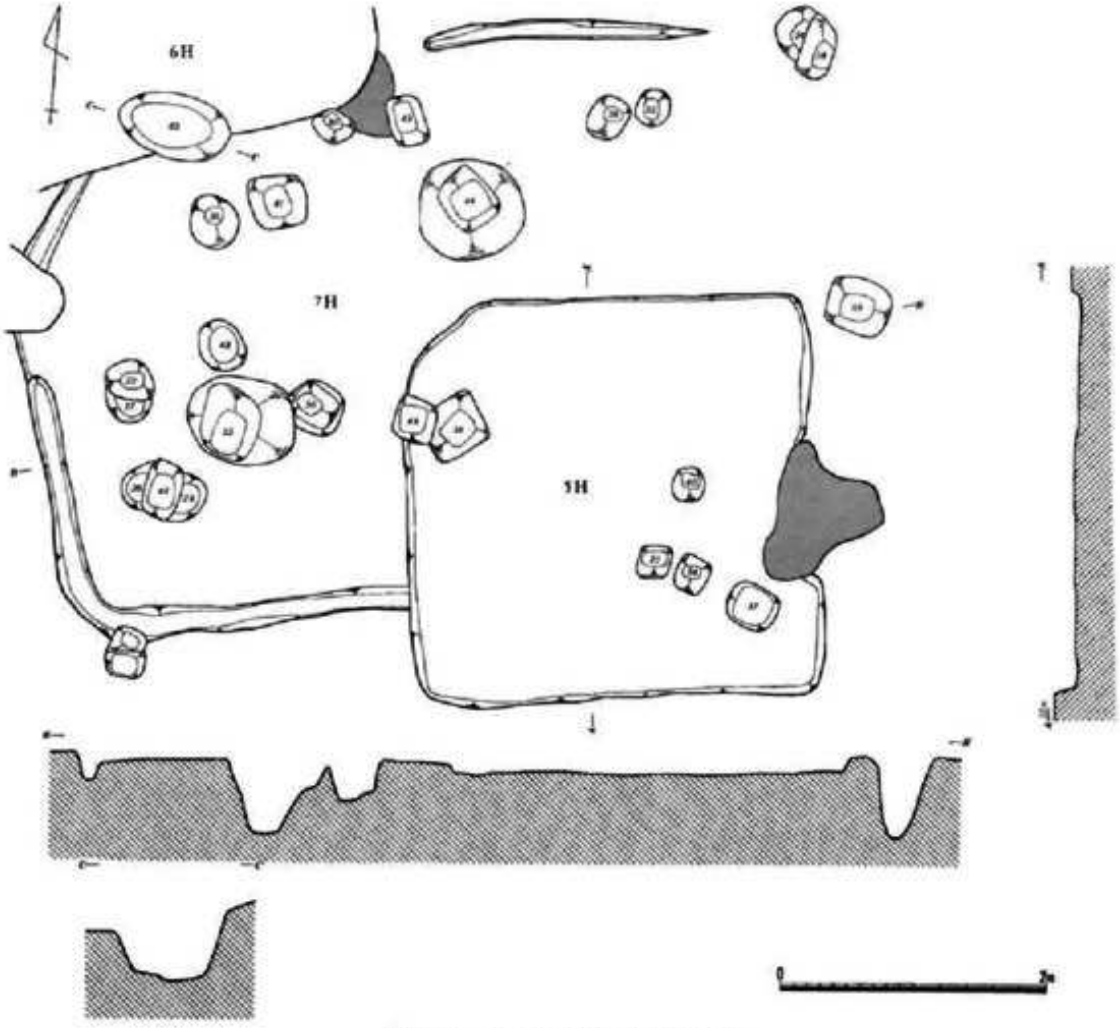
20は口縁部から胴部中位に至り残存する。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は大きく外反する。口頸部内外面横ナデ、外面は以下ナデられる。内面は横方向にヘラナデが施される。覆土中の出土である。

5号住居址（第9図）

〔位置〕（B－7）G。

〔住居構造〕7号住居址を切る。（平面形）正方形。（規模）3.12×3.04m。（壁高）20cm前後を測り、急斜に立ち上がる。（床面）住居中央がよく踏み固められている。（カマド）東壁中央から僅かに南に偏って位置する。方位はN－85°－E。長さ98cm・幅65cmを測り、天井部及び袖部は灰褐色粘土により構築される。（柱穴）住居址に伴う柱穴は検出されなかった。（覆土）焼土粒子・粘土粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

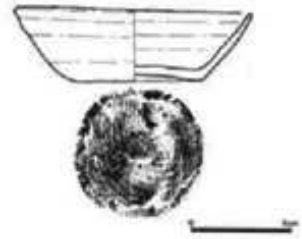


第9図　5・7号住居址（1/60）

〔時期〕国分式期。

5号住居址出土遺物（第10図）

カマド前面の床面上出土の須恵器坏形土器である。上げ底ぎみの底部から僅かに内湾しながら立ち上がる。底面には回転糸切り痕を残す。1/2強の遺存度である。



第10図　5号住居址出土遺物（1/4）

6号住居址（第11図）

〔位置〕（B－6）G。

〔住居構造〕7号住居址を切り、1・9号住居址、6号土坑に切られる。（平面形）正方形。（規模）6.88×6.72m。（壁高）30cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）上幅20cm・下幅10cm・深さ15cm前後を測り、カマド部分を除いて全周すると思われる。（床面）壁際を除いてほぼ全面硬化面を残す。（カマド）西壁のほぼ中央に位置するが、大部分が攪乱を受けているために詳細は不明である。方位はN－113°－W。両袖部はロームを隆起させ残し、天井部・袖部を灰褐色粘土で被覆させ構築している。（柱穴）深さ80cm前後をもつ4本が主柱穴であり、他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）カマド左側の南西コーナーにある。平面形は長方形を呈し、120×74cm・深さ70cmを測る。（覆土）ローム粒子を多く含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

6号住居址出土遺物（第12図）

1は土師器坏形土器。平底の底部から内湾しながら立ち上がる。内面及び口頸部外面は横ナデ、体部外面はナデが施されるが、底部にはヘラ削り痕を残す。床面上の出土で、完形。

2は手捏ねのミニチュア土器。外面はヘラ削りされる。覆土中の出土で、完形。

7号住居址（第9図）

〔位置〕（B－6）G。

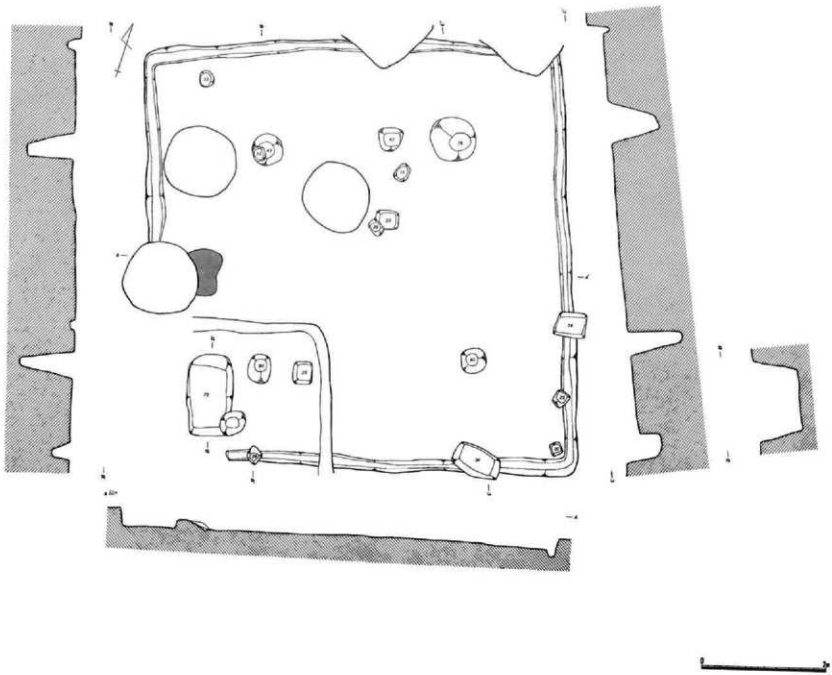
〔住居構造〕5・6号住居址に切られる。（平面形）長方形と思われる。（規模）不明×4.3m。（壁高）10cm前後を測る。（壁溝）上幅15cm・下幅10cm・深さ15cm前後を測る。住居西半では検出できたが、東半では不明である。（床面）中央付近に硬化部分を残す。（カマド）北壁のほぼ中央に位置すると思われる。大部分を6号住居址に破壊されており、灰褐色粘土を検出できるのみである。（柱穴）確認できるピットは後世のものである。（貯蔵穴）カマド西側にある。平面形は楕円形を呈し、84×50cm・深さ63cmを測る。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

7号住居址出土遺物（第13図）

床面上出土の土師器坏形土器。平底ぎみの底部から強く内湾しながら立ち上がり、頸部でくびれ口縁部は直線的に開く。内面口唇部下には沈線が巡る。外面は口頸部横ナデ、体部から底面にかけ



第11図　6号住居址（1/60）

てはナデられるがヘラ削り痕が明瞭に残る。内面は口頸部横ナデ、以下はナデられる。内面及び口頸部外面は赤彩される。口頸部の一部を欠損。

8号住居址（第14図）

〔位置〕（C－8）G。

〔住居構造〕28号住居址を切る。（平面形）正方形と思われる。（規模）不明×5.86m。（壁高）著しく攪乱を受けており、南壁の一部及び北壁・西壁は破壊されている。東壁は20cm前後の高さを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）南壁下にあり、上幅18cm・下幅10cm・深さ15cm前後を測る。（床面）攪乱のため破壊されている部分が多く詳細は不明。（カマド）北壁ほぼ中央にあるが、大部分が破壊されている。方位はN－19°－W。（柱穴）主柱穴は4本検出された。（貯蔵穴）カマド右横にある。平面形は長方形を呈し、80×56cm・深さ42cmを測る。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とするが、大きく攪乱を受けている。

〔遺物〕床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

8号住居址出土遺物（第15図）

土師器坏形土器（1～4）

1は頸部で強く屈曲し段をもつ。口頸部は僅かに外傾しながら立ち上がる。口頸部内外面は横ナデ、それ以下は内面ナデ、外面はヘラナデされる。カマド中の出土で、1/4程の遺存度。

2は頸部で内屈し、口縁部は僅かに内湾しながら立ち上がる。口頸部内外面は横ナデ、それ以下は磨きが施される。カマド中の出土で、1/2程の遺存度。

3は頸部に明瞭な段をもち、口頸部は外傾する。外面は口頸部横ナデ、それ以下はヘラナデされる。内面は横ナデされる。図示できなかったが口唇上には沈線が巡る。胎土は非常に精選されていて、粒子が密である。覆土中の出土で、1/3程遺存する。

4は頸部でくびれ、口縁部は外反する。図示できなかったが口唇上には浅い沈線が巡る。外面口頸部は横ナデ、それ以下はヘラ削りの後、ヘラナデされる。内面は横ナデされる。胎土は非常に精選されている。カマド中の出土で、1/4程の遺存度。

土師器高坏形土器（5）

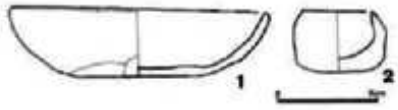
脚台部を欠損する。坏部は僅かに内湾しながら開く。坏部と脚台部の接合はソケット状の形態をとる。内外面ともていねいにナデられ赤彩される。カマド中の出土。

土師器甕形土器（6）

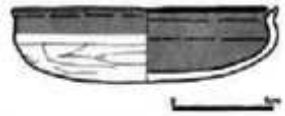
胴部上半以上、1/2程度遺存する。頸部で屈曲し、口縁部は外湾しながら開く。口頸部内外面は横ナデ、胴部外面はヘラナデされるが、その痕跡が擦痕状に残る。胴部内面はヘラナデされるが、工具の木口部分を用いたためハケ目状を呈する。カマド中の出土。

9号住居址（第16図）

〔位置〕（A－5）G。



第12図　6号住居址出土遺物（1/4）



第13図　7号住居址出土遺物（1/4）

〔住居構造〕6号住居址を切り、6号土坑に切られる。（平面形）正方形と思われる。（規模）不明×4ｍ。（壁高）西壁と南壁の一部を除いて不明。30cm前後の高さを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（床面）6号住居址と重複する部分は貼床となる。（カマド）北壁ほぼ中央にあるものと思われ、方位はN－4°－W。長さ86cm・幅58cmを測り、袖部はロームを隆起させ残し、灰白色粘土で天井部・袖部を構築する。（柱穴）主柱穴は4本検出された。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

9号住居址出土遺物（第17図）

土師器坏形土器（1・2）

1は平底ぎみの底部から内湾しながら立ち上がり、頸部で内傾し、口縁部は僅かに外反して立つ。口頸部内外面は横ナデ、体部内外面はナデ調整される。カマド中出土で、口頸部を1/3程欠損。

2は小型の土器で、平底の底部から僅かに内湾しながら開く。外面口頸部は横ナデ、体部はナデられるがヘラ削り痕を残す。内面は横ナデされる。覆土中の出土で、口頸部の一部を欠く。

土師器甕形土器（3～5）

3は小型の甕形土器。胴部は球状を呈し、胴部上半に稜をもつ。頸部は直立し、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、胴部外面はヘラナデされる。床面上の出土で、1/2程の遺存度。

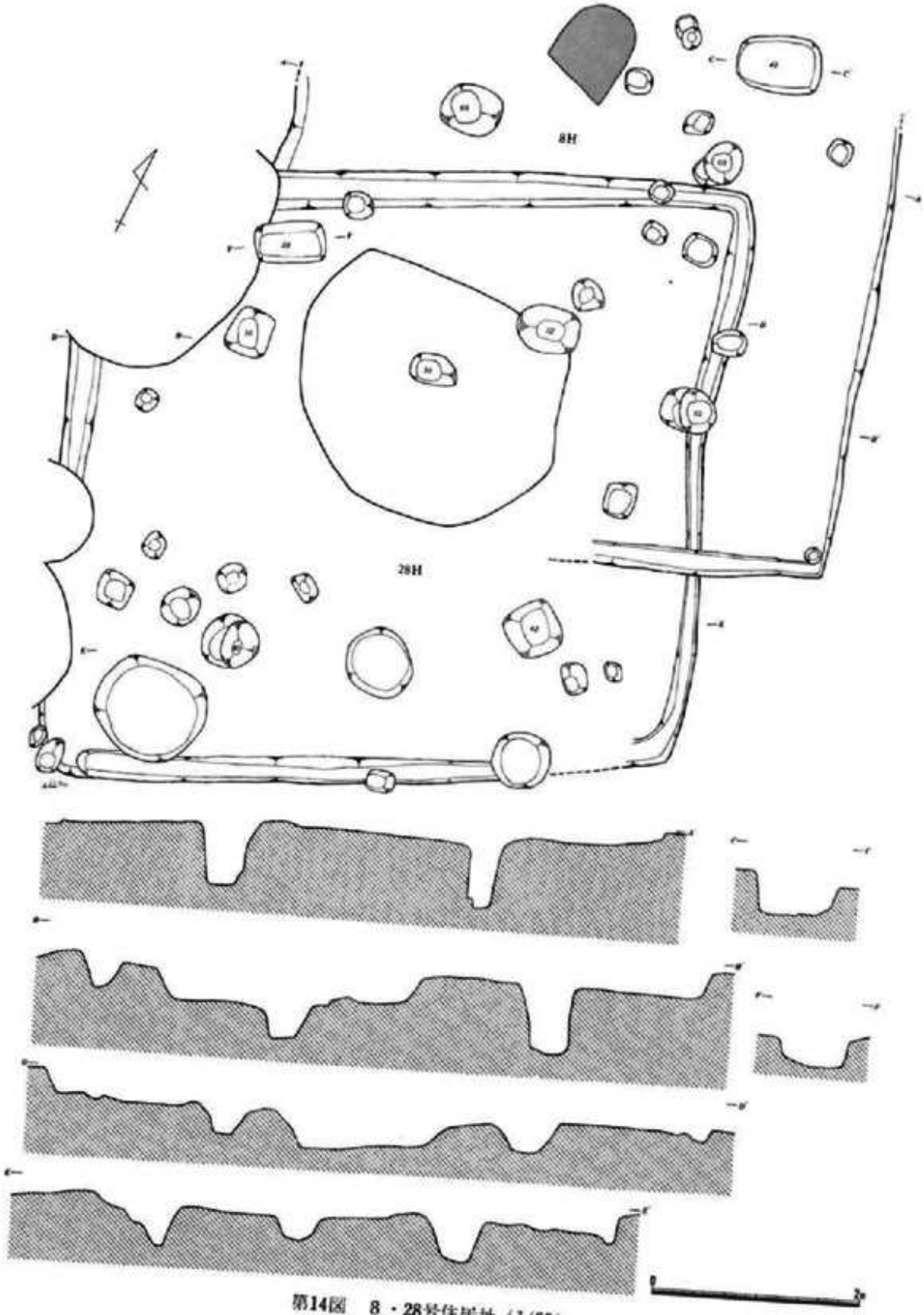
4は口縁部が大きく外湾する土器。外面口頸部は横ナデ、胴部はヘラナデされる。内面は横ナデされる。柱穴中の出土で、胴部上位以上1/3程の遺存度。

5は丸底ぎみの底部から僅かに内湾しながら立ち上がる長胴甕で、頸部から口縁部にかけて外反する。外面はヘラナデされるが、胴部下半にはヘラ削り痕が僅かに残る。内面は口頸部横ナデ、以下はナデられる。カマドに掛かった状態で出土。口頸部を1/2程欠損する。

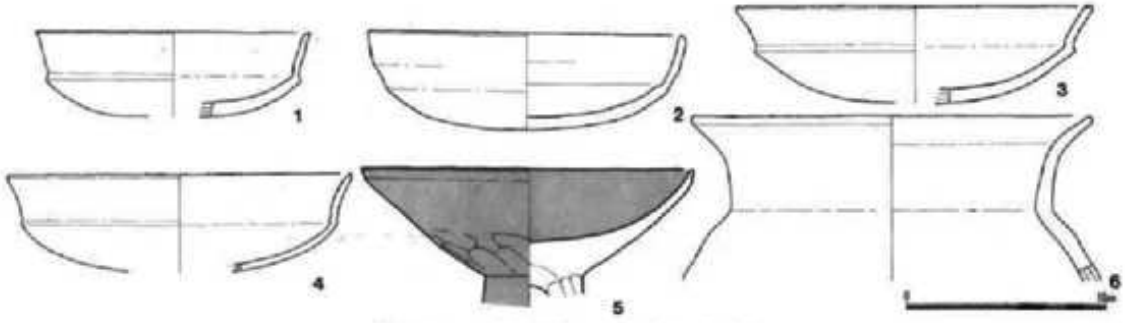
11号住居址（第18図）

〔位置〕（A－5）G。

〔住居構造〕10・20号住居址、5号土坑に切られ、北壁は未調査である。（平面形）正方形。（規模）5.3×5.18ｍ。（壁高）西壁は攪乱を受け不明であるが、遺存状態が比較的よい南壁では43cmの高さを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）上幅18cm・下幅10cm・深さ8cm前後を測り、全周すると思われる。（床面）壁際及び5号土坑との重複部付近を除いて、ほぼ全面硬化面を残す。（カマド）北壁に接する付近で床面が焼けていたことから、この部分にカマドがあった可能性がある。（柱穴）検出されなかった。住居址内のピットは後世のものである。（覆土）上層は焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む茶褐色土、下層はローム粒子・焼土粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む茶



第14図　8・28号住居址（1/60）



第15図　8号住居址出土遺物（1/4）

褐色土を基調とする。

〔遺物〕北東コーナー付近に多かった。

〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕覆土中に焼土粒子・炭化物粒子を含み、焼失住居の可能性がある。

11号住居址出土遺物（第19図）

土師器高坏形土器（1）

脚台部のみ遺存する。脚柱部は裾部へ向かって開き、裾部は屈曲して大きく開く。裾部内外面は横ナデ、脚柱部外面は縦方向のヘラ削り後ナデられる。内面は輪積痕を消すように横方向にナデられる。覆土中の出土である。

土師器壺形土器（2～5）

2～4は小さな底部に算盤玉状の胴部をもつ小型の壺である。2は外面ヘラナデ後ていねいに磨きが施される。内面には横方向のハケ目調整がみられる。東壁中央寄りの床面上の出土で、口頸部を欠損する。3は内外面ともにナデがなされる。覆土中の出土で、口頸部を欠損する。4は外面ナデられるが、ヘラ削り痕を残している。内面はヘラナデがなされる。北東コーナー付近の床面上の出土で、1/3程度の遺存度である。3の胴部外面は赤彩が施される。

5は有段口縁状の口頸部に球状の胴部をもち、底部は若干上げ底を呈する。口頸部途中の有段は輪積みの利用とナデにより1条の浮線状に作出されている。外面は口頸部横ナデ、胴部はナデの後磨きが施される。内面は口頸部横ナデ後左傾する磨きが加えられる。胴部はヘラナデがなされる。北東コーナー付近の床面上の出土で、ほぼ完形である。

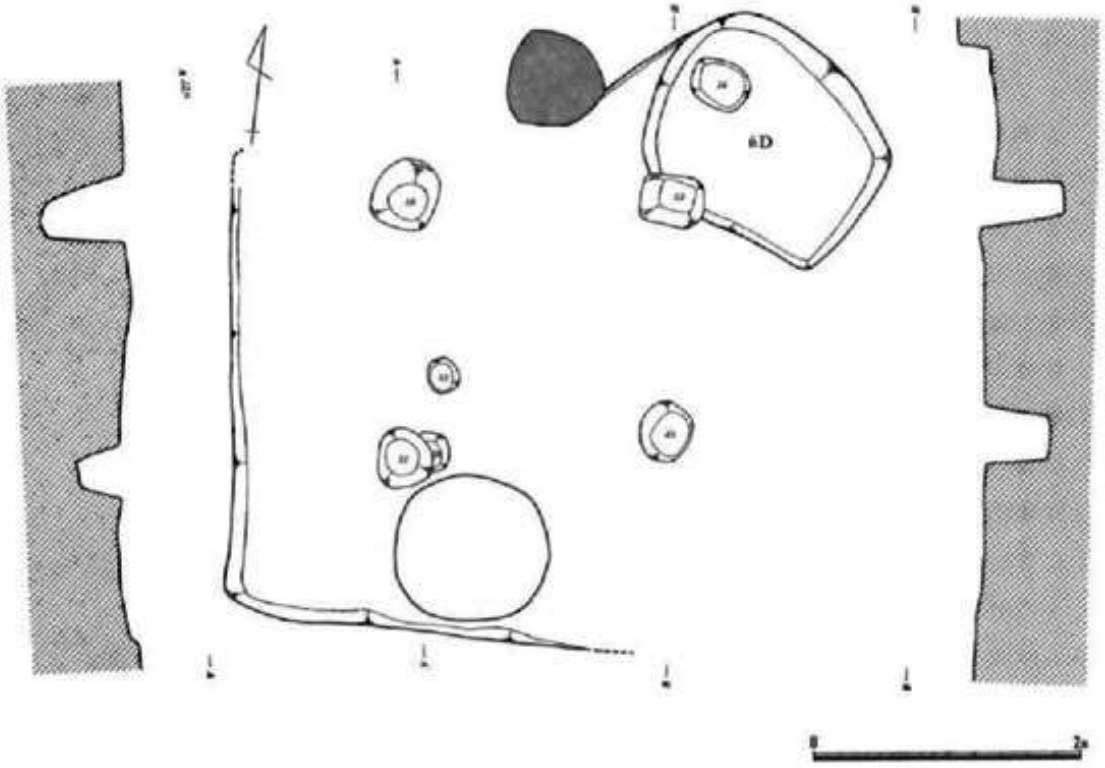
土師器甕形土器（6）

大きな球状の胴部をもち、頸部でくびれ、口縁部に至り大きく外反する。口頸部内外面横ナデ、胴部外面は右傾するハケ目調整後ナデられている。内面はヘラナデが施される。床面上出土の破片で、遺存度は1/5未満である。

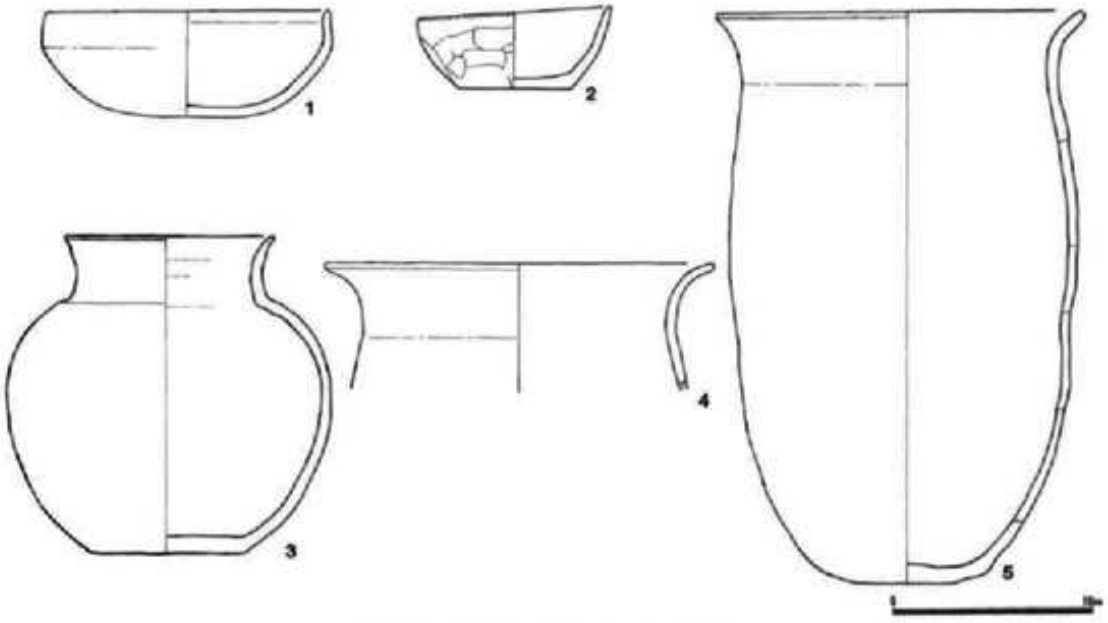
12号住居址（第20図）

〔位置〕（B－4）G。

〔住居構造〕（平面形）正方形。（規模）5.76×5.64m。（壁高）東壁は攪乱を受けており、壁溝のみの確認に終った。遺存のよい部分では30cm前後の高さを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）



第16図　9号住居址・6号土坑（1/60）



第17図　9号住居址出土遺物（1/4）

カマド部分を除いて全周する。上幅12～20cm・下幅10cm・深さ10cm前後を測る。（床面）壁際付近を除いてよく踏み固められている。（カマド）北壁ほぼ中央にあり、方位はN－32°－W。北半は攪乱を受けている。幅108cmを測り、袖部はロームを隆起させ残し、灰褐色粘土を被覆させ構築している。（柱穴）ピットは6本検出されたが、主柱穴は4本である。（貯蔵穴）カマド左横に位置する。平面形は長方形を呈し、120×62cm・深さ56cmを測る。（覆土）上層はローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土、下層はローム粒子・焼土粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から多く出土したが、カマド・貯蔵穴周辺に多い。

〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕覆土中に多量に焼土を含み、焼失住居の可能性がある。また、重複している柱穴の存在から、住居の建て直しが考えられる。

12号住居址出土遺物（第21図）

土師器坏・埦形土器（1～6）

1は体部上半で内傾し、口縁部は外反する。外面は口頸部横ナデ、体部から底部にかけて磨き調整がなされ光沢をおびる。口頸部から体部にかけて赤彩が施される。内面はナデ後赤彩が施される。床面上の出土で、4/5程の遺存度。

2は体部上半で内傾し、頸部でややくびれ、口縁部は外反ぎみに立ち上がる。体部は大きく丸味をもち深い。口頸部内外面横ナデされる。体部外面はヘラ削り後ナデられるが、その後に若干磨きが加えられる。内面はヘラナデされる。外面及び体部内面中位以上は赤彩される。カマド左横の床面上出土で、完形。

3は頸部でややくびれ、口縁部は外反する。体部は丸味をもつ。口頸部内外面は横ナデされる。体部外面はヘラ削り後磨き調整がなされ光沢をおびる。内面はていねいなナデがなされる。赤彩は外面が口頸部から体部にかけて、内面は全面施されている。覆土中の出土で、2/5程の遺存度。

4は1と相似た器形をもつが、若干容量を大にするものである。覆土中の出土で、1/2程の遺存度である。

5は丸底の底部から内湾ぎみに立ち上がり口頸部に至る。底部から体部への移行は、ヘラ削りにより稜を形成している。口頸部付近は内外面とも横ナデ後赤彩される。体部外面は若干ナデられるが、ヘラ削り痕を顕著に残す。内面はヘラナデされる。覆土中の出土で、1/2程の遺存度。

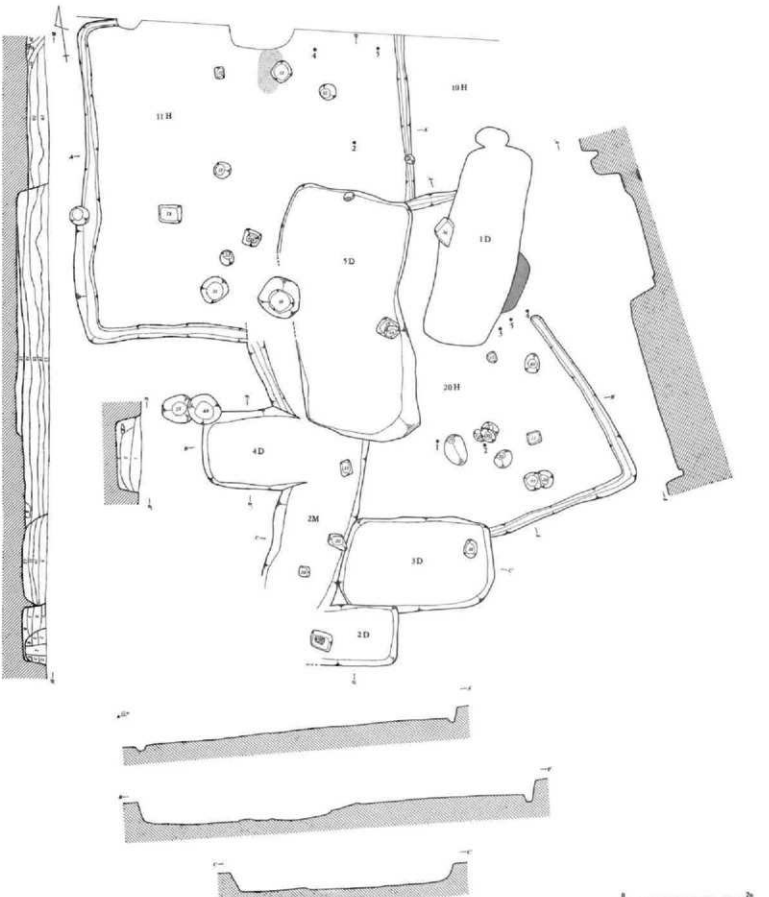
6は底部から体部及び口頸部への移行はスムーズで、いわゆる埦状を呈する。口頸部内外面は横ナデされる。体部外面はナデられるが、ヘラ削り痕を若干残す。内面はナデがなされる。赤彩は外面が口頸部付近、内面が口頸部から底部近くまで施されている。覆土中の出土で、2/5程度遺存する。

土師器鉢形土器（7）

大型の埦状を呈する。非常に器壁が薄く端正に作られている。内面及び口頸部外面は横ナデ、体部外面はヘラ削り後ていねいにナデられている。覆土中の出土で、2/5程の遺存度である。

土師器高坏形土器（8）

脚台部のみ残存する。脚柱部は短く弓状に開き、裾部へとスムーズに移行する。外面は縦方向の



第18図　10・11・20号住居址、2～5号土坑、2号溝址（1/60）

ヘラ削り後若干ナデられる。内面は脚柱部にヘラ削り痕が残る。裾部は横ナデされる。覆土中の出土である。

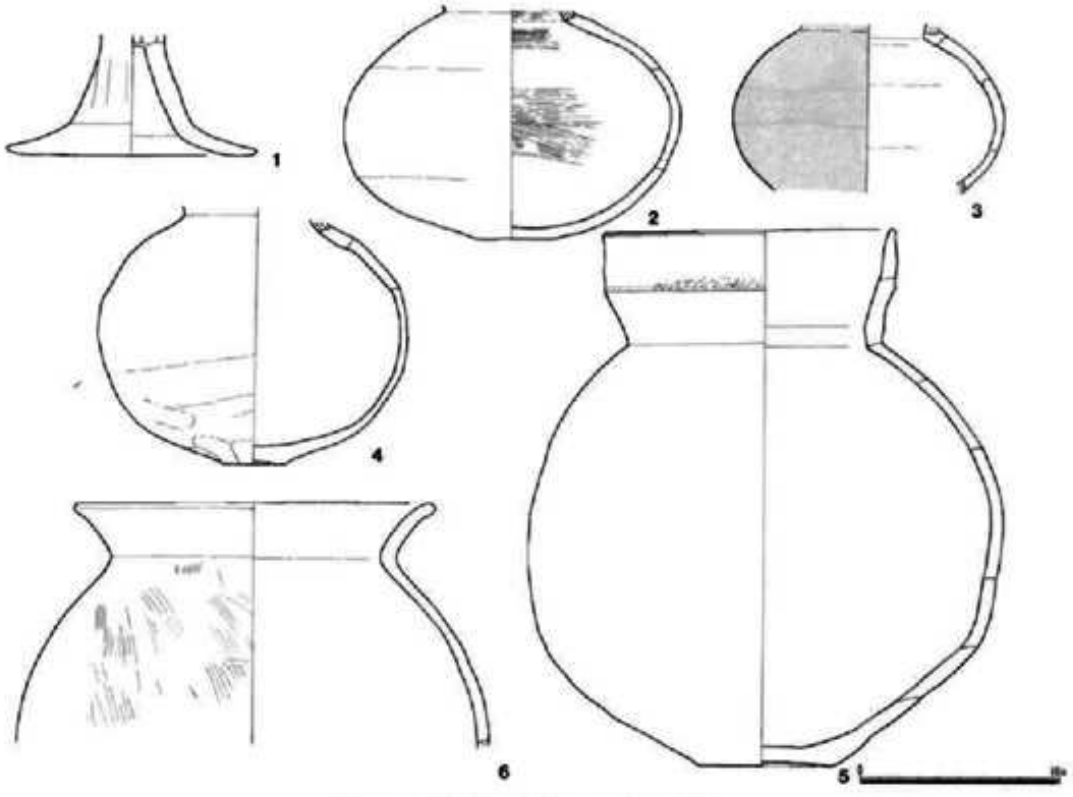
土師器甑形土器（9・10）

9は口縁部に最大径をもち、底部に向かって直線的にすぼまる。口縁部は口縁部下端にのみ粘土帯貼付けを施して複合口縁を作出している。底部に単孔を穿つ。外面には全面ハケ目痕がみられるが、口頸部は横ナデ、胴部はヘラナデが磨き的に施されている。内面はハケ目痕を顕著に残すが、口頸部は横ナデされる。貯蔵穴南側の床面上出土で、4/5程の遺存度。

10は底部から内湾ぎみに立ち上がり、ゆるやかに胴部に移行する。口縁部は9と同様の手法を用い複合口縁を作出している。底部に単孔を穿つ。外面は口頸部横ナデ、以下ナデられるが、ハケ目痕を残す。内面は口頸部ハケ目調整後横ナデ、胴部はナデられるが、縦方向の細長い磨きが放射状に施される。貯蔵穴南側の床面上出土で、4/5程の遺存度。

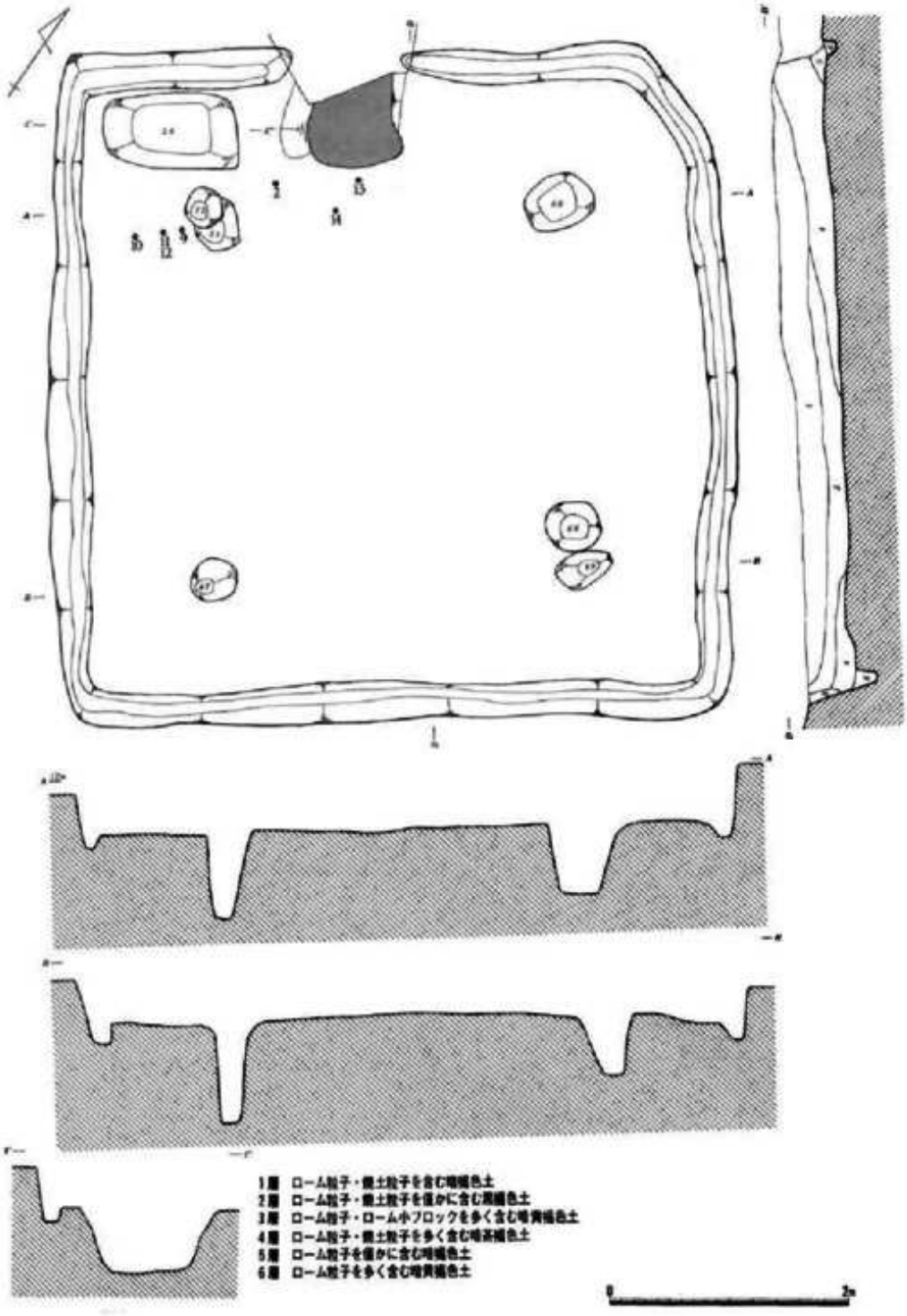
土師器甕形土器（11～14）

11は壺形土器としたほうがよいのかもしれない。底部はヘラ削りにより丸底ぎみに作出されている。頸部は直立し、口縁部は大きく外反する。胴部は下位に最大径をもち、下ぶくれの形状を呈する。口頸部内外面はヘラ状工具により横ナデされる。胴部外面はていねいにヘラナデされる。内面は先端がささら状を呈すると思われる工具による幅4cm程度のヘラナデが施される。貯蔵穴南側の床面上出土で、2/3強の遺存度。

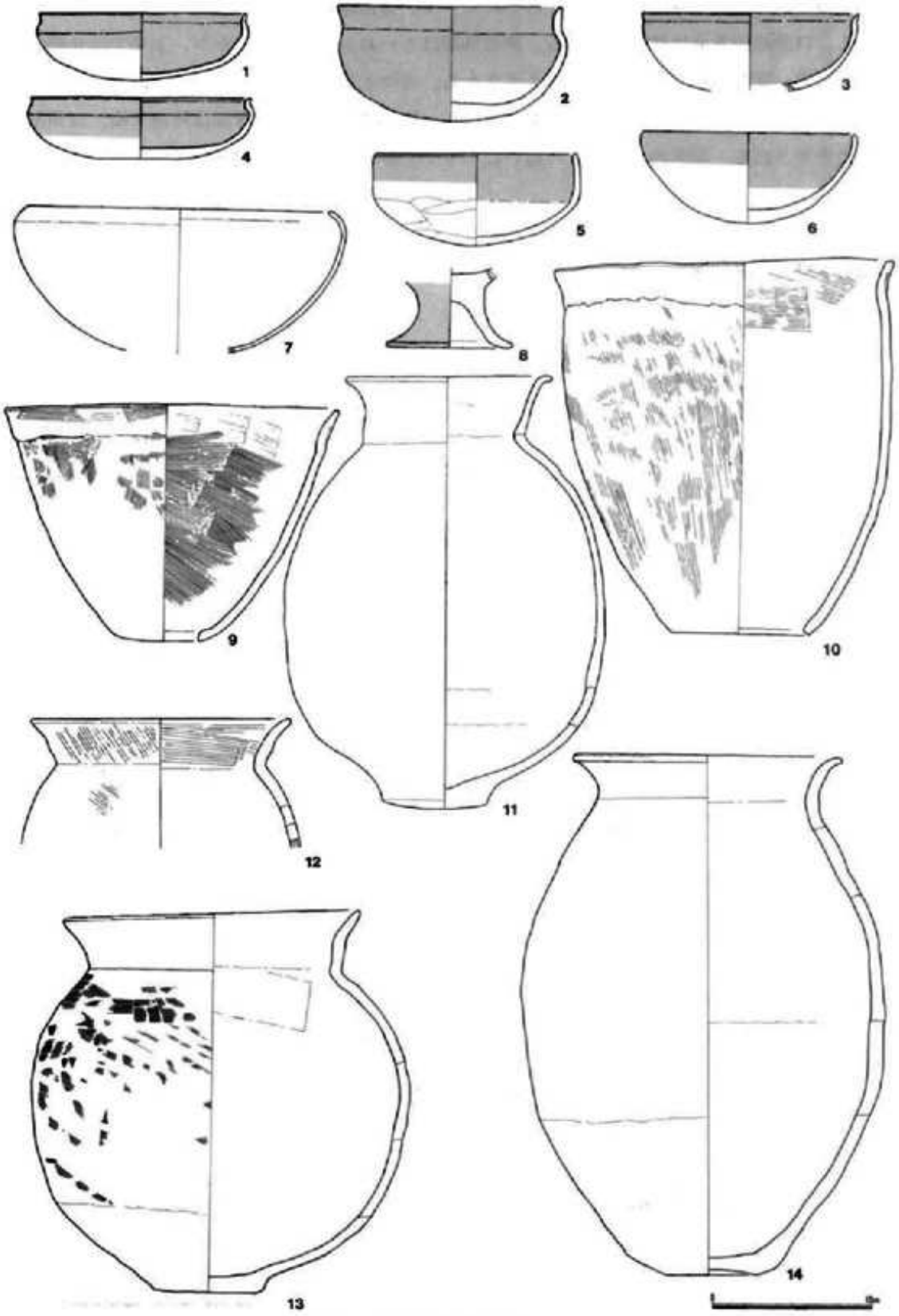


第19図　11号住居址出土遺物（1/4）

12は頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。外面口頸部はハケ目調整後横ナデ、それ以下はナデられるが、ハケ目痕が若干残る。内面口頸部はハケ目調整、以下ヘラナデされる。貯蔵穴南側の床面上出土で、胴部の大部分を欠損する。



第20図　12号住居址（1/60）



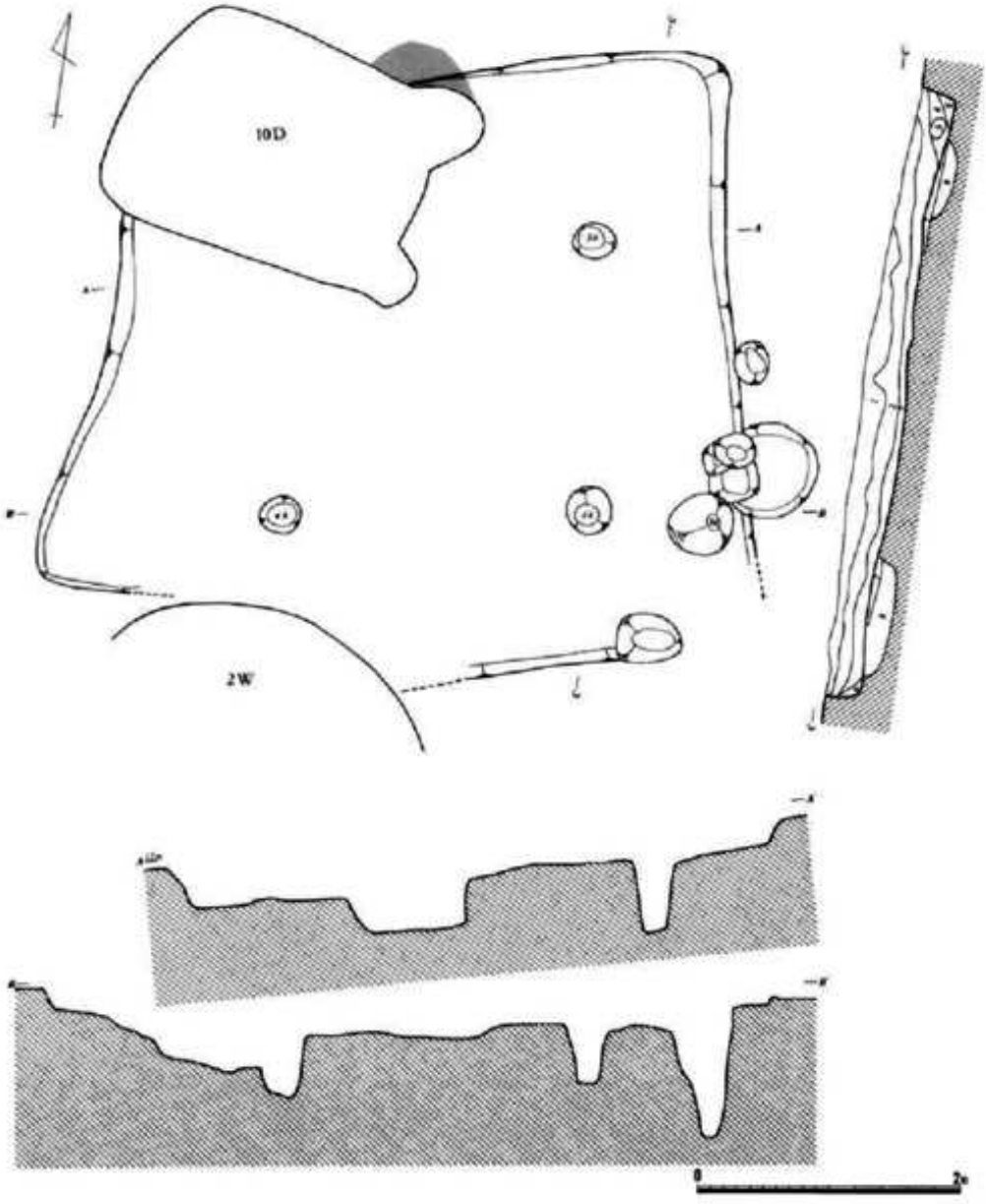
第21図　12号住居址出土遺物（1/4）

13はヘラ削りにより底部が平底に作出されている。胴部は球状を呈し、肩部を有し、口頸部は外反する。口頸部内外面は横ナデされる。胴部外面はていねいにナデられるが、上半では比較的細密なハケ目痕が顕著に残る。内面はヘラナデされる。カマド南側の床面上出土で、ほぼ完形。

14は胴部中位に最大径をもち、上半部で内傾し、頸部でくびれ、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデされる。胴部内外面はていねいにヘラナデされる。カマド南側の床面上出土で、ほぼ完形。

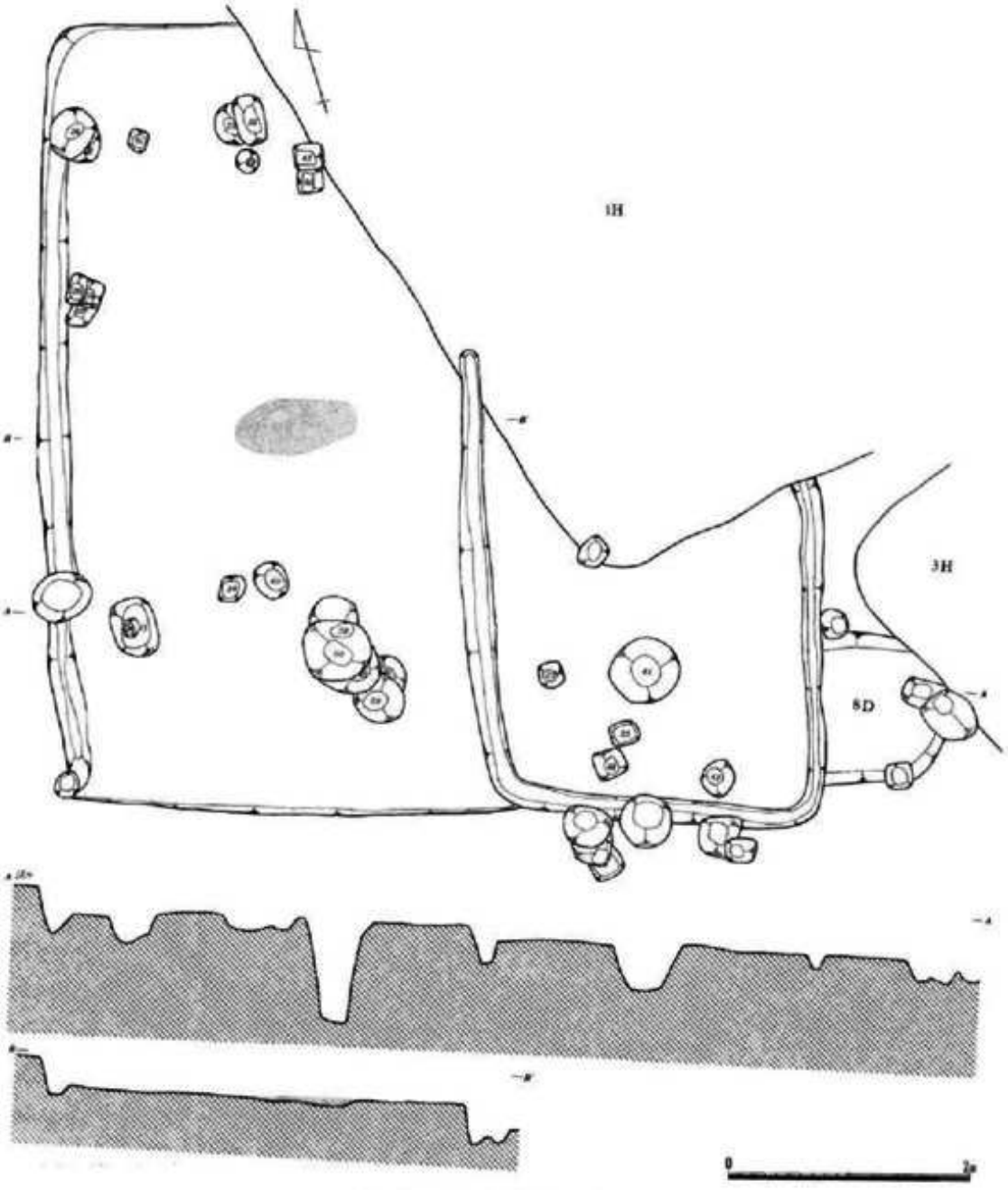
13号住居址（第22図）

〔位置〕（D－7）G。



第22図　13号住居址（1/60）

〔住居構造〕10号土坑、2号井戸址に切られる。（平面形）西壁が攪乱をひどく受けているためにプランが歪んでいるが、基本的には正方形と思われる。（規模）4.6×4.58m。（壁高）比較的遺存状態がよい東壁では20～30cmを測り、急斜に立ち上がる。（床面）中央付近及び東側の一部に硬化面を残すが、大部分が攪乱により不明である。（カマド）北壁ほぼ中央に位置するが、10号土坑により大部分を破壊されている。方位はN－10°－Wか。（柱穴）主柱穴4本で構成されると思われる。そのうち3本が検出されたが、他の1本は配置から考えて10号土坑に破壊されたのであろう。（覆土）1層－ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む暗褐色土。2層－ローム粒子・焼土粒子を含む



第23図　14号住居址（1/60）

黒褐色土。3層―ローム粒子を多く含み、焼土粒子を含む黒褐色土。4層―灰褐色粘土粒子を多く含む暗灰褐色土。5層―灰褐色粘土ブロック。6層―ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。7層―貼床部でロームブロック。8層―ローム粒子・ロームブロックを多く含む暗茶褐色土。

〔遺物〕覆土中・床面上から土器片が僅かに出土したが、実測できるものはなかった。

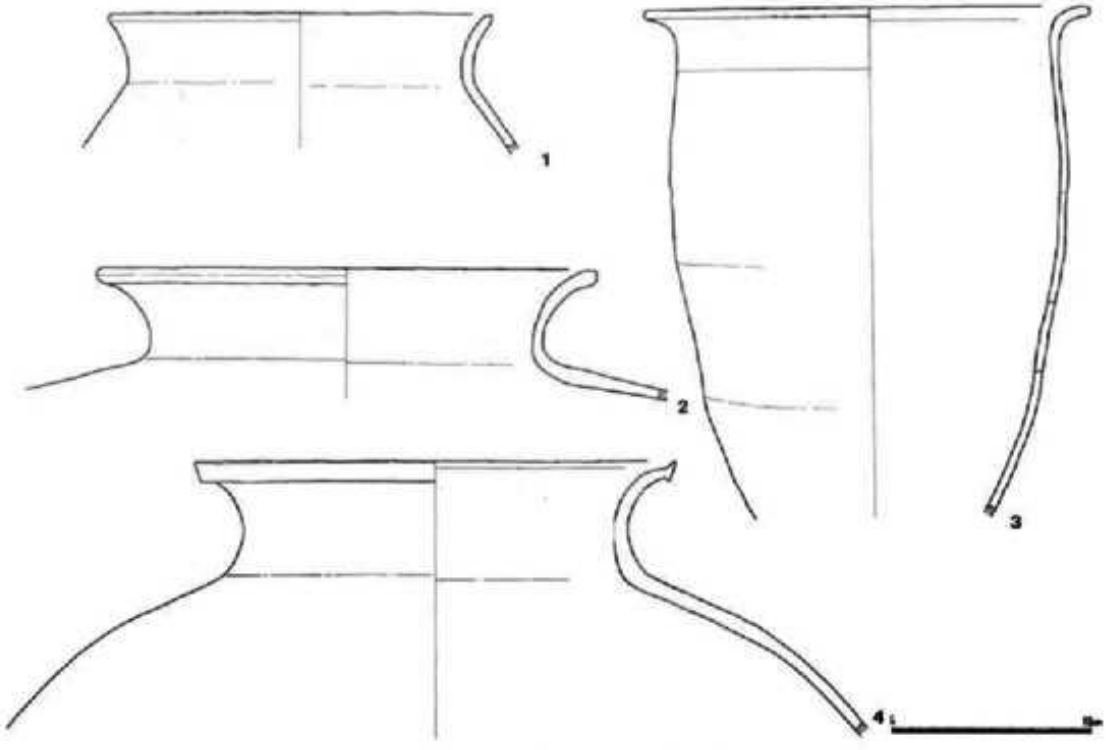
〔時期〕鬼高式期。

14号住居址（第23図）

〔位置〕（B－5）G。

〔住居構造〕1号住居址、8号土坑に切られる。（平面形）正方形と思われる。（規模）6.6×6.4m。（壁高）20～30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）東壁から延びる壁溝は、住居のほぼ中央をとおり、東西を区切るかのように設定される。西側に設けられた壁溝は、西壁のみで全周しない。両者とも上幅20cm・下幅10cm・深さ10cm前後を測る。（床面）1号住居址に切られる部分を除き、よく踏み固められている。（炉）住居中央からやや西に偏って位置する。100×44cmの楕円形を呈し、10cm程の掘り込みをもつ。上層は焼土粒子を含む黒褐色土、下層は焼土が堆積し、炉床はよく焼けている。（柱穴）ピットは多数検出されたが、本住居址に伴うものは北西コーナー・北東コーナーに位置する、やや大きめの2本であると思われる。北側では検出されなかった。他のピットは後世のものである。（覆土）ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕北東コーナ床面上から多く出土した。



第24図　14号住居址出土遺物（1/4）

〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕本住居址は正方形の定形的な平面形をもちながら、住居中央に溝が設けられるという特徴をもつ。間仕切り的な機能をもつものであろうか。

第14号住居址出土遺物（第24図）

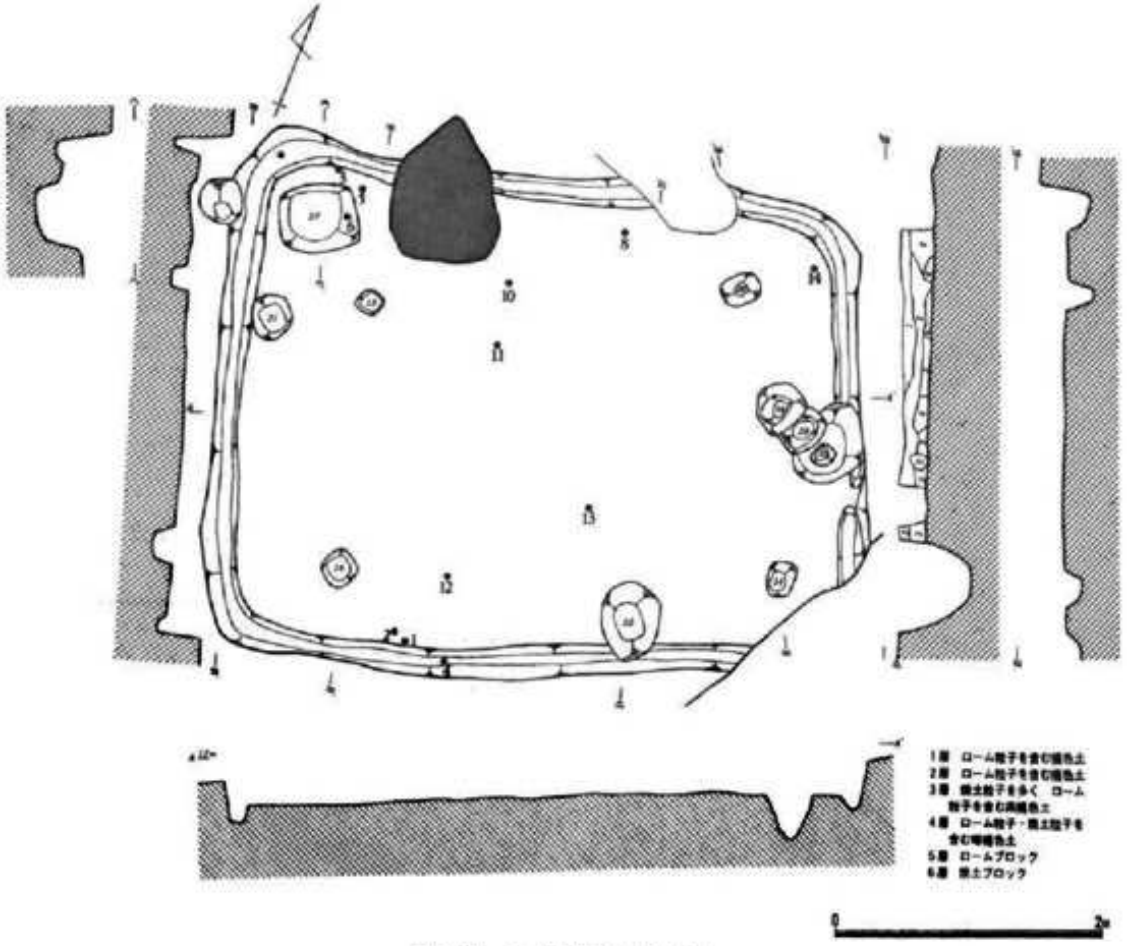
すべて土師器甕形土器である。

1は口頸部が外反する土器。口頸部内外面は横ナデ、胴部内外面はていねいにナデられる。覆土中の出土で、口頸部1/5程の遺存度。

2は頸部が大きく湾曲し、口縁部は強く外湾する。肩部は大きく開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられる。床面上の出土で、1/2程の遺存度。

3は長胴甕。胴部最大径を胴部上位にもち、徐々にすぼまる。口縁部は大きく外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいにヘラナデされる。覆土中の出土で、1/2程の遺存度。

4は大型の甕形土器。頸部は立ちぎみとなり口縁部は大きく外湾する。口唇部は複合口縁状を呈し、上下に三角形状に突出する。胴部は大きく張るものと思われる。須恵器模倣の甕とでもいおうか。口頸部内外面は横ナデ、胴部内外面はていねいにヘラナデされる。床面上の出土で、胴部上半以上2/3程の遺存度。

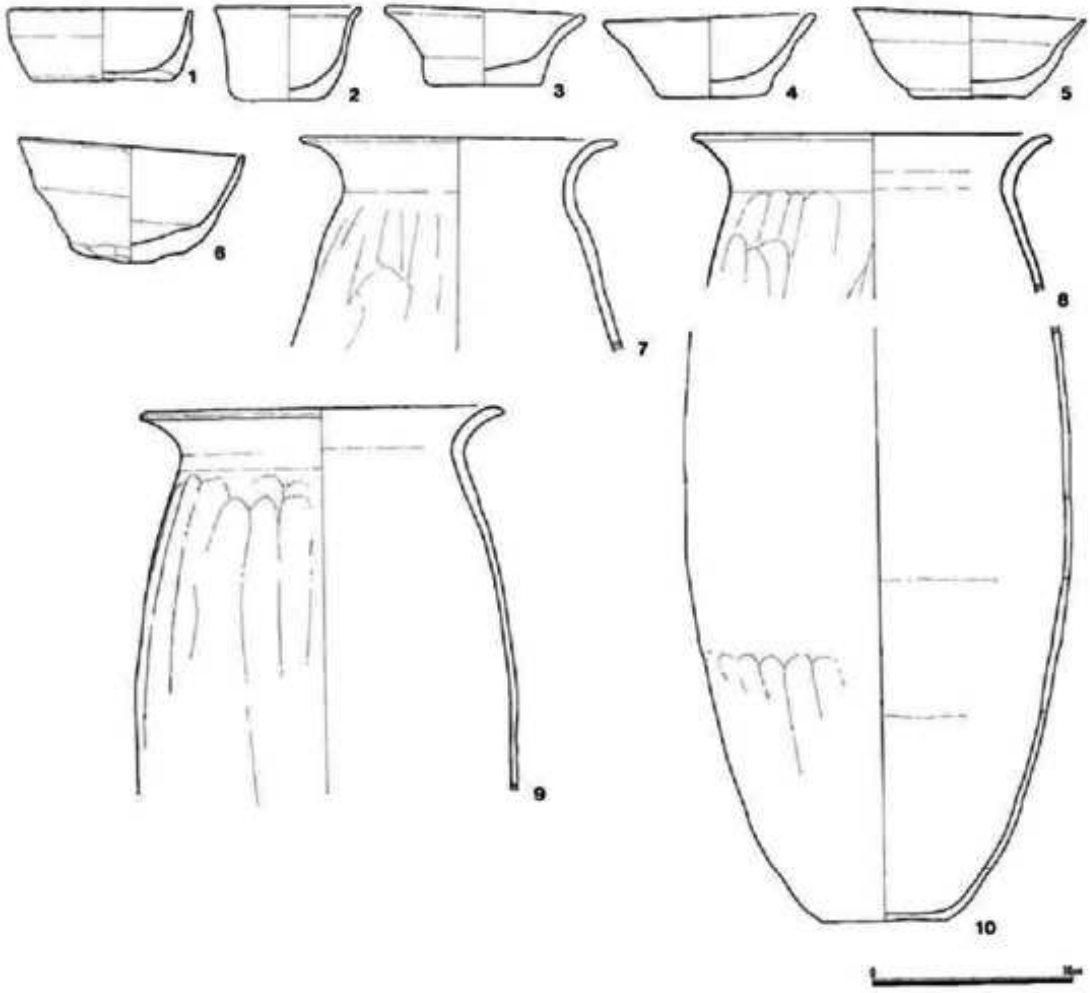


第25図　15号住居址（1/60）

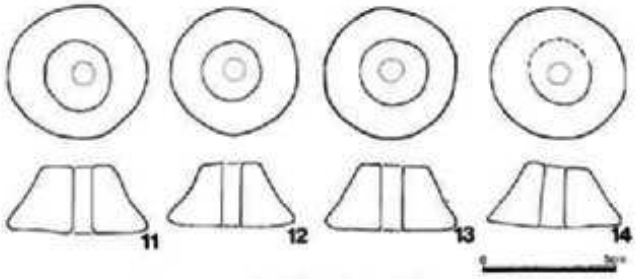
15号住居址（第25図）

〔位置〕（B－5）G。

〔住居構造〕2号溝址に切られる。（平面形）長方形。（規模）4.85×3.77m。（壁高）25cm前後を測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）上幅14cm・下幅10cm、深さ8～20cmを測り、カマド部分を除いて全周する。（床面）壁際の一部を除いてよく踏み固められている。（カマド）北壁中央から西に偏ってある。方位はN－15°－W、長さ110cm・幅53cmを測る。両袖はロームを馬蹄形状に隆起さ



第26図　15号住居址出土遺物（1/4）



第27図　15号住居址出土遺物2（1/3）

せ残し、長甕を伏せ灰褐色粘土を被覆させる。天井部も灰褐色粘土により構築される。（柱穴）各コーナー部にある4本が主柱穴となろう。他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）カマド左側の北西コーナーに位置する。平面形は長方形で、60×50cm・深さ30cmを測る。（覆土）焼土粒子・炭化物粒子を多く含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕カマド・貯蔵穴付近からの出土が多い。

〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕覆土中に焼土粒子・炭化物粒子を多く含むことより、焼失住居の可能性がある。

15号住居址出土遺物（第26・27図）

土師器坏・埦形土器（1～6）

1は平底の底部から急斜に立ち上がり、頸部に僅かな稜をもち、口縁部はほぼ直立する。内外面とも横ナデされる。南壁下西寄りの床面上出土で、口頸部の一部を欠く。

2はコップ状を呈する土器で、平底の底部から立ち上がり、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいにヘラナデされる。南壁下西寄りの床面上出土で、完形である。

3は平底の底部から直立して立ち上がり、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられる。北壁下貯蔵穴付近の床面上の出土で、3/4程度の遺存度である。

4は焼き歪みの大きい土器で、平底の底部から外反して開く。口唇端部は平坦である。外面口頸部は横ナデ、それ以下はナデられる。内面はヘラナデされる。壁際覆土上部の出土で、ほぼ完形である。

5は平底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に僅かなくびれをもち、口頸部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。北壁下貯蔵穴付近の床面上の出土で、完形である。

6は丸底ぎみの底部から内湾しながら開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられる。底部にはヘラ削り痕を残す。貯蔵穴に流れ込むような状態で出土。口頸部の一部を欠く。

以上の坏形土器は、いずれも雑な作りである。

土師器甕形土器（7～10）

7～9は、いずれも口縁部が大きく外湾し、胴部中位が僅かに張る器形となるものと思われる。7は口頸部内外面は横ナデ、胴部外面は縦位のヘラ削りの後ナデ、内面はナデられる。カマド中の出土で、胴部上半以上、1/3程度の遺存度である。8は口頸部内外面横ナデ、胴部外面はていねいにナデられるが、ヘラ削り痕を残す。内面はナデられる。北壁下ほぼ中央の床面上出土。胴部上半以下を欠損する。9は口頸部内外面は横ナデ、胴部外面は縦位のヘラ削りの後ていねいにナデられる。内面はナデられる。カマド右袖の補強材として使用された土器で、胴部下半以上1/2程の遺存度である。

10は胴部上半からゆるやかに底部に移行する。外面はていねいにナデられるが、ヘラ削り痕を残す。内面はナデられる。カマド前面の床面上の出土で、胴部上半以上を欠く。

土製品（11～14）

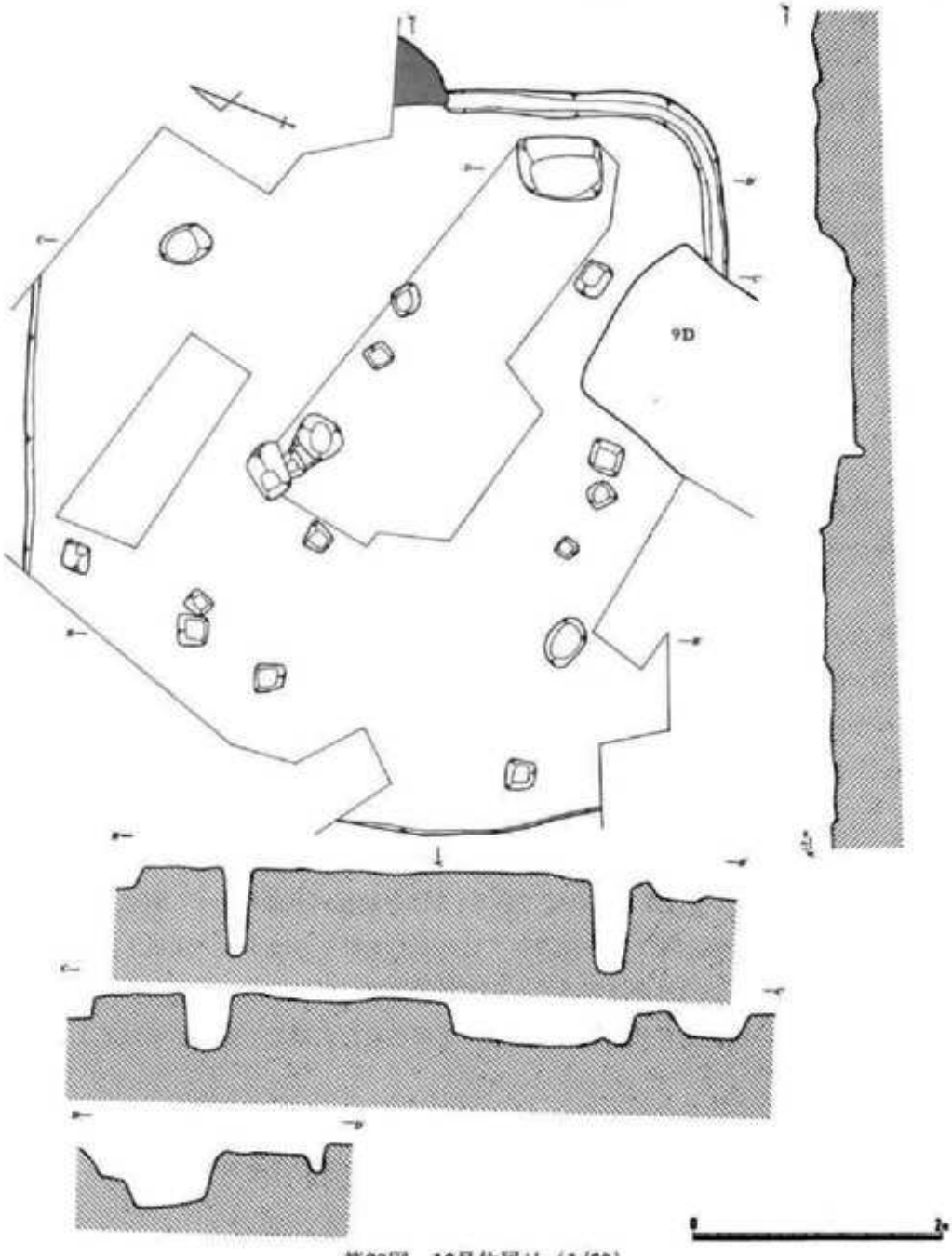
いずれも断面台形を呈する土製の紡錘車で、ていねいに磨かれている。11はカマド前面、12は北

壁そば、13は住居中央南寄り、14は北東コーナー部の床面上の出土である。

16号住居址（第28図）

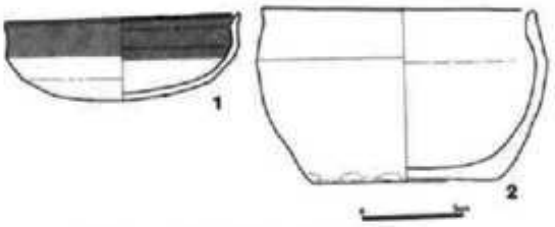
〔位置〕（C－7）G。

〔住居構造〕9号土坑に切られる。（平面形）長方形。（規模）6.04×5.56m。（壁高）攪乱が著しく、破壊されている部分が多い。10cm前後の高さを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）東壁から南壁にかけて検出された。上幅14cm・下幅8cm・深さ12cm前後を測る。（床面）攪乱が著しいが、



第28図　16号住居址（1/60）

硬化面が部分的に存在する。（カマド）東壁ほぼ中央に位置し、方位はN－68°－E。攪乱のため北半は破壊されている。天井部・袖部は灰褐色粘土で構築される。（柱穴）主柱穴は各コーナー部の4本と考えられる。他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）カマド右側に位置する。68×50cm・深さ50cmを測り、平面形は長方形を呈する。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。



第29図　16号住居址出土遺物（1/4）

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

16号住居址出土遺物（第29図）

1は土師器坏形土器。丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に僅かな稜をもち、口縁部は屈曲して外反する。内面口唇部直下にはかすかに沈線が巡る。口頸部内外面は横ナデ、体部内外面はていねいに磨きが施され光沢をおびる。口頸部内外面は赤彩される。覆土中の出土で、口頸部の一部を欠損する。

2は土師器埦形土器。平底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に僅かな稜をもち、口頸部は内傾ぎみに外反する。口頸部内外面は横ナデ、体部内外面はナデられる。外面体部下端にはヘラ削り痕を残す。底面には木葉痕がみられる。床面上の出土で、口頸部の一部を欠く。

17号住居址（第30図）

〔位置〕（D－6）G。

〔住居構造〕24～26号土坑に切られる。（平面形）長方形。（規模）6.96×6.4m。（壁高）17～38cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）カマド部分を除いて全周する。上幅14～20cm・下幅8～14cm・深さ8～12cmを測る。（床面）壁際を除いてよく踏み固められている。（炉）住居中央から僅かに北に偏って位置する。42×40cmの円形を呈し、10cm前後の掘り込みをもつ。炉の可能性が考えられる。（カマド）北壁ほぼ中央に位置し、方位はN－17°－W。大半を24号土坑に破壊されている。灰褐色粘土により構築されていた。（柱穴）主柱穴は各コーナーに設けられたと思われるが、南東コーナーのものは26号土坑により破壊されたらしい。南壁下中央には深さ10cm程の浅い掘り込みがあり、礫が配されていた。（貯蔵穴）北東コーナーに位置する。平面形は長方形を呈し、68×46cm・深さ45cmを測る。（覆土）上層はローム粒子・焼土粒子を僅かに含む黒褐色土、下層はローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

17号住居址出土遺物（第31図）

1は土師器坏形土器。丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に稜をもち、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデされる。体部及び底部外面はヘラ削り後ナデられる。内面はナデられ

る。北壁下、カマドと貯蔵穴の間の床面上出土で、口頸部を1/3程度欠損する。

2は須恵器聰形土器。体部から肩部にかけての破片と注口部の破片からの推定復元のため、実測図には多少の誤差が考えられる。丸底と思われる底部から内湾しながら立ち上がり、体部中央でほぼ垂直となり、大きく内屈して頸部へ移行する。口縁部は逆「ハ」字状に開こうか。注口部は貼り付けによりくちばし状に突出する。体部中央に2条の沈線を巡らせ、その間には櫛歯状工具による列点文が充填される。覆土中からの出土。

3は小型の土師器甕形土器で口縁部を欠損する。上底ぎみの底部から直線的に立ち上がり、肩部は内湾して頸部に移行する。頸部には僅かな稜をもち、口縁部は外反するようである。口頸部内外面は横ナデ、胴部内外面はナデられるが、外面にはヘラ削り痕を残す。覆土中の出土。

5は土師器甑形土器か。頸部では直線的に開き、口縁部で外反する。頸部には僅かに稜をもち、胴部は直線的である。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられる。北壁下、カマド右横の床面上出土で、胴部中位以下を欠損する。

5は須恵器甕形土器。1/5程度の破片からの推定復元のため若干の誤差があろう。口頸部は大きく外湾し、口唇部外側は面取りが施される。下端には三角形状に突出部をもつ。覆土中の出土。

18号住居址（第32図）

〔位置〕（C－5）G。

〔住居構造〕19号住居址、7・23号土坑に切られる。（平面形）正方形。（規模）6.2×6.12m。（壁高）35～55cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）19号住居址に切られる北西コーナーでは不明であるが、全周するものと思われる。上幅15cm・下幅10cm・深さ10cm前後を測る。（床面）壁際を除いて硬く踏み固められている。（カマド）北壁に位置したと思われるが、19号住居址に破壊されたのであろう。（柱穴）主柱穴4本で構成されており、他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）北西コーナーに位置する。平面形は不整長方形を呈し、76×66cm・深さ30cm前後を測る。（覆土）上層はローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土、下層はローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕北西コーナー付近の床面上から多く出土した。

〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕覆土中に焼土粒子・炭化物粒子を含み、焼失住居の可能性をもつ。

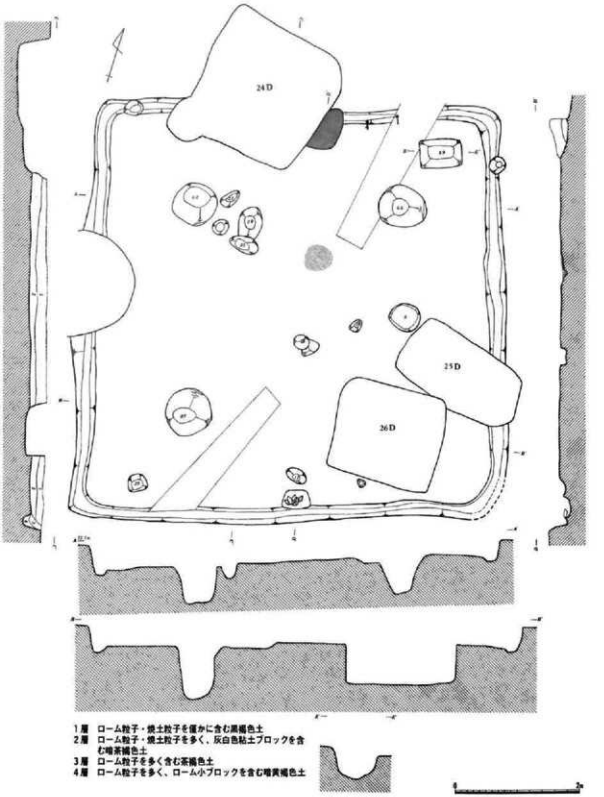
18号住居址出土遺物（第33・34図、第108図1）

土師器坏・埦形土器（1～5）

1は埦状の土器で、丸底の底部から内湾しながら開き、口頸部はほぼ直線的に立ち上がる。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいにナデられる。覆土中の出土で、1/3程の遺存度。

2は口頸部が内湾し、底部は高台状に突出する。口頸部内外面は横ナデされるが、外面にはハケ目を残す。体部内外面はナデられる。底面は磨きが施され光沢をおびる。覆土中出土で、1/2遺存。

3は丸底ぎみの底部から徐々に内湾しながら開き、肩部で張らみ、頸部で屈曲し、口縁部は僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデされる。体部及び底部外面はていねいにヘラナデされ光沢をお



第30図　17号住居址（1/60）

びる。内面はナデられる。内面及び口頸部外面は赤彩される。覆土中の出土で、1/3程の遺存度である。

4は丸底ぎみの底部から内湾しながら立ち上がる。口頸部内外面は横ナデ、それ以下は外面ヘラナデ、内面はナデられる。口頸部内外面は赤彩される。北壁下中央の床面上の出土で、1/3程度の遺存度。

5は口縁部が外反する土器。口頸部内外面は横ナデ、それ以下は外面ヘラナデ、内面はナデられる。覆土中の出土で、体部下半以上1/3程の遺存度。

土師器高坏形土器（6～8）

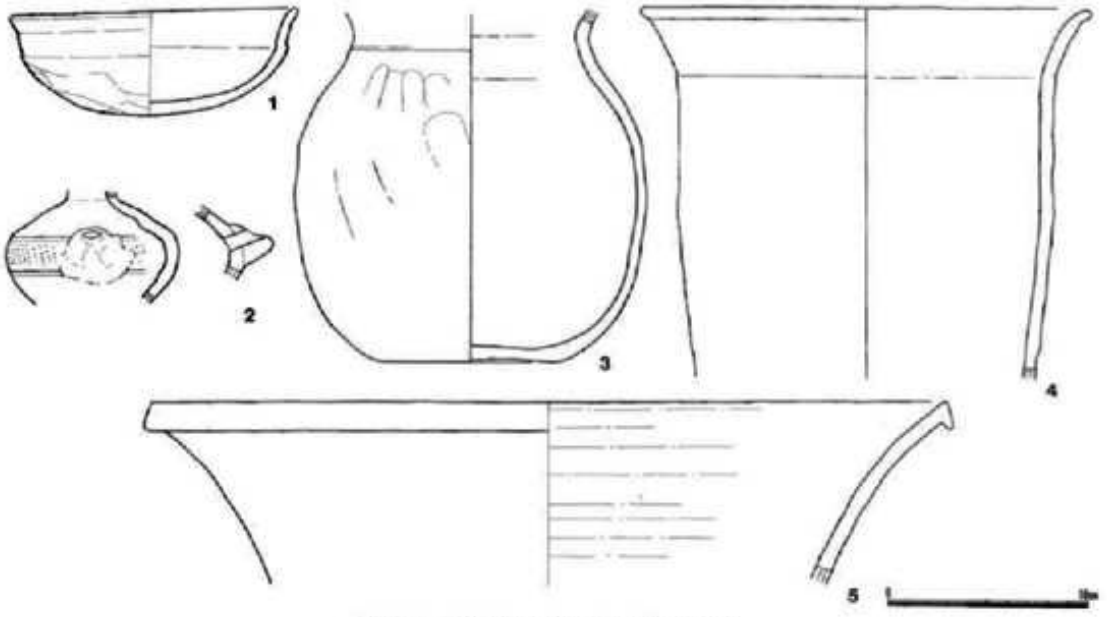
6は坏部下半から脚台部下半にかけて遺存する。坏部は椀状を呈し内湾しながら開く。脚柱部は直線的に僅かに開き、裾部は「ハ」字状に開くようである。坏部内外面はナデられ赤彩される。脚台部外面はナデられるが、斜位のハケ目痕を残し赤彩される。内面はナデられる。西側主柱穴付近の床面上の出土である。

7は坏部下半と脚台部との接合部が遺存する。坏部は皿状の器形となろうか。坏部内外面はていねいにナデられ赤彩される。脚台部外面には縦位のヘラ削り痕がみられ赤彩される。覆土中の出土である。

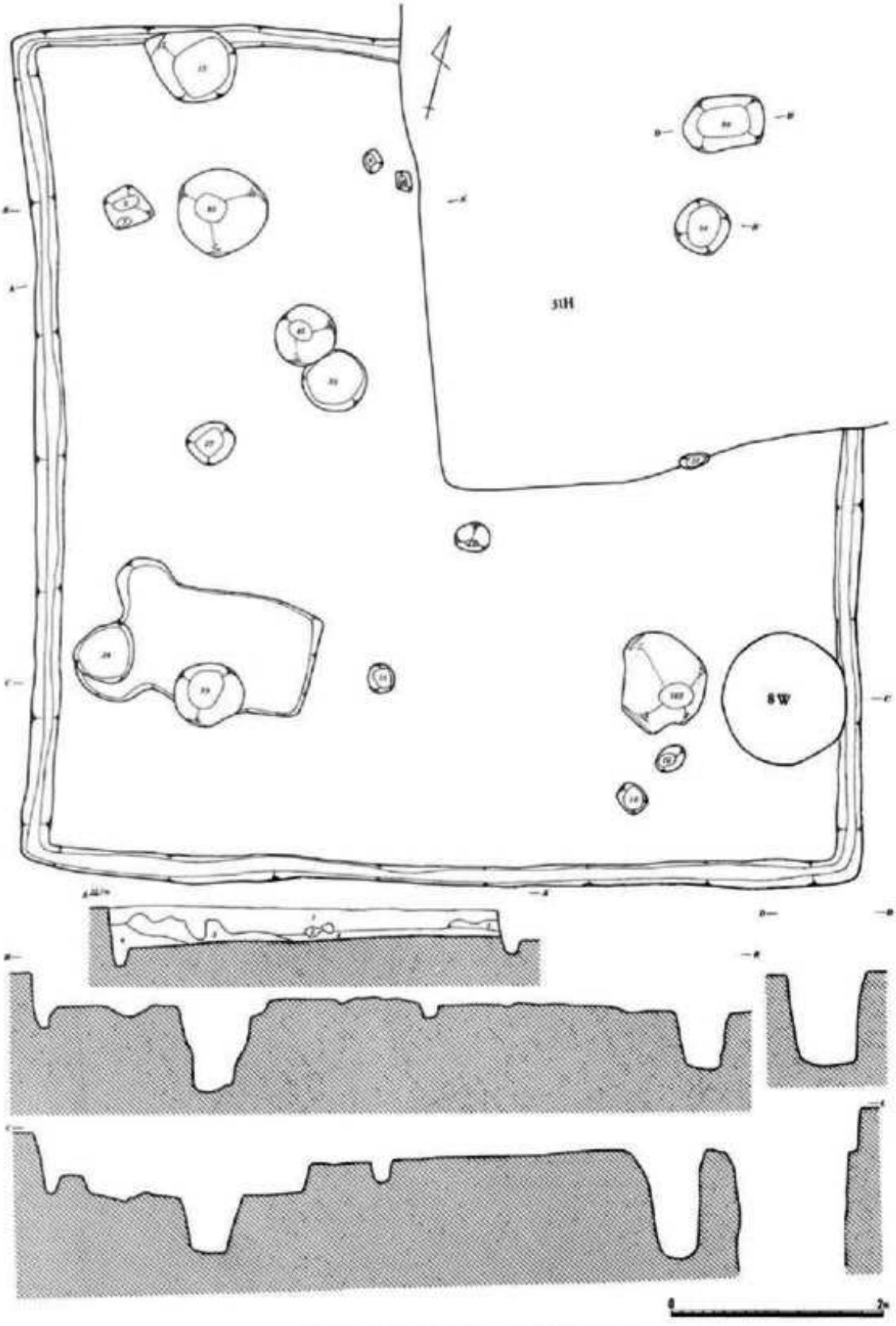
8は脚台部のみ遺存する。直線的に僅かに開き、裾部は「ハ」字状に開くものと思われる。外面はていねいにナデられるが縦位のヘラ削り痕を残し赤彩される。内面にはヘラ状工具による調整痕を残す。裾部は横ナデされるらしい。覆土中の出土である。

土師器甑形土器（9～11）

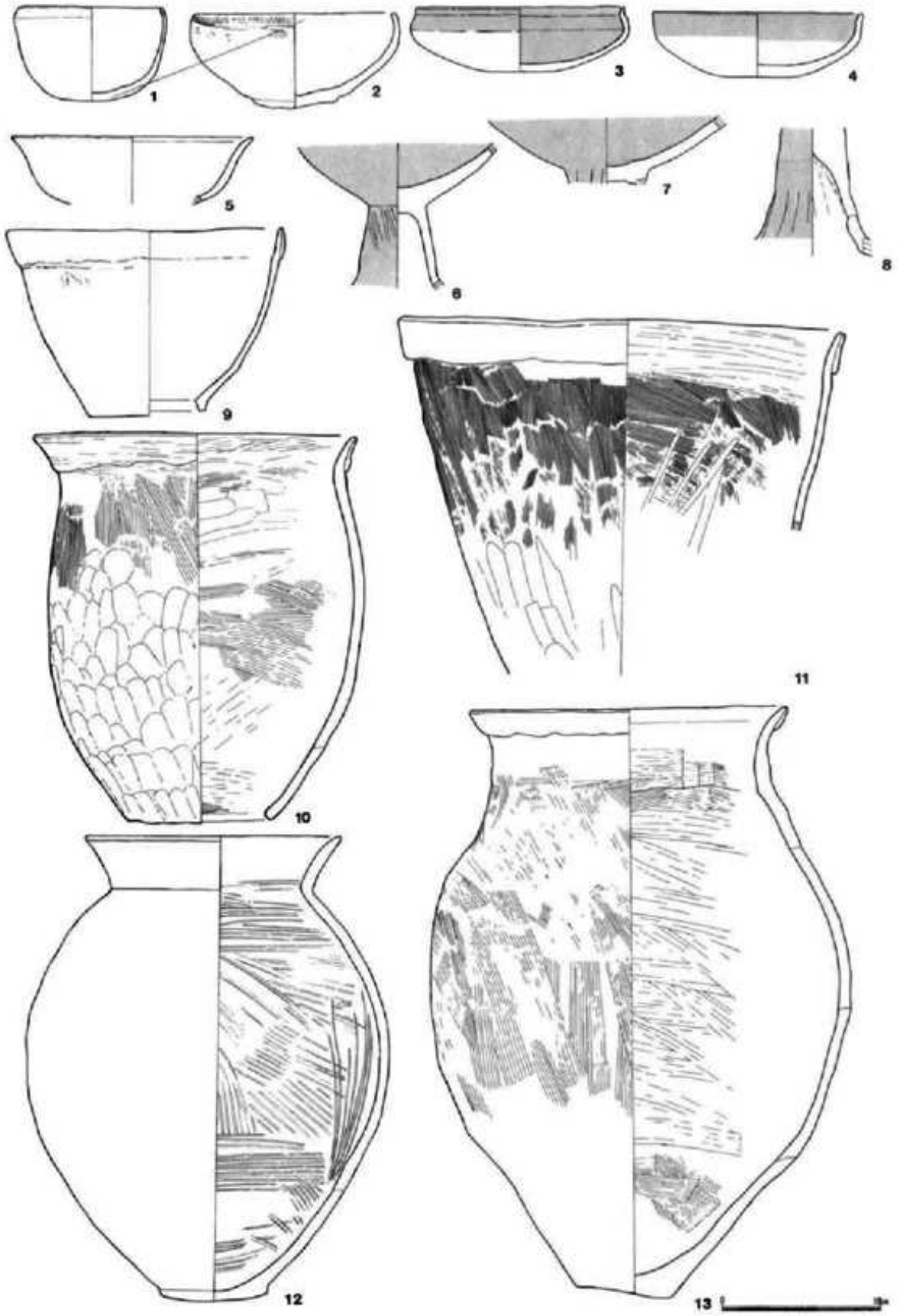
9は小型の土器で、僅かに内湾しながら単純に開く。口縁部は粘土帯の貼り付けにより複合口縁状を呈する。口縁部内外面は横ナデ、それ以下はナデられる。口縁部直下はハケ状工具により刺突



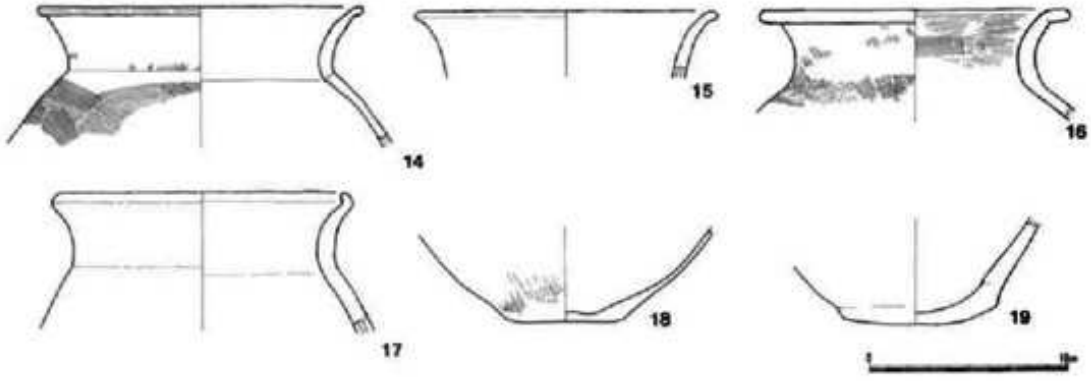
第31図　17号住居址出土遺物（1/4）



第32図　18号住居址、7号土坑（1/60）



第33図　18号住居址出土遺物1（1/4）



第34図　18号住居址出土遺物２（1/4）

され列点文状に残る。北壁際ほぼ中央の床面上の出土で、口頸部から胴部へかけての一部分を欠損する。

10は胴部中位が張らみ、頸部でくびれ、複合口縁状を呈する口縁部は外反する。口縁部内外面はナデられるが横位のハケ目を残す。胴部外面は上半が斜位・縦位のハケ目調整、下半はヘラ削りないしヘラナデされるが、これはハケ目調整後になされたらしい。胴部内面は全面ハケ目を残すが、部分的にナデられる。住居西側の主柱穴間の床面上出土で、口縁部から胴部中位にかけて1/2程度欠損する。

11はほぼ直線的に単純に開く器形で、口縁部は帯状の複合口縁となる。口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は上半がハケ目を顕著に残す。下半はヘラ削りないしヘラナデされる。内面は全面にハケ目調整されるが、部分的にヘラナデされる。西側主柱穴付近の床面上の出土で、胴部下半以上1/2程度の遺存度である。

土師器甕形土器（12～19）

12は胴部中位に最大径をもち、底部は丸底状を呈する。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は直線的に外反する。口頸部内外面は横ナデされる。胴部外面は上半がヘラナデ、下半はヘラ磨きに近い縦位のヘラナデがていねいに施される。胴部内面は荒くヘラナデされる。北壁際ほぼ中央の床面上出土で、ほぼ完形。

13は胴部中位に最大径をもつ土器で、頸部は直立ぎみに立ち上がり、複合口縁状を呈する口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデされる。胴部外面は下位以上にハケ目を残すが、部分的にヘラナデされる。下位はヘラ磨き的なヘラナデがていねいに施され光沢をおびる。内面は全面にハケ目を残す。西側主柱穴付近の床面上出土で、ほぼ完形である。

14は外反する口頸部をもつ土器。口頸部内外面は横ナデされるが、内面には横位のハケ目を残す。肩部外面には明瞭はハケ目を残す。内面はナデられる。北壁際中央の床面上出土で、肩部以上1/3程度の遺存度である。

15はやや立ちぎみの頸部をもち口縁部は外反する。口頸部内外面とも横ナデされる。覆土中の出土で、口頸部のみの遺存。

16は口縁部が大きく外湾する。口縁部は複合口縁状を呈するが、これは輪積みの接合痕によるも

のである。口頸部内外面は横ナデされるが、外面は斜位、内面は横位のハケ目を残す。肩部外面はハケ目、内面はナデられる。覆土中の出土で、肩部以上1/2程度遺存する。

17は頸部が外反し、口縁部は内屈する。口頸部内外面は横ナデ、肩部内外面はナデられる。西側主柱穴付近の床面上出土で、肩部以上1/3程度の遺存度。

18は平底の底部から内湾しながら立ち上がる。外面にハケ目痕がみられる。北壁際ほぼ中央の床面上の出土である。

19は丸底ぎみの底部をもつ土器。内外面ともヘラナデされるが、外面及び底面は特にていねいである。覆土中の出土。

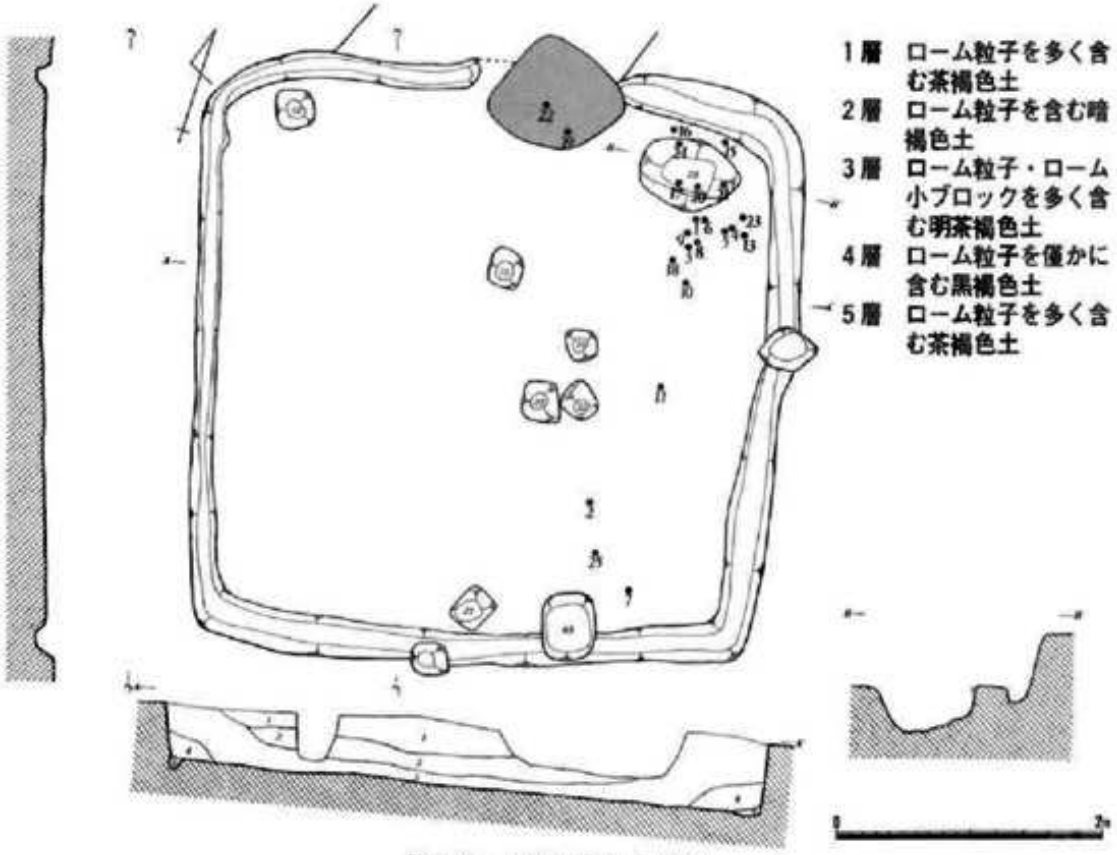
土製品（第108図1）

断面形台形を呈する紡錘車である。表面はていねいにナデられる。覆土中の出土。

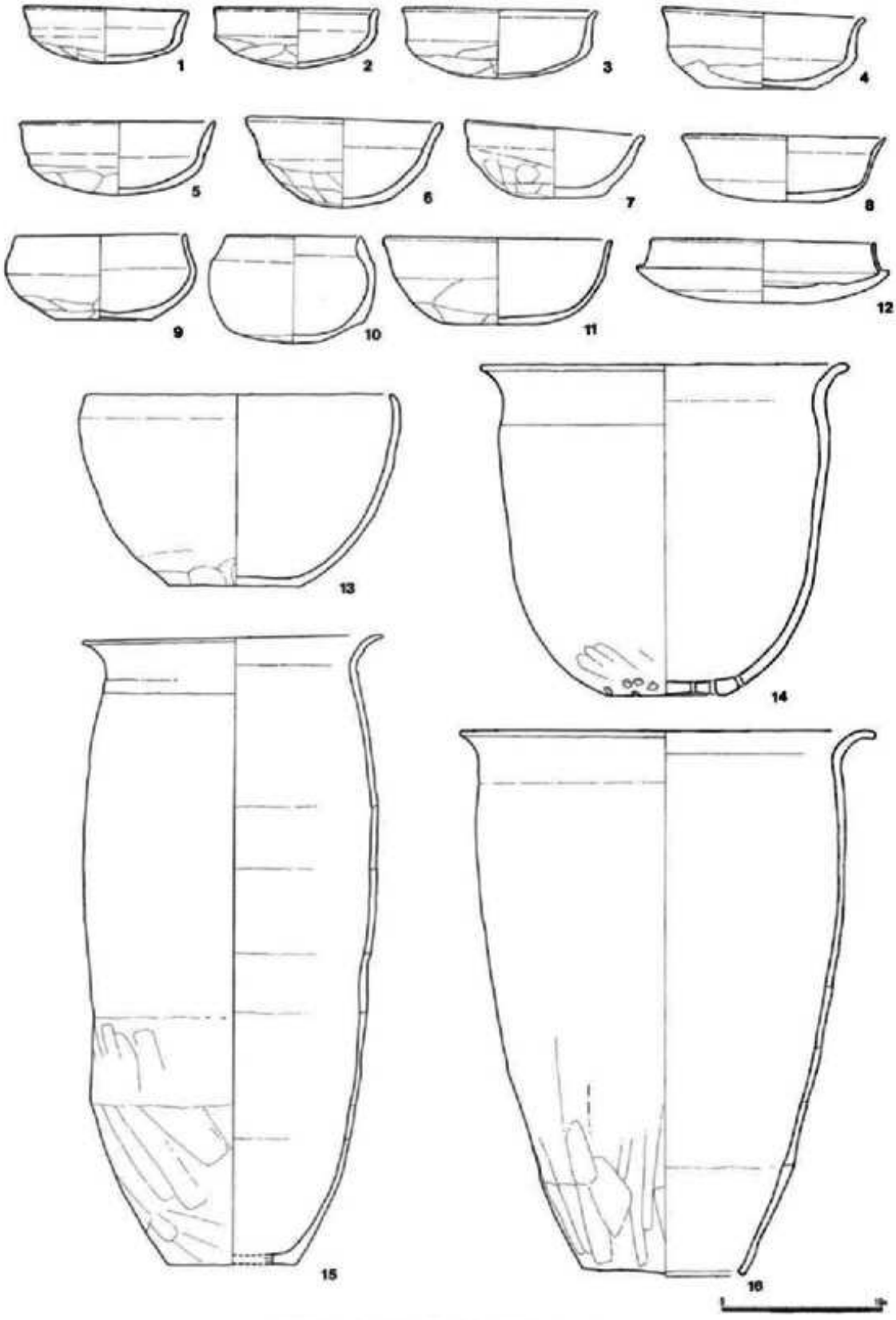
19号住居址（第35図）

〔位置〕（C－5）G。

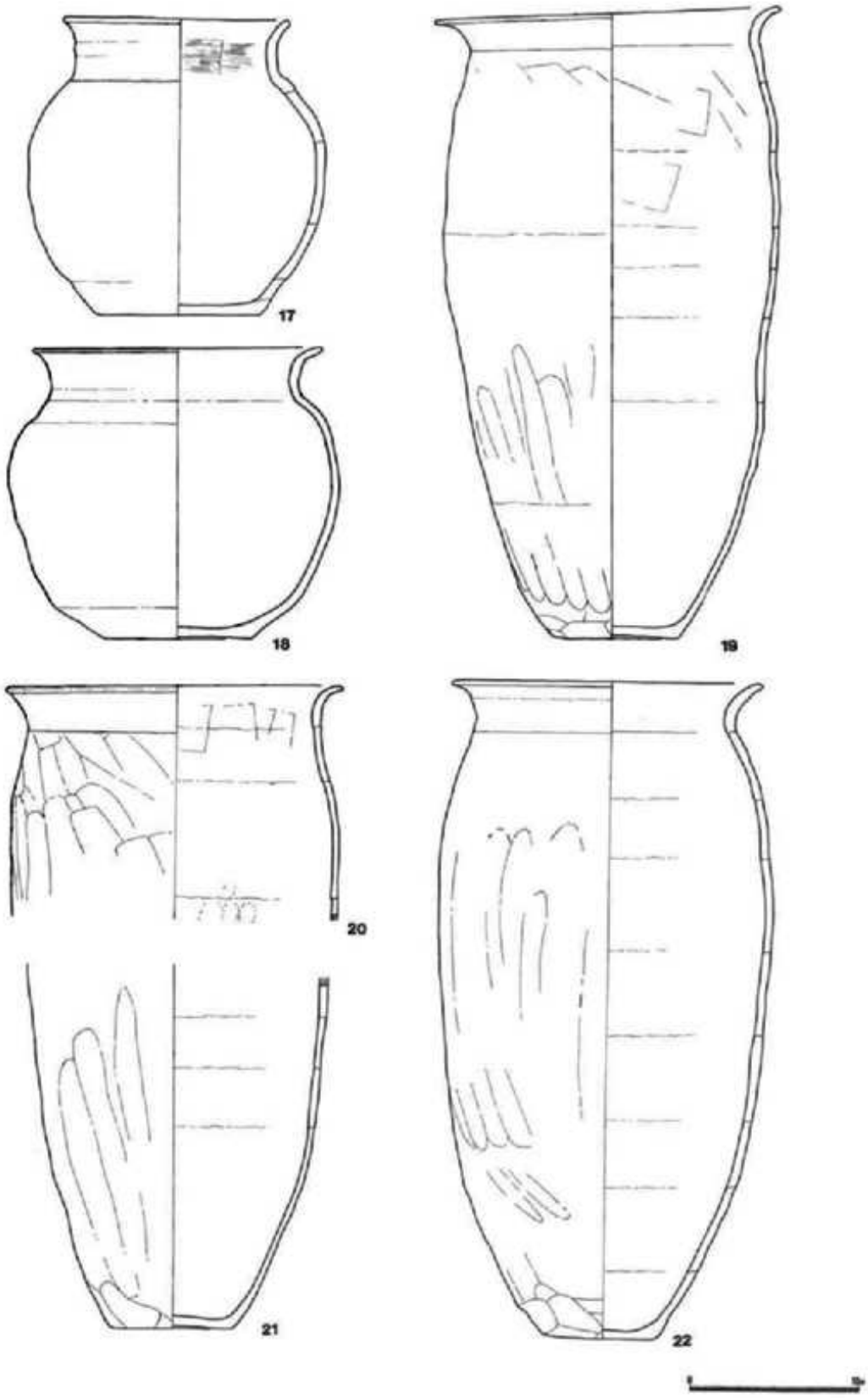
〔住居構造〕18号住居址を切り、2号溝址に切られる。（平面形）正方形。（規模）4.64×4.62m。（壁高）50cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）カマド部分を除いて全周する。上幅20cm・下幅10cm・深さ10cm前後を測る。（床面）壁際を除いてよく踏み固められている。（カマド）北壁ほぼ中央に位置し、方位はN－11°－W。長さ81cm・幅69cmを測り、両袖部はロームを隆起させ



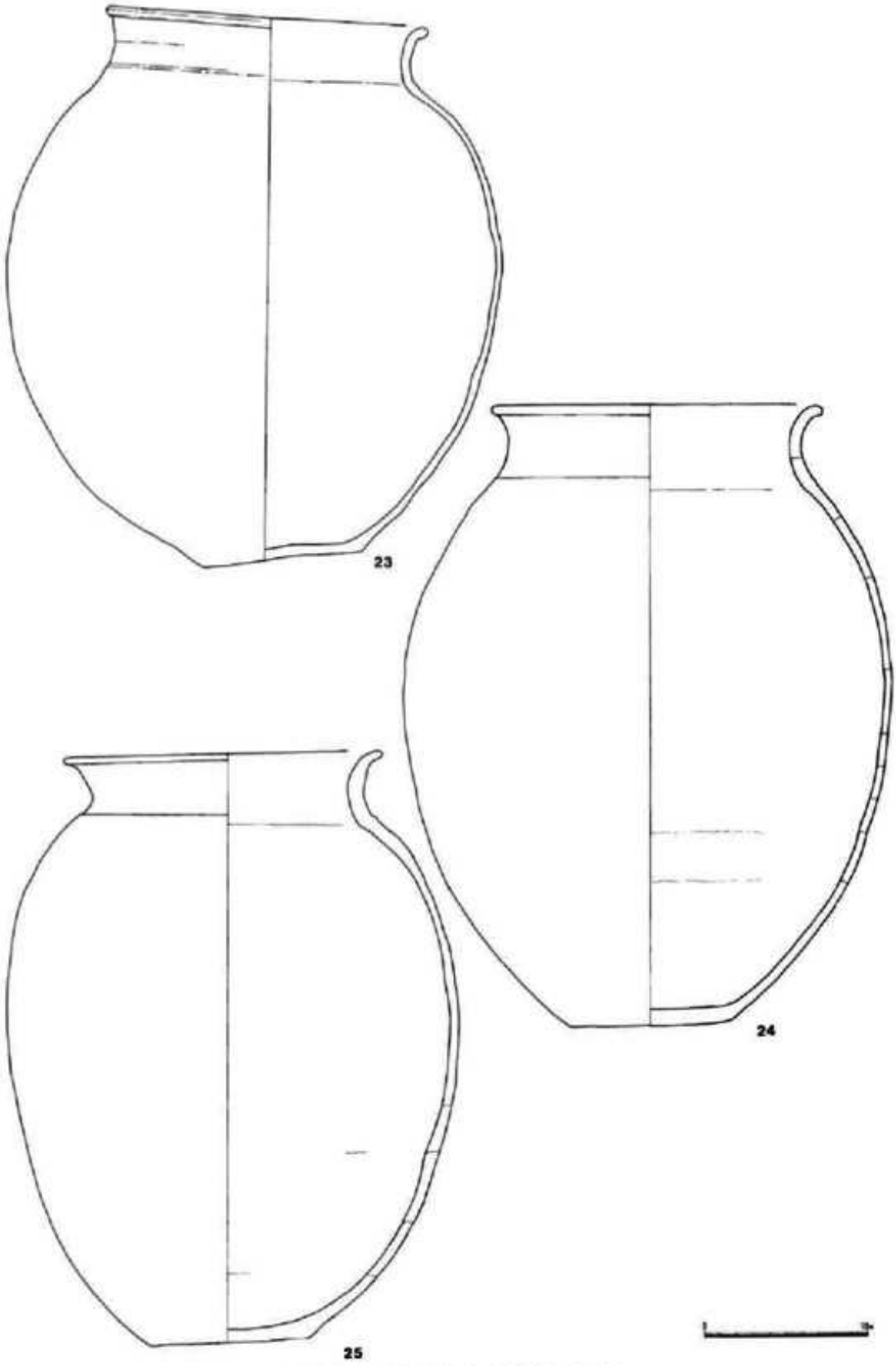
第35図　19号住居址（1/60）



第36図　19号住居址出土遺物1（1/4）



第37図　19号住居址出土遺物2（1/4）



第38図　19号住居址出土遺物3（1/4）

残し、灰褐色粘土を被覆する。天井部も灰褐色粘土で構築される。掛け口には土製支脚がすえられていた。（柱穴）検出されなかった。住居内のピットはすべて後世のものである。（貯蔵穴）北東コーナーに位置する。平面形は長方形を呈し、76×54cm・深さ30cmを測る。

〔遺物〕覆土中・床面上から多く出土した。カマド・貯蔵穴付近に集中する。

〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕覆土中に多量の焼土粒子を含み、焼失住居の可能性をもつ。

19号住居址出土遺物（第36～38図）

土師器坏・埦形土器（1～11）

1は小型の土器。丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられるが、外面にはヘラ削り痕を残す。完形である。

2も小型の土器であるが、1よりも深さがある。丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に稜をもち、口縁部は僅かに外反しながら開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられるが外面にはヘラ削り痕を残す。1/3程度を欠損する。

3は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に稜をもち、口縁部は外反する。口頸部内外面横ナデ、それ以下はナデられるが、外面にはヘラ削り痕を残す。完形。

4は上底ぎみの底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に稜をもち、口縁部は外湾しながら開く。外面は口頸部横ナデ、体部上半はナデられるが、下半は雑なヘラ削り痕を残す。内面は体部上半以上横ナデ、それ以下はナデられる。底面には木葉痕を残す。完形。

5は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に僅かなくびれをもち、口縁部は直線的に開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられるが、外面にはヘラ削り痕を残す。完形。

6は深みのある埦状の土器。頸部に僅かな稜をもち、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、体部外面はナデられるが、ヘラ削り痕を顕著に残す。内面はヘラナデされる。完形。

7は平底の底部からほぼ直線的に開き、頸部に僅かな稜をもち、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられるが、外面にはヘラ削り痕を残す。口縁部の一部を欠損する。

8は丸底ぎみの底部から開き、頸部に至り僅かな稜をもつ。口頸部は僅かに外反しながら開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられるが、外面体部下半から底部にかけてはヘラ削り痕を残す。口頸部を1/2程欠損する。

9は平底の埦状の土器。体部は大きく内湾し、口縁部は僅かに外反する。外面は口頸部横ナデ、体部はナデられるが、下半にはヘラ削り痕を残す。内面は体部上半以上横ナデ、それ以下はナデられる。底面には木葉痕を残す。完形。

10は口縁部がすぼまる埦状の土器。丸底状の底部から屈曲して体部に移行する。体部は内湾しながら立ち上がり、頸部に僅かな稜をもち、口縁部は外反ぎみに内傾する。外面は口頸部横ナデ、体部はナデられる。底部にはヘラ削り痕を残す。内面は口頸部横ナデ、それ以下はナデられる。完形。

11はやや大ぶりの土器で、丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、口頸部は直線的に開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられるが、外面にはヘラ削り痕を残す。口頸部1/3程度を欠損する。

1・3～6・8～10は貯蔵穴付近の床面上出土で、1・6は重なっていた。2は南東コーナー部付近、7は南壁際東寄りの床面上出土。11は住居中央から東に寄った覆土中の出土で、床面から20cm程浮いていた。

須恵器坏形土器（12）

丸底の底部から僅かに内湾しながら開き受部に移行する。受部は水平に延び段をなし、口縁部は僅かに外反しながら内傾する。底部は回転ヘラ削り、他は横ナデされる。覆土中の出土で、1/3程度の遺存度。

土師器鉢形土器（13）

平底の底部から内湾しながら立ち上がる埦状の土器である。口縁部内外面は横ナデ、それ以下はナデられるが、外面底部付近にはヘラ削り痕を残す。貯蔵穴南側の床面上出土で、1/2強の遺存度。

土師器甑形土器（14・16）

14は平底の底部から僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁部は外湾する。底面から胴部下端にかけて、径5mm前後の小孔が多数穿たれる。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面には部分的にヘラ削り痕を残す。覆土中の出土で、1/3程度の遺存度。

16は底部から内湾ぎみに立ち上がり、頸部が僅かにくびれ、口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデ、胴部外面はヘラナデされるが、下半には縦位のヘラ削り痕を残す。胴部内面はていねいにヘラナデされる。貯蔵穴北側の床面上出土で、1/3程度欠損する。

土師器甕形土器（15・17～25）

15はほぼ筒状の胴部をもつ土器で、頸部に僅かな稜をもち、口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面胴部下半にはヘラ削り痕を残す。底面には木葉痕がみられる。北東コーナー部の床面上出土で、底部の一部を欠損する。

17・18は大きさに差異が認められるが、相似た器形の土器である。広めの平底の底部をもち、胴部はほぼ球形を呈する。頸部に僅かな稜をもち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられる。底面には木葉痕を残す。17は床面と同レベルの埋没した貯蔵穴上の出土で完形。18は貯蔵穴南側の床面上出土で、1/3程度欠損する。

19は胴部中位に僅かな張らみをもつ長胴の甕で、頸部に稜をもち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面胴部下半にはヘラ削り痕を残す。底面には木葉痕がみられる。カマド上の出土で、ほぼ完形である。

20は胴部中位以下を欠く。頸部は立ちぎみで、口縁部は外湾する。口頸部は横ナデ、胴部外面はヘラナデされるがヘラ削り痕を顕著に残す。胴部内面はヘラナデされるが、輪積み痕上下には指頭痕がみられる。貯蔵穴上層の出土。

21は胴部中位以上を欠損する。内外面ともヘラナデされるが、外面にはヘラ削り痕を残す。底面には木葉痕がみられる。貯蔵穴上層の出土。

22は胴部上位に僅かな張らみをもつ長胴甕で、頸部でくびれ、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面にはヘラ削り痕を残す。底部には木葉痕がみられる。カマド掛け口に残された土器で、完形。

23は胴部中位に最大径をもつ土器。肩部で内湾し、頸部は立ちぎみで、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデされる。胴部外面はヘラ削り後、ヘラナデされる。内面はヘラナデ。貯蔵穴東側の床面上出土で、胴部を1/2程度欠損する。

24は胴部中位に最大径をもつ。頸部に僅かな稜をもち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、胴部外面はていねいにヘラナデされ光沢をおびる。胴部内面はヘラナデされる。貯蔵穴上層の出土で、ほぼ完形。

25は最大径がほぼ胴部中位にある。頸部に稜をもち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデされる。胴部内外面はていねいにヘラナデされる。南東コーナー付近の床面上出土で、胴部下位の一部を欠く。

20号住居址（第18図）

〔位置〕（B－5）G。

〔住居構造〕11号住居址を切り、10号住居址、1・3～5号土坑、2号溝址に切られる。（平面形）長方形。（規模）5.54×4.46m。（壁高）比較的遺存状態のよい南・東壁で30cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）他の遺構と重複する部分では不明であるが、おそらくカマド部分を除いて全周すると思われる。上幅20cm・下幅10cm・深さ10cm前後を測る。（床面）壁際を除いて硬く踏み固められている。（カマド）1号土坑により大半が破壊されている。東壁中央から北に偏って位置し、方位はN－63°－E。灰褐色粘土により構築される。（柱穴）検出されなかった。住居址内のピットは後世のものである。（貯蔵穴）北東コーナーに位置するが、大部分を1号土坑に破壊される。深さ36cmを測る。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕カマド付近にまとまって出土した。

〔時期〕鬼高式期。

20号住居址出土遺物（第39図）

土師器坏形土器（1・2）

1は丸底ぎみの底部から内湾しながら立ち上がり、口頸部は直線的に内傾する。口頸部内外面は横ナデ、以下はナデられる。住居中央から南に寄った床面上の出土で、口縁部を若干欠く。

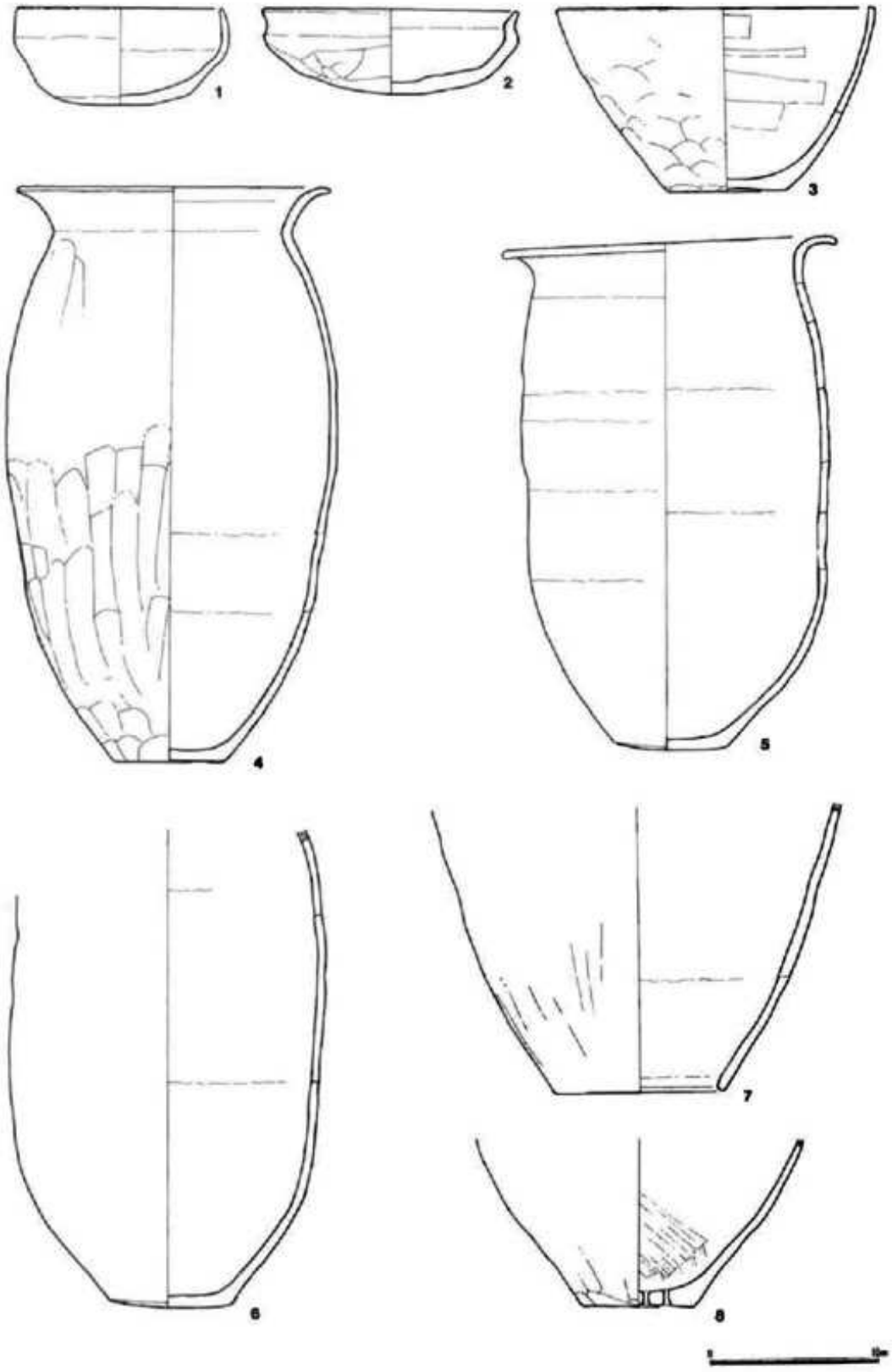
2は大ぶりで器壁が厚い土器。丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部が張らみ、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデされる。体部外面はヘラナデされるが、ヘラ削り痕を残す。内面はナデられる。住居中央から南に寄った床面上の出土で、2/3の遺存度。

土師器鉢形土器（3）

平底の底部から僅かに内湾しながら開く。口唇端部は平坦である。内外面ともヘラナデされるが、外面にはヘラ削り痕を残す。カマド右横の床面上出土で、ほぼ完形。

土師器甕形土器（4～6）

4は胴部中位に張らみをもつ長胴甕。口頸部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデされる。胴部外面はヘラ削り後にナデられる。内面はナデられる。カマド右横の床面上の出土で、胴部上半から口縁部にかけて大きく欠損する。



第39図　20号住居址出土遺物（1/4）

5は丸底ぎみの底部から開き、胴部中位はほぼ直線的に立ち上がり、肩部で僅かにすぼみ、口縁部は大きく外湾し水平ぎみに開く。口頸部内外面は横ナデ、胴部内外面はナデられる。カマド右横床面上の出土で、口縁部・胴部の一部を欠く。

6は5と相似た器形をもつ土器。内外面はヘラナデされる。貯蔵穴中の出土で、胴部中位以上を欠く。

土師器甑形土器（7・8）

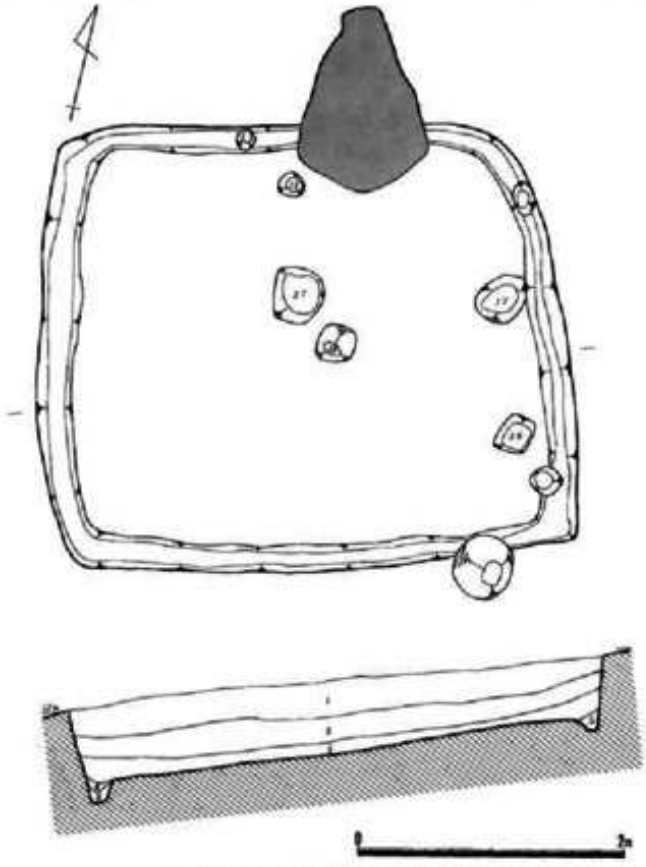
7は底部から直線的に開く土器。外面はヘラ削り後にナデられる。内面はナデられる。床面上の出土で、胴部下位以下1/2の遺存度。

8は底部から僅かに内湾しながら開く。内外面はヘラナデされるが、外面にはヘラ削り痕を残す。底面には9個の小孔が穿たれる。床面上の出土で、胴部下位以下の遺存。

21号住居址（第40図）

〔位置〕（B－6）G。

〔住居構造〕1・6号住居址を切る。（平面形）長方形。（規模）4.02×3.38m。（壁高）1号住居址の床面から50cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）上幅15cm・下壁10cm・深さ10cm前後を測り、カマド部分を除いて全周する。（床面）中央付近に硬化面を残す。（カマド）北壁中央からやや東に偏って位置し、方位はN－16°－W。長さ140cm・幅100cm・壁への掘り込み80cmを



第40図　21号住居址（1/60）

測る。天井部・袖部は灰褐色粘土を被覆させ構築している。（柱穴）検出されなかった。住居址内のピットは後世のものである。（覆土）1層―ローム粒子・焼土粒子を多く含む茶褐色土。2・3層―ローム粒子・焼土粒子を多く含む暗褐色土。4・5層―ローム粒子・ロームブロックを含む暗黄褐色土。

〔遺物〕床面上及び3層から炭化米・炭化種子（ヤマモモ）が検出された。

〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕覆土中に焼土粒子を多く含み、また、炭化種子の出土などから、焼失住居の可能性がある。

21号住居址出土遺物（第41・42図）

須恵器蓋形土器（1）

坏蓋である。天井部から頸部への移行は途中僅かな窪みを有し、口縁部は内湾する。口縁部内面には1条の沈線が巡る。覆土中の出土で、小片である。

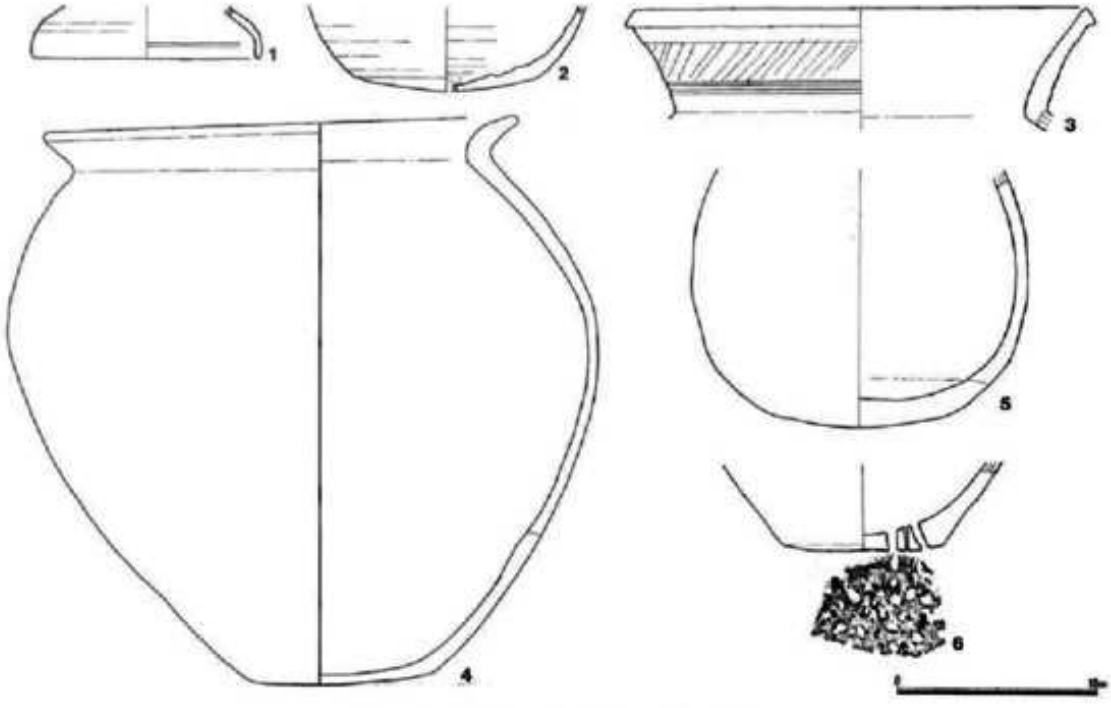
須恵器坏形土器（2）

坏蓋の可能性もある。丸底の底部から内湾しながら立ち上がる。底部は回転ヘラ削りされる。覆土中の出土で、小片である。

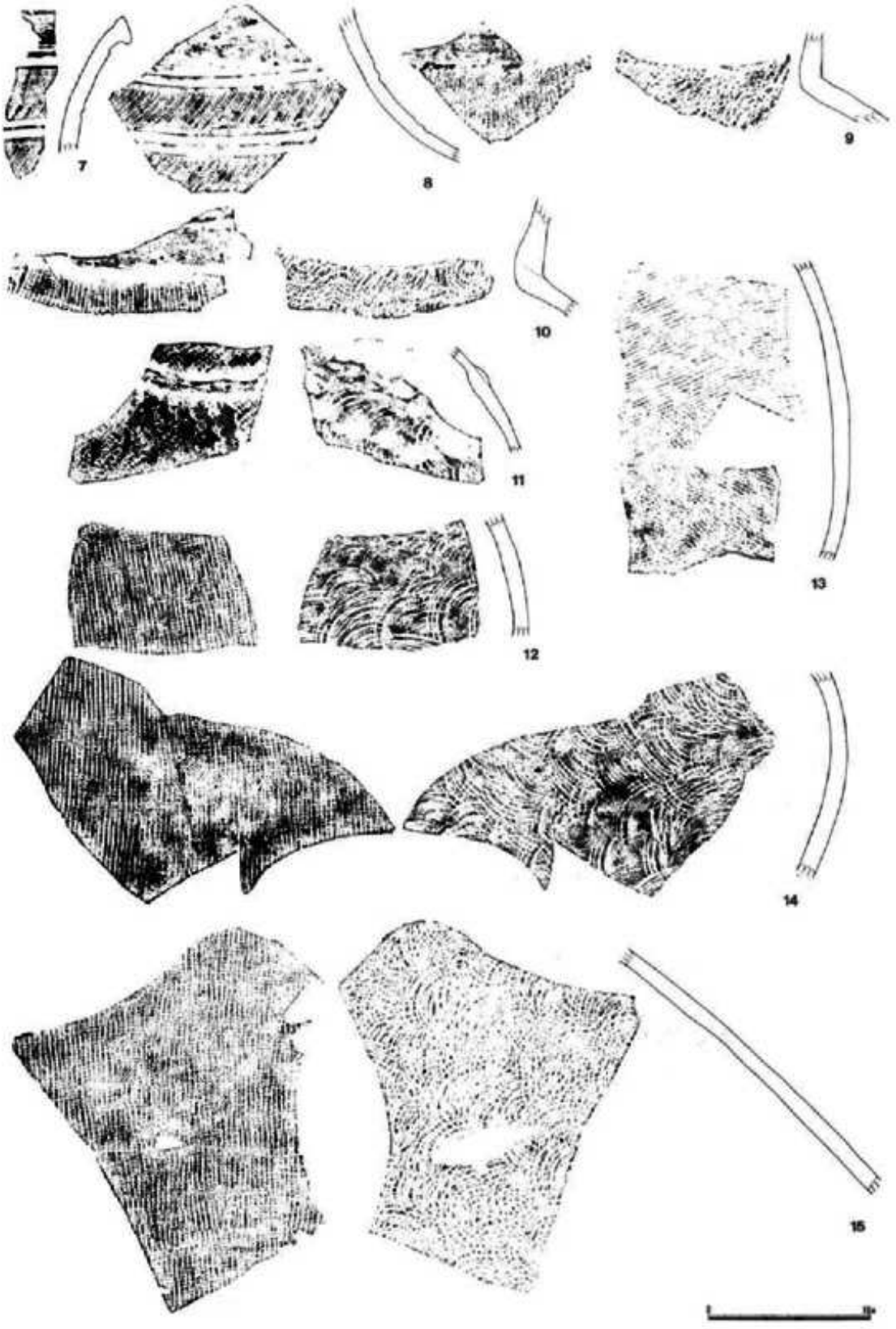
須恵器甕形土器（3・7～15）

3は口頸部のみ若干遺存する。口頸部はゆるやかに外湾し、口唇端部は面取りされる。口唇部下端は三角形状に突出する。頸部には2条の沈線が巡り、その上部には櫛歯状工具による列点文が斜位に施される。床面上の出土である。

7・8は同一個体と思われる土器。7は口頸部破片で、ゆるやかに外湾して開く。口唇部は端部を上下に突出する。口縁部より1段の稜と2条の沈線を巡らせ、その間に17本1単位の櫛描波状文



第41図　21号住居址出土遺物1（1/4）



第42図　21号住居址出土遺物2（1/4）

を施文する。8は肩部の破片。2本1単位の沈線を2段巡らせ、その間を17本1単位の櫛描波状文を充填させる。7は覆土中、8は床面上の出土である。

9・10は頸部から肩部にかけての破片。頸部内外面は横ナデされる。肩部は外面に平行叩き目痕、内面に同心円あて板痕が残る。肩部外面には自然釉がみられる。9の頸部と肩部の輪積み接合部の肩部側には、平行叩き目痕がみられる。土器製作方法の判明する事例である。ともに覆土中の出土。

11～15は胴部破片で床面上の出土。外面はすべて平行叩き目痕を残す。11は1条の貼付突帯が巡る。外面には黄褐色の自然釉がかかる。12・14・15は内面に同心円あて板痕を残す。13の内面はていねいにヘラナデされる。

土師器甕形土器（4・5）

4は胴部上位で最大径を測り、底部は平底を呈する。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は短く外反する。外面はヘラ削り後ていねいにナデられるが、胎土に砂粒を多く含むためか、器面がゴツゴツした観をもつ。内面はヘラナデされる。カマド南側の床面上出土で、2/3の遺存度。

5は底部がヘラ削りにより丸底風に作出される。外面はナデ、内面はヘラナデされる。床面上の出土で、1/4程の遺存度。

土師器甑形土器（6）

底部のみの破片である。多孔式のもので、外面はナデ、内面はヘラナデされる。床面上の出土。

22号住居址（第43図）

〔位置〕（A－3）G。

〔住居構造〕西壁及び北壁の大部分は調査できなかった。（平面形）正方形。（規模）6.28×6.2m。（壁高）20～26cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）調査した部分では全周する。上幅15cm・下幅10cm・深さ14cm前後を測る。（床面）壁際を除いてよく踏み固められている。南西コーナー付近には土坑状の掘り込みがみられる。（カマド）未調査部分にあるものと思われる。（柱穴）主柱穴は4本と思われる。各コーナーの3本がそれに該当し、他の1本は未調査部分にあろう。他のピットは後世のものである。（覆土）ローム粒子を含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

22号住居址出土遺物（第44図）

土師器坏・埦形土器（1～4）

1は丸底の底部から立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデされる。体部及び底部外面は磨きであろうか。内面はナデられる。底部内外面を除いて赤彩される。床面上の出土で、1/2の遺存度。

2は埦状の土器。口頸部外面と内面体部以上は横ナデされる。それ以下は磨きが施される。底部内外面を除き赤彩される。覆土中の出土で、口頸部の一部を欠く。

3は深みのある土器で、丸底ぎみの底部から立ち上がり、体部下半に僅かなくびれをもち、そこから埦状に開く。口頸部内外面は横ナデされる。体部外面はヘラナデ、内面はナデられる。床面上

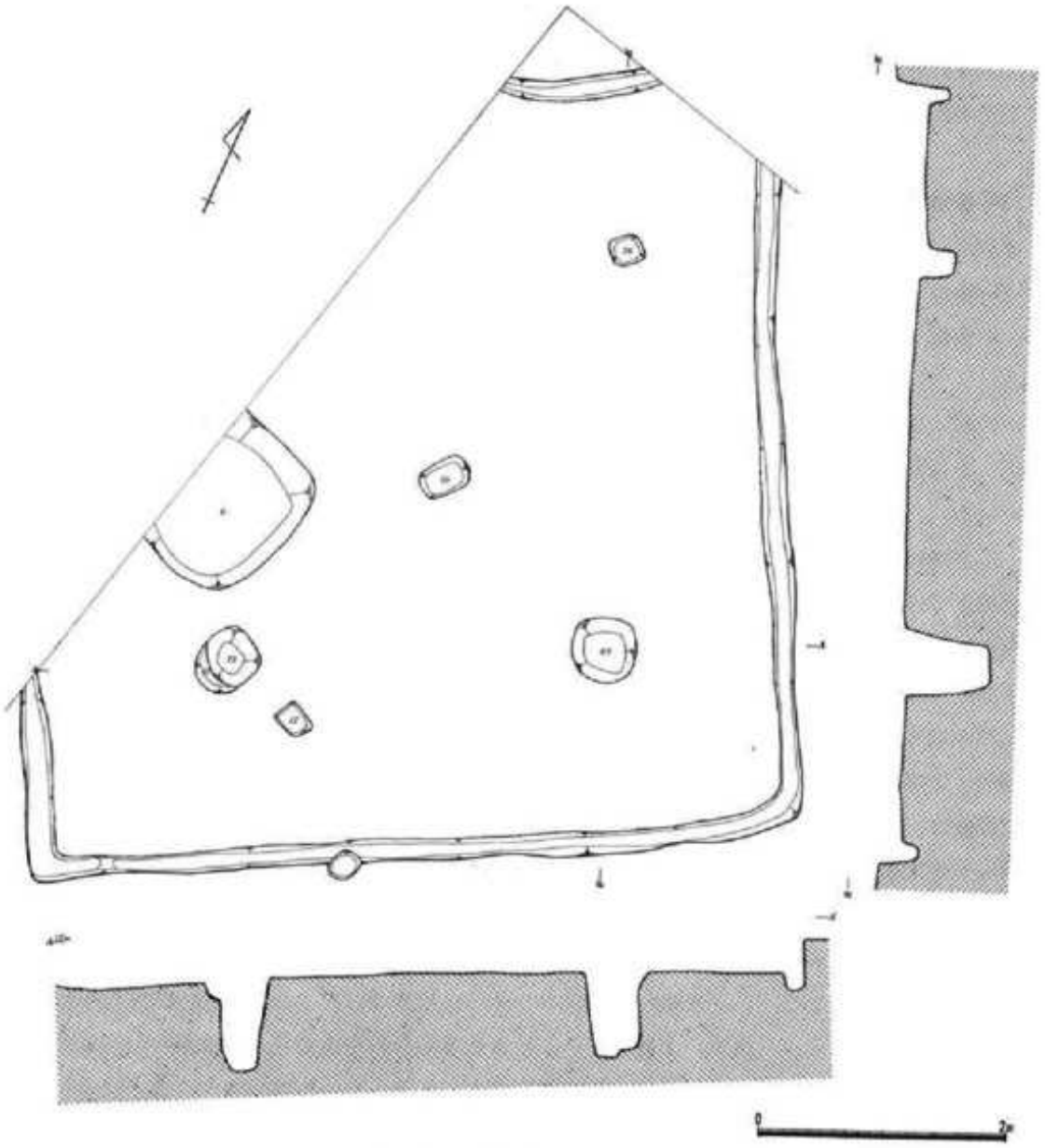
の出土で、ほぼ完形。

4は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部で僅かにくびれ、口縁部は内傾ぎみに立つ。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。内外面体部下半を除き赤彩される。覆土中の出土で、1/2の遺存度。

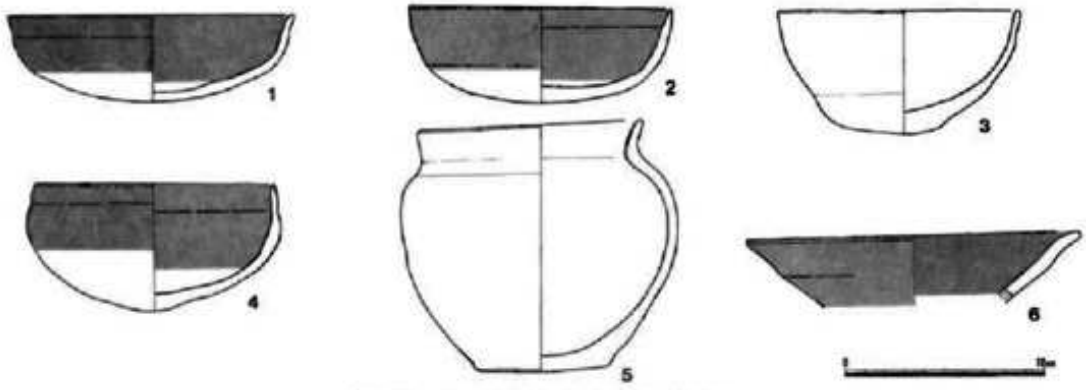
土師器甕形土器（5）

小型甕である。胴部上半に最大径をもち、口縁部は直線的に開く。口頸部内外面は横ナデされるが、内面にはスリップがかけられる。胴部内外面はヘラナデされる。覆土中の出土で、完形。

土師器高坏形土器（6）



第43図　22号住居址（1/60）



第44図　22号住居址出土遺物（1/4）

坏部は直線的に開くが、頸部に僅かな稜をもつ。内外面ともていねいにヘラナデされ赤彩される。覆土中の出土で、口頸部のみ1/2程度遺存する。

23号住居址（第45図）

〔位置〕（B－8）G。

〔住居構造〕一見して2軒の住居址の重複とみえるが、調査所見から拡張住居と考えた。拡張前をA、拡張後をBとして説明する。

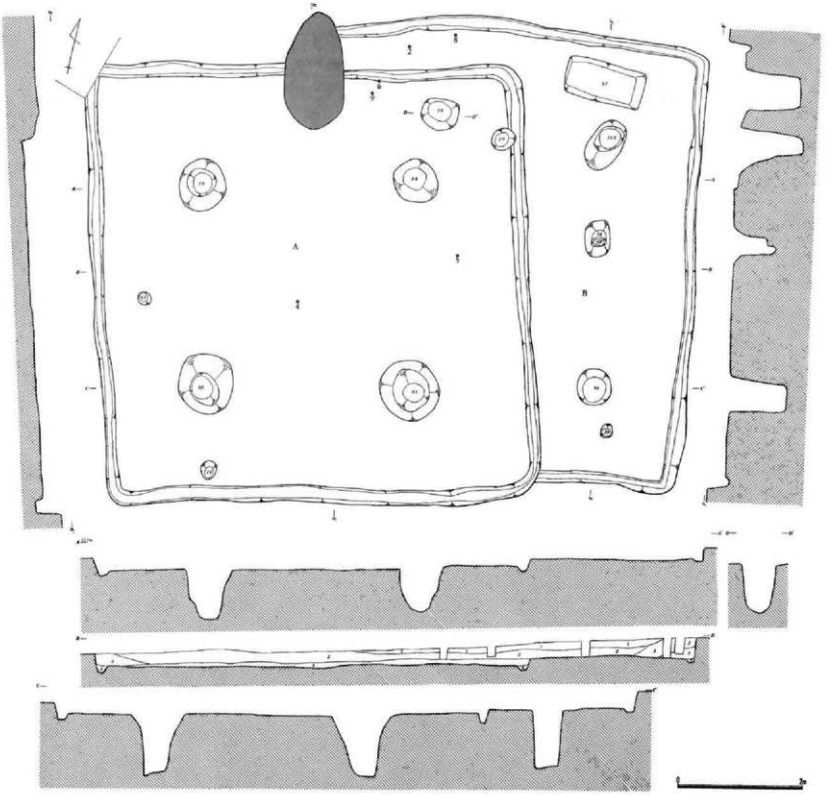
A

（平面形）正方形。（規模）6.96×6.94m。（壁高）20～28cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）上幅20cm・下幅15cm・深さ10cm前後を測り全周する。（床面）壁際を除いて硬く踏み固められている。（柱穴）対角線上の4本が主柱穴である。（貯蔵穴）北東コーナーに位置する。60×50cm・深さ78cmを測り、長方形を呈する。（覆土）5層―ローム粒子・ロームブロックを多く含む明茶褐色土で貼床充塡土。6層―ローム粒子を多く含む暗黄褐色土。

B

（平面形）拡張部分に食い違いがみられるが、一応長方形としておく。（規模）東側に2.6m、北側に75cm拡張している。（壁高）東壁30cm・西壁20cm前後を測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）上幅15cm・下幅10cm・深さ8cm前後を測る。（床面）壁際を除いてよく踏み固められている。住居址Aの部分は、貼床となる。（カマド）北壁中央から西に偏って位置する。方位はN―17°―W。長さ1.84m・幅1m・壁への掘り込み90cmを測り、袖部はロームを馬蹄形状に隆起させ残し、焚き口付近は円形状に窪みをもつ。天井部・袖部は灰褐色粘土を被覆させ構築している。（柱穴）東壁に沿う深さのある3本が新設された柱穴であるが、住居址Aの4本とあわせ、東西方向に3本ずつ対になる6本が主柱穴となろう。（貯蔵穴）北東コーナーに位置する。平面形は長方形を呈し、126×64cm・深さ90cmを測る。（覆土）1層―ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。2層―ローム粒子を含む暗褐色土。3層―ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。4層―ロームブロックを僅かに含む黒褐色土。7層―ローム粒子を多く含む明黄褐色土。

〔遺物〕カマド右側の床面上から多く出土した。



第45図　23号住居址（1/60）

〔時期〕鬼高式期。

23号住居址出土遺物（第46図）

土師器坏形土器（1～5）

1は頸部に明瞭な段をもち、口頸部は僅かに内反しながら開く。図示できなかったが、口唇部直下の内面には僅かな窪みが巡る。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいに磨きが施され、外面は光沢をおびる。内面及び口頸部外面は赤彩される。床面上の出土で、1/4程の遺存度。

2は丸底の底部から立ち上がり、頸部に強い段をもち、口頸部は直線的に開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいにヘラナデされる。カマド右横の床面上出土で、1/2程の遺存度。

3は丸底の底部から立ち上がり、頸部に明瞭な段をもち、口頸部は外反ぎみに開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいにヘラナデされる。床面上の出土で、約1/2の遺存度。

4は体部下半が僅かに屈曲し、平底ぎみの底部に至る。頸部には稜をもち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面にはヘラ削り痕を残す。住居中央に近い床面上の出土で、口頸部の一部を欠く。

5は厚めの底部をもつ土器。口頸部は大きく開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいに磨きが施され、外面は光沢をおびる。住居中央に近い床面上の出土で、1/2程の遺存度。

土師器高坏形土器（6）

脚柱部は「ハ」字状に開き、裾部は強く外屈してのびる。外面はていねいにナデられ赤彩される。内面はヘラナデされる。カマド右横の床面上の出土。

土師器甕形土器（7～9）

7はほぼ胴部中位に最大径をもち、口頸部は僅かに外反しながら開く。口頸部内外面は横ナデされる。胴部外面はヘラナデ、内面はナデられるが部分的に指頭痕を残す。覆土中の出土で、胴部下半以上が遺存する。

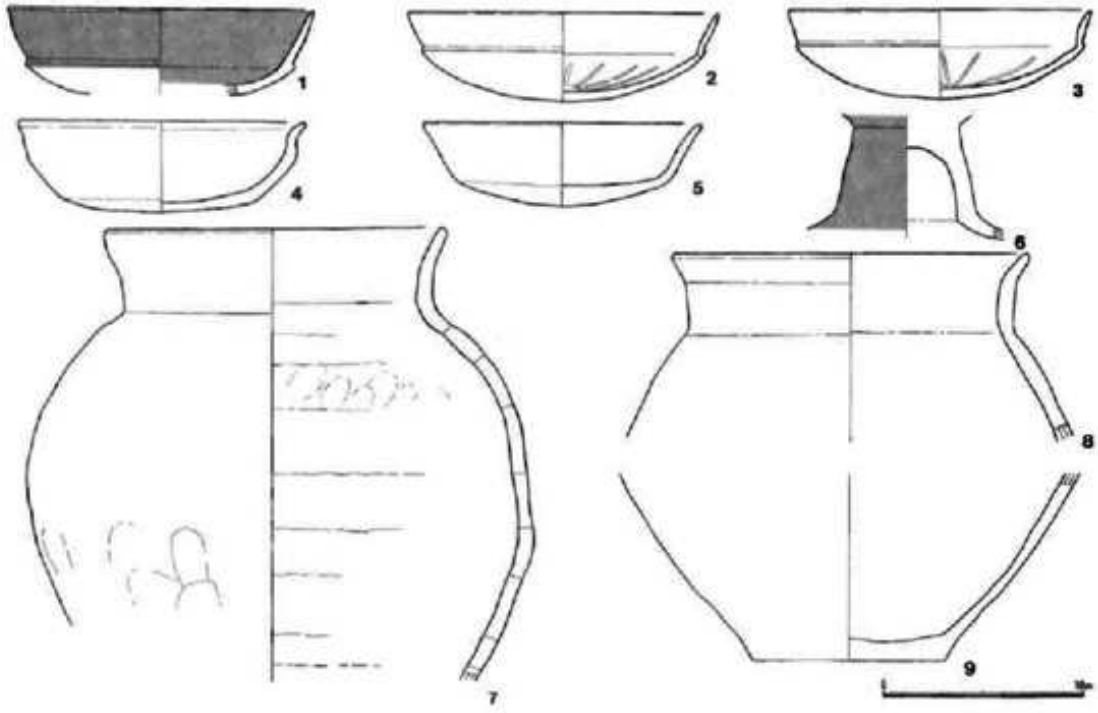
8は肩部がなだらかで、頸部は直立ぎみに立ち、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデされる。内面に細密なハケ目痕が僅かにみられる。北壁下中央の床面上の出土で、肩部以上1/3程度遺存する。

9は胴部下位以下の遺存。外面はヘラナデ、内面はナデられる。カマド右横の床面上出土。

24号住居址（第47図）

〔位置〕（B－3）G。

〔住居構造〕19号土坑に切られる。（平面形）正方形。（規模）7.84×7.68ｍ。（壁高）上部はほぼ全面が攪乱を受けている状態であるため、比較的遺存のよい部分でも20cm前後を測る程度である。（壁溝）東側の両コーナー及びカマド部分を除いて全周すると思われる。上幅20cm・下幅12cm・深さ15cm前後を測る。（床面）壁際を除いてほぼ全面硬く踏み固められているが、住居址内はピットの集中域でもあり、床面はかなり破壊されている。（カマド）東壁中央から北に偏って位置し、方位はN－61°－E。長さ104cm・幅80cmを測り、天井部・袖部は灰褐色粘土を被覆させ構築している。掛け口付近からは甕形土器が横転した状態で出土した。また、北壁下中央付近の床面が焼けて



第46図　23号住居址出土遺物（1/4）

おり、その部分の壁に僅かな掘り込みが認められた。カマドの痕跡であろうか。（柱穴）主柱穴4本で構築される。深さ89～96cmを測り、四隅に配される。他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）北東コーナーに2基検出された。貯蔵穴A―96×76cm・深さ118cmを測り、長方形を呈する。貯蔵穴B―128×64cm・深さ94cmを測り、長方形を呈する。（覆土）ローム粒子を含む暗褐色土を基調とし、自然堆積状態を呈する。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

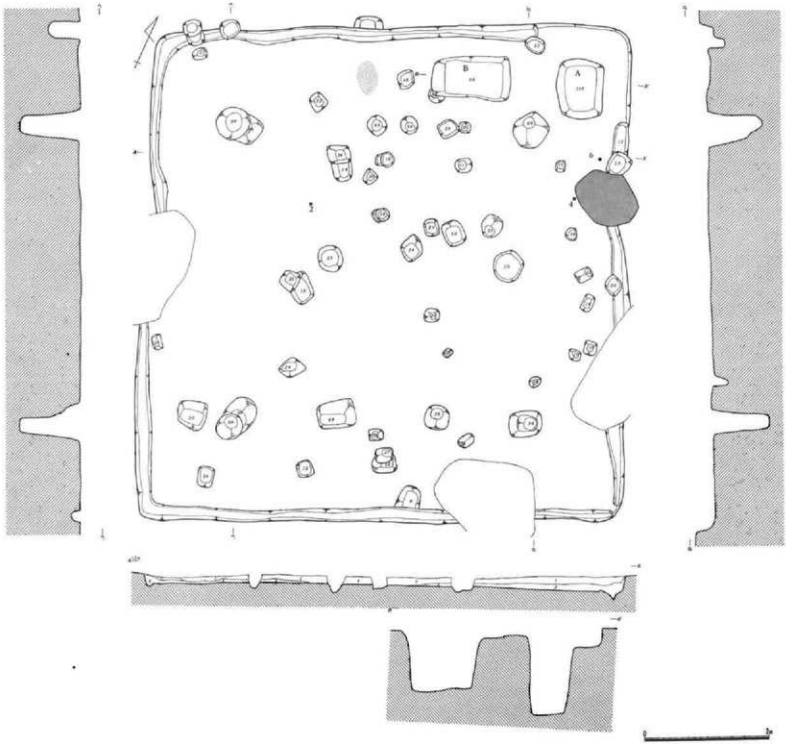
〔所見〕貯蔵穴Bの西側に焼土が検出され、カマドの痕跡としてとらえられる。また、西側の2本の柱穴がそれぞれ重複していること、貯蔵穴を2基有することなどから察し、住居の建て替えが考えられる。つまり、建て替え以前では北壁にカマドが設けられ、貯蔵穴Bが使用されていた。建て替え後は、東壁にカマドが設けられることになり、貯蔵穴Aが使用されるに至ったと考えられる。

24号住居址出土遺物（第48図、第108図5）

土師器坏形土器（1～3）

1は丸底ぎみの底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に強い段をもち、口頸部は僅かに外反しながら開く。口頸部内外面は横ナデされる。体部内外面はていねいに磨きが施され光沢をおびる。口頸部外面及び内面全体は赤彩される。床面上の出土で、1/3程度の遺存度。

2は大ぶりの土器で、丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に明瞭な段をもち、口縁部は大きく外反する。口頸部内外面は横ナデ、体部内外面はていねいにヘラナデされる。住居中央から西に寄った床面上の出土で、ほぼ完形。



第47図　24号住居址（1/60）

3は浅めの土器。丸底ぎみの底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面にはヘラ削り痕を残す。外面体部下半及び内面底部を除き赤彩される。覆土中の出土で、1/3程度の遺存度。

土師器甕形土器（4～6）

4は最大径を胴部中位にもち、頸部は直立ぎみに立ち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、胴部内外面はていねいにヘラナデされ、外面は光沢をおびる。カマド前面の出土で、胴部下半を部分的に欠く。

5は口縁部が大きく外湾する。内外面は横ナデされ赤彩される。床面上の出土で、口頸部1/4の遺存度。

6は肩部が張り、頸部は直線的に開き、口縁部は複合口縁を呈し外反する。頸部内面にはハケ目痕が残り、口縁部内面は赤彩される。カマド左横の床面上の出土で、口頸部のみ遺存。

鉄製品（第108図5）

大部分を欠損するが、鎌と思われる。

25号住居址（第49図）

〔位置〕（C－2）G。

〔住居構造〕大部分が調査区外にある。（壁高）20～25cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。カマドに接する両壁は外側にやや屈曲し、肩を張った形状を呈する。（床面）中央付近に硬く踏み固められた面を残す。（カマド）東壁の中央に位置すると思われ、方位はN－90°－E。長さ・幅とも100cmを測り、天井部・袖部は灰褐色粘土で構築される。（柱穴）主柱穴4本で構築されると思われる。3本は検出されたが、北西コーナーの1本は調査区外にあると思われる。他のピットは後世のものである。（覆土）1層－耕作土。2層－焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土。3層－ローム粒子を僅かに含む暗褐色土。4層－ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土。5層－焼土粒子を多く、ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む黒色土。6層－ローム粒子を多く含む茶褐色土。7層－ローム粒子ロームブロックを含む茶褐色土。8層－焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土。

〔遺物〕カマド付近から出土した。

〔時期〕国分式期。

〔所見〕覆土中に焼土粒子・炭化物粒子を含み、焼失住居の可能性をもつ。

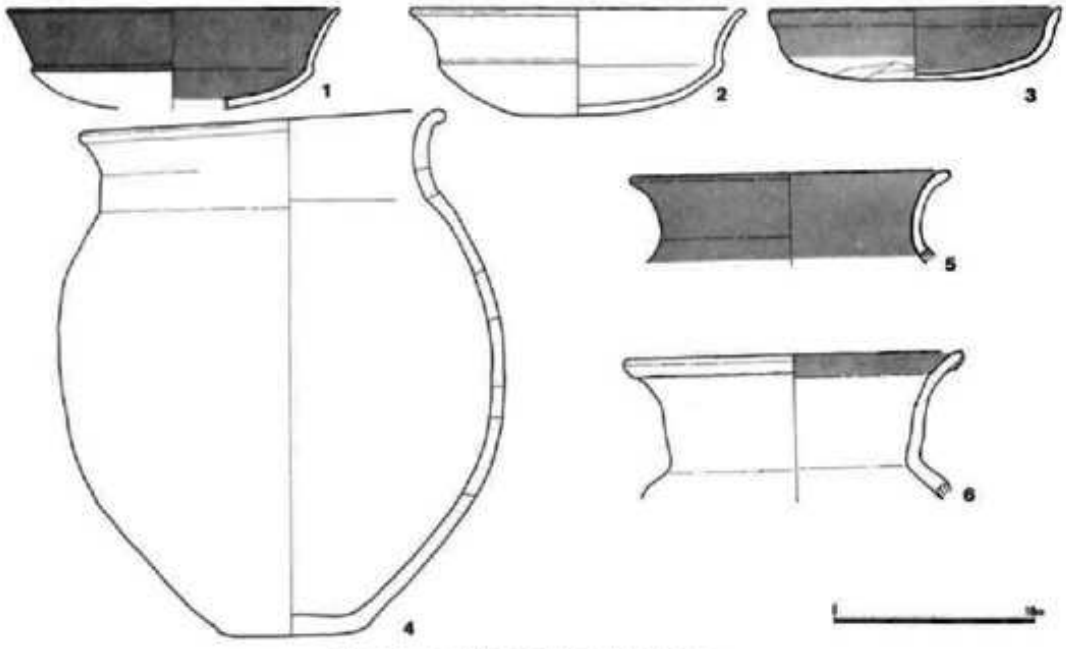
25号住居址出土遺物（第50図）

須恵器坏形土器（1～4）

1は底部から直線的に開き、口縁部が僅かに外反する。底面には回転糸切り痕を残す。覆土中の出土で、1/4程度欠損する。

2は焼き歪みのある土器。僅かに内湾しながら開き、口唇部は尖る。底面には回転糸切り痕を残す。覆土中の出土で、1/3程度を欠損する。

3は厚めの土器で、僅かに内湾しながら開く。底面には回転糸切り痕を残す。カマド前面の床面上出土で、完形。



第48図　24号住居址出土遺物（1/4）

4は直線的に開く。底面には回転糸切り痕を残す。覆土中の出土で、1/3の遺存度。

須恵器壺形土器（5）

底部付近のみの遺存であるため詳細は不明であるが、壺形土器として取り扱う。底面は回転糸切り後、全面回転ヘラ削りで調整する。胎土中には僅かに白色針状物質を含む。覆土中の出土。

28号住居址（第14図）

〔位置〕（C－8）G。

〔住居構造〕8号住居址、1号井戸址に切られ、さらに大部分が攪乱によって破壊されている。（平面形）正方形。（規模）6.16×5.96m。（壁高）20cm前後を測る程度である。（壁溝）ほぼ全周するものと思われる。上幅18cm・下幅10cm・深さ10cm前後を測る。（床面）攪乱によって非常に遺存状態が悪く、部分的に硬化面を残す。（カマド）8号住居址に破壊された可能性がある。（柱穴）30cm以上の深さをもつ対角線上の4本が主柱穴となろう。他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）北西コーナー近くに位置する。70×40cmの長方形を呈し、深さ28cmを測る。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

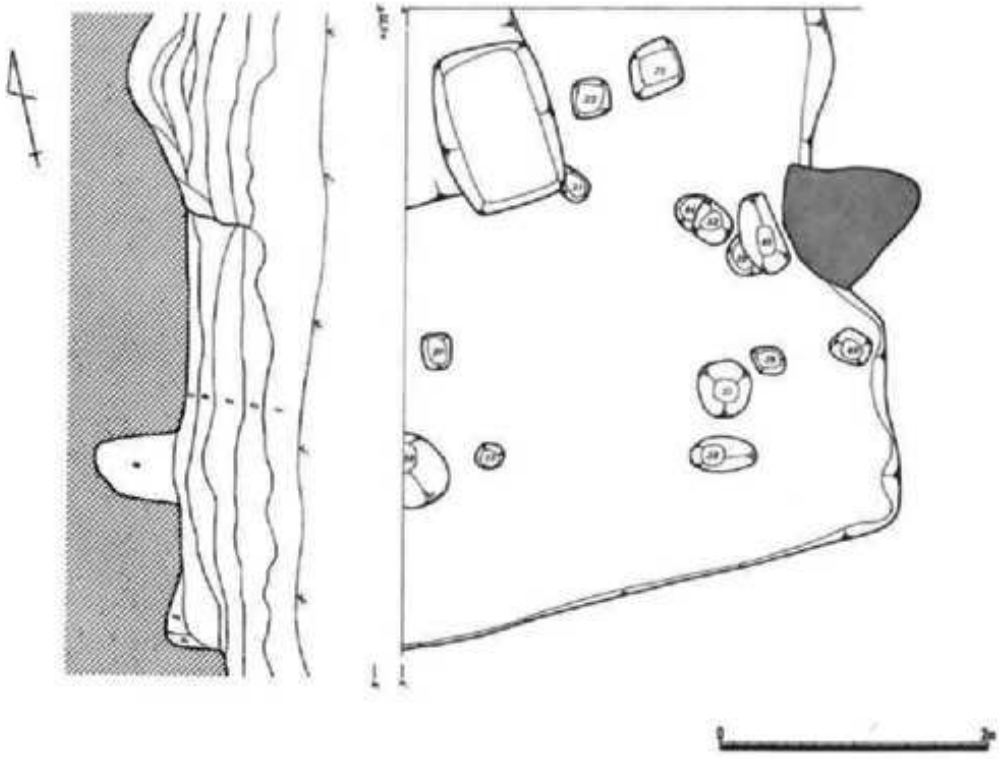
〔遺物〕非常に僅かで、実測できるものはなかった。

〔時期〕鬼高式期。

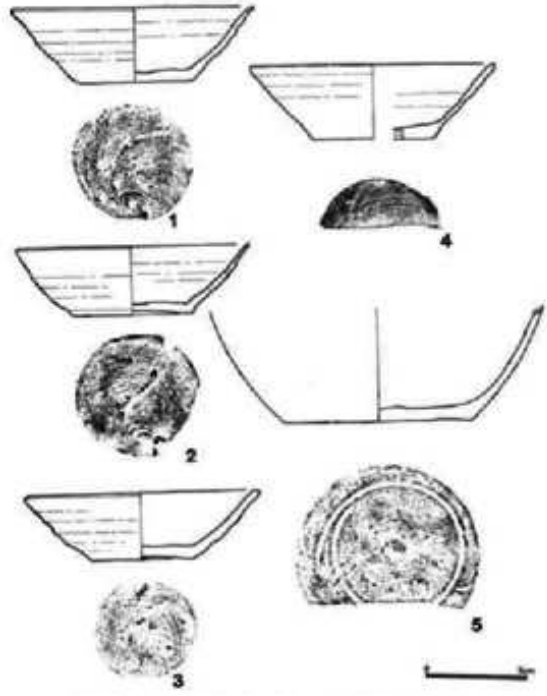
29号住居址（第51図）

〔位置〕（C－10）G。

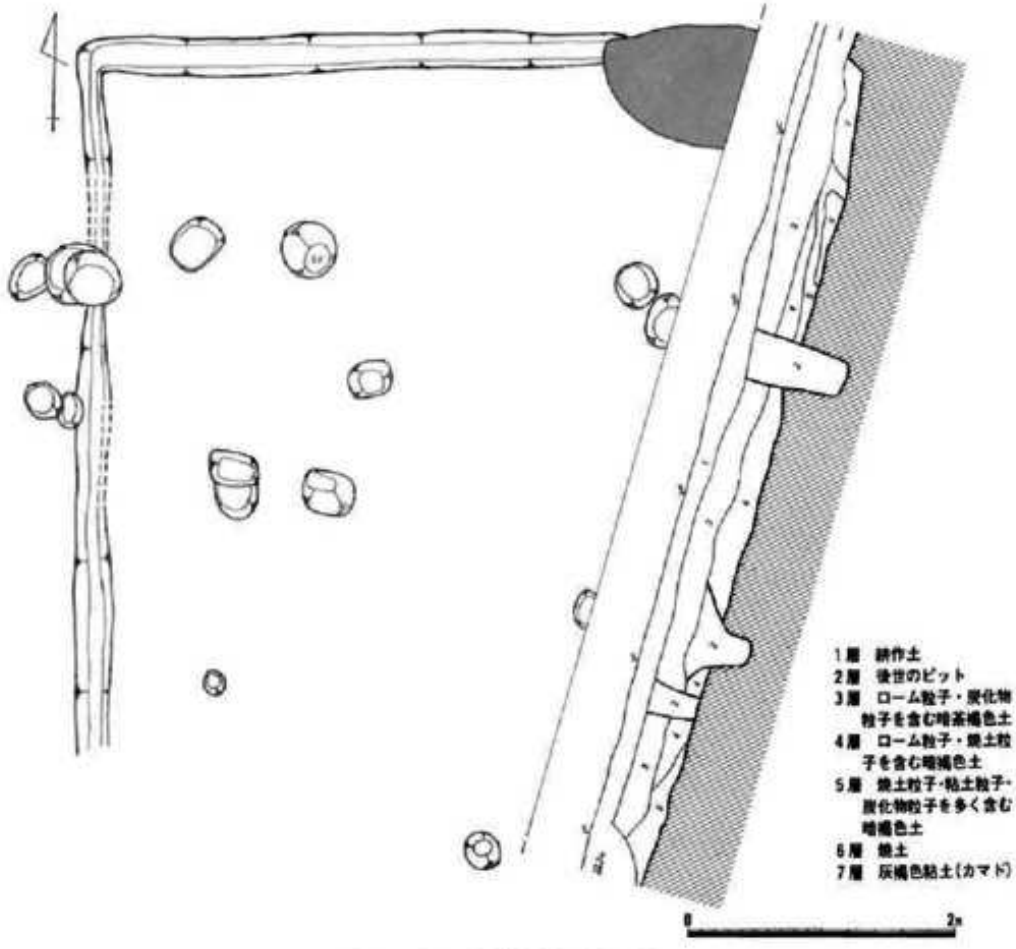
〔住居構造〕東側が調査区外にあり、さらに20号土坑及び攪乱によって破壊されているため、平面形・規模などは不明である。（壁高）25cm前後を測る。（壁溝）上幅20cm・下幅10cm・深さ10cm前



第49図　25号住居址（1/60）



第50図　25号住居址出土遺物（1/4）



第51図　29号住居址（1/60）

後を測る。（床面）遺存状態が非常に悪く、部分的に硬化面を残す程度である。（カマド）北壁に設けられるが、一部は調査区外にある。方位はN－1°－Wで、天井部・袖部は灰褐色粘土で構築される。（柱穴）北西コーナーに1本検出された。他のピットは後世のものである。（覆土）全体的に焼土粒子・炭化物粒子を多く含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

29号住居址出土遺物（第52図）

土師器坏形土器（1）

口径のわりに深みのある土器。丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に明瞭な段をもち、口縁部は僅かに外反しながら開く。口頸部内外面は横ナデ、以下はヘラナデされる。内面及び口頸部外面は赤彩される。覆土中の出土で、1/2程の遺存度。

須恵器蓋形土器（2）

坏蓋である。1/6程の破片からの推定復元のため、ある程度の誤差があるかもしれない。口縁部は内湾しながら下がり、口唇端部は平坦である。天井部は丸くなるものと思われ、口縁部との境に鋭い稜がある。口縁部は横ナデされる。覆土中の出土。

須恵器坏形土器（3）

1/5からの推定復元。口縁部は僅かに外湾しながら内傾する。体部は丸い。受部は僅かに上にのびる。体部下半は回転ヘラ削り、他は横ナデされる。覆土中の出土。

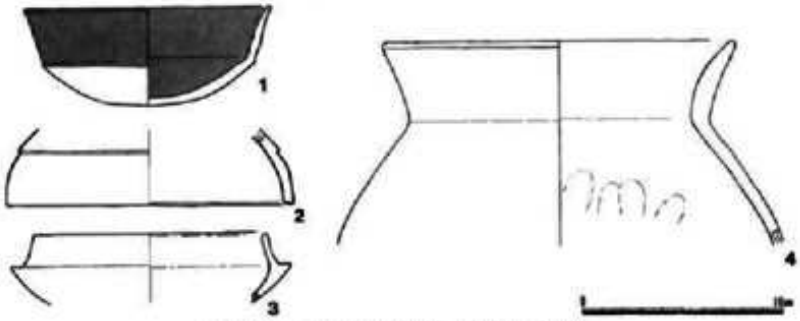
土師器甕形土器（4）

頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は直線的に開く。口頸部内外面は横ナデ、以下はヘラナデされる。カマド中の出土。肩部以上の遺存で、口頸部1/4を欠損する。

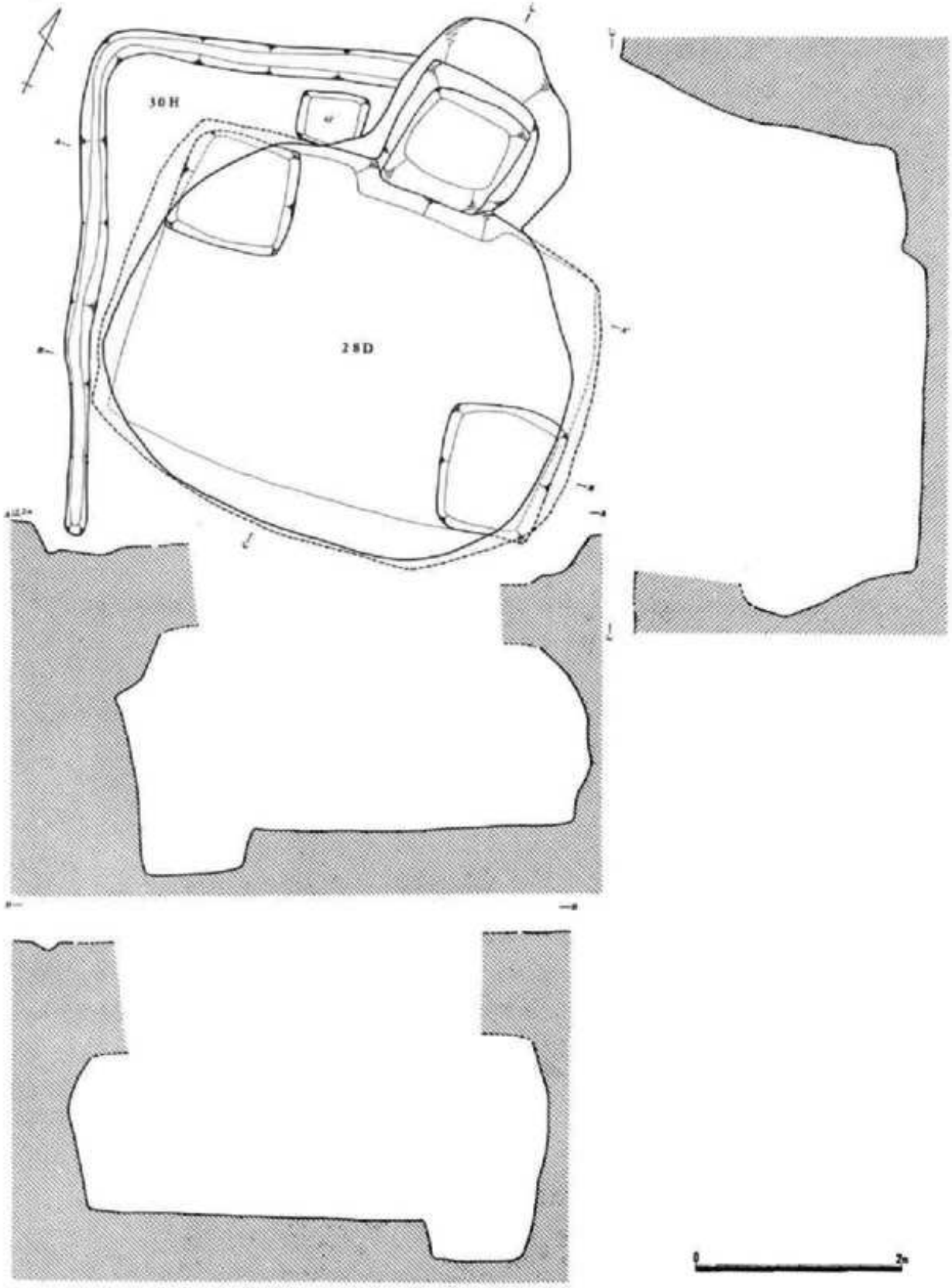
30号住居址（第53図）

〔位置〕（D－2）G。

〔住居構造〕28号土坑に大部分が破壊され詳細不明である。（壁高）比較的遺存の良い部分でも20cm前後を測る程度である。（壁溝）確認できる範囲では全周する。上幅18cm・下幅10cm・深さ10cm前後を測る。（床面）遺存状態が悪く、部分的に硬化面が認められる。（柱穴）不明である。（貯蔵穴）北西コーナーから僅かに東へ偏って位置する。66×52cm・深さ62cmを測り、長方形を呈する。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。



第52図　29号住居址出土遺物（1/4）



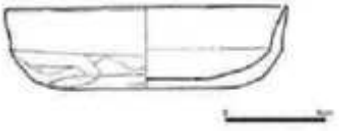
第53図　30号住居址、28号土坑（1/60）

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

30号住居址出土遺物（第54図）

土師器坏形土器である。平底ぎみの底部から内湾して立ち上がり、頸部に稜をもち、口縁部は直立ぎみに立つ。口頸部内外面は横ナデ、体部内外面はヘラナデされるが、外面には明瞭にヘラ削り痕を残す。貯蔵穴中の出土で、2/3程度の遺存度。



第54図　30号住居址出土遺物（1/4）

31号住居址（第55図）

〔位置〕（C－8）G。

〔住居構造〕32・35号住居址を切り、18号土坑に切られる。（平面形）正方形。（規模）5.84×5.72m。（壁高）比較的遺存状態のよい部分で30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）北西コーナー付近とカマド左横の部分が攪乱のため不明であるが、その他の部分では全周する。上幅18cm・下幅10cm・深さ10cm前後を測る。（床面）壁際を除いて硬く踏み固められている。（カマド）北壁中央からやや東へ偏って位置する。方位はN－25°－W。長さ94cm・幅84cm・壁への掘り込み20cmを測り、天井部・袖部は灰褐色粘土により構築される。（柱穴）主柱穴は対角線上の4本である。深さ70cm前後を測る。（貯蔵穴）カマド右横に位置する。平面形は長方形を呈し、58×40cm・深さ67cmを測る。（覆土）ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とし、自然堆積状態を呈する。

〔遺物〕覆土中・床面上から多く出土した。

〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕覆土中から焼土粒子・炭化物粒子が検出されることにより、焼失住居の可能性がある。

31号住居址出土遺物（第56図）

須恵器坏形土器（1）

口縁部は僅かに外反しながら強く内傾する。体部は浅めで丸い。受部は上向きにのびる。体部下半は回転ヘラ削り、それ以外は横ナデされる。覆土中の出土で、口縁部の一部を欠く。

土師器坏形土器（2）

丸底の底部から立ち上がり、口頸部は直立ぎみに開く。口頸部内外面は横ナデ、体部外面はヘラ削り痕を顕著に残す。体部内面はナデられる。南側柱穴横の床面上の出土で、口頸部を若干欠く。

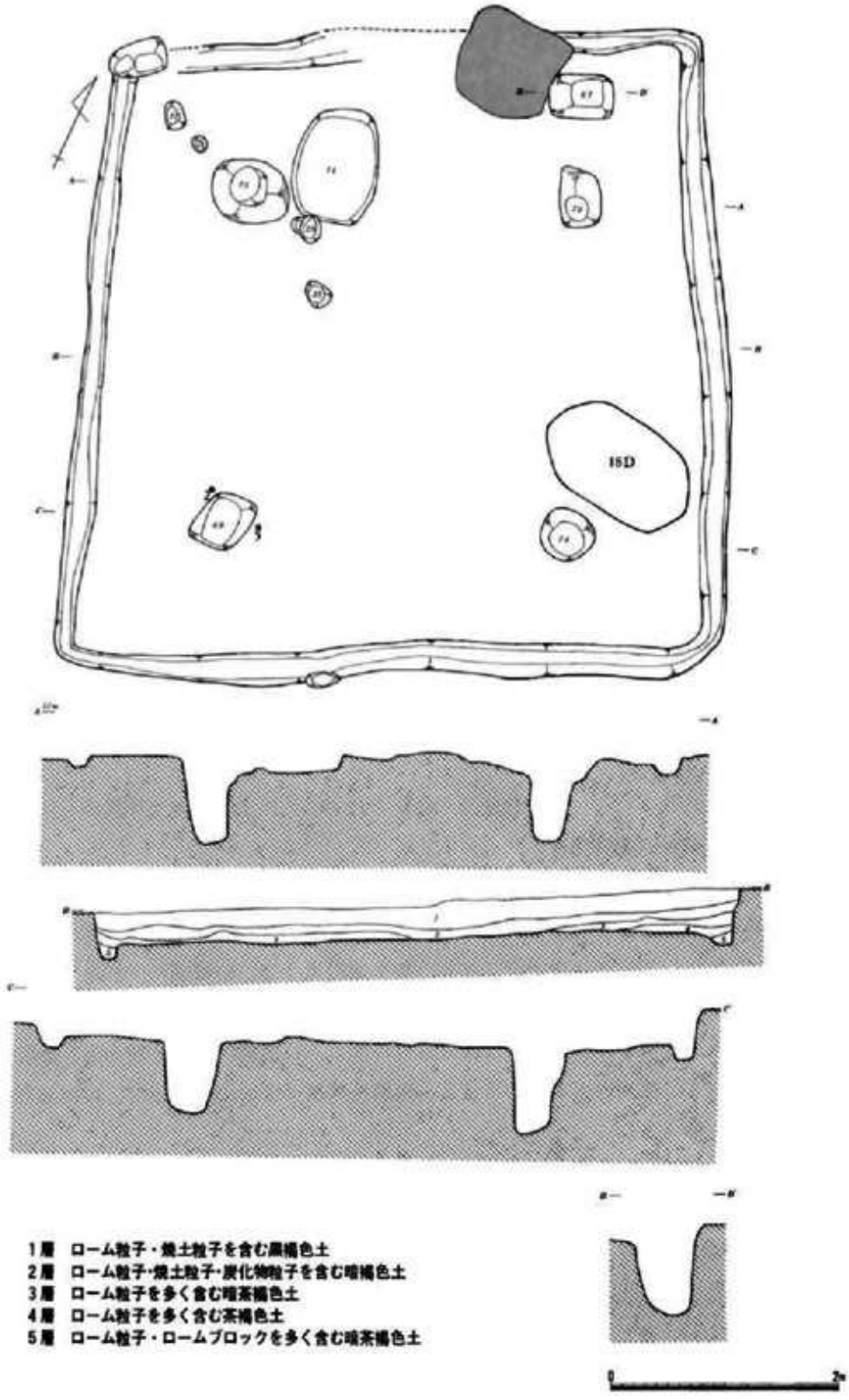
土師器高坏形土器（3）

柱状を呈する脚台部のみの遺存である。脚台部外面はヘラ削り後、ヘラナデされ赤彩される。坏部内面も赤彩される。覆土中の出土。

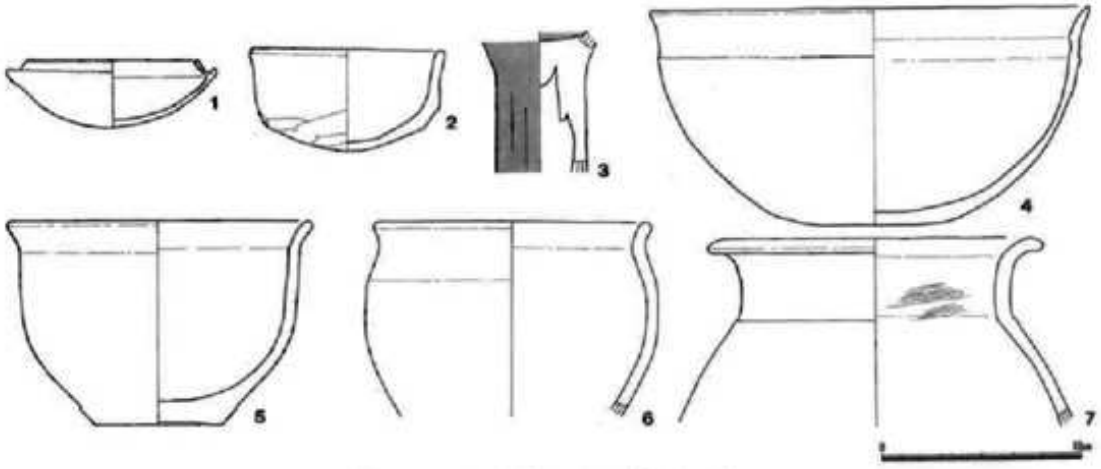
土師器鉢形土器（4～6）

4は平底の底部から椀状に開き、頸部に稜をもち、口縁部は僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。覆土中の出土で、3/4程の遺存度。

5は平底の底部から内湾しながら立ち上がり、体部上半で直立ぎみに立ち、口頸部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、体部下半にはヘラ削り痕を残す。南側柱穴



第55図　31号住居址（1/60）



第56図　31号住居址出土遺物（1/4）

横の床面上の出土で、1/2程遺存する。

6は最大径を体部上位にもち、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。覆土中の出土で、体部下半以上1/3程遺存する。

土師器甕形土器（7）

頸部は直立し、口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデ、以下はヘラナデであろうか。覆土中の出土で、肩部以上2/5程遺存する。

32号住居址（第57図）

〔位置〕（D－8）G。

〔住居構造〕31号住居址、8号井戸址に切られる。（平面形）正方形。（規模）8×7.74m。（壁高）35cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）31号住居址に切られている部分を除き全周する。上幅18cm・下幅8cm・深さ15cm前後を測る。（床面）壁際を除いて硬く踏み固められた面を残す。（カマド）31号住居址により破壊されたと思われる。（柱穴）対角線上の4本が主柱穴である。（貯蔵穴）北東コーナーに位置すると思われる。78×50cmの長方形を呈し、深さ88cmを測る。（覆土）不規則な堆積状態を呈する。1層－ローム粒子を含む黒褐色土。2層－ロームブロック。3層－ローム小ブロックを含む暗褐色土。4層－ローム粒子を多く、ロームブロックを僅かに含む暗茶褐色土。5層－ローム粒子を多く含む茶褐色土。6層－ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

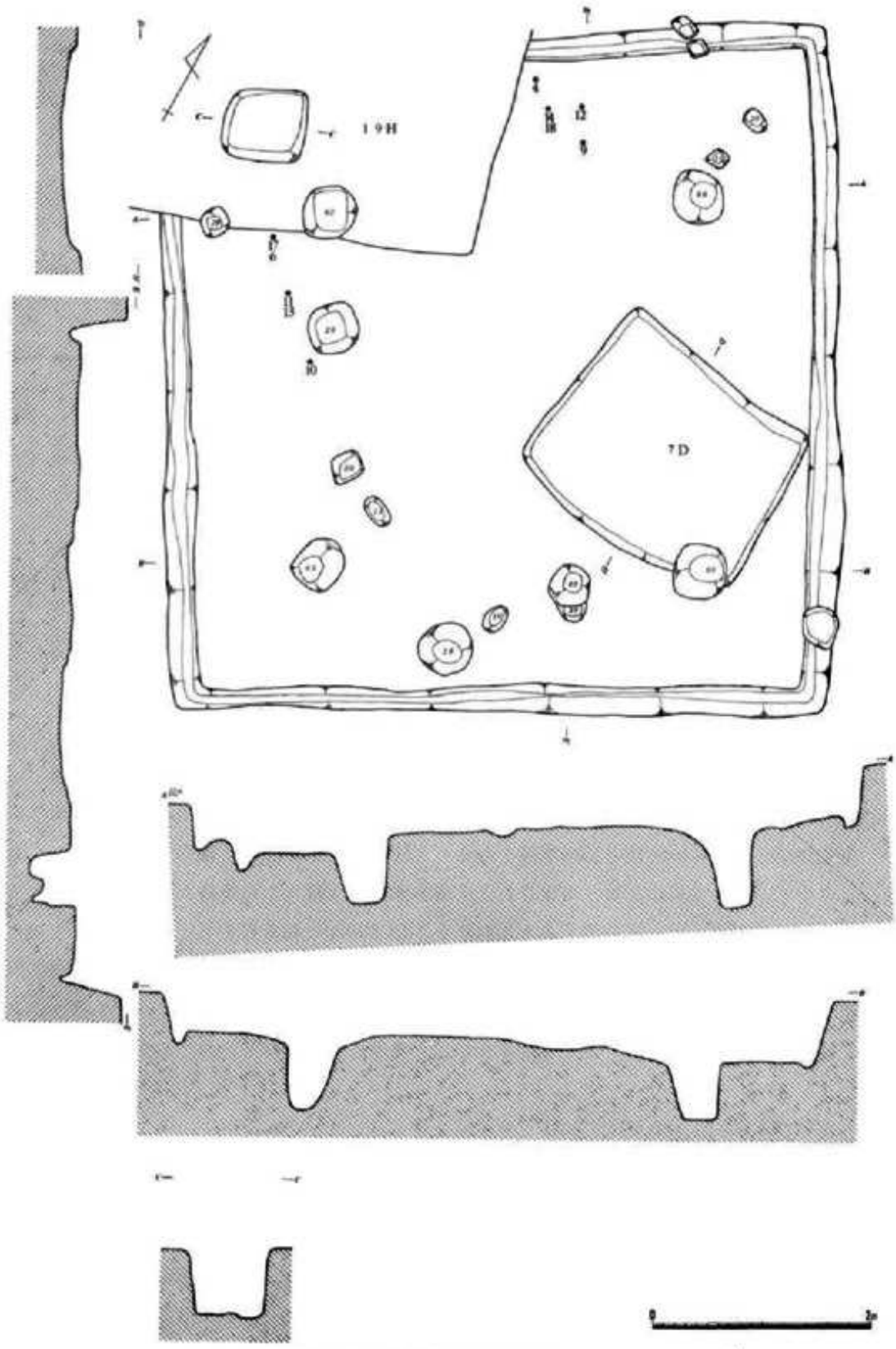
〔時期〕鬼高式期。

32号住居址出土遺物（第58図）

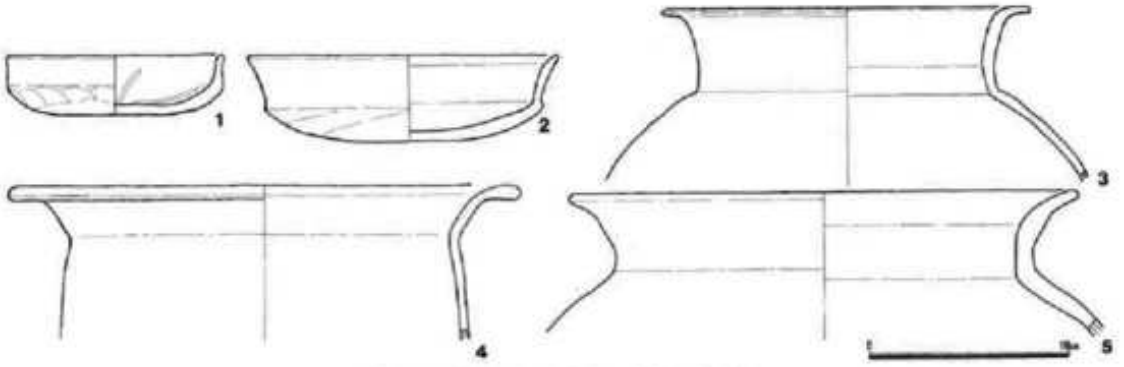
土師器坏形土器（1・2）

1は平底の底部から直線的に立ち上がる。口頸部内外面は横ナデ、体部下半にはヘラ削り痕を残す。底面には木葉痕を残す。床面上の出土で、口頸部を2/3程欠損する。

2は丸底の底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がり、頸部に強い段をもち、口縁部は外反し



第57図　32号住居址、8号井戸址（1/60）



第58図　32号住居址出土遺物（1/4）

ながら開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面にはヘラ削り痕を残す。床面上の出土で、底部と口頸部の一部を欠く。

土師器甕形土器（3～5）

3は頸部が直立ぎみで、口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。床面上の出土で、肩部以下を欠く。

4は長胴甕で、頸部は直線的に開き、口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。覆土中の出土で、肩部以上1/3の遺存度。

5は肩が張り、口頸部が大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。覆土中の出土で、肩部以上1/2程遺存する。

33号住居址（第59図）

〔位置〕（B－10）G。

〔住居構造〕撹乱による破壊が著しく、壁溝の存在からプランが確認できた。（平面形）正方形。（規模）5.4×5.14m。（壁溝）南壁の過半が撹乱のため不明であるが、ほぼ全周するものと思われる。上幅18cm・下幅8cm前後・深さ14～18cmを測る。（床面）壁際を除いて全体がよく踏み固められている。（カマド）北壁ほぼ中央にあったと思われる。撹乱により大部分が破壊されており、焼土のみ検出された。（柱穴）主柱穴4本で構成される。4本ともやや中央に寄った配置をとり、柱間160cm、深さ50cm前後を測る。他のピットは後世のものである。（覆土）焼土粒子を含む黒褐色土を基調とするが、撹乱が著しく詳細不明。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

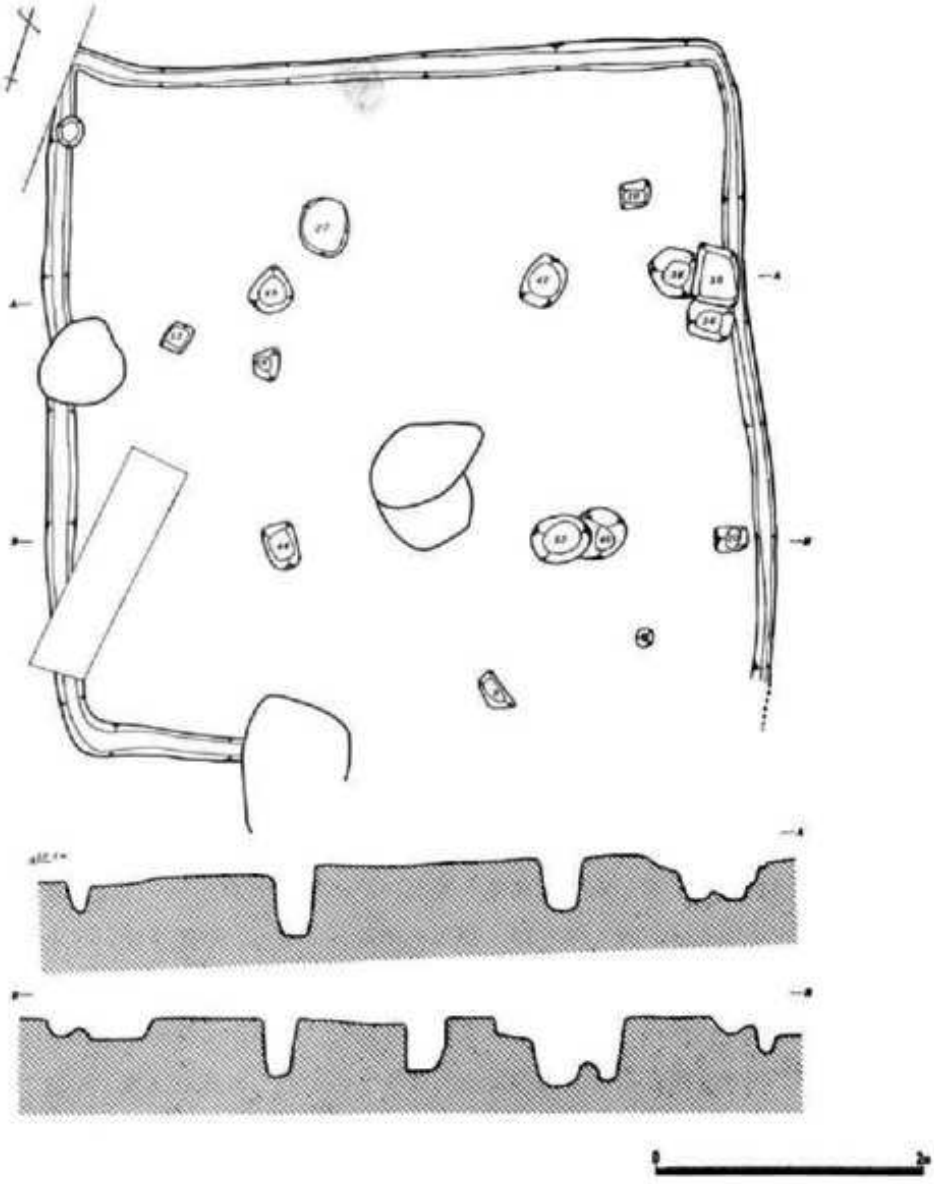
33号住居址出土遺物（第60図）

土師器坏形土器である。丸底の底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がり、強い段をもち、口縁部は大きく外湾するものの僅かに内反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。内面及び口頸部外面は赤彩される。床面上の出土で、1/3の遺存度。

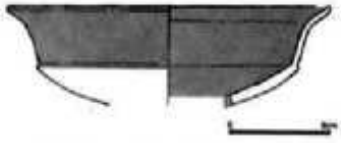
34号住居址（第61図）

〔位置〕（D－10）G。

〔住居構造〕20号土坑の天井部の崩壊により、過半が破壊され詳細不明であるが、一辺5.48ｍを測



第59図　33号住居址（1/60）



第60図　33号住居址
出土遺物（1/4）

る。（壁高）26～32cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）調査部分では全周する。上幅20cm・下幅12cm・深さ10cm前後を測る。（床面）壁際を除いて硬く踏み固められている。（柱穴）南側の2本を確認できた。おそらく主柱穴4本で構成されると思われる。（貯蔵穴）南東コーナー近くに位置する。124×70cmの長方形を呈し、深さ30cmを測る。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から比較的多く出土した。

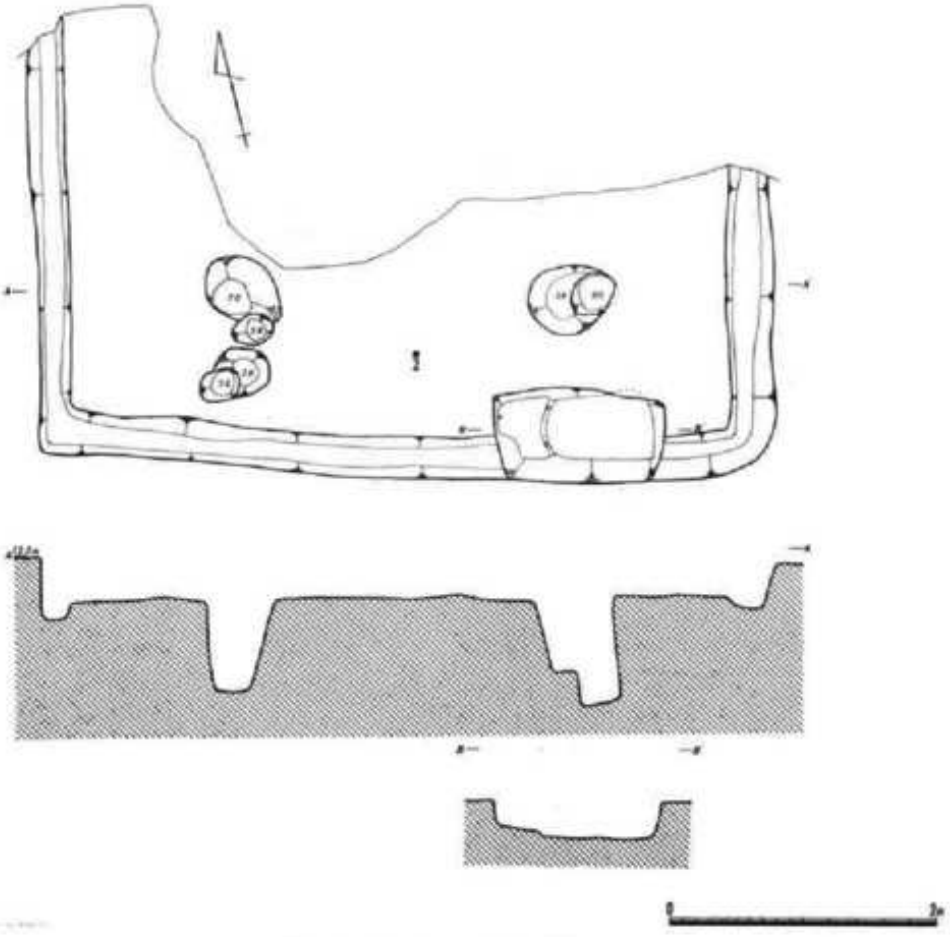
〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕カマドが破壊された部分にあったとすると、貯蔵穴の位置としては他の住居址にはみられない形状である。いささか疑問もあるが、一応貯蔵穴としてあつかった。

34号住居址出土遺物（第62図、第108図8）

土師器坏形土器（1～3）

1は受部をもつ。丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部には顕著な稜をもち、受部の立ち上がりは僅かに外反し内傾する。口頸部は横ナデ、それ以下はていねいにヘラナデされるが、特に外面は光沢をおびる。内外面は黒色処理されたような色調を呈する。貯蔵穴中の出土で、1/4の遺存度。



第61図　34号住居址（1/60）

2は丸底ぎみの底部からゆるやかに立ち上がり、口頸部は直立する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、体部下半は光沢をおびる。住居南側の床面上の出土で、1/2の遺存度。

3は底部から埦状に内湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。内面及び口頸部外面は赤彩される。貯蔵穴中の出土で、1/3の遺存度。

土師器埦形土器（4）

体部は内湾し、口頸部は僅かに外反して立つ。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいにヘラナデされる。外面及び口頸部内面は赤彩される。貯蔵穴中の出土で、体部上半以上1/2の遺存度。

土師器甑形土器（5）

胴部は単純に開き、口頸部は僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいに磨きが施され内外面とも光沢をおびる。床面上の出土で、胴部下位以下を欠く。

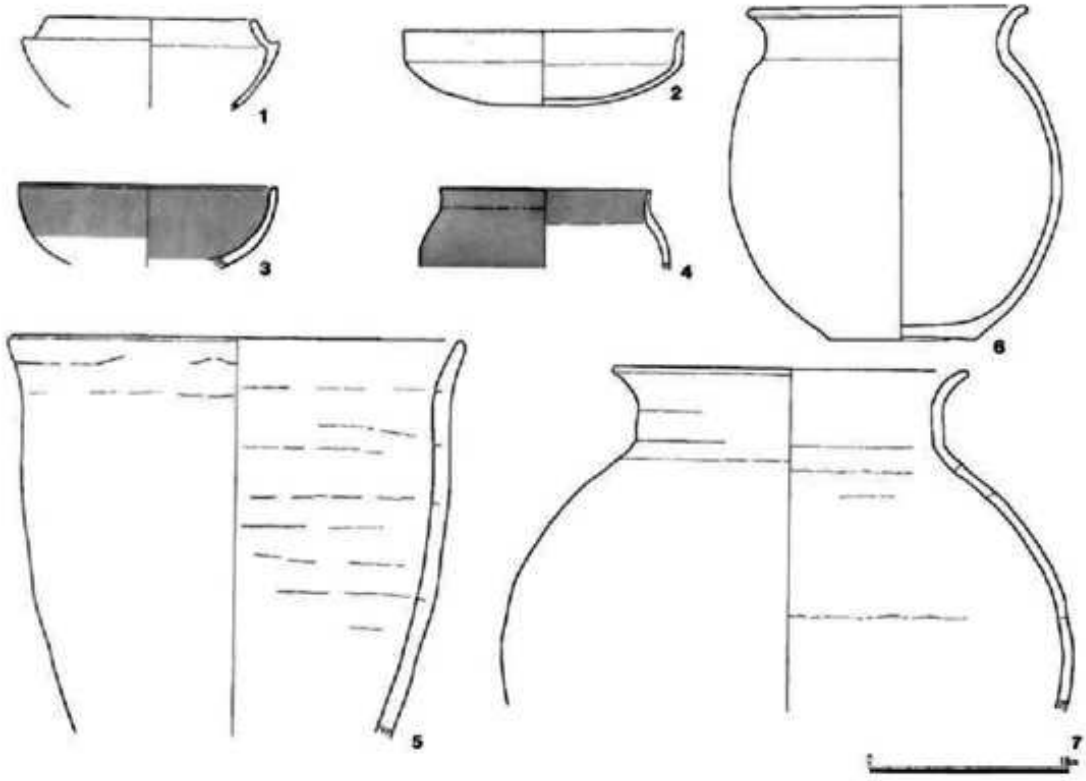
土師器甕形土器（6・7）

6は小型甕。胴部は球状を呈し、頸部に僅かな稜をもち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。床面上の出土で、口縁部・胴部を若干欠く。

7は胴部中位に最大径をもつ球胴甕。頸部は直立ぎみに立ち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。覆土中の出土で、胴部中位以上1/2の遺存度。

石製品（第108図8）

ていねいに研磨された管玉である。暗緑色を呈する蛇紋岩製。

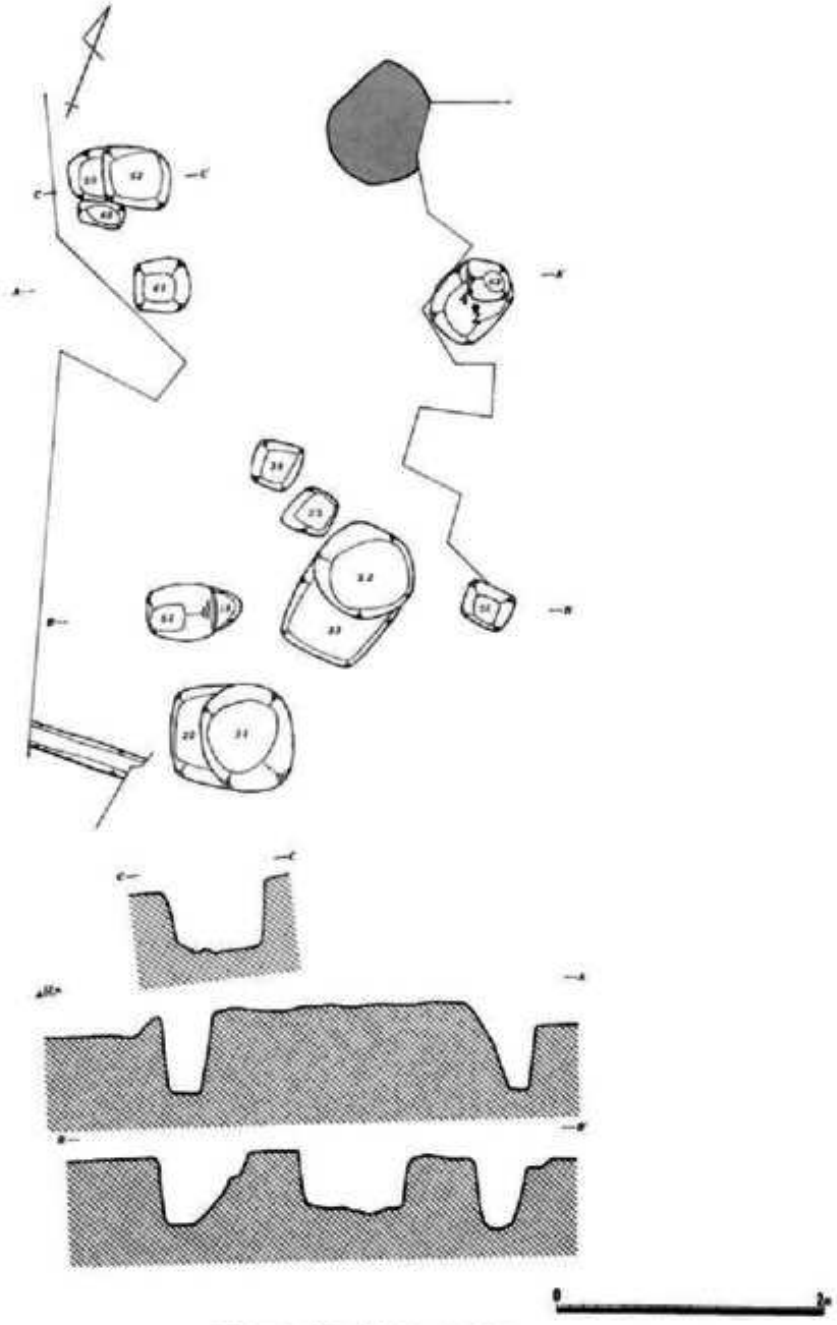


第62図　34号住居址出土遺物（1/4）

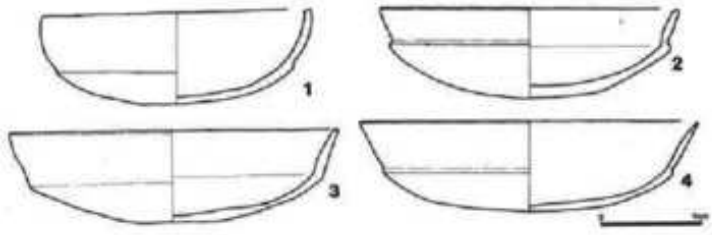
35号住居址（第63図）

〔位置〕（C－9）G。

〔住居構造〕31・36号住居址に切られ、また、攪乱が著しいため詳細不明である。（壁溝）南壁の一部にしか確認できなかった。上幅20cm・下幅10cm・深さ10cm前後を測る。（床面）部分的に硬化面を残す程度である。（カマド）北壁中央からやや東に偏って位置すると思われ、方位はN－17°－W。天井部・袖部は灰褐色粘土で構築される。（柱穴）主柱穴4本で構成される。他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）カマド左横に位置する。76×42cmの長方形を呈し、深さ52cmを測る。



第63図　35号住居址（1/60）



第64図　35号住居址出土遺物（1/4）

（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とするが、攪乱により詳細不明。

〔遺物〕覆土中、床面上から僅かに出土。

〔時期〕鬼高式期。

35号住居址出土遺物（第64図）

土師器坏形土器（1～4）

1は須恵器坏蓋の模倣と思われる土器。丸底の底部から内湾しながら開き、頸部に稜をもつ。口縁部は内湾し、口唇端部は平坦となる。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいに磨きが施される。貯蔵穴中の出土で、口頸部の一部を欠く。

2は口頸部の短めの土器。丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に明瞭な段をもち、口縁部は直線的に開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいにナデが施される。北東主柱穴に流れ込むような状態で出土。口縁部を僅かに欠く。

3は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に段をもち、口縁部は直線的に開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいに磨きが施される。覆土中の出土で、底部の一部を欠く。

4は丸底の底部からゆるやかに内湾し、頸部に強い段をもち、口縁部は直線的に大きく開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいに磨きが施される。北東主柱穴に流れ込むような状態で出土した。完形。

36号住居址（第65図）

〔位置〕（C－9）G。

〔住居構造〕35号住居址を切り、37号住居址、21号土坑に切られる。（平面形）正方形。（規模）8.64×8.5m。（壁高）攪乱がひどく、比較的遺存状態のよい部分でも20cm前後である。（壁溝）北壁カマド右側を除き巡るものと思われる。上幅18cm・下幅8cm・深さ8cm前後を測る。（床面）攪乱によりかなり破壊されている。また、ピットの集中域でもあり、住居址内全面に後世のピットが散在する。部分的に踏み固められた面を残すが、南側の方が比較的遺存状態がよい。（カマド）北壁中央からやや東に偏って位置し、方位はN－5°－E。大部分が破壊されているが、灰褐色粘土により構築されている。（住穴）住居址四隅に位置する4本が主柱穴と考えられる。（貯蔵穴）カマド右横の北東コーナーに位置する。108×84cmの長方形を呈し、深さ104cmを測る。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とするが、攪乱が著しく詳細不明。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

第65図　36号住居址（1/60）

36号住居址出土遺物（第66図）

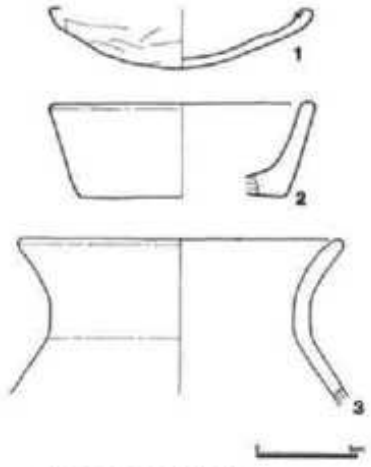
土師器坏形土器（1・2）

1は丸底の底部から内湾しながら開き、頸部に段をもつ。内外面はナデが施される。カマド前面の床面上出土で、口頸部を欠損する。

2は厚手の土器。平底の底部から直線的に開く。口頸部内外面横ナデ、以下はナデられる。覆土中の出土で、1/3程度遺存する。

土師器甕形土器（3）

口頸部は、なで肩の肩部から外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいにヘラナデされる。覆土中の出土で、肩部以上約1/2の遺存度。



第66図　36号住居址出土遺物（1/4）

37号住居址（第67図）

〔位置〕（C—10）G。

〔住居構造〕36号住居址を切る。（平面形）長方形。（規模）4.68×4.08m。（壁高）攪乱がひどく、10cm前後を残すのみである。（壁溝）カマド部分を除いて全周する。上幅18cm・下幅10cm・深さ10cm前後を測る。（床面）壁際を除いてほぼ全面硬く踏み固められている。（カマド）東壁の南東コーナー近くにあり、方位はN—65°—E。長さ132cm・幅66cmを測り、天井部・袖部は灰褐色粘土により構築される。（柱穴）検出されなかった。住居址内のピットは後世のものである。（覆土）ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とするが、攪乱のため詳細不明。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕国分式期。

37号住居址出土遺物（第68図、第108図6）

須恵器坏形土器（1）

平底の底部から直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。底面は回転糸切り後、回転ヘラ削りで調整される。覆土中の出土で、体部を3/4程欠損する。

須恵器甕形土器（2）

口頸部は僅かに外湾しながら開く。口唇部には粘土紐が貼り付けられ稜となる。床面上の出土で、口頸部のみ1/4程遺存する。

鉄製品（第108図6）

両端を欠損するが、鎌と思われる。

38号住居址（第69図）

〔位置〕（C—3）G。

〔住居構造〕4号井戸址に切られる。（平面形）長方形。（規模）5.44×4.04m。（壁高）16cm前

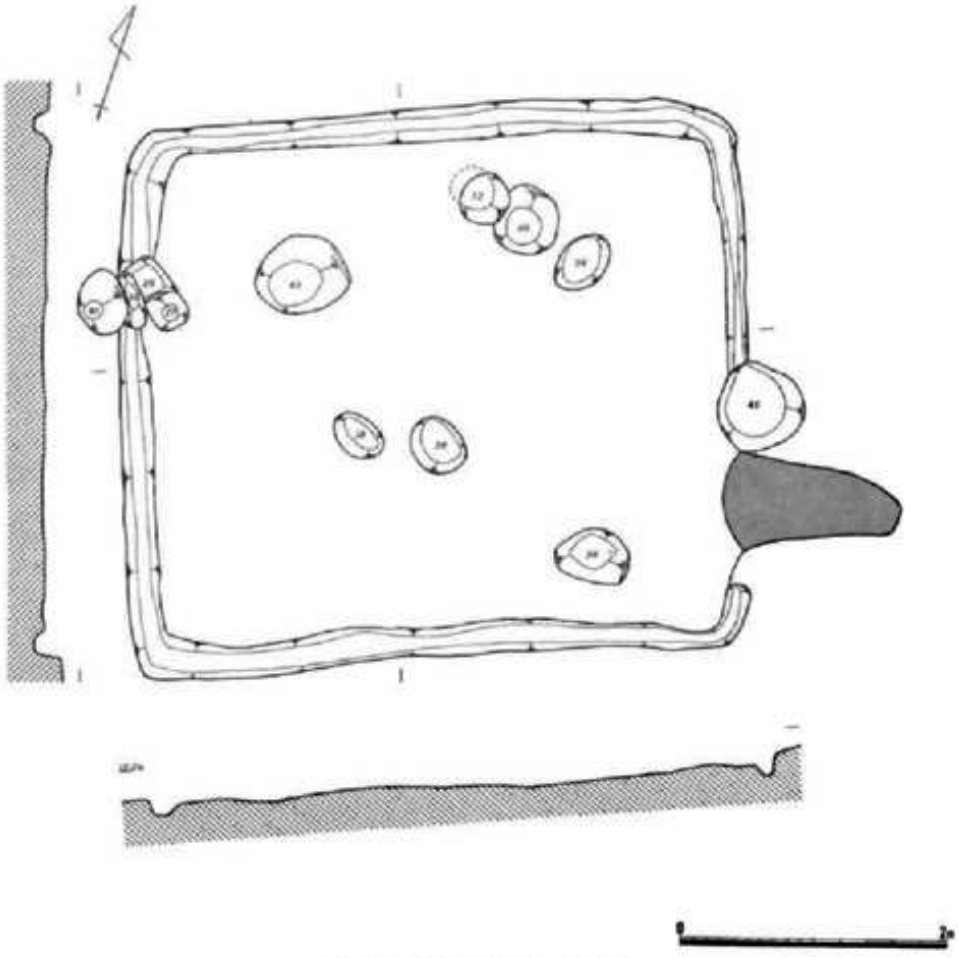
後を残すのみである。〔床面〕中央部付近が硬く踏み固められている。（カマド）東壁中央からやや南に偏って位置し、方位はN—99°—E。長さ117cm・幅84cm・壁への掘り込み70cmを測り、天井部・袖部は灰褐色粘土で構築される。（柱穴）検出されなかった。住居址内のピットは後世のものである。（覆土）ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

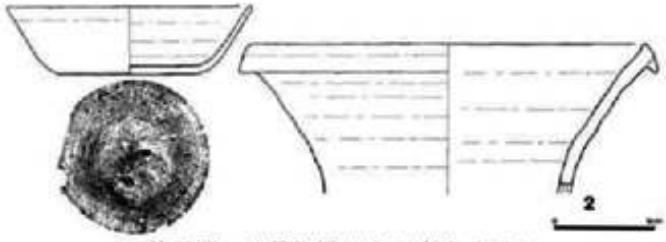
〔時期〕国分式期。

38号住居址出土遺物（第70図、第108図２）

須恵器坏形土器（１）



第67図　37号住居址（1/60）



第68図　37号住居址出土遺物（1/4）

平底の底部から直線的に開く。底面には回転糸切り痕を残す。色調は完全に還元焼成されず黄橙色を呈する。北東コーナー付近の床面上の出土で、完形である。

須恵器埦形土器（2）

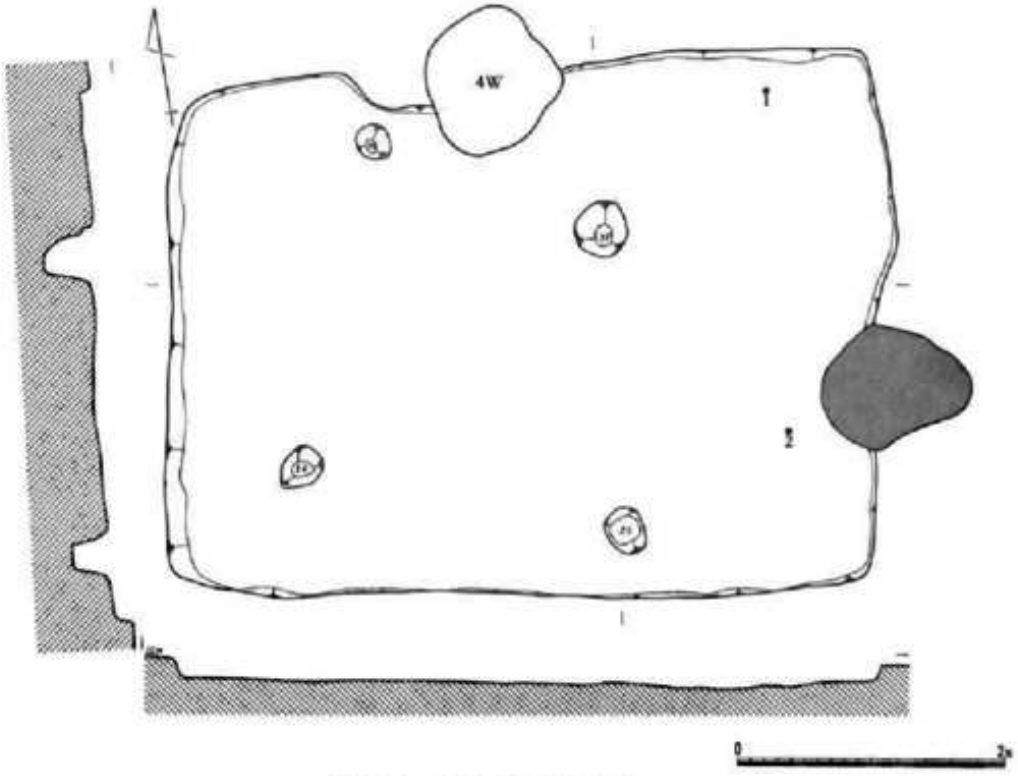
平底の底部から内湾しながら立ち上がる。底面には回転糸切り痕を残す。カマド前面の床面上の出土で、口縁部を欠く。

灰釉坏形土器（3）

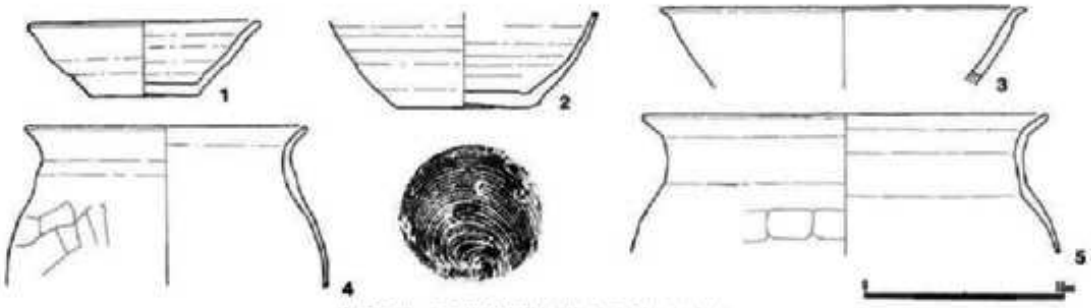
体部は僅かに内湾し、口縁部は屈曲し外反する。内面には灰釉が施される。覆土中の出土で、体部下位以上1/2程の遺存度。

土師器甕形土器（4・5）

4は台付甕と思われる土器で、口頸部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、胴部外面はヘラ削り、内面はナデられる。覆土中の出土で、胴部中位以上4/5程の遺存度。



第69図　38号住居址（1/60）



第70図　38号住居址出土遺物（1/4）

5は頸部が直立し、口縁部が外反する、いわゆる「コ」字状。口頸部内外面は横ナデ、肩部外面はヘラ削り、内面はナデられる。カマド中の出土で、肩部以上1/2程の遺存度。

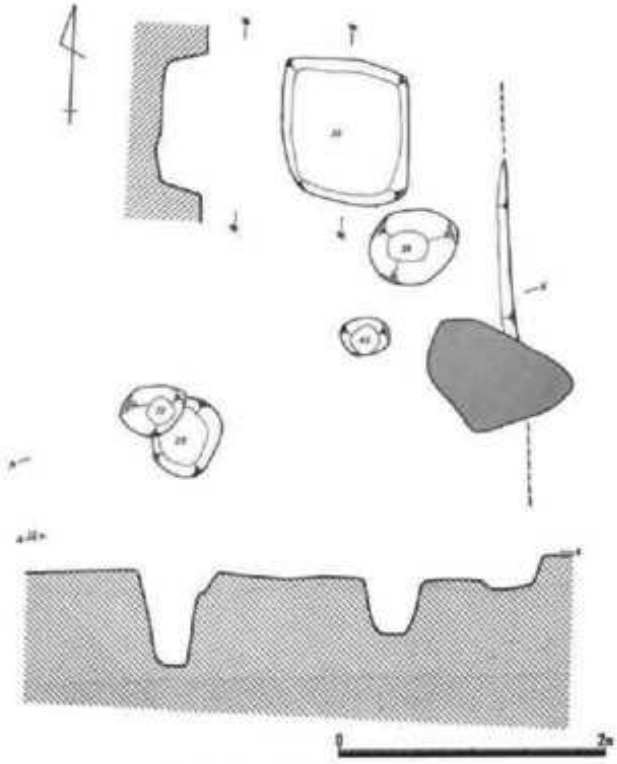
土製品（第108図2）

須恵器坏形土器の底部を利用した紡錘車。回転糸切り痕を残す。覆土中の出土。

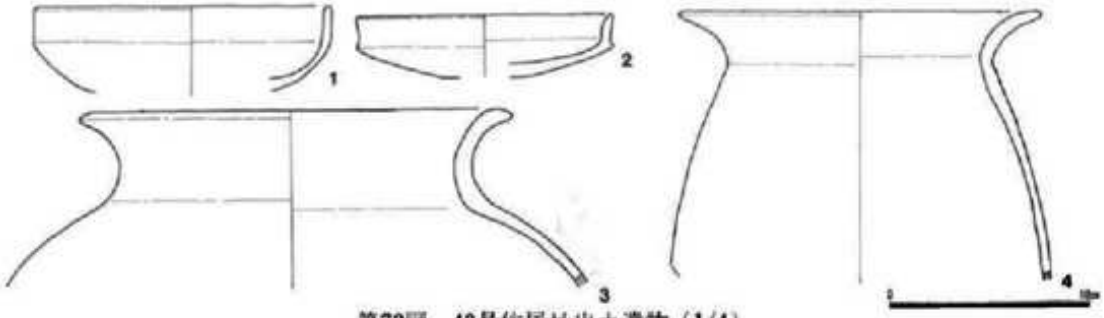
40号住居址（第71図）

〔位置〕（D－4）G。

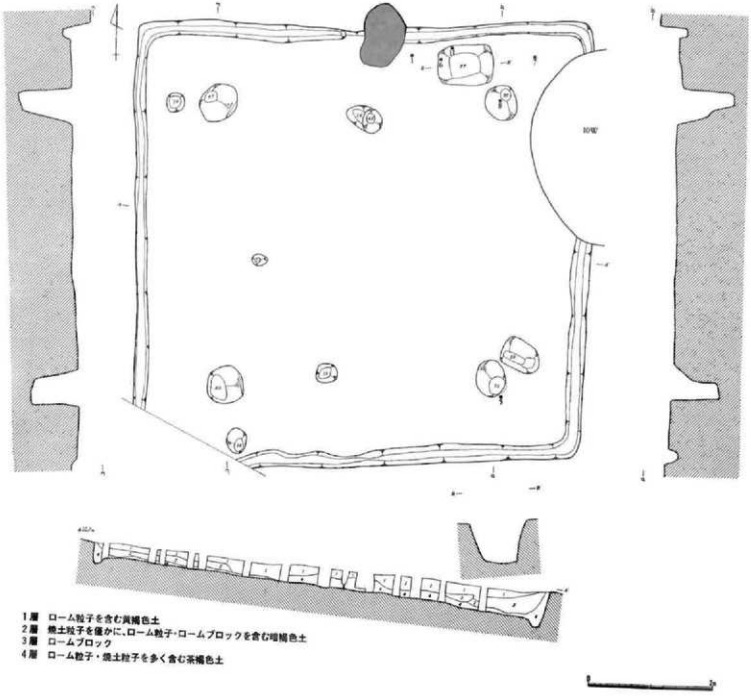
〔住居構造〕攪乱が著しく詳細不明。（壁高）東壁の一部を確認した。20cm前後の高さで、ほぼ垂直に立ち上がる。（床面）一部硬く踏み固められている面を残す。（カマド）東壁に設けられる。方位はN－83°－E。長さ113cm・幅93cm・壁への掘り込み30cmを測り、両袖部はロームを若干隆起させ残し、天井部ともに灰褐色粘土を被覆させ構築される。（柱穴）検出されなかった。住居址内



第71図　40号住居址（1/60）



第72図　40号住居址出土遺物（1/4）



第73図　41号住居址（1/60）

のピットは後世のものである。（貯蔵穴）カマド左横に位置する。108×94cmの不整方形を呈し、深さ32cmを測る。（覆土）ローム粒子を僅かに含む暗褐色土を基調にするが、攪乱が著しく詳細は不明。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

40号住居址出土遺物（第72図）

土師器坏形土器（1・2）

1は口頸部が直立する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。覆土中の出土で、1/2程の遺存度。

2は丸底の底部から僅かに内湾しながら立ち上がり、頸部に明瞭な稜をもち、口縁部は直立ぎみに開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。カマド中の出土で、1/2程の遺存度。

土師器甕形土器（3・4）

3は肩部が張り、口頸部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。カマド左横の床面上の出土で、肩部以上1/2程の遺存度。

4は胴部が脹らみ、口頸部は大きく外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。覆土中の出土で、胴部中位以上4/5程の遺存度。

41号住居址（第73図）

〔位置〕（D－10）G。

〔住居構造〕10号井戸址、1号溝址に切られる。（平面形）正方形。（規模）7.3×7m。（壁高）全体的に攪乱による破壊を受けている。比較的遺存のよい東壁で32cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）カマド部分を除いて全周する。上幅20cm・下幅10cm・深さ15cm前後を測る。（床面）壁際を除いてほぼ全面硬く踏み固められている。（カマド）北壁の中央に位置する。方位はN－3°－W。長さ100cm・幅79cm・壁への掘り込み40cmを測る。両袖部はロームを隆起させ残し、長甕を置き補強する。天井部・袖部ともに灰褐色粘土を被覆させ構築している。（柱穴）主柱穴4本で構成される。深さ80cm前後を測り、四隅に配される。（貯蔵穴）カマド左横に位置する。90×64cm・深さ77cmを測り、長方形を呈する。（覆土）ローム粒子・焼土粒子を多く含む茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕カマド・貯蔵穴付近から多く出土した。

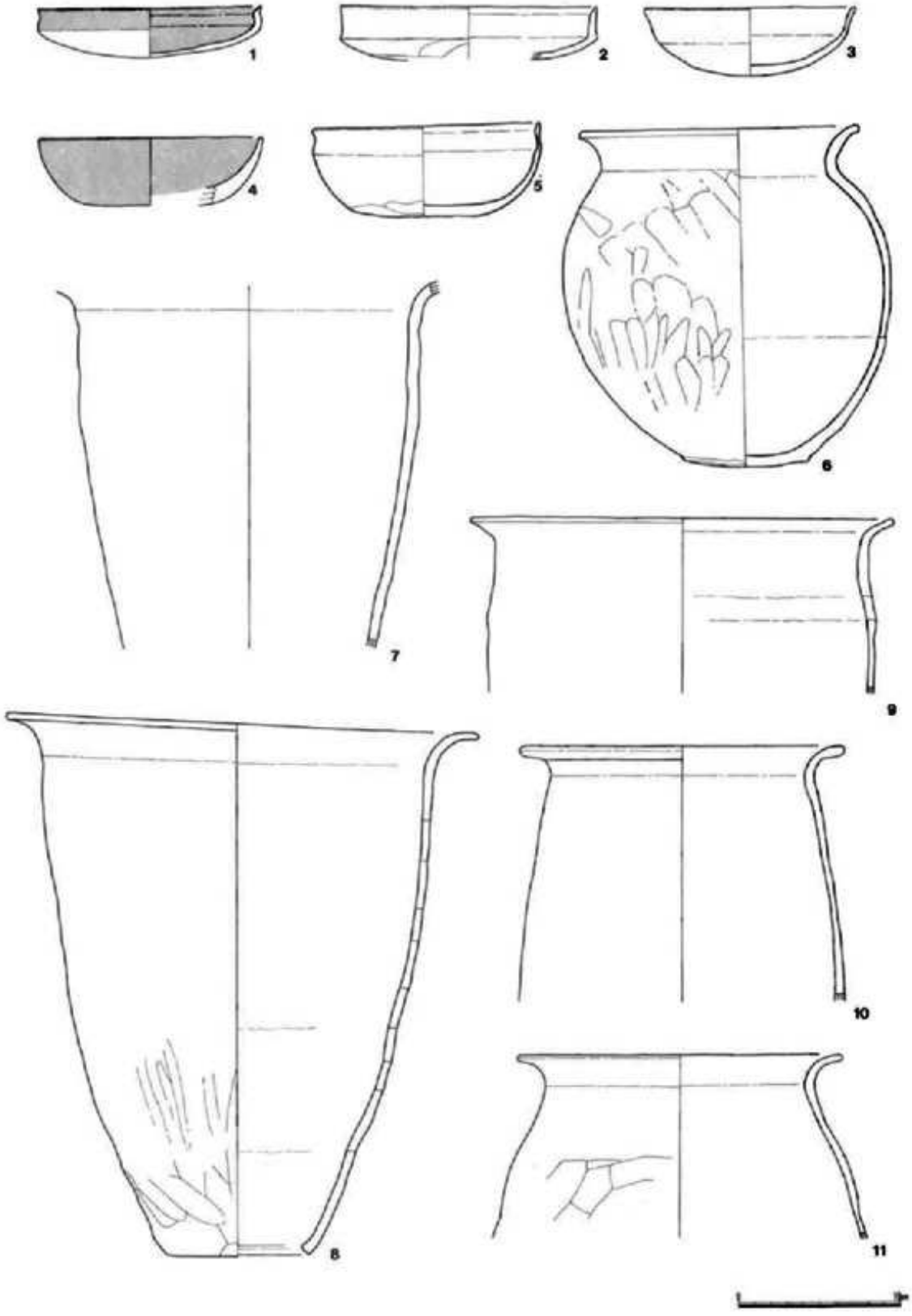
〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕覆土中から焼土粒子が多く検出されているため、焼失住居の可能性がある。

41号住居址出土遺物（第74図、第108図9）

土師器坏・埦形土器（1～5）

1は浅めの土器。体部上位で強く内湾し、口縁部は短く外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいにナデが施され、特に外面は光沢をおびる。内面及び口頸部外面は赤彩される。カマド右横の床面上の出土で、口頸部・体部の一部を欠く。



第74図　41号住居址出土遺物（1/4）

2は体部がゆるやかに内湾し、頸部に稜をもち、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面には部分的にヘラ削り痕を残す。覆土中の出土で、1/3程の遺存度。

3は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に僅かな稜をもち、口縁部は外反ぎみに開く。口頸部内外面は横ナデされる。体部外面はヘラナデ、内面はナデられる。覆土中の出土で、1/4程の遺存度。

4は埦状を呈する土器。口縁部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面には部分的にヘラ削り痕を残す。内外面とも赤彩される。覆土中の出土で、1/3の遺存度。

5は深めの土器。平底ぎみの底部から湾曲しながら立ち上がり、頸部で内傾し、口縁部は僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデされる。体部外面はヘラナデされるが、底部にはヘラ削り痕を残す。内面はナデられる。南東主柱穴横の床面上の出土で、口頸部1/2程を欠く。

土師器甕形土器（6・7・9～11）

6は小型甕。胴部中位に最大径をもち球胴状を呈する。口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、以下はヘラナデされるが、外面にはヘラ削り痕を残す。貯蔵穴上層からの出土で、口頸部の一部を欠損する。

7は甑形土器の可能性がある。頸部内外面は横ナデ、以下はヘラナデされる。北東コーナーの床面上の出土で、口縁部と胴部下半を部分的に欠く。

9は胴部が直立ぎみで、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。甑形土器の可能性がある。カマド中の出土で、胴部上位以上が遺存。

10は胴部中位に張らみをもち、口縁部は大きく開く。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。カマド中の出土で、胴部上位以上3/4程が遺存する。

11は頸部でくびれ、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面にはヘラ削り痕を残す。貯蔵穴上層からの出土で、胴部上位以上1/4の遺存度。

土師器甑形土器（8）

底部から僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面胴部下位にはヘラ削り痕を残す。北東主柱穴横の床面上出土で、ほぼ完形。

石製品（第108図9）

白玉である。両面は平端であるが、端部には僅かに稜を残す。絹雲母片岩製。

42号住居址（第75図）

〔位置〕（E－7）G。

〔住居構造〕43号住居址、27号土坑に切られる。（平面形）正方形。（規模）6.04×5.8m。（壁高）40cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）上幅16～20cm・下幅10cm・深さ15cm前後を測り、カマド部分を除いて全周する。（床面）壁際を除いて、ほぼ全面踏み固められている。（カマド）北壁中央からやや東に偏って位置し、方位はN－2°－W。長さ204cm・幅134cmを測り、天

井部・袖部は灰褐色粘土により構築される。（柱穴）主柱穴4本で構成される。深さ70～79cmを測り、四隅に配される。（貯蔵穴）カマド右横の北東コーナーに位置する。84×56cmの楕円形を呈し、深さ66cmを測る。（覆土）ローム粒子を多く、ロームブロック・焼土粒子を含む暗褐色土を基調とし、自然堆積状態を呈する。

〔遺物〕カマド・貯蔵穴付近から多く出土した。

〔時期〕鬼高式期。

42号住居址出土遺物（第76・77図、第108図4）

土師器坏形土器（1～6）

1は体部から頸部にかけて丸味を有し、口頸部は内傾ぎみに立ち上がり外反する。底部中央は尖り、口唇部内面直下には1条の沈線が巡る。内面及び口頸部外面は横ナデの後赤彩される。外面は以下磨きが施される。住居ほぼ中央の床面上出土で、口頸部を僅かに欠損する。

2は体部から頸部にかけて稜を有し、口縁部は直立する。内面及び口頸部外面ヨコナデ、外面は以下ヘラ削り痕を残す。覆土中の出土で、2/3程の遺存度。

3は体部から頸部にかけて稜を有し、口縁部は弓状に外湾する。内面口唇部直下に1条の沈線が巡る。内面及び口頸部外面は横ナデ、外面は以下ヘラ削り痕を顕著に残す。覆土中の出土で1/3の遺存度。

4は体部から頸部にかけて稜を有し、口頸部はほぼ直立する。内面及び口頸部外面は横ナデ、外面は以下磨耗により不明である。覆土中の出土で、1/2程の遺存度。

5は体部から頸部にかけては僅かに稜を有し、口縁部はやや外反する。底部は丸底を呈する。口頸部内外面は横ナデ、内面は以下ヘラナデ、外面は若干ナデられるが、底部付近にヘラ削り痕を顕著に残す。床面上の出土で、4/5程の遺存度。

6は群を抜き大型であり、浅鉢形土器であるかもしれない。底部は平底を呈し、体部から頸部にかけて段を有し、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、以下内外面ナデられるが、特に外面底部付近にヘラ削り痕が顕著にみられる。覆土中の出土で、2/3程の遺存度。

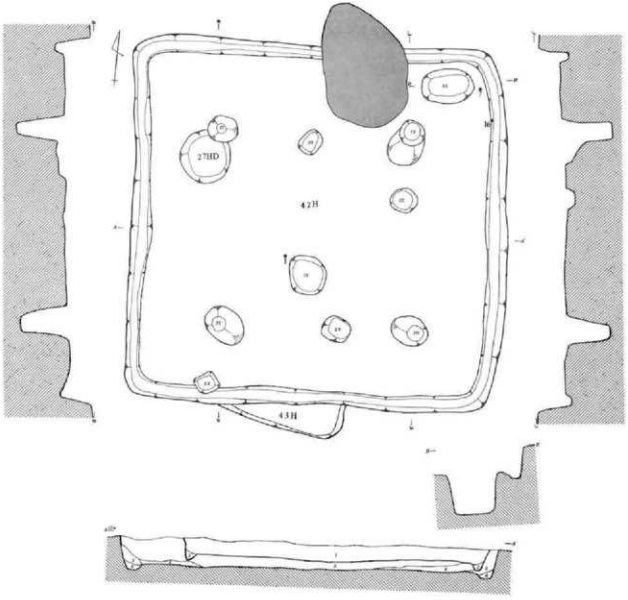
土師器甕形土器（7～9・11～17）

7は胴部と頸部との境に横ナデが施され、胴部は球形状を呈する。平底ぎみの底部には木葉痕が残る。外面はヘラ削り、内面はヘラナデが施される。貯蔵穴付近の床面上の出土で、1/3程の遺存度。

8は胴部上半で最大径を測り、肩部を有する。頸部は短く、口縁部は外反する。底部は平底を呈し木葉痕を残す。口頸部内外面は横ナデ、以下外面はていねいにナデられているが、胴部下半で僅かにヘラ削り痕がみられる。内面はヘラナデ。覆土中の出土で、1/2程の遺存度。

9は丸底風の底部と卵形状の胴部をもつ。口頸部はゆるやかに外反し、胴部中位やや下で最大径を測る。口頸部内外面は横ナデ、外面は以下ナデられ、特に胴部上半では縦方向のヘラナデがていねいに施される。内面はヘラナデされる。覆土中の出土で、1/2程の遺存度。

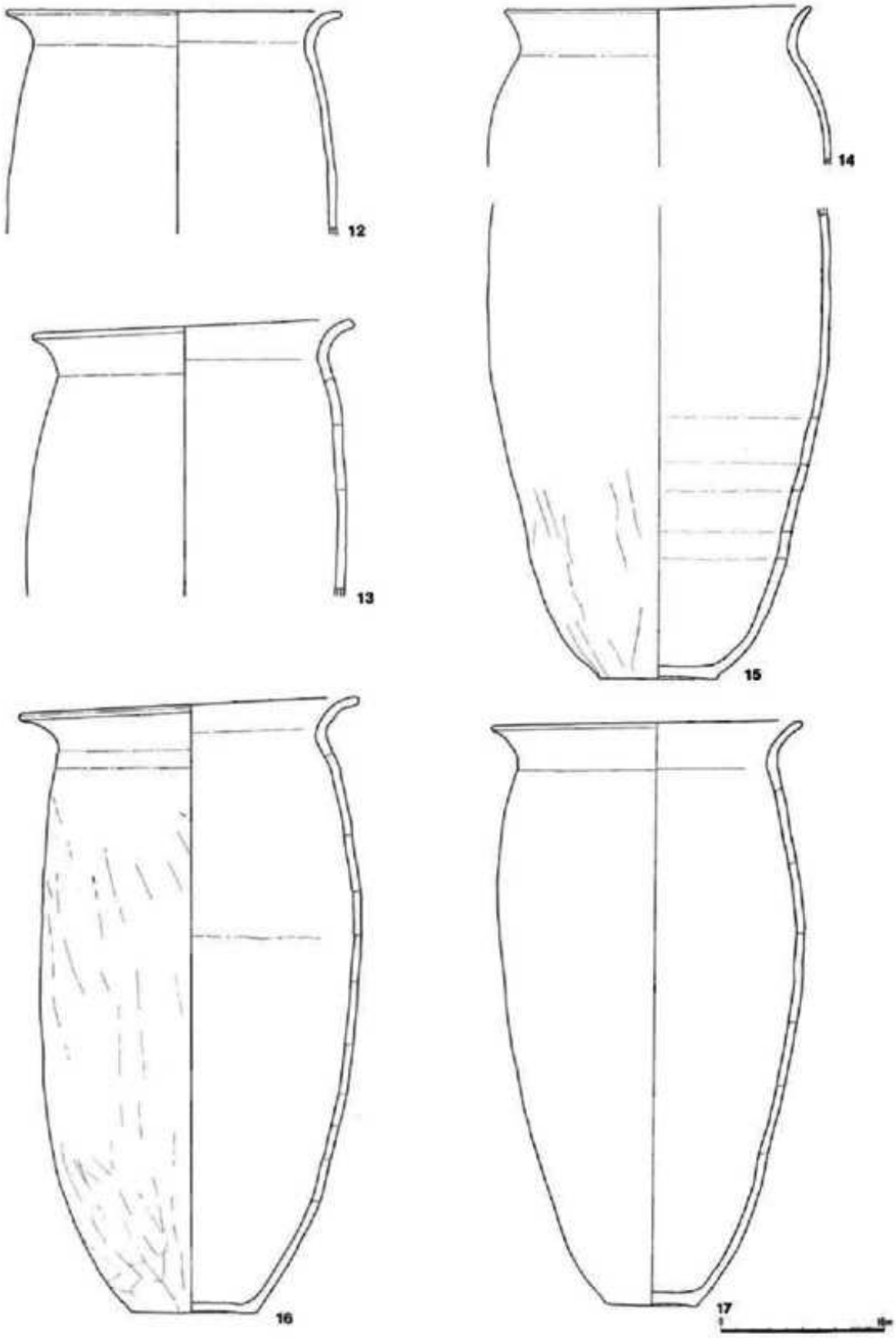
11は胴部下半以下を欠損する。胴部は直線的で細長く、口頸部は大きく外湾する。口頸部内外面横ナデ、外面は以下縦長のヘラ削り痕が残る。また、内面にはヘラナデが施されるが、輪積み痕が



1層　ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土
2層　ローム粒子を僅かに含む黒褐色土
43号住居址覆土
3層　ローム粒子を多く、ロームブロック・焼土粒子を含む暗褐色土
4層　ローム粒子を多く含む暗茶褐色土
5層　ローム粒子を多く含む黒褐色土
6層　ローム粒子・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土
42号住居址覆土

第75図　42・43号住居址、27号土坑（1/60）

第76図　42号住居址出土遺物1（1/4）



第77図　42号住居址出土遺物2（1/4）

顕著にみられる。覆土中の出土で、1/3程の遺存度。

12・13は胴部中位以下を欠損する。最大径は口縁部と胴部中位ほぼ同じ値になると思われる。口頸部内外面は横ナデ、外面は以下ヘラ削り後ナデられる。12は器面が磨耗しているため不明であるが、内面はヘラナデされよう。覆土中の出土で、12が1/5、13が1/4程の遺存度。

14も胴部中位以下を欠損するが、胴部は丸味をもち、口頸部の外反もゆるやかである。口頸部内外面は横ナデ、外面は以下粗雑なヘラナデの痕であろうか。内面はヘラナデ。覆土中の出土で、1/5程の遺存度。

15は胴部上半以上を欠損する。やや窄みをもつ底部から細長い胴部に至る。底部には木葉痕を残す。また、内面には輪積み痕と土器成形時において付いたと思われる指頭圧痕が顕著にみられる。外面はナデられるが、胴部下半に若干ヘラ削り痕が残る。内面はヘラナデされる。貯蔵穴付近の床面上の出土で、1/3程の遺存度。

16はやや窄みをもつ底部から直線的な細長い胴部に至り、口頸部は大きく外湾する。口縁部で最大径を測り、底部には木葉痕を残す。口頸部内外面は横ナデ、外面は以下ナデられるが、ヘラ削り痕を若干残す。内面はヘラナデ。貯蔵穴付近の床面上の出土で、完形である。

17は16に比べ、胴部下半の形態がやや細身であるが、大略同器形となろう。底部には木葉痕を残す。口頸部内外面は横ナデ、外面は以下ていねいにナデられている。内面はヘラナデ、床面上の出土で、3/5程の遺存度。

土師器甑形土器（10）

口縁部で最大径を測り、筒抜け状の孔をもつ。口頸部内外面は横ナデ、外面は以下ていねいにヘラナデされ、ヘラ削り痕を消している。内面は横方向にヘラナデがされた後縦方向の細長い磨きが密に施される。貯蔵穴内からの出土で、4/5程の遺存度。

土製品（第108図4）

土錘である。形状は円筒形を呈し、その中央を直径7㎜の孔が貫通している。

43号住居址（第75図）

〔位置〕（E－7）G。

〔住居構造〕42号住居址を切る。（平形面）大部分が42号住居址内にあり、そのプランを確認することはできなかった。（規模）不明×4.9ｍ。（壁高）30㎝前後を測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）土層観察ベルトによって確認できた。上幅15㎝・下幅10㎝・深さ10㎝前後を測る。（床面）42号住居址覆土中に、部分的に硬化面が認められた。（カマド）東壁の南東コーナーに近い部分に位置する。方位はN－101°－E。長さ135㎝・幅86㎝を測り、天井部・袖部は灰褐色粘土により構築される。掛け口には土製支脚がすえられていた。（覆土）ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕カマド付近に集中して出土した。

〔時期〕国分式期。

43号住居址出土遺物（第78図、第108図7）

須恵器坏形土器（1～3）

1は体部が僅かに内湾しながら開き、口縁部は外反する。覆土中の出土で、1/2を欠く。

2は底部から直線的に開く。底面には回転糸切り痕を残す。カマド中の出土で、口縁部から体部にかけて1/2程欠損する。

3は体部が内湾し、口縁部は外反する。底面には回転糸切り痕を残す。カマド中の出土で、1/3程の遺存度。

須恵器壺形土器（4）

長頸壺になろうか。肩部は張りぎみで、底部には高台がつけられる。カマド中の出土で、肩部以下1/3の遺存度。

須恵器甕形土器（5）

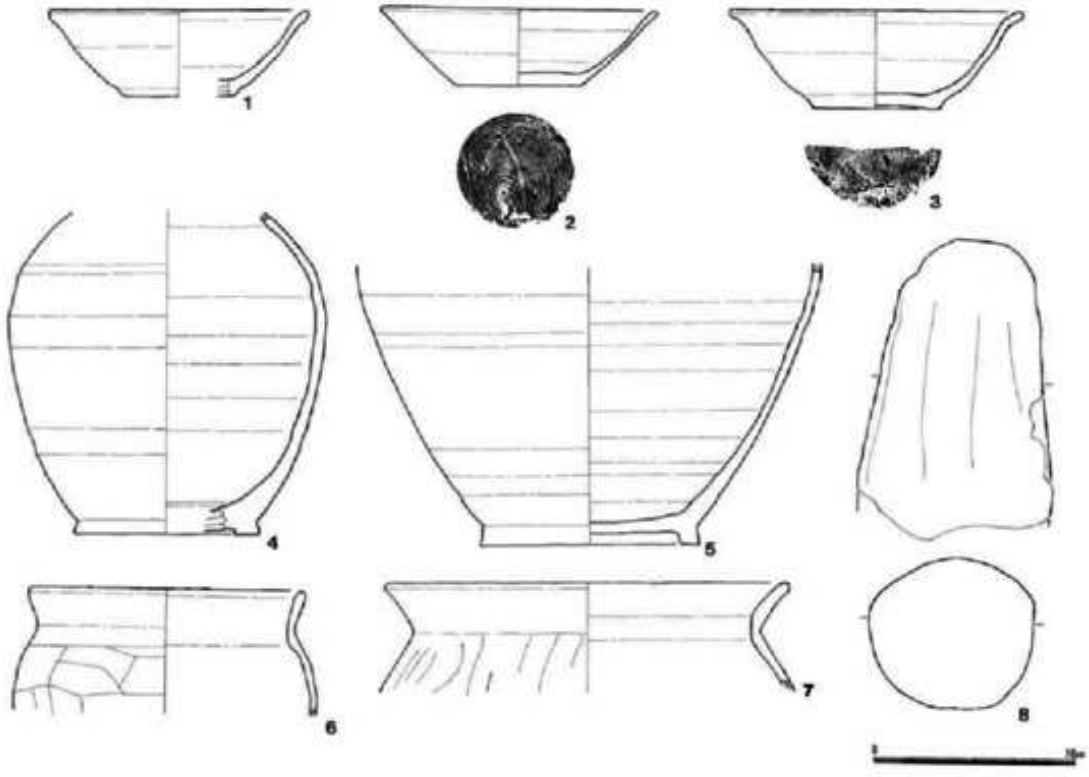
高台付の底部から僅かに内湾しながら立ち上がる。カマド中の出土で、胴部下位以下1/4の遺存度。

土師器甕形土器（6・7）

6は台付甕となろうか。口頸部は直線的に僅かに開く。口頸部内外面は横ナデされる。胴部外面はヘラ削り、内面はナデられる。床面上の出土で、胴部上位以上1/2の遺存度。

7は頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデされる。肩部外面はヘラ削り、内面はナデられる。覆土中の出土で、肩部以上1/2の遺存度。

土製品（8）



第78図　43号住居址出土遺物（1/4）

カマド中から出土した支脚である。

鉄製品（第108図７）

刀子と考えられる。先端部と基部を欠損する。床面上の出土。

44号住居址（第79図）

〔位置〕（Ｉ－５）Ｇ。

〔住居構造〕西側半分以上が調査区外にあるために詳細不明である。（壁高）北壁58cm・南壁46cm・東壁33cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できる範囲では全周する。上幅20cm・下幅10cm・深さ10cm前後を測る。（床面）壁際を除いて硬く踏み固められている。（柱穴）深さ79cm・85cmの東側の２本が検出された。主柱穴４本で構成され、それぞれ四隅に配されると思われるが、西側２本については調査区外にあるであろう。東壁に接するピットは後世のものである。（貯蔵穴）北東コーナーに位置する。72×56cm・深さ48cmを測り、隅丸長方形を呈する。（覆土）１層―耕作土。２層―ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。３層―ローム粒子・焼土粒子を多く含む暗茶褐色土。４層―ローム粒子・焼土粒子を多く含む黒褐色土。５層―ローム粒子を多く含む暗黄褐色土。

〔遺物〕貯蔵穴付近からの出土が多い。

〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕覆土中から焼土粒子が多く検出されることから、焼失住居の可能性が考えられる。

44号住居址出土遺物（第80図）

土師器坏形土器（１）

浅めの土器。頸部で膨らみ、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、以下外面はていねいに磨きが施される。内面及び口頸部外面は赤彩される。覆土中の出土で、¼の遺存度。

土師器甕形土器（２～４）

２は頸部に僅かな稜をもち、口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデされる。覆土中の出土で、口頸部½の遺存度。

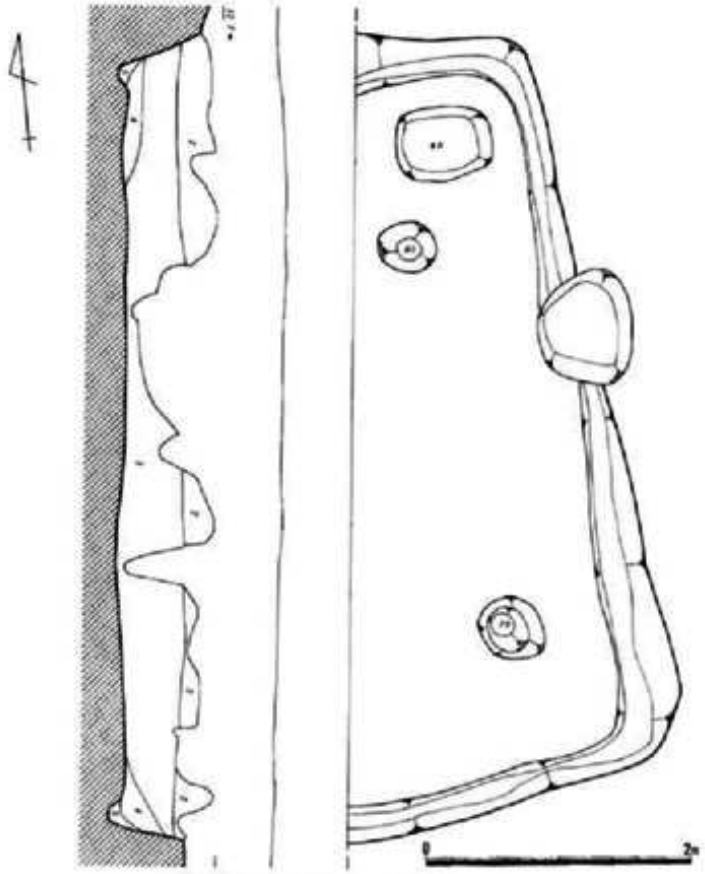
３は甑形土器の可能性がある。頸部に稜をもち、口縁部が大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデされる。胴部内外面はヘラナデされるが、外面にはヘラ削り痕を残す。覆土中の出土で、胴部中位以上⅓の遺存度。

４は胴部中位が膨らみ、頸部に僅かな稜をもち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面胴部下半にはヘラ削り痕を残す。底面には木葉痕がみられる。貯蔵穴中の出土で、ほぼ完形。

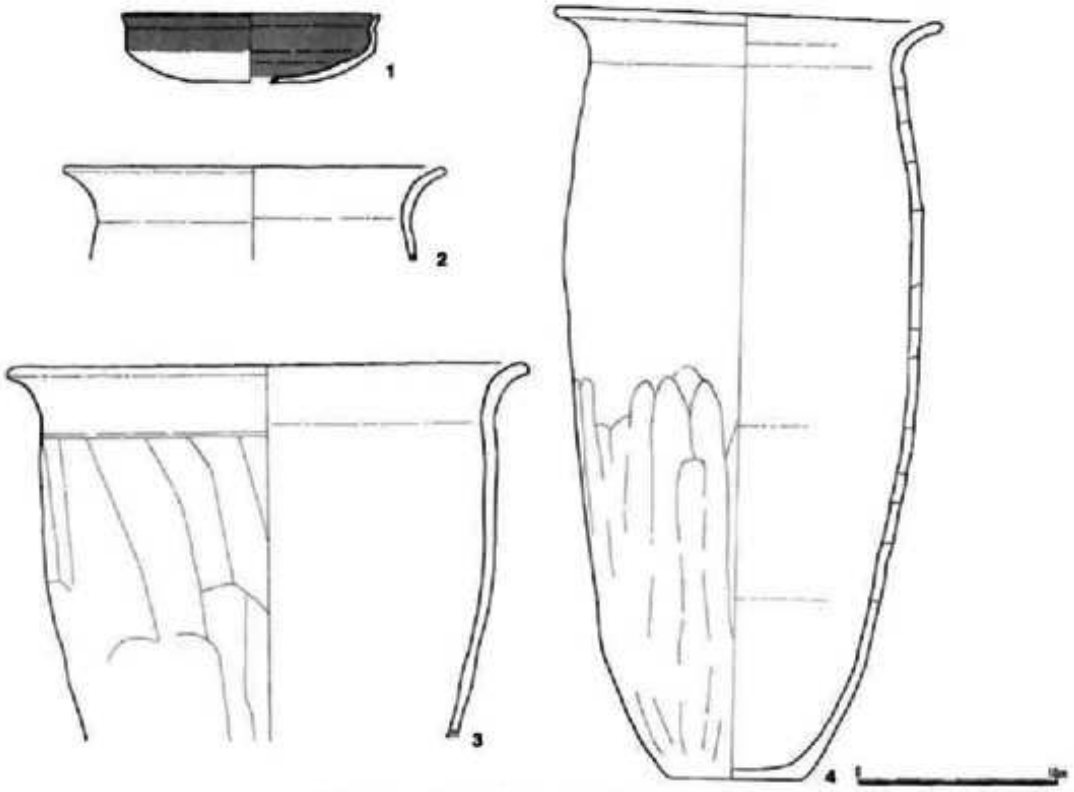
45号住居址（第81図）

〔位置〕（Ｅ－４）Ｇ。

〔住居構造〕５号溝址に切られる。（平面形）正方形。（規模）5.44× 5.2m。（壁高）20～30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）上幅12cm・下幅８cm・深さ10cm前後を測り、カマド部分を除いて全周する。（床面）壁際を除いてほぼ全面硬く踏み固められている。（カマド）東壁中央



第79図　44号住居址(1/60)

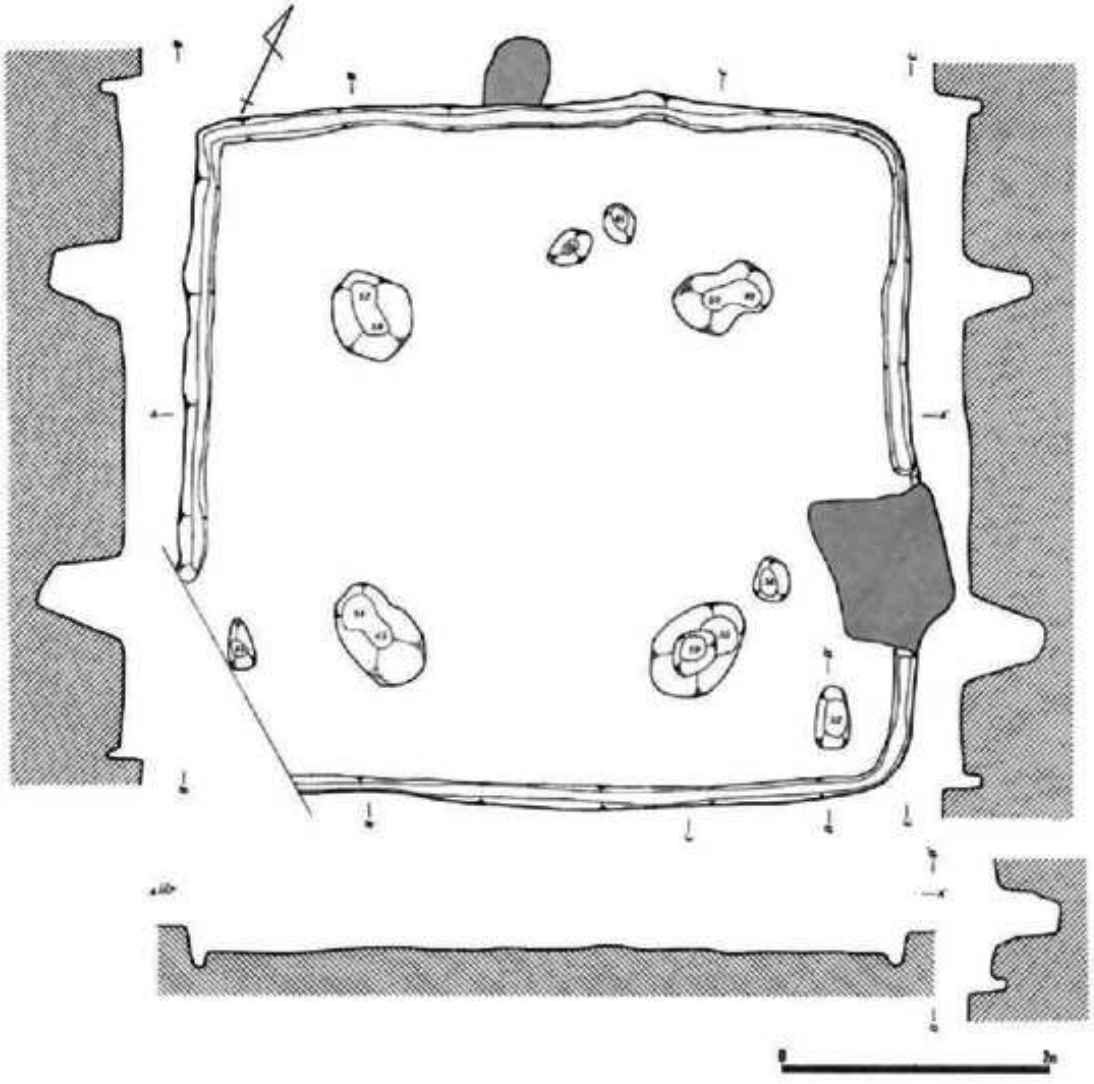


第80図　44号住居址出土遺物(1/4)

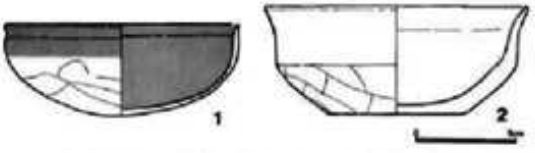
からやや南に偏って位置し、方位はN－62°－E。長さ93cm・幅 115cmを測り、天井部・袖部は灰褐色粘土により構築される。また、北壁中央に灰褐色粘土が認められ、カマドの痕跡と考えられる。（柱穴）主柱穴4本で構成される。それぞれの柱穴には重複がみられる。（貯蔵穴）南東コーナーに位置する。46×26cmの楕円形を呈し、深さ52cmを測る。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。



第81図　45号住居址(1/60)



第82図　45号住居址出土遺物(1/4)

〔所見〕北壁のカマドの痕跡、主柱穴の重複から住居の建て替えが想定できる。

45号住居址出土遺物（第82図）

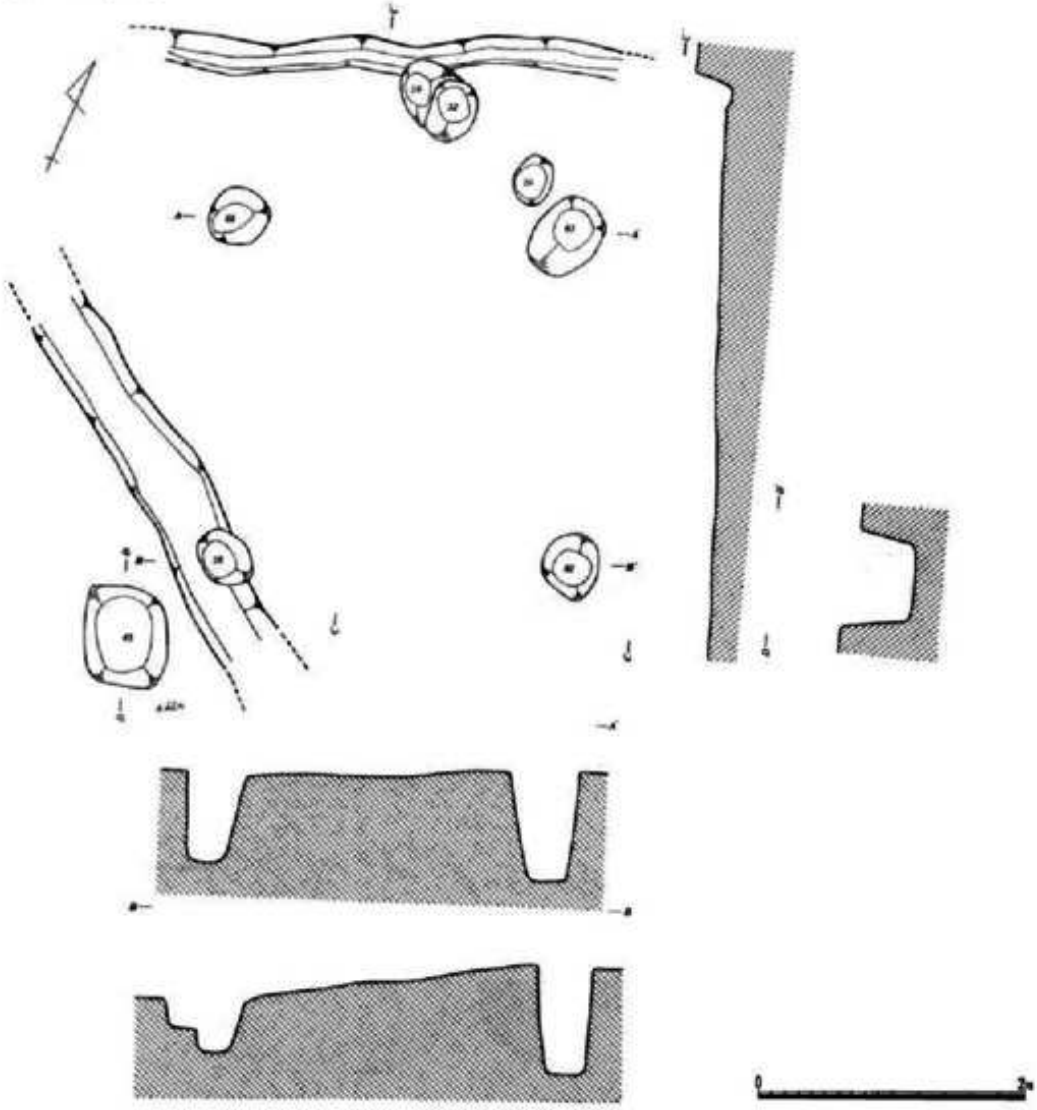
土師器坏形土器（1・2）

1は丸底の底部から開き、体部上半は直立ぎみに立ち、口縁部は短く僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面にはヘラ削り痕を残す。内面及び口頸部外面は赤彩される。床面上の出土で、完形。

2は平底ぎみの底部から直線的に開き、頸部に僅かな稜をもち、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面にはヘラ削り痕を残す。覆土中の出土で、⅔の遺存度。

46号住居址（第83図）

〔位置〕（D－2）G。



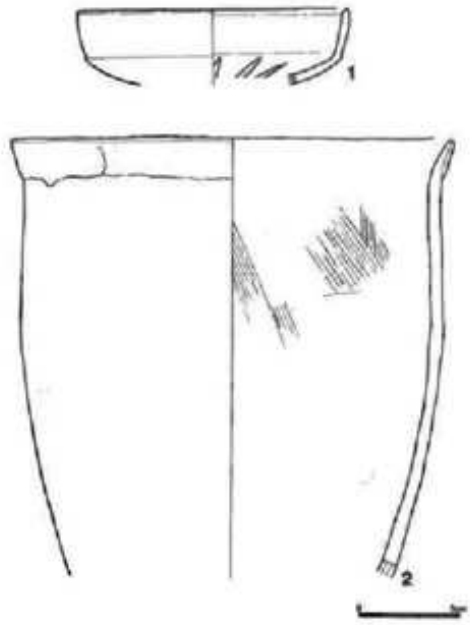
第83図　46号住居址（1/60）

〔住居構造〕28号土坑に切られ、さらに大部分が攪乱を受けているために詳細不明である。（壁溝）壁は破壊されており壁高は不明で壁溝は北壁の一部で確認できる程度である。（床面）部分的に硬く踏み固められた面を残す。（柱穴）主柱穴4本で構成される。他は後世のものである。（貯蔵穴）北西コーナーに位置すると思われる。74×62cm・深さ45cmを測り、楕円形を呈する。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とするが、攪乱により詳細不明である。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕30号住居址との切り合いは28号土坑の構築のために不明である。



第84図　46号住居址出土遺物(¼)

46号住居址出土遺物（第84図）

土師器坏形土器（1）

須恵器坏蓋の模倣と考えられる。頸部に明瞭な段をもち、口縁部は僅かに内反する。口唇端部は面取りが施され、体部内面には暗文がみられる。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。床面上の出土で、¼の遺存度。

土師器甑形土器（2）

胴部上位に僅かな張らみをもち、複合口縁状の口縁部は外反する。口縁部内外面は横ナデ、以下はていねいに磨きが施されようか。床面上の出土で、胴部下位以上¼の遺存度。

47号住居址（第85図）

〔位置〕（D－4）G。

〔住居構造〕29号土坑に切られる。また、北東コーナー付近は攪乱が著しい。（平面形）正方形。（規模）4.26×4.06m。（壁高）攪乱による破壊のため、遺存状態のよい部分でも20cmを測る程度である。（壁溝）カマド部分を除いて全周するものと思われる。上幅18cm・下幅12cm・深さ10cm前後を測る。（床面）壁際を除いて硬く踏み固められている。（カマド）北壁中央に位置し、方位はN－4°－W。攪乱により破壊されているため、灰褐色粘土の検出だけにとどまった。（柱穴）検出されなかった。住居址中のピットは後世のものである。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とするが、攪乱により詳細不明。

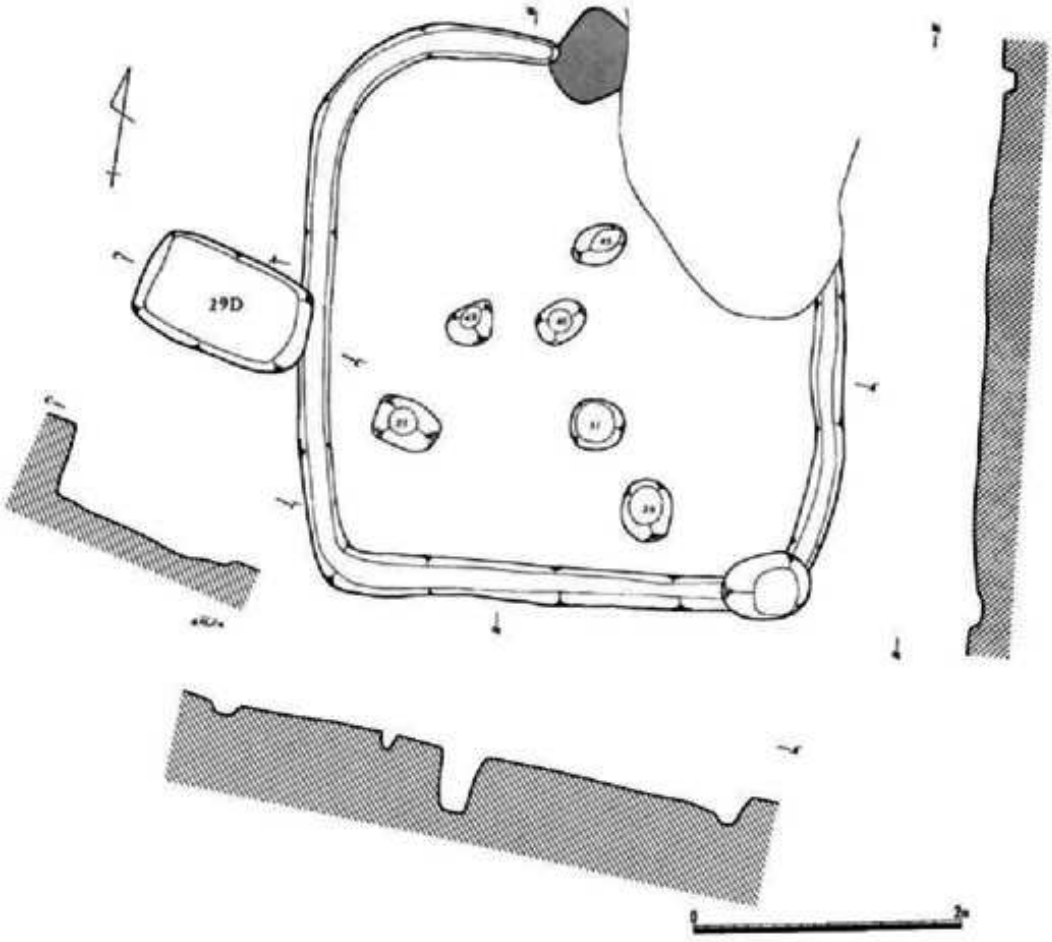
〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

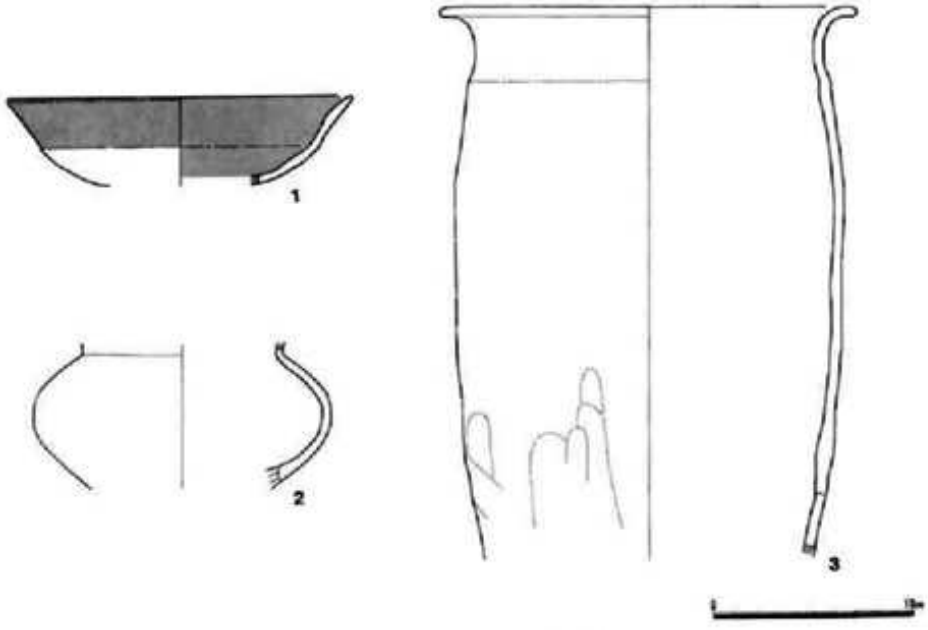
47号住居址出土遺物（第86図）

土師器坏形土器（1）

体部は皿状にゆるやかに開き、頸部に僅かな段をもち、口頸部は外反する。口頸部内外面は横ナ



第85図　47号住居址・29号土坑(1/60)



第86図　47号住居址出土遺物(1/4)

デ、それ以下はていねいにナデが施され、外面は光沢をおびる。内面及び口頸部外面は赤彩される。覆土中の出土で、⅓程の遺存度。

土師器壺形土器（2）

胴部は中位に最大径をもち扁球状を呈する。外面は磨かれて光沢をおび、内面はナデられる。覆土中の出土で、胴部のみ⅓程度遺存する。

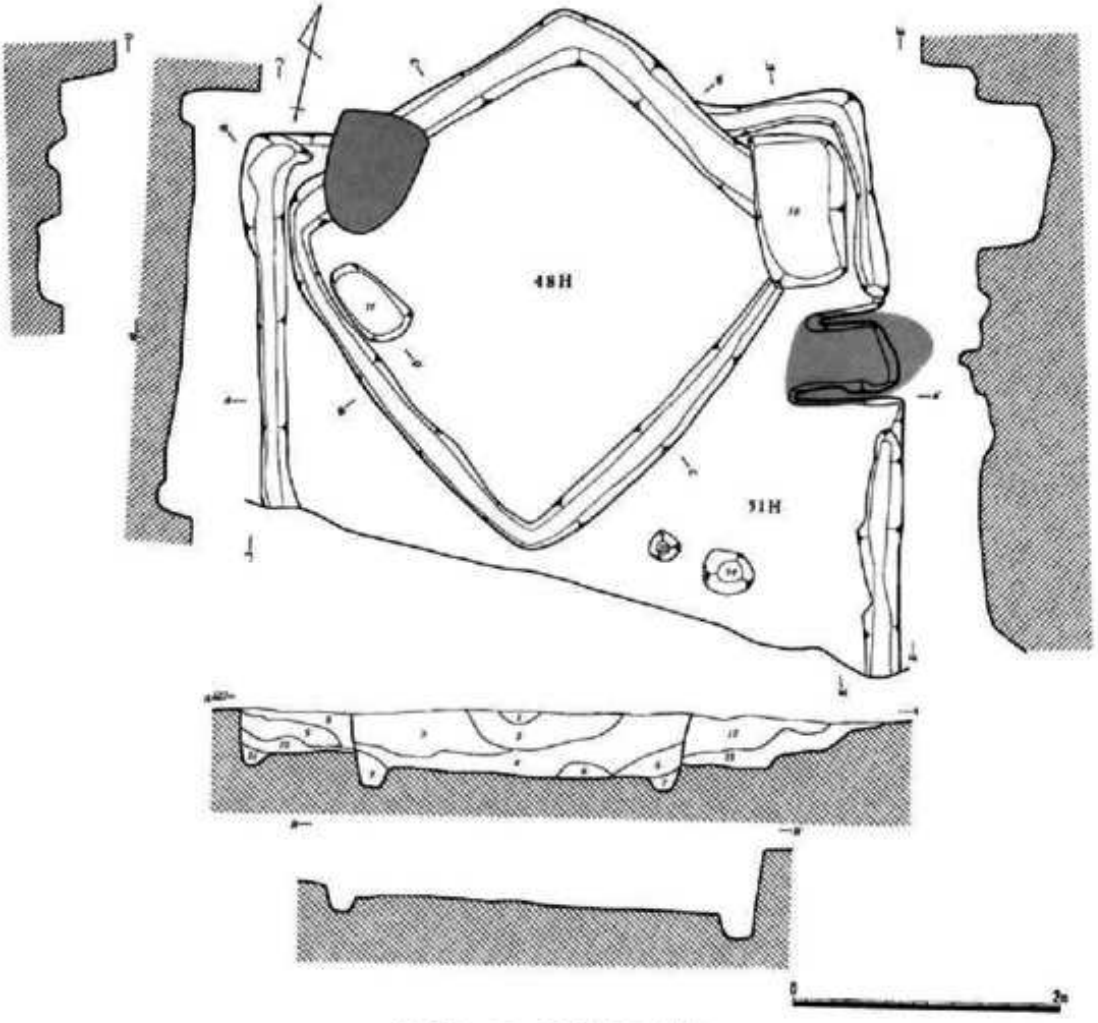
土師器甕形土器（3）

胴部中位が僅かに張らむ長胴甕。頸部に僅かな稜をもち、口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面胴部下半にはヘラ削り痕を残す。覆土中の出土で、胴部下位以上⅓程の遺存度。

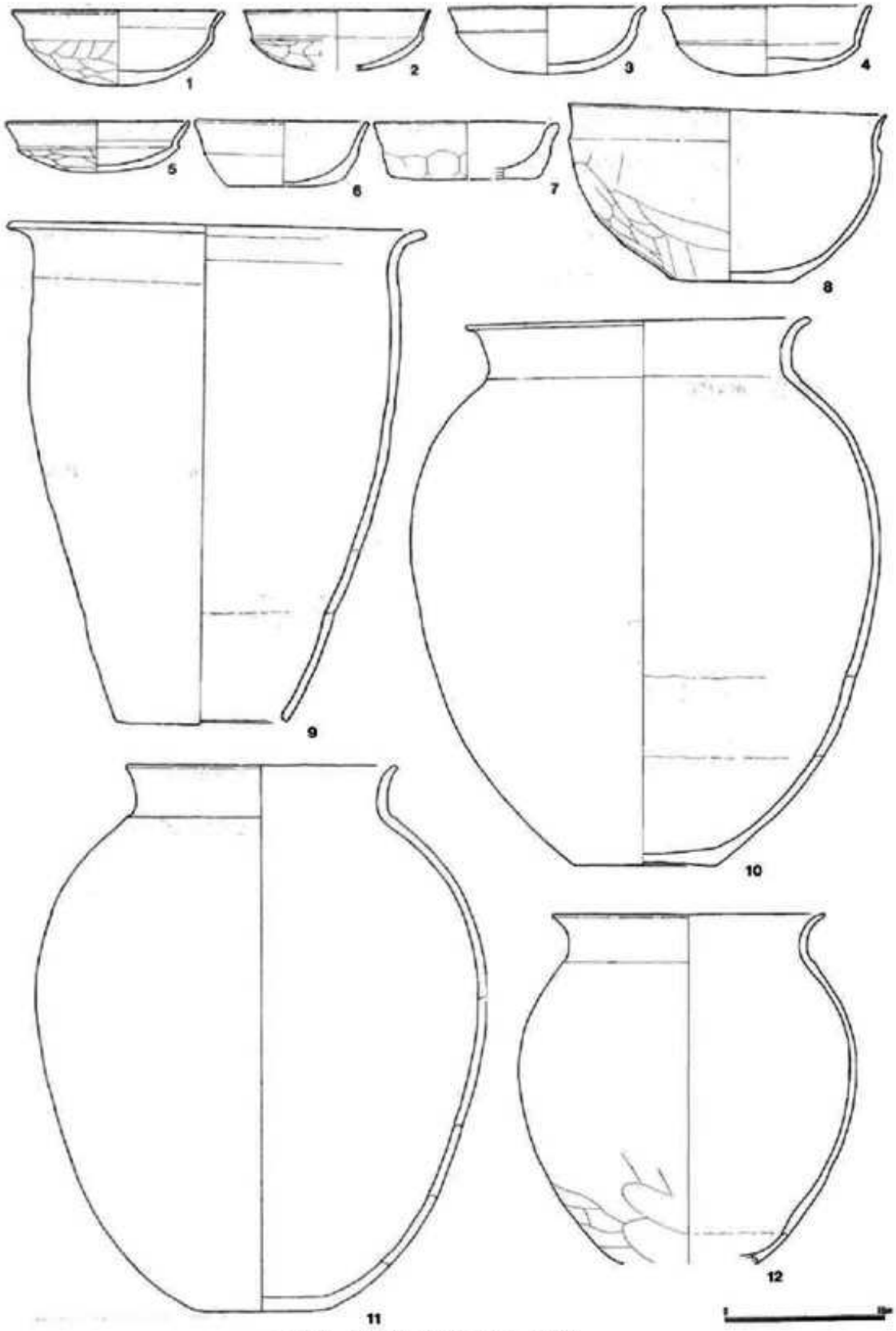
48号住居址（第87図）

〔位置〕（F－6）G。

〔住居構造〕51号住居址を切る。（平面形）正方形。（規模）3.28×3.22m。（壁高）45cm前後を

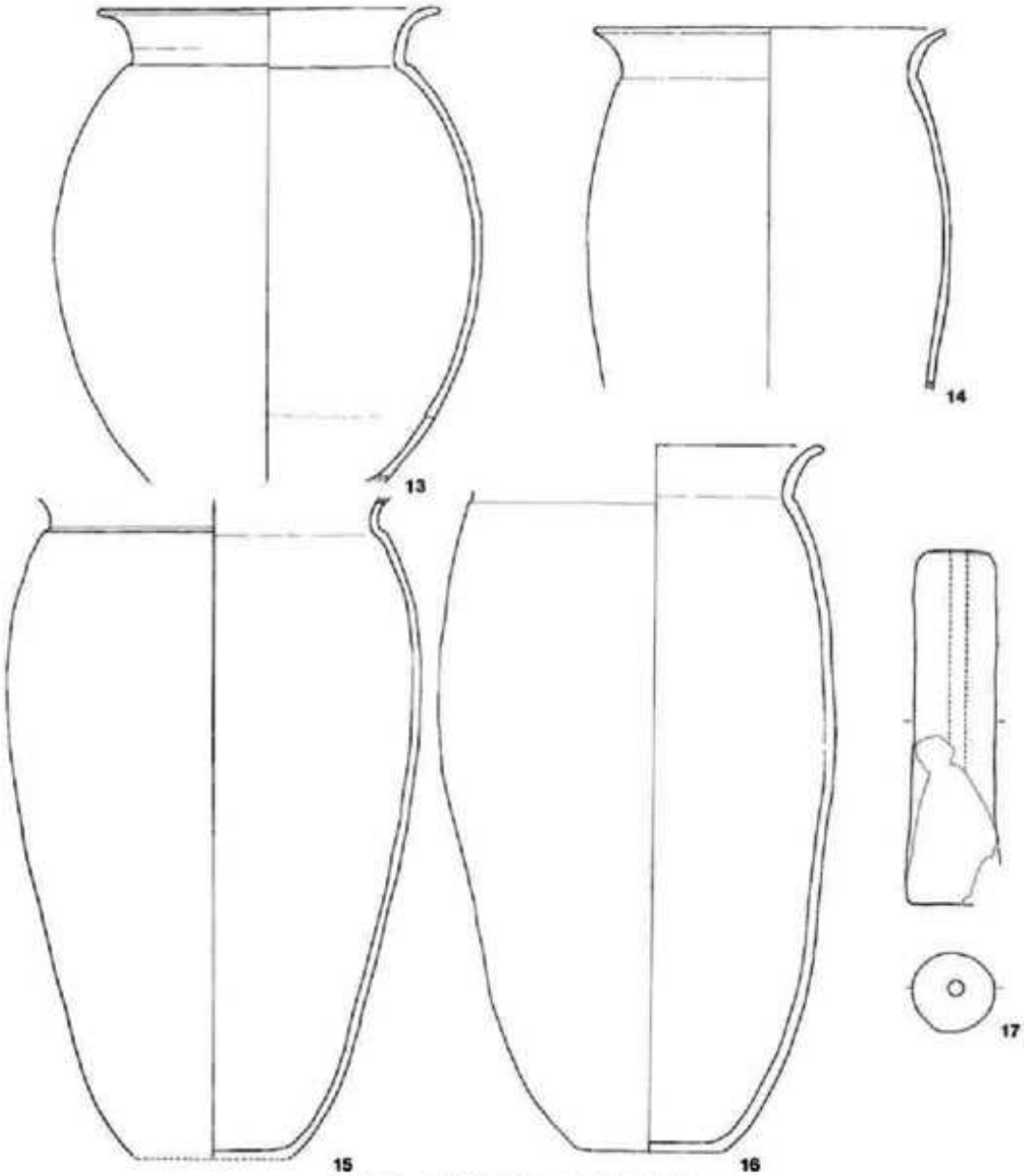


第87図　48・51号住居址(1/60)



第88図　48号住居址出土遺物1（¼）

測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）上幅20～28cm・下幅12～18cm・深さ12～16cmを測り、カマド部分を除いて全周する。（床面）壁際を除いて全面硬く踏み固められている。（カマド）西壁中央から南に偏って位置し、方位はN－52°－W。長さ95cm・幅87cm・壁への掘り込み30cmを測り、袖部はロームを馬蹄形状に隆起させ残し、天井部ともに灰褐色粘土を被覆させ構築している。（貯蔵穴）カマド左側の南西コーナーに位置する。70×36cmの長方形を呈し、深さ17cmを測る。（覆土）全体に不規則な堆積状態を呈する。1層－ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。2層－ローム粒子を多く、焼土粒子を僅かに含む黒褐色土。3層－ローム粒子を多く、焼土粒子を含む暗茶褐色土。4層－ローム粒子を多く、焼土粒子を含む茶褐色土。5層－ローム粒子を含む暗茶褐色土。6層－ローム粒子・焼土粒子を多く含む暗茶褐色土。7層－ローム粒子を多く含む暗黄褐色土。



第89図　48号住居址出土遺物2（¼）

〔遺物〕住居南側の床面上から多く出土した。

〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕覆土中に焼土粒子を多く含み、焼失住居の可能性がある。なお、本遺構で貯蔵穴としたものは17cmの深さしかなく、実際に機能したかは疑問が残る。

48号住居址出土遺物（第88・89図）

土師器坏・埦形土器（1～7）

1～5は体部から頸部にかけては稜を有し、口頸部は外反し、底部は丸底を呈するという特徴において相似ている。6・7は大きめの平底の底部に木葉痕を残している。すべて床面上の出土である。

1は内面及び口頸部外面は横ナデ、外面は以下ヘラ削り痕を残す。⅔程の遺存度。

2は内面及び口頸部外面は横ナデ、外面は以下ヘラ削り痕を顕著に残す。⅓程の遺存度。

3は内面及び口頸部外面は横ナデ、外面は以下器面が荒れているために不明である。⅔程の遺存度。

4は1～3・5に比べると、口頸部がやや長く、頸部の稜が下に下がるようである。内面及び口頸部外面は横ナデ、外面は以下ナデられている。⅚程の遺存度。

5は内面及び口頸部外面は横ナデ、外面は以下ヘラ削り痕を残す。胎土には砂粒を多く含んでいる。ほぼ完形である。

6は口頸部横ナデにより、僅かに稜を有し、体部と区別できる。口頸部内外面横ナデ、外面は以下ナデられる。また、調整時についたと思われる指紋が観察される。内面はヘラナデが施される。口縁部を僅かに欠損する。

7は6よりもさらに扁平なもので、内面及び口頸部外面は横ナデ、外面は以下ヘラ削り痕が残る。⅓程の遺存度。

土師器鉢形土器（8）

平底の底部から丸味をもつ体部に至り、頸部への移行は稜を有し、口頸部は外反ぎみに立ち上がる。口頸部内外面横ナデ、外面は以下ヘラ削り痕を残す。内面はヘラナデが施される。貯蔵穴内からの出土で、⅜程の遺存度。

土師器甑形土器（9）

口縁部で最大径を測り、筒抜け状の孔を有する。口頸部内外面横ナデ、外面は以下ナデられるが、ヘラ削り痕を若干残す。内面は横方向のヘラナデ後、縦方向に細長い磨きが施される。床面上の出土で、ほぼ完形に近い。

土師器甕形土器（10～16）

10はやや窪みをもつ底部から卵形状の胴部に至り、口縁部は外湾する。最大径は胴部上半にある。口頸部内外面横ナデ、外面は以下ナデられる。内面はヘラナデが施される。床面上の出土で、口頸部付近を若干欠損する程度である。

11は10に比べ、頸部がすぼまり、口縁部の外湾も弱い。口頸部内外面横ナデ、外面は以下ナデられる。内面はヘラナデが施される。床面上の出土で、⅓程の遺存度。

12は底部を欠損する。薄手のもので、胴部上半で最大径を測り、口縁部は外湾する。口頸部内外面横ナデ、外面は以下ナデられるが、底部付近で若干ヘラ削り痕が残る。内面はヘラナデが施される。床面上の出土で、½程の遺存度。

13は12と同様、薄手で器形的にも相似ているが、胴部から頸部にかけての段差が大きく、全体にもろい感じがする。口頸部内外面横ナデ、外面は以下ナデられ、内面はヘラナデが施される。床面上の出土で、⅔程の遺存度。

14～16はいずれも、口頸部が外反し、最大径を胴部上半で測る長胴のものである。

14は口頸部内外面横ナデ、外面は以下ナデられ、内面はヘラナデが施される。床面上の出土で、½程の遺存度。

15は口縁部を欠損する。口頸部内外面横ナデ、外面は以下ナデられるが、ヘラ削り痕を若干残す。内面はヘラナデが施されるが、後に胴部下半を除き、スリップがかけられる。床面上の出土で⅔程の遺存度。

16は口頸部内外面横ナデ、外面は以下ナデられ、内面はヘラナデが施される。床面上の出土で、⅔程の遺存度。

土製品（17）

支柱である。細長い円筒形を呈し、中央には直径8㎜の孔が貫通している。

49号住居址（第90図）

〔位置〕（D－3）G。

〔住居構造〕全体的に上部は攪乱を受けている。（平面形）長方形。（規模）6.06×5.32m。（壁高）遺存状態が悪く、15cm前後を測る程度である。（壁溝）カマド部分を除いて全周するものと思われる。上幅20cm・下幅12cm・深さ10cm前後を測る。（床面）壁際を除いて硬く踏み固められている。（カマド）北壁ほぼ中央に位置し、方位はN－2°－E。長さ93cm・幅 135cm・壁への掘り込み40cmを測り、袖部はロームを馬蹄形状に隆起させ残し、天井部ともに灰褐色粘土を被覆させ構築している。掛け口には土製支脚がすえられていた。（柱穴）主柱穴4本で構成される。他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）カマド右側の北東コーナーに位置する。坑底は若干段差を有しているが、基本的には1つであろう。 116×40cmの長方形を呈し、深さ30cm前後を測る。（覆土）ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕貯蔵穴付近から多く出土した。

〔時期〕鬼高式期。

49号住居址出土遺物（第91図）

土師器坏形土器（1～7）

全体的に小型のものが多く、口径は1～5・7が10cm前後、6が13cm程である。

1は扁平な底部から開き、頸部に稜をもち、口縁部は途中でややくびれ立ち上がる。口唇部内面には沈線が巡る。口頸部内外面は横ナデ、以下ナデられる。内面及び口頸部外面は赤彩される。覆土中の出土で、⅔程の遺存度。

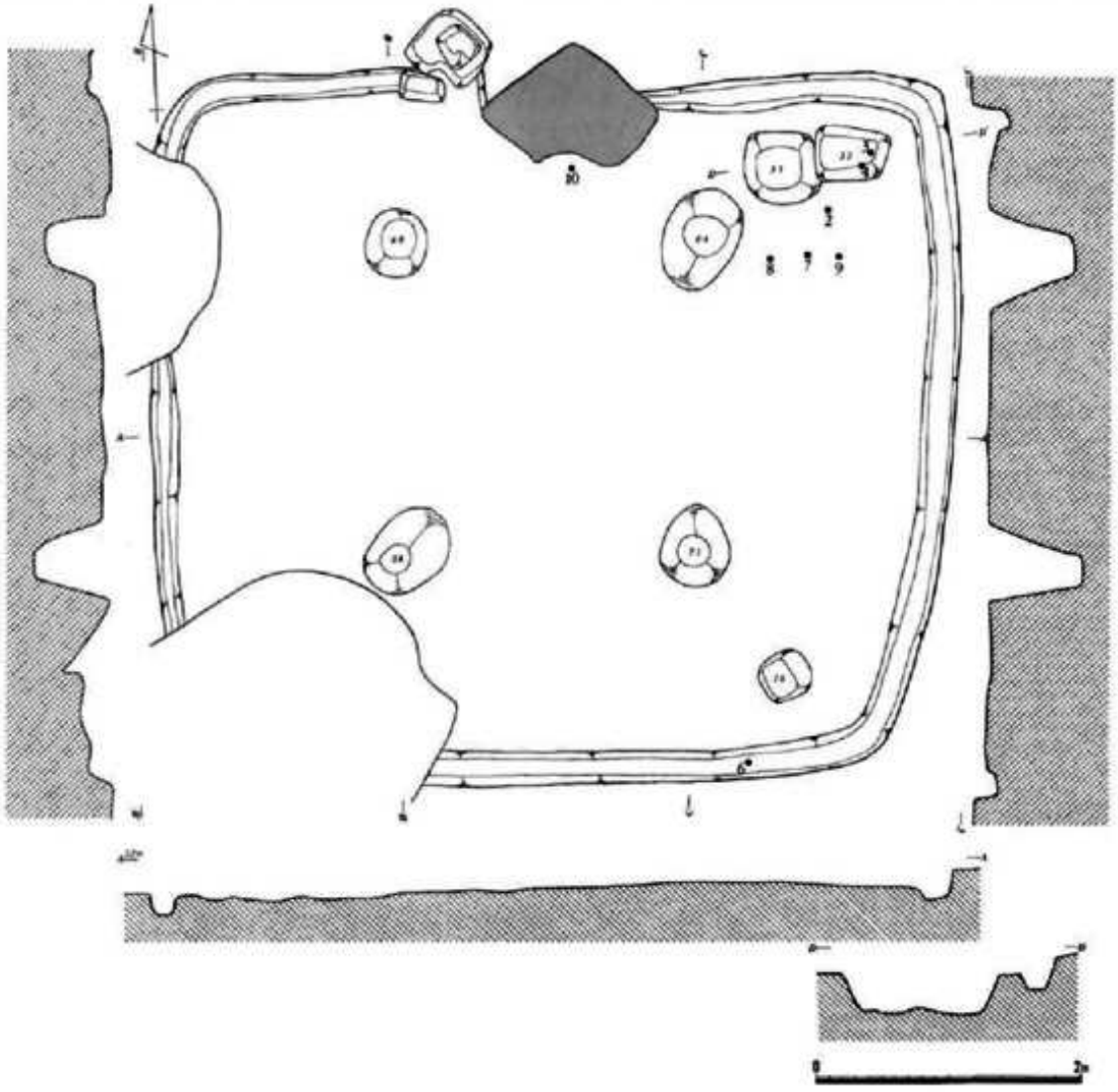
2は1に比べ底部に丸味をもつ。口唇部内面には沈線が巡る。口頸部内外面は横ナデ、以下ナデられるが、外面にはヘラ削り痕を残す。内面及び口頸部外面は赤彩される。貯蔵穴南側の床面上の出土で、口頸部を僅かに欠損する。

3は頸部に稜をもち、口頸部は直線的に立ち上がる。外面口頸部は横ナデ、それ以下はヘラ削りされる。内面は横ナデされる。貯蔵穴上層からの出土で、口頸部を僅かに欠く。

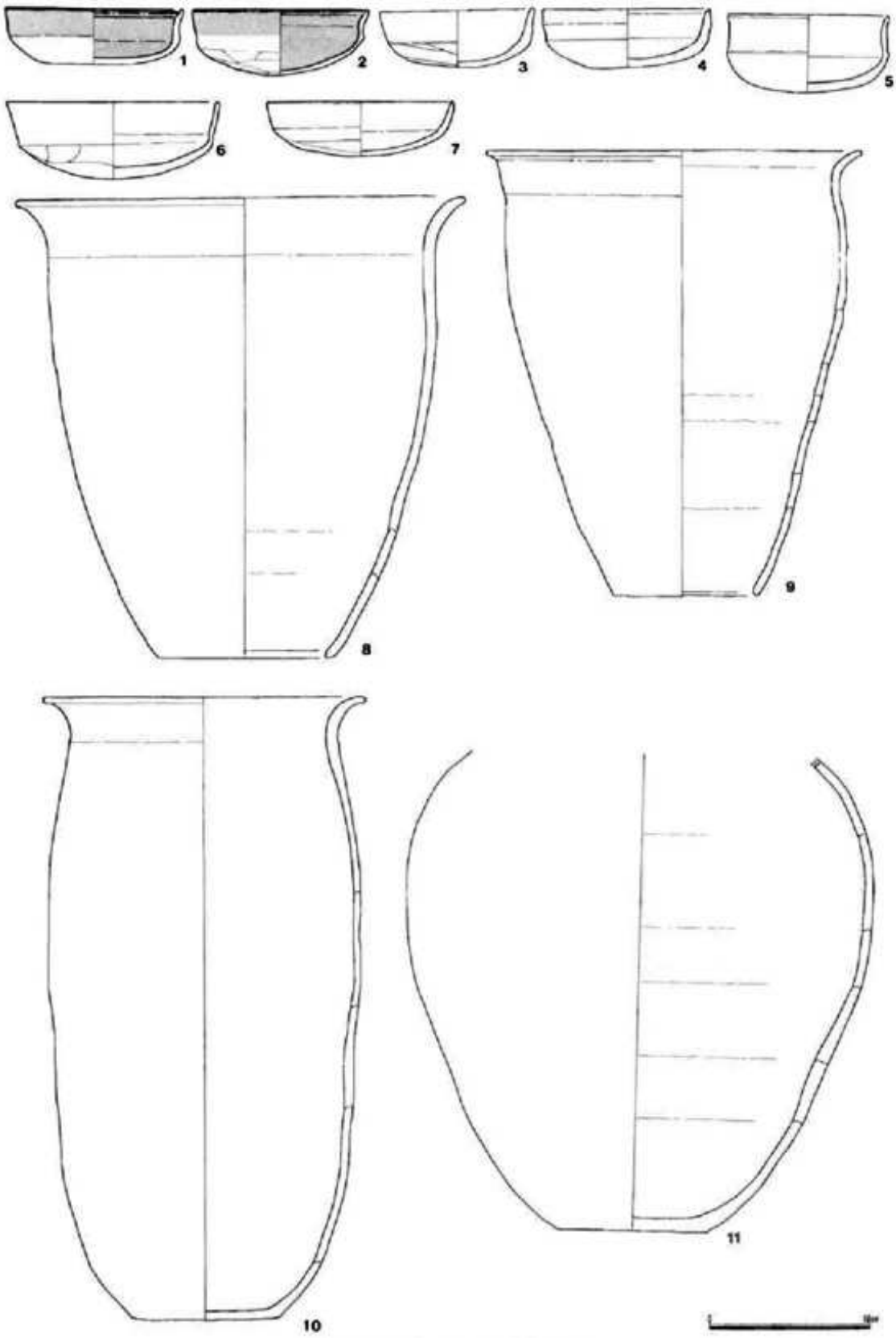
4は頸部に稜をもち、口頸部は途中やや膨らみをもって直立する。外面口頸部は横ナデ、以下ヘラ削りされる。内面は横ナデされる。内面及び口頸部外面は黒色を呈し、黒彩土器の可能性がある。貯蔵穴上層からの出土で、完形である。

5は頸部に段をもち、口頸部は1度直立してから僅かに外反する。口頸部外面は横ナデ、以下ナデられる。内面は横ナデされる。覆土中の出土で、¼程の遺存度。

6は頸部に段をもち、口頸部は直線的に外傾する。外面口頸部は横ナデ、以下ヘラ削り痕を残す。内面は横ナデされる。全面黒く煤けている。南東コーナ付近の壁溝上層からの出土で、⅔程の遺存



第90図　49号住居址(1/60)



第91図　49号住居址出土遺物(¼)

度。

7は頸部に稜をもつが、内面においてはその移行がスムーズである。口頸部は僅かに外傾する。外面口頸部は横ナデ、以下ヘラ削り痕を若干残す。内面は横ナデされる。貯蔵穴南側の床面上の出土で、ほぼ完形である。

土師器甑形土器（8・9）

8・9はともに口縁部で最大径を測り、筒抜け状の孔を有する。9は8に比べ、やや細身である。口頸部内外面ヨコナデ、外面は以下ナデられ、ヘラ削り痕を消している。内面は横方向のヘラナデ後、細長い磨きが放射状に施され、9にそれは顕著である。貯蔵穴南側の床面上の出土で、8は⅚、9は⅔の遺存度。

土師器甕形土器（10・11）

10は砲弾形を呈する長胴甕で、最大径は口縁部と胴部中位にもつ。口頸部内外面ヨコナデ、外面は以下ヘラ削り後ナデられているが、胎土に砂粒を多く含むために器面がゴツゴツした観をもつ。内面はヘラナデが施される。カマド前面に横転していたが、本来は掛け口に掛けられていた可能性が強い。½の遺存度。

11は平底の底部から卵形状の胴部に至り、口頸部以上を欠損する。外面はナデ、内面はヘラナデが施される。床面上の出土で¼程の遺存度。

50号住居址（第92図）

〔位置〕（E－4）G。

〔住居構造〕1・5号溝址に大部分が切られており、床硬化面の一部と貯蔵穴・柱穴1本のみしか確認できなかった。（柱穴）本住居址に伴うものは貯蔵穴の東側に検出される深さ44cmの1本のみである。住居址内の配置については不明である。（貯蔵穴）78×48cm、深さ35cmを測り、楕円形を呈する。位置については不明である。

〔遺物〕貯蔵穴内から一括して出土した。

〔時期〕鬼高式期。

50号住居址出土遺物（第93図）

土師器坏形土器（1）

丸底ぎみの底部から僅かに内湾しながら立ち上がり、頸部には鋭い段をもち、僅かに張らみながら直立ぎみに開く。口唇部内面には沈線が巡る。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいにナデが施され、特に外面は光沢をおびる。⅔の遺存度。

土師器甕形土器（2）

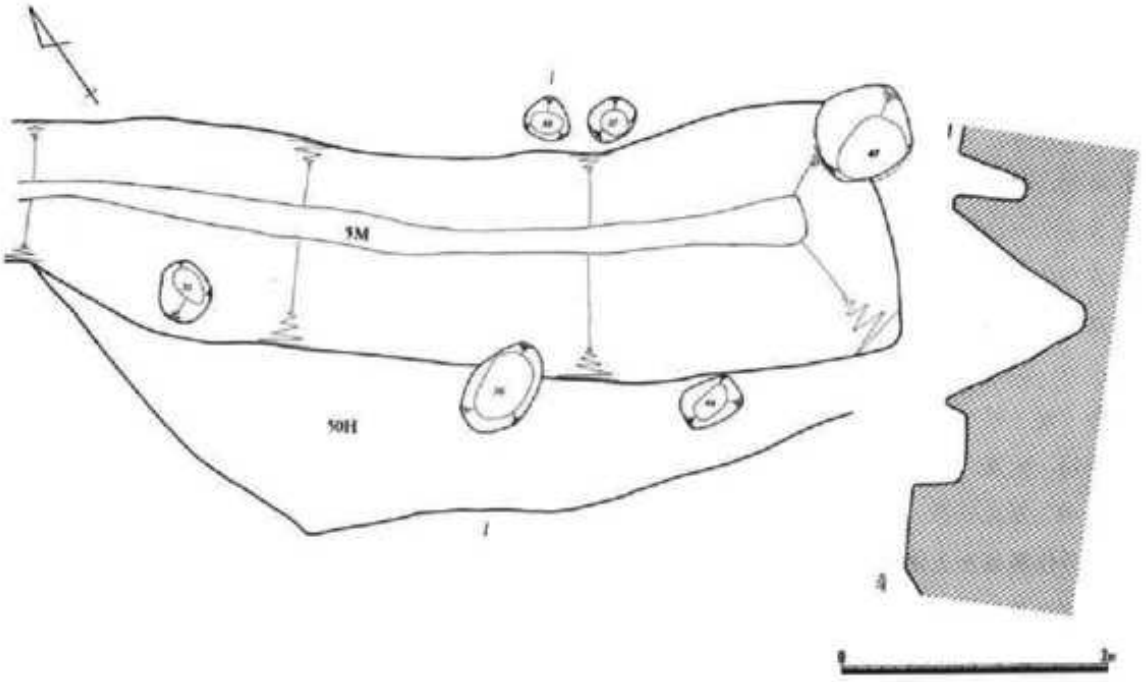
胴部中位に最大径をもち、やや長めの球胴状を呈する。外面はていねいに磨きが施され、胴部下半では光沢をおびる。内面はナデられ、胴部下位から底部にかけては炭化物が付着する。頸部以下⅚程度の遺存度。

土師器甑形土器（3）

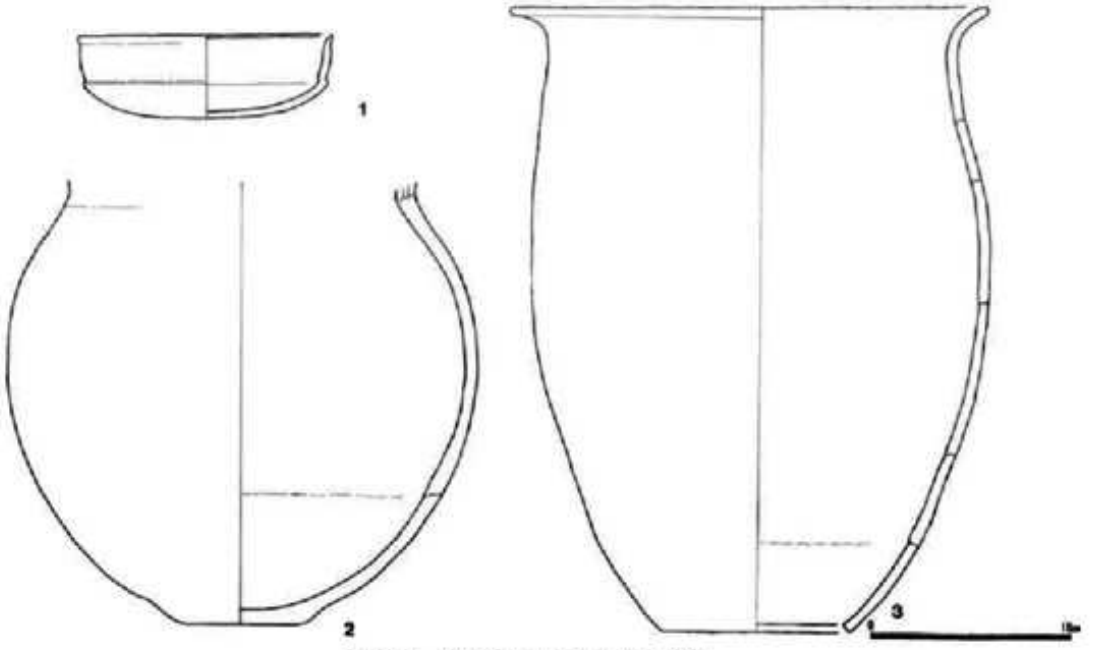
筒抜けの底部から僅かに内湾しながら立ち上がり、胴部最大径を中位よりやや上にもち、頸部で

ややすぼみ、口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデされる。胴部外面はヘラナデ、内面はナデられる。¾程の遺存度である。

以上の土器は、いずれも貯蔵穴中の出土である。



第92図　50号住居址(1/60)



第93図　50号住居址出土遺物(1/4)

51号住居址（第87図）

〔位置〕（F－6）G。

〔住居構造〕48号住居址、1号溝址に切られる。（平面形）正方形と思われる。（規模）不明×4.74m。（壁高）36～45cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）カマド部分を除いて全周するものと思われる。上幅20cm・下幅10cm・深さ10cm前後を測る。（床面）壁際を除いて硬く踏み固められた面を残す。（カマド）東壁中央からやや北に偏って位置し、方位はN－75°－E。長さ 110cm・幅70cmを測り、袖部はロームを馬蹄形状に隆起させて残し、天井部ともに灰褐色粘土を被覆させ構築している。（柱穴）南東コーナーに1本が検出された。おそらく主柱穴4本で構成されると思われるが、48号住居址、1号溝址の構築のさいに破壊されたのであろう。（貯蔵穴）カマド左側の北東コーナーに位置する。 116×68cmの長方形を呈し、深さ56cmを測る。（覆土）48号住居址に切られるため詳細は不明であるが、自然堆積状態を呈するものと思われる。8層－ローム粒子を含む暗茶褐色土。9層－ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。10層－ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。11層－ローム粒子を多く含む黄褐色土。12層－ローム粒子・焼土粒子を含む茶褐色土。13層－ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。

〔遺物〕貯蔵穴内及び付近から多く出土した。

〔時期〕鬼高式期。

51号住居址出土遺物（第94図）

土師器坏・椀形土器（1・2）

1は丸底の底部から内湾しながら立ち上がる椀状の土器。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。内面及び口頸部外面は赤彩される。覆土中の出土で、¼強の遺存度。

2は丸底ぎみの底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に明瞭な段を有し、口頸部は直線的に開く。口縁部内外面は横ナデ、それ以下はていねいに磨きが施され、外面は光沢をおびる。内面及び口頸部外面は赤彩される。貯蔵穴中の出土で、⅓程の遺存度。

土師器鉢形土器（3・4）

3は丸底の底部をもち、体部は下半に僅かなくびれをもってから椀状に立ち上がる。頸部には稜があり、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、以下はナデ後細長い磨きが施される。外面は光沢をおびる。貯蔵穴中の出土で、⅔程の遺存度。

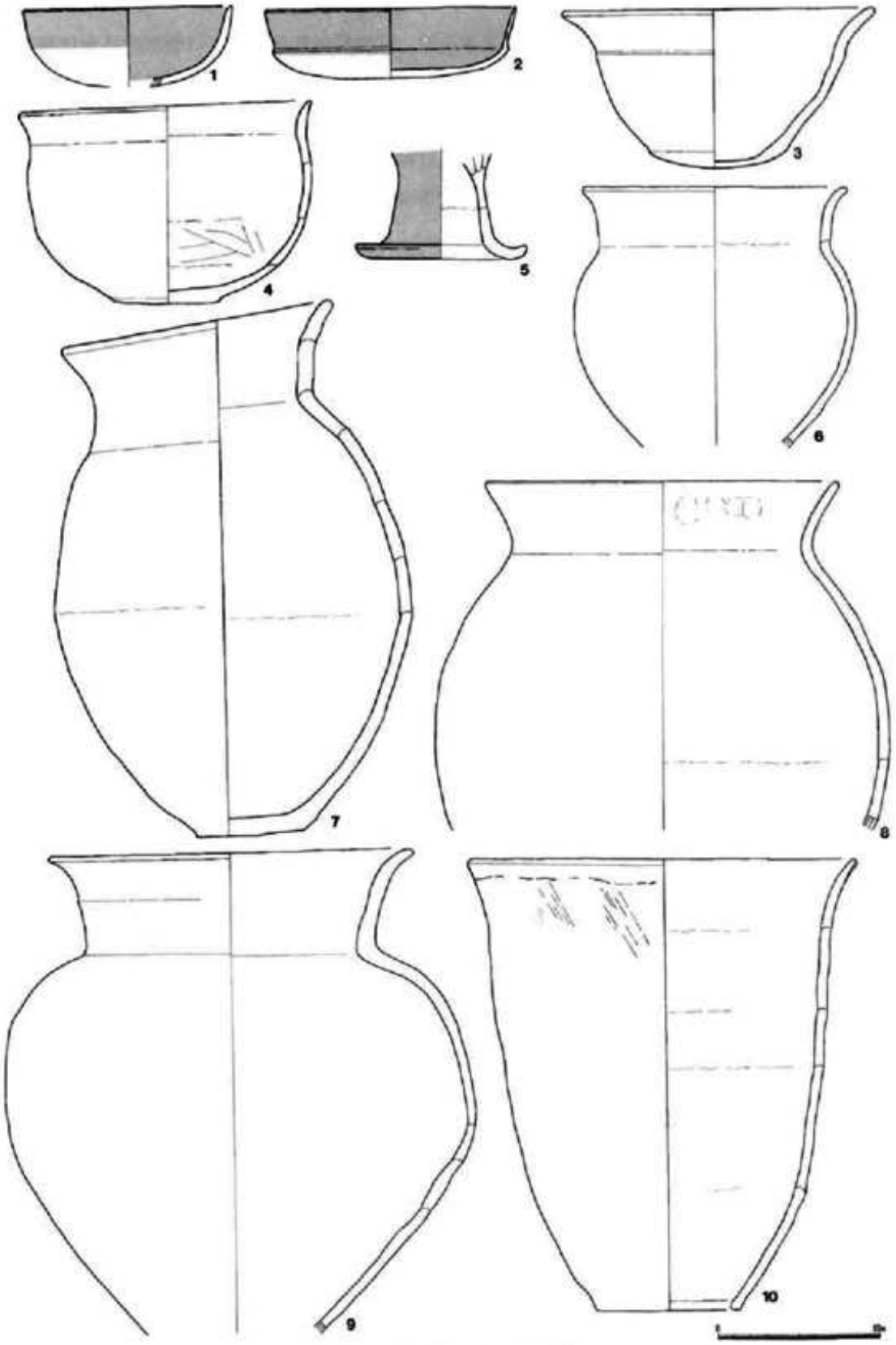
4は体部が椀状を呈し、口頸部は僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデされる。体部外面はていねいに磨きが施され、下半は光沢をおびる。内面はヘラナデされる。貯蔵穴中の出土で、ほぼ完形。

土師器高坏形土器（5）

脚台部のみ遺存。脚柱部は短めで僅かに開き、裾部は水平にのびる。内外面ともヘラナデされ、外面は赤彩される。カマド左横の床面上出土。

土師器甕形土器（6～9）

6は小型甕。ほぼ胴部中位に最大径をもち、ゆるやかに頸部に移行する。頸部は直立ぎみに立ち、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。カマド左横の床面上の出



第94図　51号住居址出土遺物(1/4)

土で、胴部下半以上⅔程の遺存度。

7は胴部中位に最大径をもち、頸部は直立ぎみで、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はていねいにヘラナデされ、外面は磨きが施される。外面には部分的に煤が付着する。貯蔵穴中の出土で、胴部を若干欠損する。

8は胴部中位に最大径をもち球胴状を呈する。口頸部は直線的に開く。口頸部内外面は横ナデされるが、内面には部分的に指頭痕を残す。胴部内外面はヘラナデされる。貯蔵穴中の出土で、胴部中位以上½程の遺存度。

9は最大径をもつ胴部上位から底部にむかって急激にすぼまる。肩部は張りぎみである。頸部は直立ぎみに開き、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はていねいにナデが施され、外面は磨かれる。貯蔵穴中の出土で、胴部下半以上⅔程の遺存度。

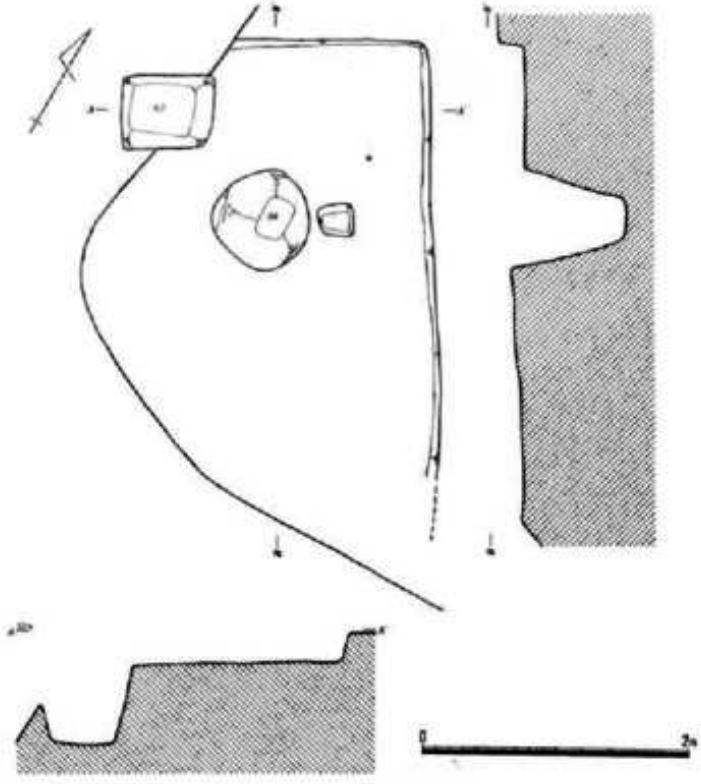
土師器甑形土器（10）

筒抜け状の底部から僅かに内湾しながら立ち上がり、胴部上半は直線的に開く。頸部はくびれぎみで、口縁部は複合口縁状を呈する。口頸部内外面は横ナデ、以下は内外面磨きが施されるがハケ目痕が若干みられる。貯蔵穴中の出土で、ほぼ完形。

53号住居址（第95図）

〔位置〕（F－5）G。

〔住居構造〕大部分が1号溝址に切られているため詳細不明である。（壁高）北東コーナー付近を



第95図　53号住居址（1/60）

残す程度である。20cm前後を測る。（壁溝）確認できなかった。（床面）1号溝址との重複部分及び壁際を除いて、硬く踏み固められた面を残す。（柱穴）北東コーナーの深さ84cmを測る1本が検出されるのみである。おそらく主柱穴4本で構成されるうちの1本と思われる。（貯蔵穴）北東コーナーからやや西に偏って位置すると思われる。68×56cm、深さ63cmを測り、長方形を呈する。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕貯蔵穴付近から出土した。

〔時期〕鬼高式期。

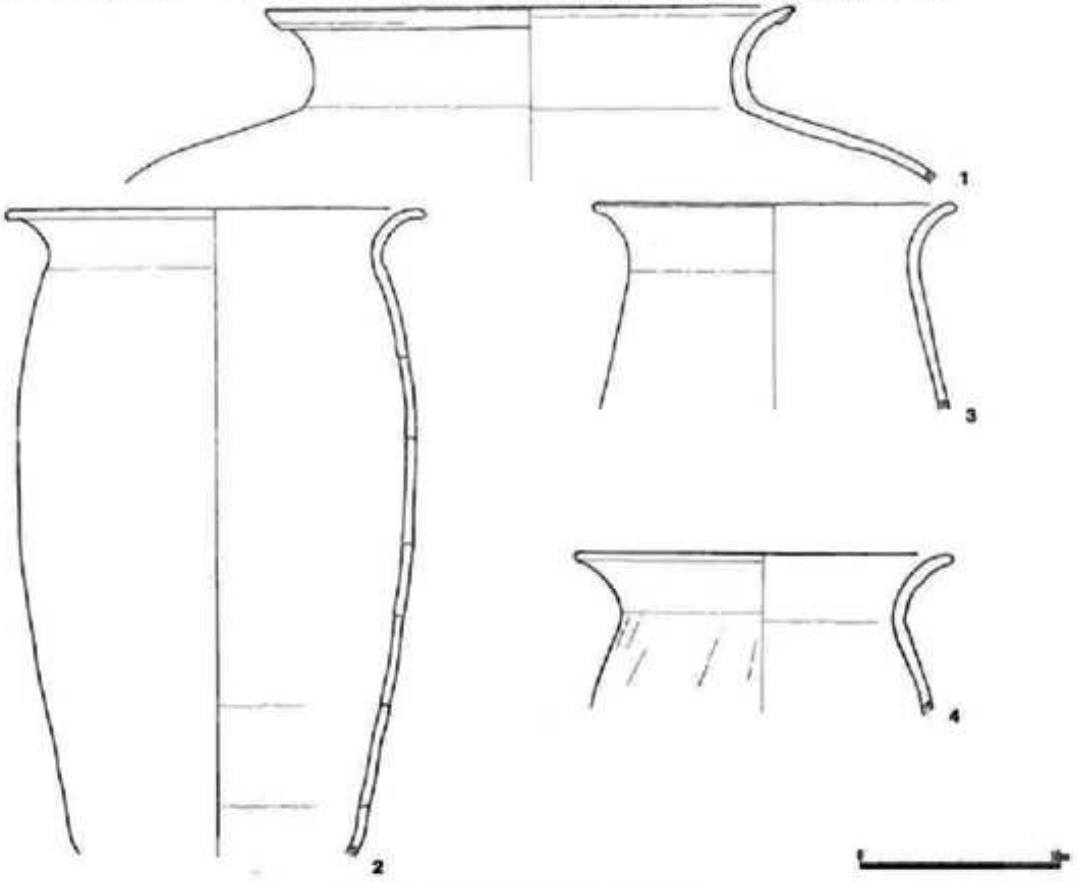
53号住居址出土遺物（第96図）

土師器甕形土器（1～4）

1は肩部が強く張り、口縁部は大きく外湾する。口頸部は複合口縁状を呈し、内面には僅かな窪みが巡る。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。覆土中の出土で、肩部以上⅔程の遺存度。

2は胴部上半に張らみをもち、頸部には稜がみられる。口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。胴部外面には部分的に煤が付着する。床面上の出土で、胴部下半以下を欠く。

3は胴部上半が直線的にすぼまり、頸部に僅かな稜をもち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。覆土中の出土で、胴部上半以上⅔程が遺存する。



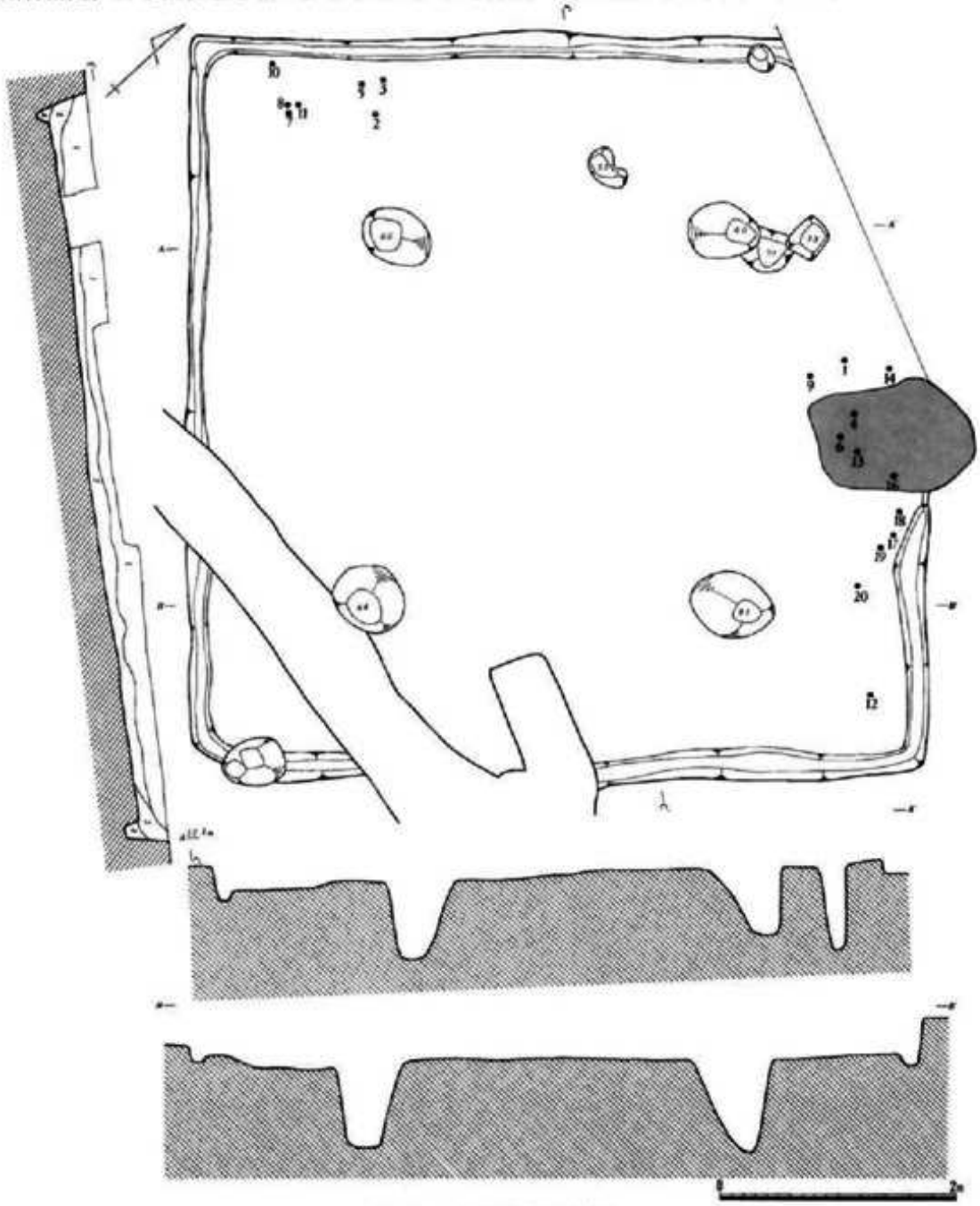
第96図　53号住居址出土遺物（¼）

4は胴部上半が内湾しながらすぼまり、口頸部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面には部分的にヘラ削り痕を残す。覆土中の出土で、胴部上半以上¼程の遺存度。

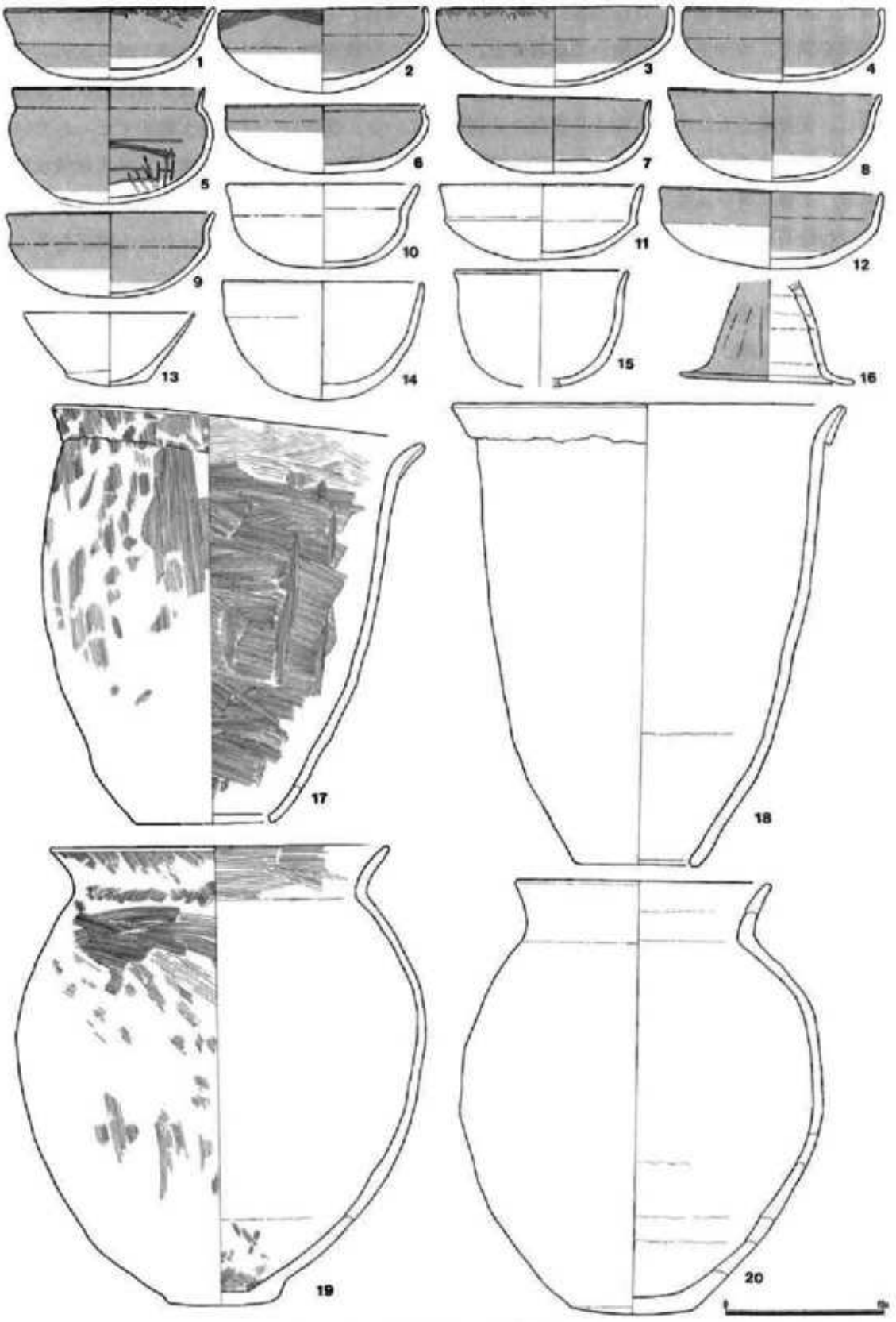
54号住居址（第97図）

〔位置〕（E－5）G。

〔住居構造〕57号住居址を切り、4号溝址に切られる。（平面形）正方形。（規模）6.38×6.2m。



第97図　54号住居址（1/60）



第98図　54号住居址出土遺物1（¼）

（壁高）20～35cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）上幅16～20cm・下幅6～10cm・深さ10cm前後を測り、カマド部分を除いて全周する。（床面）壁際を除いてほぼ全面硬く踏み固められている。（カマド）北東壁ほぼ中央に位置し、方位はN－43°－E。袖部はロームを馬蹄形状に隆起させ残し、天井部ともに灰褐色粘土を被覆させ構築している。掛け口には土製支脚がすえられていた。（柱穴）主柱穴4本で構成され、深さ60～81cmを測り、四隅に配される。（覆土）自然堆積状態を呈する。1層－ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。2層－ローム粒子を多く、焼土粒子を部分的に多く含む暗茶褐色土。3層－ローム小ブロックを僅かに含む暗褐色土。4層－ローム粒子を多く含む暗黄褐色土。

〔遺物〕カマド付近及び西コーナーから多く出土した。

〔時期〕鬼高式期。

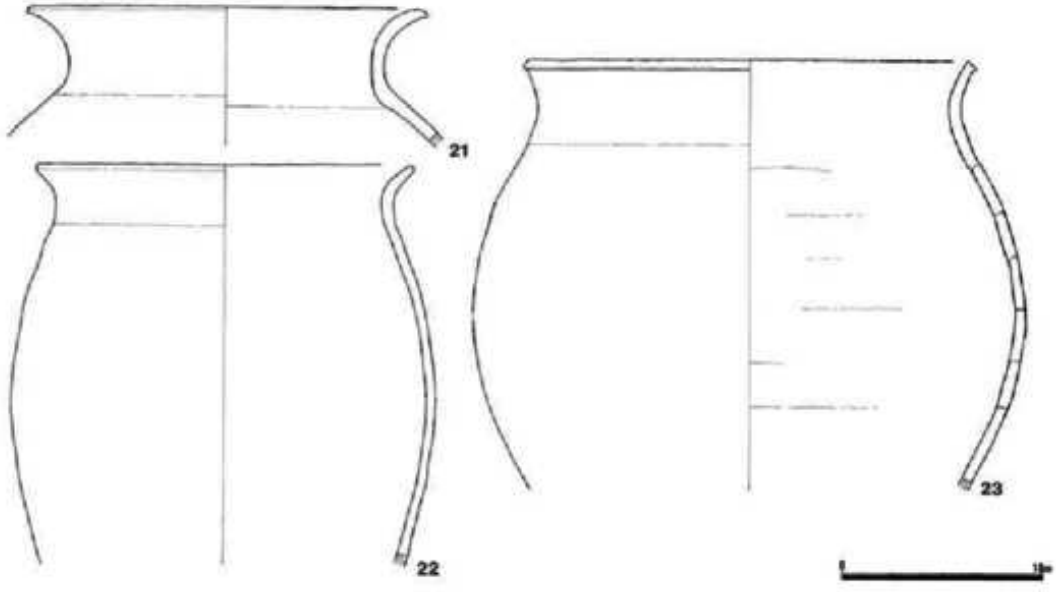
54号住居址出土遺物（第98・99図、第108図3）

土師器坏・埦形土器（1～15）

1は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に僅かな稜をもち、口縁部はやや内湾ぎみに開く。口頸部内外面は横ナデされるが、内面には部分的にハケ目を残す。体部及び底部外面はていねいに磨きが施され光沢をおびる。内面はナデられる。底部内外面を除いて赤彩される。カマド左横の床面上出土で、完形。

2は口頸部が内湾する埦状の土器。口頸部内外面は横ナデされるが、外面には部分的にハケ目を残す。体部及び底部外面はていねいに磨きが施され光沢をおびる。内面はナデられる。口頸部外面は赤彩される。内面は底部を除き赤彩される。西コーナー付近の床面上出土で、完形。

3は埦状の土器で2より大型。口頸部内外面は横ナデされるが、外面には部分的にハケ目を残す。体部及び底部外面はていねいに磨きが施される。内面はナデられる。底部内外面を除き赤彩される。西コーナー付近の床面上出土で、完形。



第99図　54号住居址出土遺物2（¼）

4は口頸部が僅かに内湾する埦状の土器。口頸部内外面は横ナデされる。体部及び底部外面はていねいに磨きが施されるが一部にヘラ削り痕を残す。内面はナデられる。底部内外面を除いて赤彩される。カマド中の出土で、口頸部を若干欠く。

5は深めの土器。体部は埦状を呈し、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は直線的に開く。口頸部内外面は横ナデされる。体部及び底部外面はていねいに磨きが施される。内面はナデられるが、暗文風の磨きが加えられる。底部内外面を除き赤彩される。西コーナー付近の床面上出土で、完形。

6は体部上半が張らみ、口縁部が短く外反する。口頸部内外面は横ナデされる。体部及び底部外面はていねいに磨きが施され光沢をおびる。内面はナデられる。内面及び体部上半以上の外面は赤彩される。カマド中からの出土で、ほぼ完形。

7は平底ぎみの底部から内湾して立ち上がり、頸部に稜をもち、口頸部は僅かに外反しながら直立ぎみに立つ。口頸部内外面は横ナデされる。体部・底部外面はていねいに磨きが施され光沢をおびる。内面はナデられる。底部内外面を除き赤彩される。西コーナー付近の床面上出土で、ほぼ完形。

8は深めの土器。埦状の体部から頸部で僅かにくびれ、口縁部は直線的に開く。口頸部内外面は横ナデされる。体部及び底部外面はていねいに磨きが施される。内面はナデられる。外面は体部中位以上、内面は底部を除いて赤彩される。西コーナー付近の床面上出土で、完形。

9は体部上半に張らみをもち、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデされる。体部・底部外面はていねいに磨きが施され光沢をおびる。内面はナデられる。外面は体部中位以上、内面は底部を除き赤彩される。カマド左横の床面上出土で、完形。

10は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、口頸部は外傾する。口頸部内外面は横ナデされる。体部・底部外面はていねいに磨きが施され光沢をおびる。内面はナデられる。西コーナー付近の床面上の出土で、完形。

11は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に明瞭な段をもち、口頸部は僅かに外傾しながら開く。口唇部内面には1条の沈線が巡る。内面及び口頸部外面は横ナデされる。体部及び底部外面はヘラナデされる。西コーナー付近の床面上出土で、ほぼ完形。

12は内湾する体部から頸部に僅かな稜をもち、口縁部は直線的に若干開く。口頸部内外面は横ナデされる。体部及び底部外面はていねいに磨きが施され光沢をおびる。内面はナデられる。内外面口頸部付近は赤彩される。東コーナー付近の床面上出土で、口頸部の½程を欠く。

13は器肉が薄い土器である。丸底風の底部から直線的に外傾する。内面はていねいにヘラナデされ、外面は縦方向に細密な磨きが施され光沢をおびる。カマド中の出土で、体部上半以上¾を欠損する。

14・15は丸底の埦状の土器で、15の口縁部は僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はていねいにヘラナデが施され、外面は磨かれる。14はカマド左横の床面上出土で、口頸部を¼程欠損する。15は覆土中の出土で、¼の遺存度。

土師器高坏形土器（16）

脚台部のみ遺存する。脚柱部は僅かに内湾しながら開き、裾部は水平に延びる。脚柱部内外面は

ヘラナデされるが内面には輪積み痕を残す。裾部は横ナデされる。外面は赤彩される。カマド中の出土。

土師器甑形土器（17・18）

17は筒抜け状の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は複合口縁状を呈し外反する。外面は全面ハケ目調整がされるが、胴部下半はていねいに磨きが施され光沢をおびる。内面もハケ目調整されるが、口頸部は横ナデされる。カマド右横の床面上の出土で、胴部下半の一部を欠く。

18は筒抜け状の底部から僅かに内湾しながら開き、複合口縁状の口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、以下内外面ともていねいに磨きが施され光沢をおびる。カマド右横の床面上出土で、口頸部の½を欠く。

土師器甕形土器（19～23）

19は丸底ぎみの底部をもつ。胴部は最大径を中位より僅か上にもち卵形状を呈する。口頸部は外反する。口頸部外面は横ナデされるがハケ目を残す。胴部外面はハケ目調整後ヘラナデされるが、特に下半は光沢をおびる。内面はヘラナデされるが、底部付近にはハケ目を残す。カマド右横の床面上出土で、口頸部の½を欠損する。

20は丸底状の底部をもつ。最大径は胴部中位にあり、口頸部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、以下外面はていねいに磨き、内面はヘラナデが施される。カマド右横の床面上出土で、ほぼ完形。

21は肩部が張り、頸部が直立ぎみに立ち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられる。覆土中の出土で、肩部以上¼強の遺存度。

22は胴部がやや長めで、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデが施される。覆土中の出土で、胴部下半以上⅓程の遺存度。

23は胴部中位に最大径をもち、口縁部は外反し、口唇上には面取りが施される。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデが施される。覆土中の出土で、胴部下半以上⅓の遺存度。

石製品（第108図の３）

紡錘車である。断面は台形を呈し、１孔を有する。側面には加工痕が細長く残るが、おそらく金属器によるものであろう。蛇紋岩製。

56号住居址（第100図）

〔位置〕（Ｅ－６）Ｇ。

〔住居構造〕58号住居址を切り、55・59号住居址、４号溝址に切られる。（平面形）正方形。（規模）5.42×5.34ｍ。（壁高）35cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）上幅18cm・下幅10cm前後・深さ14～24cmを測り、カマド部分を除いて全周する。（床面）壁際を除いてほぼ全面硬く踏み固められている。（カマド）北壁中央にあったようだが、55号住居址により破壊されたらしい。（柱穴）主柱穴４本で構成される。深さ48～62cmを測り、四隅に配される。（貯蔵穴）北東コーナーに位置する。62×48cmの長方形を呈し、深さ52cmを測る。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕カマド・貯蔵穴付近から多く出土した。

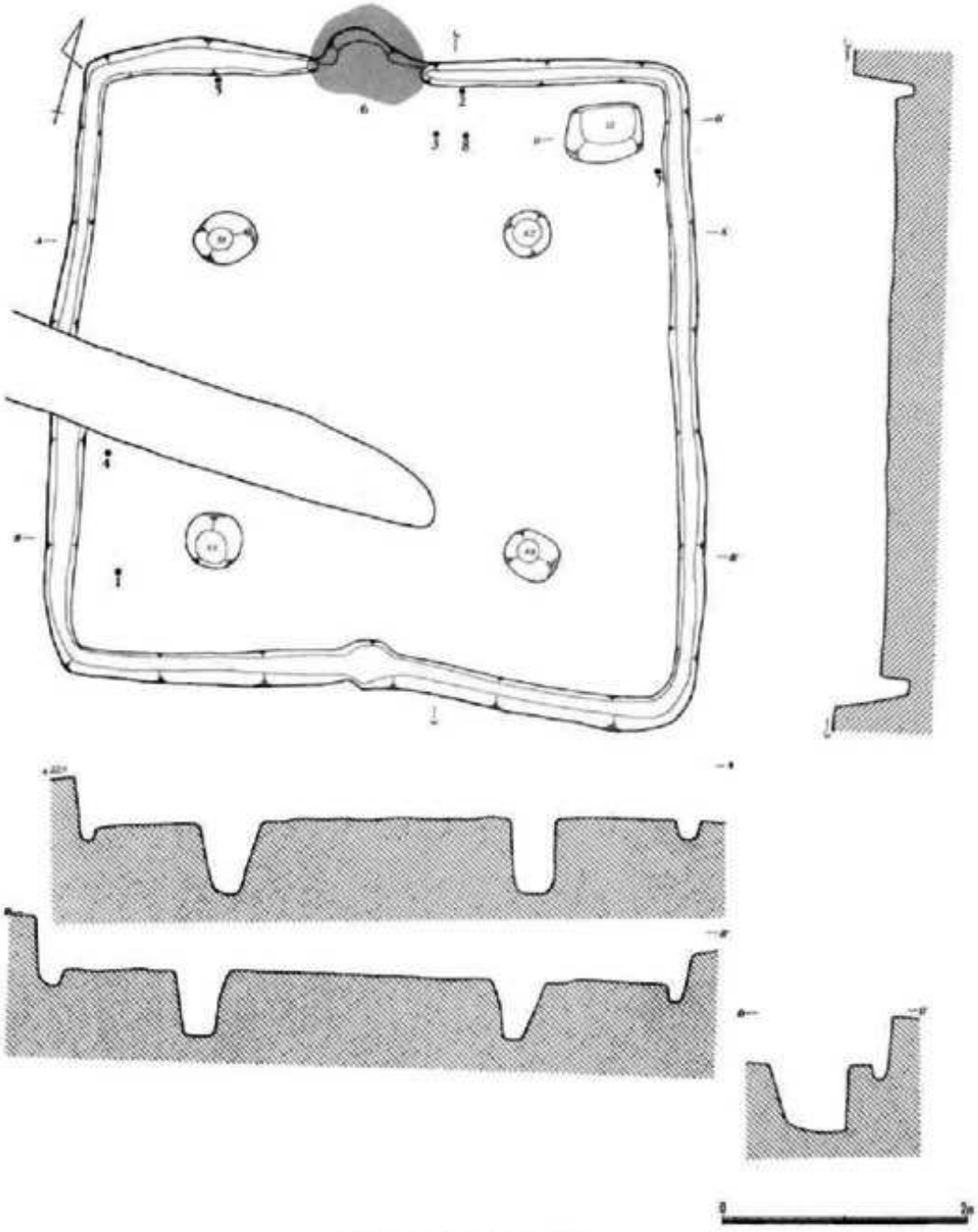
〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕本住居址覆土中に貼床が認められたために、これを55号住居址としたが、詳細は不明である。

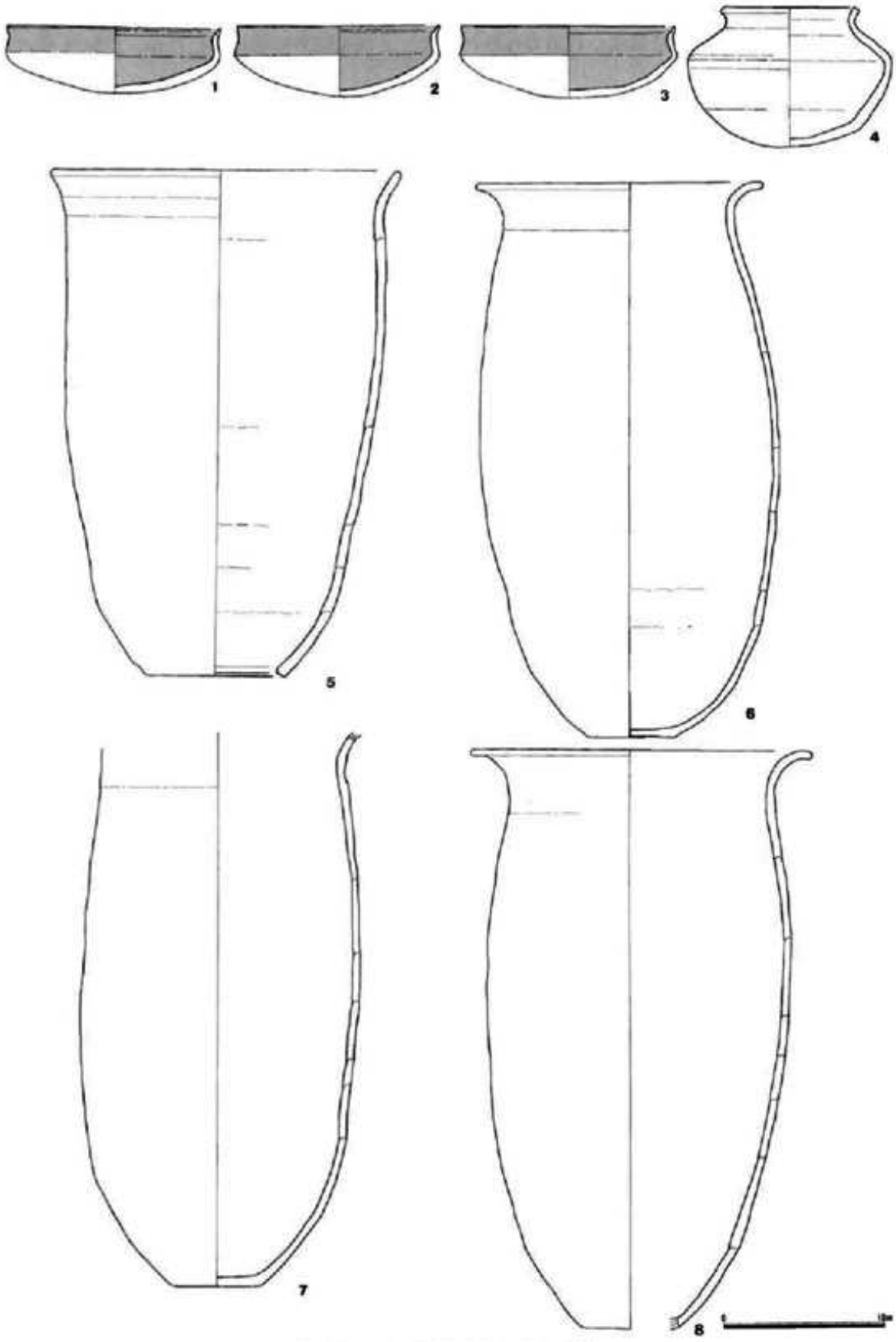
56号住居址出土遺物（第101図）

土師器坏形土器（1～3）

相似た器形の土器である。丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部で屈曲し直立ぎみに立ち、口縁部は外反する。口唇部内面には沈線が巡る。口頸部内外面は横ナデされる。体部及び底部



第100図　56号住居址(1/60)



第101図　56号住居址出土遺物(¼)

外面はていねいに磨きが施され光沢をおびる。内面はナデられる。内面及び口頸部外面は赤彩される。いずれも完形で、1は南西コーナー付近、2・3はカマド右横の床面上の出土。

須恵器壺形土器（4）

短頸壺である。丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、最大径をもつ体部上位に至る。肩部は張り、口頸部は短く外反する。内外面とも横ナデされる。外面には部分的に自然釉がかかる。南西コーナーに近い西壁下の床面上出土で、完形である。

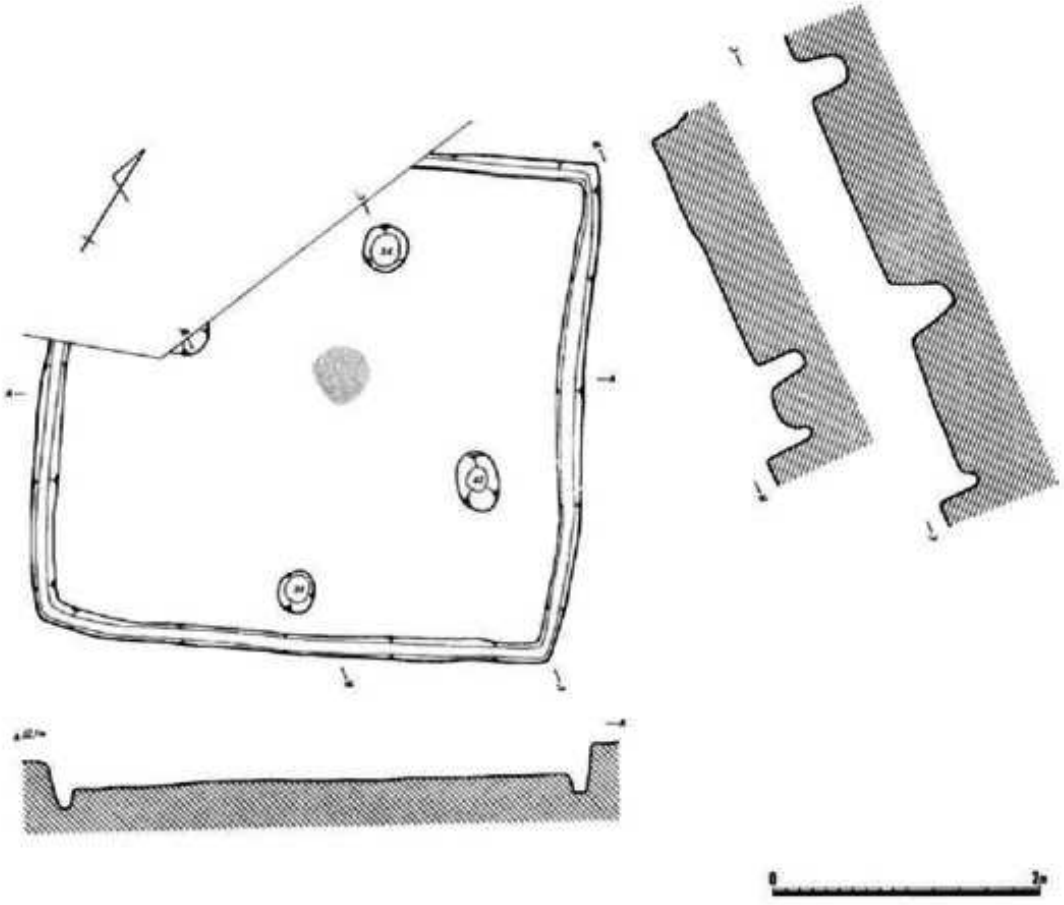
土師器甑形土器（5）

筒抜け状の底部から僅かに内湾しながら立ち上がり、胴部下位以上はほぼ直線的に開く。口頸部は僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされる。カマド左横の床面上の出土で、ほぼ完形。

土師器甕形土器（6～8）

6は胴部が最大径を中位にもちやや膨らむ。口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はていねいにヘラナデされ、特に外面胴部下半は光沢をおびる。カマド前面の床面上の出土で、ほぼ完形。

7は胴部下位からほぼ垂直に立ち上がり、頸部は僅かな稜をもって外反する。頸部内外面は横ナ



第102図　57号住居址(1/60)

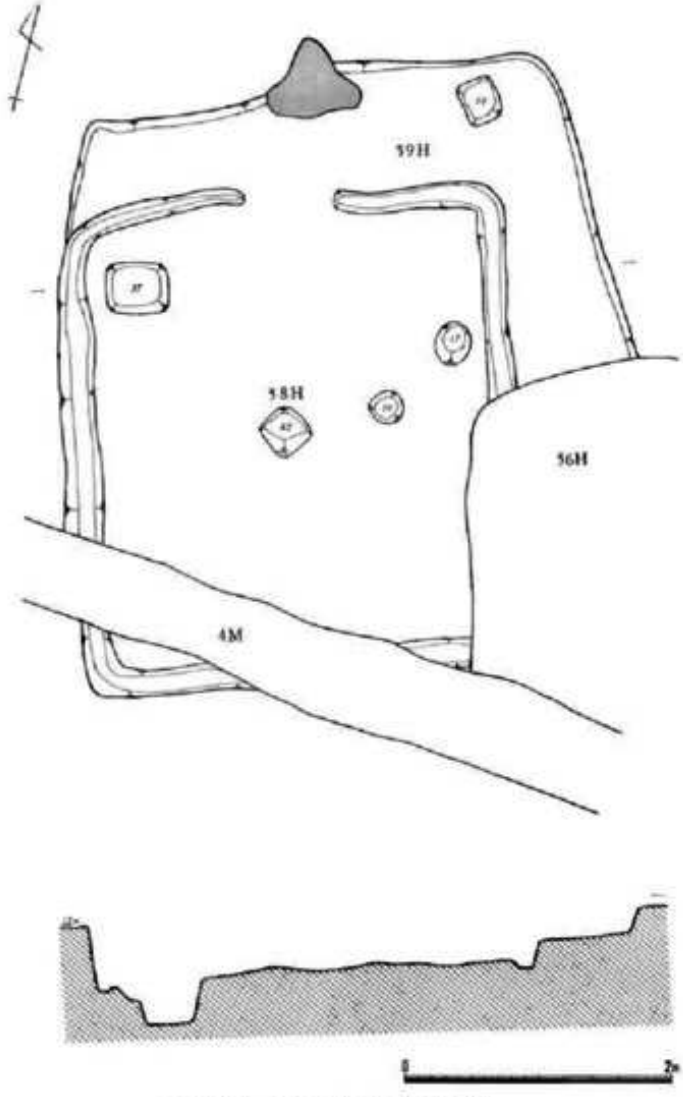
デ、それ以下はヘラナデされる。北東コーナーに近い東壁下の床面上出土で、口縁部を欠く。

8は胴部最大径を中位にもち、底部にむかって徐々にすぼまる。頸部は僅かにくびれ、口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデ、以下ヘラナデされる。カマド右横の床面上出土で、底部と胴部の一部を欠く。

57号住居址（第102図）

〔位置〕（E－6）G。

〔住居構造〕54号住居址に切られる。（平面形）正方形。（規模）4.12×3.82m。（壁高）北西コーナー付近を攪乱により破壊されている。高さ25cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）全周するものと思われる。上幅15cm・下幅10cm・深さ14cm前後を測る。（床面）壁際を除いて硬く踏み固められている。（炉）長軸中央からやや北に偏って位置する。床面を掘り込んだ形跡はないが、径40cm前後のほぼ円形に床面がよく焼けている状態である。（柱穴）4本のピットが検出され



第103図　58・59号住居址（1/40）

たが、住居とピットの軸が90度交差した状態にある。このピットが主柱穴ならば特異な構成といえよう。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。実測できるものはない。

〔時期〕鬼高式期。

58号住居址（第103図）

〔位置〕（E－6）G。

〔住居構造〕56・59号住居址、4号溝址に切られる。（平面形）長方形。（規模）3.76×3.42m。（壁高）40cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）北壁中央を除いて全周する。上幅16cm・下幅10cm・深さ8cm前後を測る。（床面）壁際を除いてほぼ全面硬く踏み固められている。（カマド）壁溝のとぎれる北壁中央にあったと思われる。59号住居址に破壊されたのであろう。（柱穴）検出されなかった。発見されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）北西コーナーに位置する。48×38cmの隅丸長方形を呈し、深さ37cmを測る。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

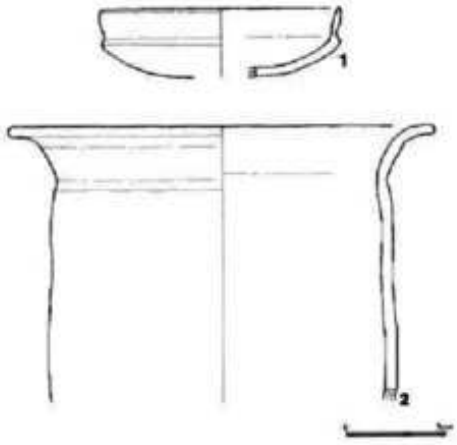
〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕鬼高式期。

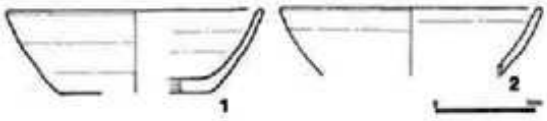
58号住居址出土遺物（第104図）

土師器坏形土器（1）

丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に明瞭な段をもち、口頸部は僅かに張らみながら



第104図　58号住居址出土遺物（1/6）



第105図　59号住居址出土遺物（1/4）

直線的に外反する。口頸部内外面は横ナデされる。体部外面はヘラナデ、内面はナデられる。貯蔵穴中からの出土で、⅚程が遺存する。

土師器甕形土器（2）

胴部はほぼ直線的に立ち上がり、頸部は稜をもってから直線的に開き、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデが施させる。覆土中の出土で、胴部中位以上½の遺存度。

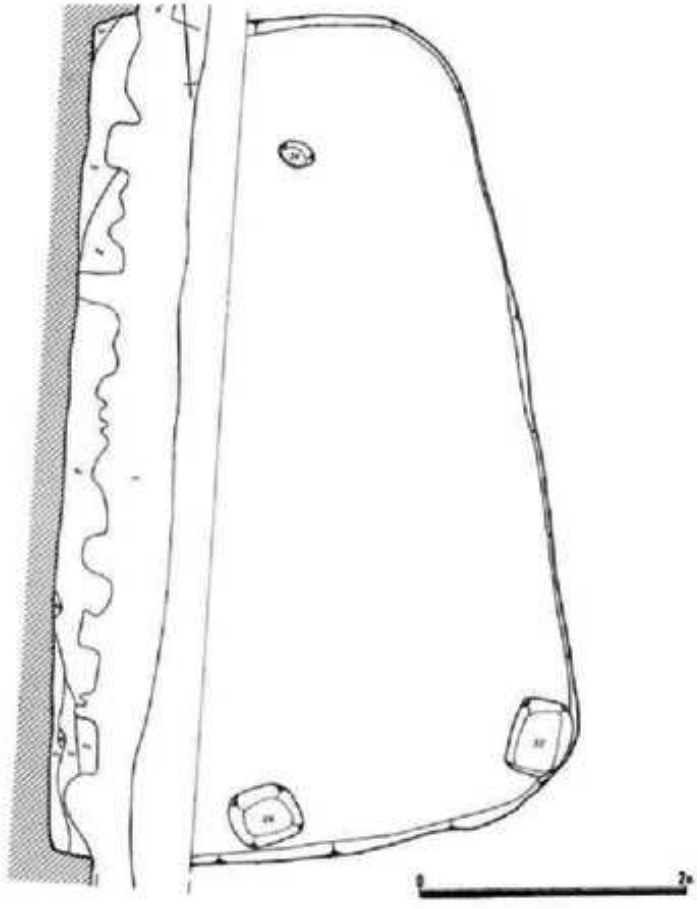
59号住居址（第103図）

〔位置〕（E－6）G。

〔住居構造〕56・58号住居址を切る。（平面形）不明。（規模）不明× 3.8m。（壁高）20cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（床面）壁際を除いて硬く踏み固められている。58号住居址との重複部分では貼床を施す。（カマド）北壁中央に位置し、方位はN－17°－W。長さ78cm・幅66cm・壁への掘り込み20cmを測り、天井部・袖部は灰褐色粘土で構築される。（柱穴）検出されなかった。発見されたピットは後世のものである。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から僅かに出土した。

〔時期〕国分式期。



第106図　60号住居址（1/60）

59号住居址出土遺物（第105図）

須恵器坏形土器（1・2）

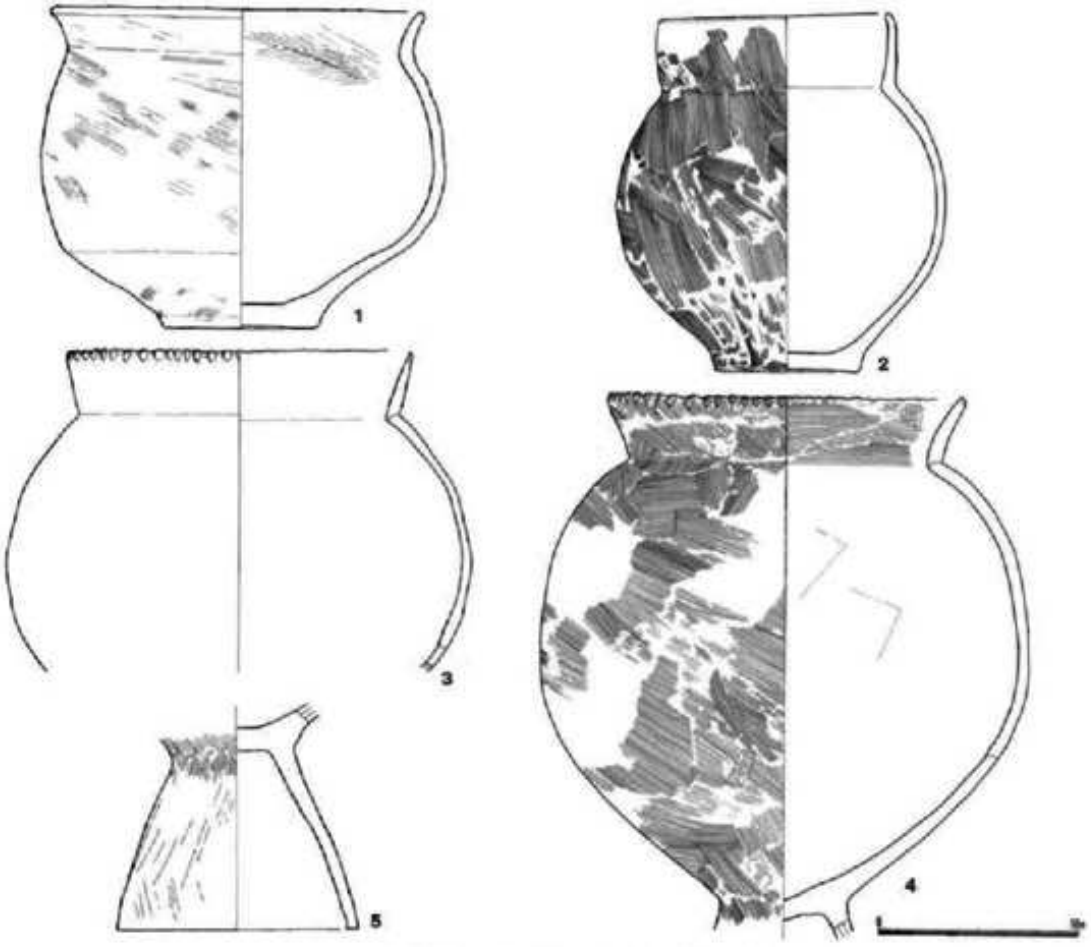
1は平底の底部から僅かに内湾しながら開く。底面は回転糸切り後、回転ヘラ削りで周縁を調整する。覆土中の出土で、⅓程の遺存度。

2は僅かに内湾しながら開く。胎土中には白色針状物質を含む。覆土中の出土で、体部下半以上½程の遺存度。

60号住居址（第106図）

〔位置〕（J－5）G。

〔住居構造〕住居の西側半分は調査区外にある。（平面形）隅丸方形と思われる。（規模）不明×6.3m。（壁高）30cm前後を測り、急斜に立ち上がる。(床面)遺存状態が良く、壁際を除いて硬化面を残す。（炉）検出されなかった。発掘区外にあるものと思われる。（柱穴）3本のピットが検出されたが、後世のものと思われる。（覆土）1層一耕作土。2層一ローム粒子・炭化物粒子・炭化材を多く含む黒褐色土。3層一ローム粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土。4層一ローム粒子・炭化物粒子を多く含む暗褐色土。



第107図　60号住居址出土遺物(¼)

〔遺物〕南東コーナー付近から多く出土した。

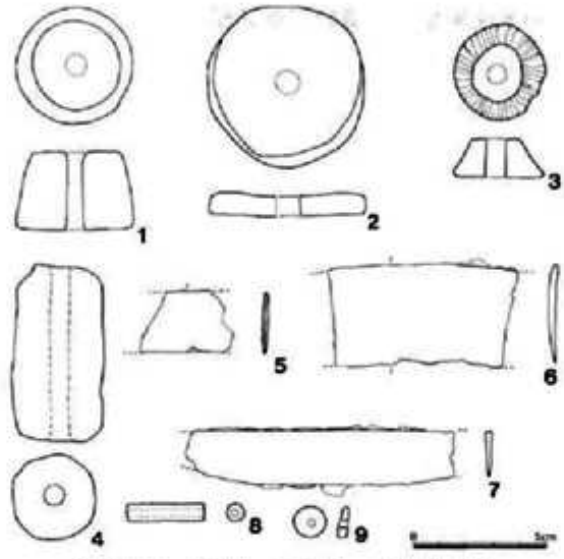
〔時期〕五領式期。

〔所見〕覆土中から炭化物粒子・炭化材が検出されることにより、焼失住居と考えられる。

60号住居址出土遺物（第107図）

土師器甕形土器（1・2）

1は底部から僅かに外湾しながら開き、胴部下半に最大径をもち、頸部はくびれ、口縁部は外反する。外面はていねいに磨かれ光沢をおびるが、部分的にハケ目を残す。内面はヘラナデされるが口頸部にはハケ目を残す。口頸部と胴部を部分的に欠く。



第108図　土製品・石製品・鉄製品(⅓)

2は胴部中位に最大径をもち球胴状を呈する。口頸部は僅かに内湾しながら直立ぎみに立つ。外面は全面にハケ目を残すが、口頸部は部分的にナデられる。内面はヘラナデされる。外面には部分的に煤が付着する。口頸部・胴部・底部の一部を欠損する。

台付甕形土器（3～5）

3は胴部が中位に最大径をもち扁球状を呈する。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は直線的に開く。口唇部外面には棒状工具による押捺が加えられる。内外面とも磨かれる。胴部下位以上⅓程の遺存度。

4は胴部中位に最大径をもち、脚台部に向かいすぼまる。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部外面にはハケ状工具による刻みが施される。外面は全面ハケ目痕を残すが、部分的に磨かれる。内面は口頸部にハケ目痕を残し、胴部はヘラナデされる。脚台部との接合部以上⅔程の遺存。

5は脚台部のみの遺存。直線的に開く。外面胴部との接合部にはハケ目痕を残す。脚台部内外面はナデが施されるが、下端は横ナデされる。

以上の土器は、すべて南東コーナー付近の床面上の出土である。

第2節　土　　坑

1号土坑（第109図）

〔位置〕（A－5）G。

〔構造〕10・20号住居址を切る。(平面形) 長方形。(規模) 330×125cm。(深さ) 60cm。(長軸方位) N－22°－E。坑底はほぼ平坦であるが、北側部と南側部では10cm程の段差を生じている。又、横断面で見た場合、部分的にいくぶん中央がふくらんでいる所がある。(覆土) 1層は貝層でシジミが堆積する。2層は炭化物・貝片を含む暗褐色土。3層はローム粒子・ロームブロックを含む褐色土。4層はローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土。5層はローム粒子を多く含む黒色土。

1号土坑出土遺物（第128図1～4）

染付碗（1～3）

肥前系の染付碗である。1・2は体部に梅花文を配しており、底部には銘が施されている。3は体部に草花文が配され、やはり底部に銘がある。3点とも呉須の発色は明瞭である。

染付坏（4）

肥前系の染付坏である。½程の破片で体部の中程に草葉文と思われる文様がある。碗に比して呉須の発色がやや不鮮明である。

他に瀬戸・美濃系の天目茶碗片や唐津系の陶器片などの出土が確認されている。大体の製品が18世紀代であり、上記の碗などは18世紀後半代のものであろう。

2号土坑（第18図）

〔位置〕（B－5）G。

〔構造〕3号土坑、2号溝址を切る。(平面形) 長方形。(規模) 130cm以上×95cm。(深さ)40cm。(長軸方位) N－81°－W。坑底はほぼ平坦である。又、本土坑内に後世のものと思われるピットが検出されている。(覆土) 1～4層は後世のものと思われるピットの覆土である。本土坑の覆土は5～8層である。5層はロームブロックを含む黄褐色土。6・7層はローム粒子を多く含む暗褐色土。8層はロームブロックを多く含む黄褐色土。

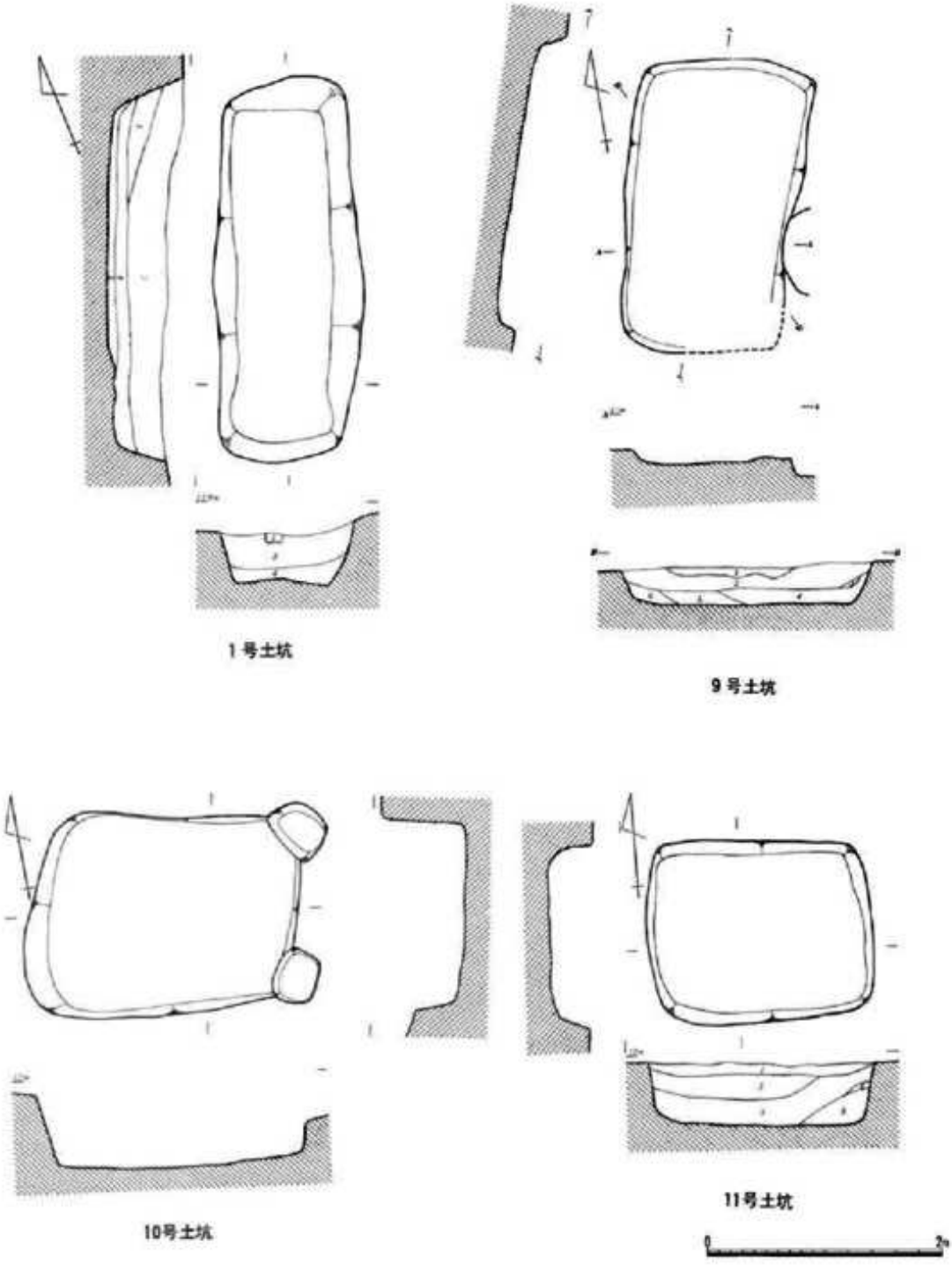
3号土坑（第18図）

〔位置〕（B－5）G。

〔構造〕20号住居址、2号溝址を切り、2号土坑に切られる。(平面形) 長方形。(規模) 240×150cm。(深さ) 40cm。(長軸方位) N－81°－W。坑底はほぼ平坦である。(覆土) 9～11層はローム粒子・ロームブロックを含む茶褐色土。12・13層はローム粒子・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土。

3号土坑出土遺物（図版42）

常滑甕の小破片である。この破片は肩部と思われ押印が施されている。



第109図　1・9～11号土坑（1/60）

4号土坑（第18図）

〔位置〕（B－5）G。

〔構造〕20号住居址を切り、2号溝址に切られる。(平面形) 長方形。(規模) 160cm以上×125cm。(深さ) 40cm。(長軸方位) N－81°－W。坑底はほぼ平坦である。(覆土) 1層はローム粒子を多く含む茶褐色土。2層はローム粒子を僅かに含む暗褐色土。 3層はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土。4層はロームブロック。

5号土坑（第18図）

〔位置〕（B－5）G。

〔構造〕11・20号住居址を切り、2号溝址に切られる。(平面形) 途中ややくびれをもつが基本的には長方形であろう。(規模) 400×185cm。(深さ) 50cm。(長軸方位) N－6°－E。(覆土) 2号溝址に破壊されているため底面直上の17層のみが確認できた。ロームブロックを含む黒色土である。

〔所見〕本土坑は南・北でややくびれをもち、やや不整をなすことから、2つの土坑の重複形であるかもしれない。しかし、底面の比高差が明瞭に観察されなかった点を重視し、一応一土坑と取り扱うことにした。

6号土坑（第16図）

〔位置〕（A－6）G。

〔構造〕6・9号住居址を切る。(平面形) 不整な長方形。(規模) 185×150cm。(深さ) 35cm。(長軸方位) N－60°－W。(覆土) ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

7号土坑（第32図）

〔位置〕（C－5）G。

〔構造〕18号住居址を切る。(平面形) 長方形。(規模) 220×185cm。(深さ) 10cm前後。(長軸方位) N－81°－W。南東コーナー底面に掘り込みが確認できた。(覆土) 南東コーナー掘り込み付近を中心として、炭化材・骨粉が検出された。

〔所見〕本土坑は18号住居址内に構築されているため上層の状態を観察できず、18号住居址床面に達する下層部のみ観察することができた。形態的な特徴では平面形が長方形を呈すること、コーナー底面に掘り込みをもつことを上げることができる。又、掘り込み付近を中心として、炭化材・骨粉が検出されたことにより墓擴と考えられよう。

9号土坑（第109図）

〔位置〕（D－7）G。

〔構造〕16号住居址を切る。(平面形) 長方形。(規模) 255×150cm。(深さ) 30cm。(長軸方位) N－18°－E。坑底はほぼ平坦である。(覆土) 1層は粒子が粗くサクサクした暗褐色土。2層はローム粒子

を含む褐色土。3層はロームブロック。4層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土。5層はローム粒子・ロームブロックを多く含む茶褐色土。6層はローム粒子を多く含む暗茶褐色土。

10号土坑（第109図）

〔位置〕（D－7）G。

〔構造〕13号住居址を切る。（平面形）長方形。（規模）230×170cm。（深さ）60cm。（長軸方位）N－82°－W。坑底はほぼ平坦である。又、東側の両隅には掘り込みが確認できた。

〔所見〕本土坑の形態的な特徴は平面形が長方形を呈すること、両隅にピットをもつことにある。これは前述の7号土坑に有する形態的な特徴に相似し、墓壙の可能性がある。

10号土坑出土遺物（図版42）

様々な時期の遺物が混在している。1は信楽の甕の肩部の小破片と思われる。2は志野織部の皿の小破片である。口縁端部には鉄絵が施されている。

11号土坑（第109図）

〔位置〕（B－7）G。

〔構造〕（平面形）長方形。（規模）190×155cm。（深さ）50cm。（長軸方位）N－87°－W。坑底はほぼ平坦である。（覆土）1層はローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土。2層はローム粒子・焼土粒子を多く含む暗茶褐色土。3層はローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土。4層はロームブロック。5層はローム粒子・焼土粒子を僅かに含む暗褐色土。

〔所見〕遺物の出土はなかったが、覆土の状態から察して古墳時代のものである可能性がある。

12号土坑（第110図）

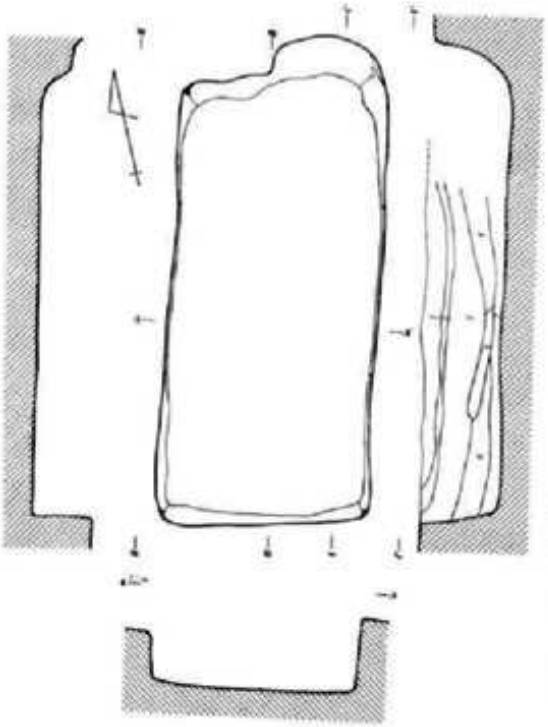
〔位置〕（C－7）G。

〔構造〕（平面形）長方形。（規模）340×155cm。（深さ）60cm。（長軸方位）N－15°－E。坑底は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）1層はローム粒子を含む暗褐色土。2層はロームブロックを多く含む暗黄褐色土。3層はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土。4層はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。5層はロームブロックを多く含む暗黄褐色土。6層はローム粒子を多く、ロームブロックを含む暗茶褐色土。7層は暗灰褐色土で粒子が細かく、粘性にとむ。

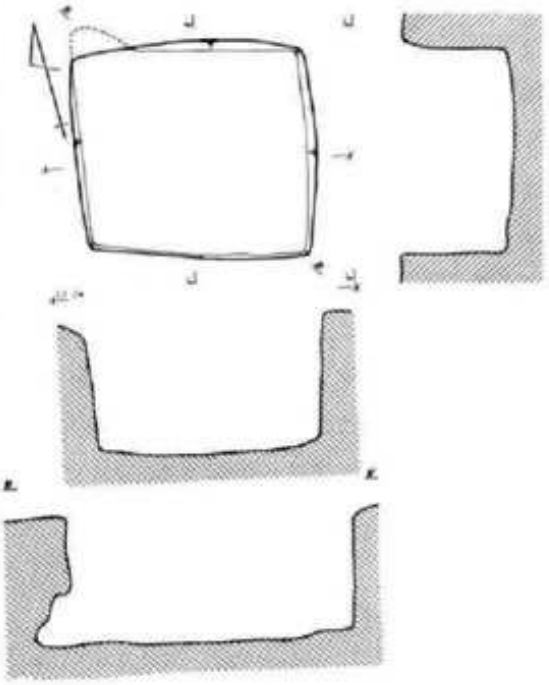
〔遺物〕内耳土器と思われる小破片が1点出土した。

〔所見〕本土坑の特徴は覆土中7層において水を受けた痕跡をとどめることにある。実際に降雨後には本土坑のみが水を満たし、ひかないということが観察できた。一見、他の土坑と変わりないローム面坑底に何か特別な処置がなされた可能性がありそうである。又、覆土の不規則な堆積状態から考えて、人為的な埋め戻しが想定できよう。

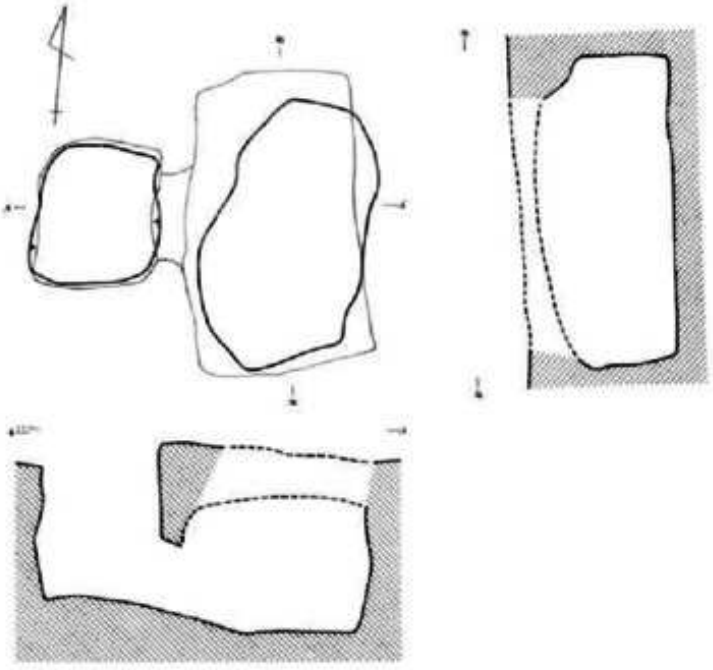
16号土坑（第111図）



12号土坑



21号土坑



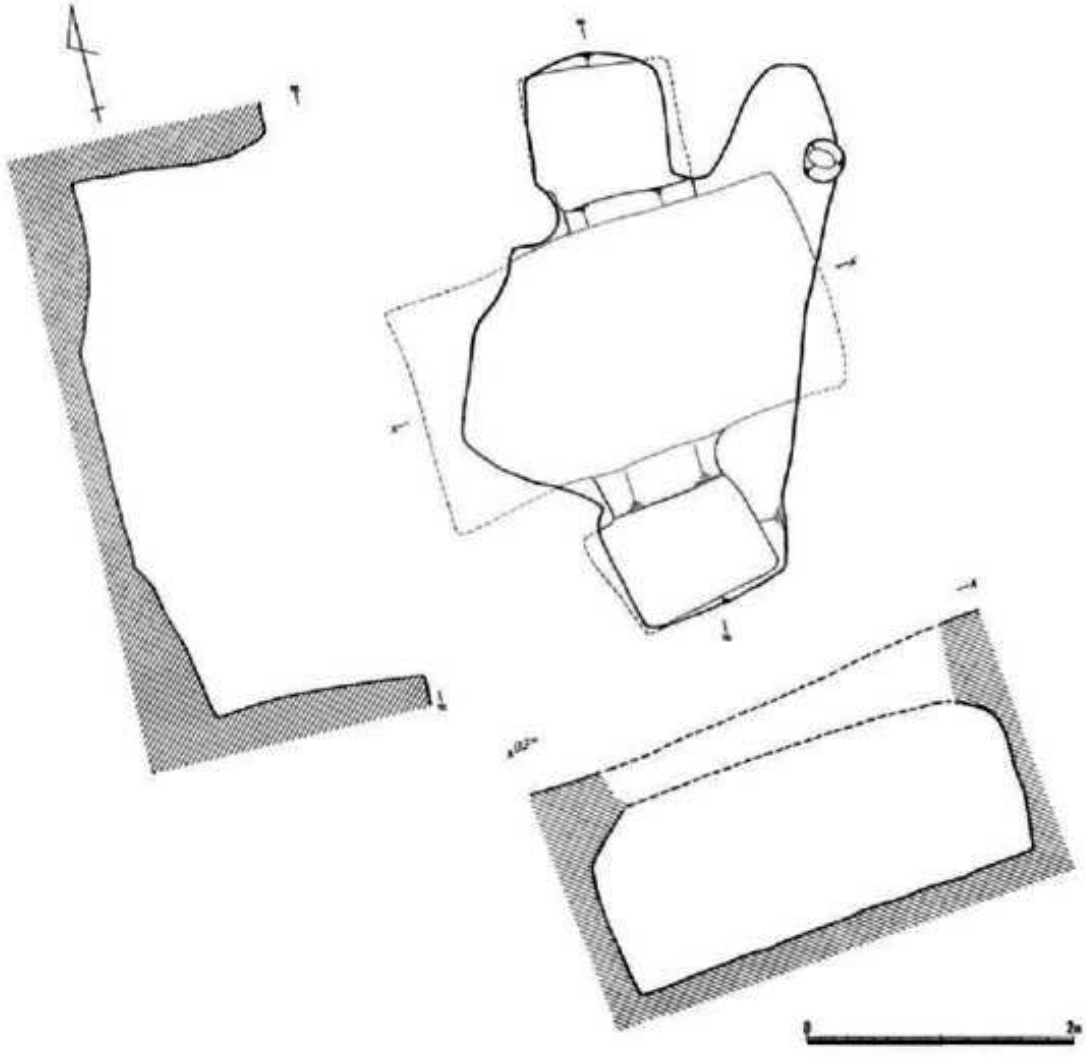
19号土坑

第110図　12・19・21号土坑（1/6）

〔位置〕（C－2）G。

〔構造〕入口竪坑部を2つ、主体部を1つもつ地下式壙で27号住居址を切る。（北側入口竪坑部）開口部は一辺100cmの方形を呈し、確認面からの深さは150cmを測り、主体部への連絡は傾斜角約20°をもって下がっている。（南側入口竪坑部）開口部は115×90cmの長方形を呈し、確認面からの深さは160cmを測り、主体部への連絡は傾斜角15°をもって下がっている。（主体部）平面形態は315×175cmの長方形を呈し、南北の入口竪坑部にはさまれる。又、主軸方位に対し横長の形態をとる。底面は平坦で入口竪坑部底面との比高差は北側で25cm、南側で30cmを測る。天井はほとんど崩落しているが、土坑内部は比較的良く残されていた。（覆土）基本的には3層に分けられる。1層はローム粒子を含む暗褐色土、2層は礫層、3層はロームが充塡している。

〔所見〕本土坑は南・北の一直線上に竪坑部2つと主体部1つが並ぶ地下式壙である。類似した形態を示すものは本遺跡長勝院地点において、46号土坑が南・東の2カ所に竪坑部をもつものとして確認されている。又、覆土3層は本土坑の天井部陥落によるロームと思われる。



第111図　16号土坑（1/60）

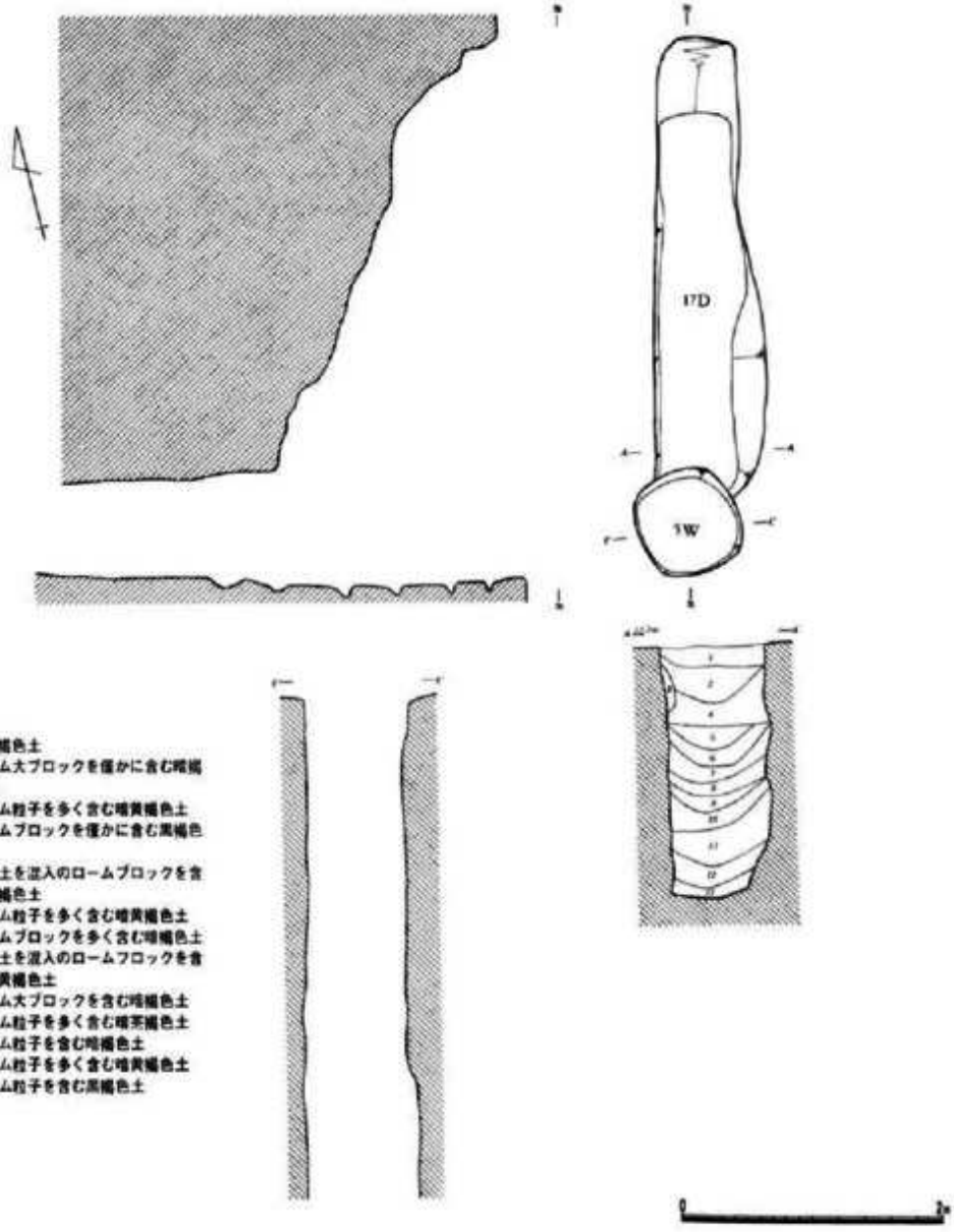
17号土坑（第112図）

〔位置〕（C－2）G。

〔構造〕27号住居址を切り、5号井戸址に切られる。（平面形）5号井戸址により南側が破壊されているが、溝状に細長い。（規模）長さ350cm、幅60～80cm。（深さ）坑底は南側に行くにつれて下がっており、傾斜角30°の勾配をもち、最深で190cmを測る。（長軸方位）N－14°－E。（覆土）ローム粒子・ロームブロックを多く含むことを特徴とする。

17号土坑出土遺物（第130図1）

径9.4cmを測る和鏡である。縁は直角に立ち上がる。二重圏で、外区には櫛歯文が充填される。外



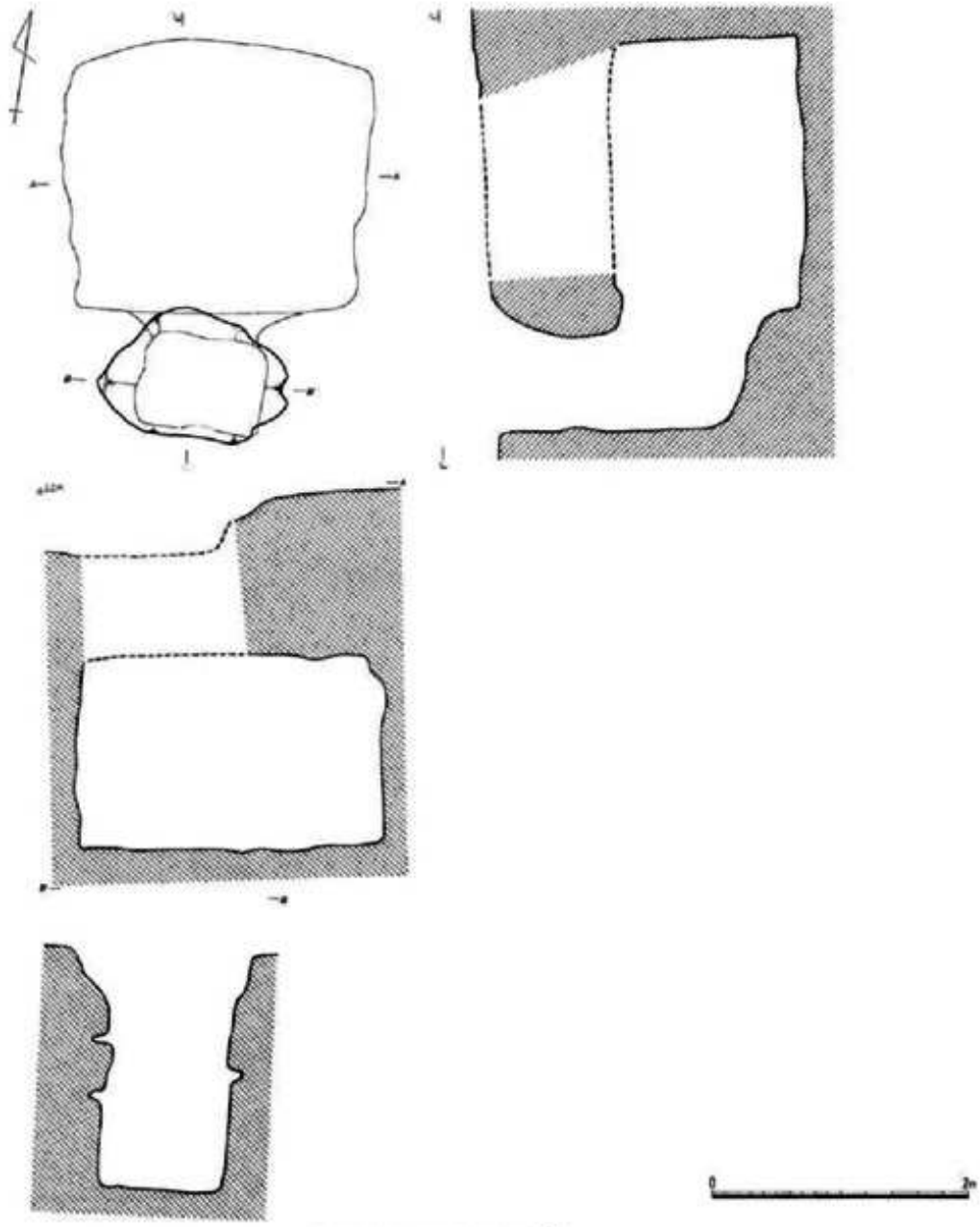
第112図　17号土坑・5号井戸址（1/6）

側の界圏上には4個1単位の珠文が等間隔に配される。内区は界圏に沿って珠文が巡らされ、菊花と対向する雀が描かれる。鈕・鈕座は花蕊座鈕となる。なお、外区には鏡をつり下げるためと思われる孔が2カ所あけられている。

18号土坑（第113図）

〔位置〕（C－9）G。

〔構造〕地下式壙で31号住居址を切る。（入口竪坑部）開口部はやや不整形をなすが、底面は100×70cmの長方形を呈し、確認面からの深さは195cmを測る。主体部への連絡は比高差40cm程の段差をも



第113図　18号土坑（1/40）

つ。（主体部）平面形態は230×210cmの長方形を呈し、主軸方位に対しやや横長の形態をとる。底面はほぼ平坦で壁の立ち上がりも垂直で内部は単純な箱形を呈する。

〔所見〕本土坑は遺存状態が良く陥没を受けなかった。形態的な特徴として入口竪坑部の壁にいくつかの小さな掘り込みが確認された。足掛穴と考えられる。

18号土坑出土遺物（第128図5、第131図1・2）

瀬戸・美濃系擂鉢（第128図5）

底部付近の破片である。器内面は磨滅が著しく、鉄釉も剥落している。口縁部などの年代の決め手となる部位の破片はない。

石製品（第131図1・2）

1は五輪塔の火輪部分と思われる。梵字は「ラン」と思われるから、西・菩提門の面であろう。

2は石臼の上臼である。

19号土坑（第110図）

〔位置〕（C－3）G。

〔構造〕地下式壙で、24号住居址を切る。（入口竪坑部）開口部は105×90cmの長方形を呈し、確認面からの深さ115cmを測る。壁はほぼ垂直で、主体部への連絡は傾斜角15°をもって下がる。（主体部）平面形は225×130cmの長方形を呈し、主軸方位に対し横長の形態をとる。底面はほぼ平坦であり、入口竪坑部底面との比高差は25cmを測る。天井部はほとんど崩落している。（覆土）入口竪坑部は小砂利を含む暗褐色土を基調とし、主体部には天井部崩落のためのロームが充満している。

19号土坑出土遺物（第128図6、第130図2）

土師質土器皿（第128図6）

ロクロ目を顕著に残し、体部下半は器肉も厚く、口縁部に直線的にのびている。器肉の状況から判断して水挽き成形と思われる。底面には回転糸切り痕を残している。15世紀後半の製品と思われる。

石製品（第130図2）

板碑片である。不鮮明であるが、右は「無妙」、左は「南無釈」か。

20号土坑（第114・115図）

〔位置〕（C－10）G。

〔構造〕1つの入口竪坑部を中心に5つの主体部が放射状に設けられるという形態の地下式壙で29号住居址を切る。（入口竪坑部）開口部は370×350cmの楕円形で底面はほぼ平坦で250×230cmの方形を呈する。確認面からの深さは280cmを測り、各主体部間とのレベル差はほとんどない。（主体部）入口竪坑部を中心に5つの主体部が放射状に設けられるという形態をもつが、東側の2つについては未調査区に入るために存在のみの確認にとどめた。よって残りの3つについては最北端のものを第1号主体部とし、あとは入口竪坑部を中心に反時計回りの方向で第2・3号主体部とし説明する。

〈第1号主体部〉平面形態は幅が前壁190cm、奥壁280cm、奥行が中央で385cmを測り、概して羽子板

状を呈する。主軸方位はN－30°－W。底面はほぼ平坦で壁の立ち上がりも垂直で、天井までの高さは100cmを測る。出入口は幅55cm、長さ70cm、高さ80cmを測り、入口竪坑部へ連絡している。注目されるのは、直径8cm、深さ11cm前後の小穴が2個1対で前壁では出入口をはさんで左右に1カ所ずつ、奥壁では左右隅寄りに1カ所ずつ、左・右壁では奥壁寄りに1カ所ずつと計6カ所に穿たれていること、さらに入口から入って右側の前壁には底辺16cm、高さ15cmの三角形状の掘り込みがあり、その上部は煤で黒くなっていることにある。〈第2号主体部〉平面形態は幅が前壁195cm、奥壁320cm、奥行が中央で385cmを測り、第1号主体部同様、概して羽子板状を呈する。主軸方位はN－85°－W。底面はほぼ平坦で壁の立ち上がりも垂直で、天井までの高さは105cmを測る。出入口は幅50cm、長さ75cm、高さ85cmを測り、入口竪坑部へ連絡している。又、本主体部においても第1号主体部と同じように直径7cm、深さ14cm前後の2個1対の小穴が壁面に掘り込まれている。三角形状の掘り込みは確認できなかった。〈第3号主体部〉平面形態は幅が前壁185cm、奥壁270cm、奥行が中央で360cmを測り、第1・2号主体部同様、概して羽子板状を呈する。主軸方位はN－15°－E。底面はほぼ平坦で壁の立ち上がりも垂直で、天井までの高さは105cmを測る。出入口は幅45cm、長さ80cmで高さは不明である。（覆土）入口竪坑部は黒色土を混入するロームが堆積しており、主体部は空洞であった。

〔所見〕本址は遺存状態が良好で当初、攪乱土と思われていた部分もプラン確認の段階でそれが本址の覆土であることがわかった。しかし、同時にかなり広範囲にわたる遺構であるために、天井部陥没が生じた場合の危険性を考え、あらかじめ、バックホーを導入し天井部を抜くことにした。形態的な特徴では、1つの入口竪坑部を中心に5つの主体部が放射状に設けられ、入口竪坑部底面と主体部底面とのあいだに明確なレベル差はほとんどないことであり、これは中田英氏の分類（中田1979）によるA Ⅲ類1にあたる。又、主体部内部付属施設として第1号主体部からは2個1対の小穴と三角形状の掘り込みが、第2号主体部からは2個1対の小穴が確認された。第115図はその略図であるが小穴についてはそれぞれ対面する小穴に対応し、おそらく板のようなものを橋渡し、棚のようにして使っていたものと想定できよう。三角形状の掘り込みについては前述したように、その上部が黒く煤けていることから照明施設として理解できよう。

20号土坑出土遺物（第128図7～16）

土師質土器皿（7・8）

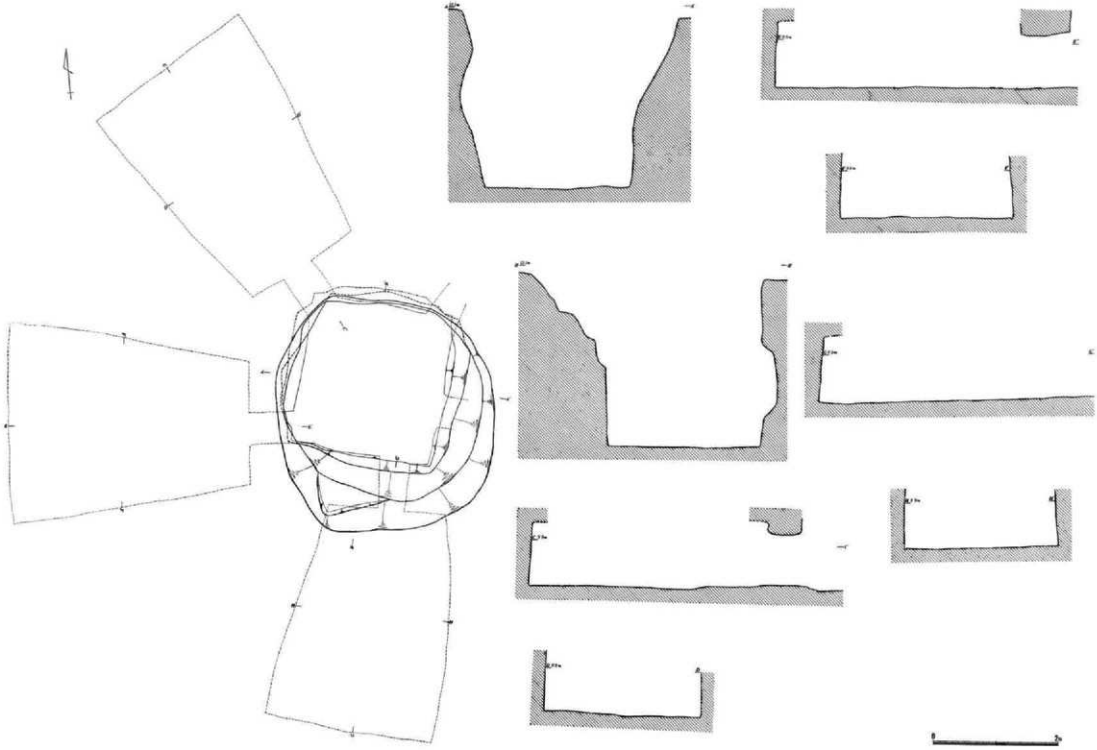
7は小型の皿で紐作りと思われ、底面には回転糸切り痕を残している。8は7より大きめの皿である。やはり紐作りで、底面に回転糸切り痕を残している。このほか常滑甕の体部破片、近世の内耳土器の破片が出土している。

瀬戸・美濃系小坏（9・10）

2点とも口縁部をわずかに欠いているのみである。鉄釉の小坏でやや茶色のかかった色調を呈している。10の製品の方が高台の作りがシャープである。胎土は砂っぽいが緻密な良質な土である。

瀬戸・美濃系緑釉茶碗（11）

体部は球形を呈して、断面方形の付高台を有する。外面は緑釉で内面は透明釉が施されている。



第114図　20号土坑（⅓）

瀬戸・美濃系灰釉稜皿（12）

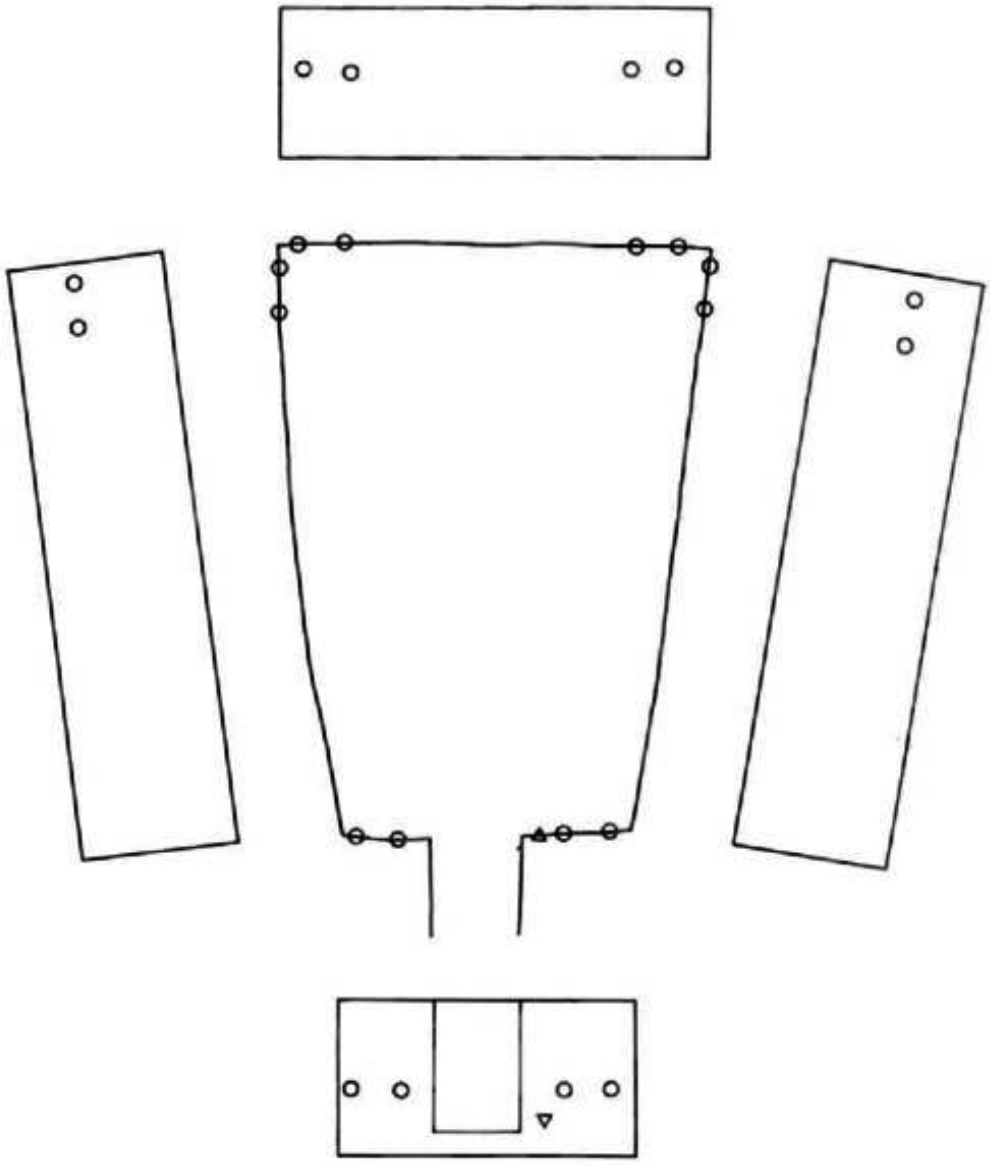
口縁部がやや外反し、削り出し高台で、断面は逆台形を呈する。釉薬は、全面に長石釉が施されている。

瀬戸・美濃系丸皿（13）

体部はやや丸みを帯びるが、稜も明瞭である。全体に厚めの器壁である。削り出し高台で、断面は低い台形を呈する。釉薬は、全面に長石釉が施されている。底部内面には円錐ピンの跡がある。

瀬戸・美濃系輪禿皿（14）

口縁部が外反し、底部内面に輪状に凸部がある。これは重ね焼きのためのものであり、釉はこの



第115図　20号土坑第1号主体部付属施設略図

部分だけ施されていない。他の器内面の体部の途中までは長石釉が施されている。高台は断面三角形に作られている。

瀬戸・美濃系片口（15）

⅓程の破片である。片口部は欠損してないが、残存部から推測して片口であろう。体部下端に稜が入り、上方は直立する。削り込み高台で、体部から口縁部の内面にかけて鉄釉が施される。

備前系染付皿（16）

内面底部に草葉が描かれている。

これらの遺物の中では、緑釉の製品がやや新しいのに対して、他の製品は比較的製作年代が一致していると思われる。ほぼ17世紀後半から18世紀前半のものと思われる。

21号土坑（第110図）

〔位置〕（C－9）G。

〔構造〕36号住居址を切る。（平面形）長方形。（規模）180×165cm。（深さ）100cm。（長軸方位）N－77°－W。坑底はほぼ平坦で壁も垂直に立ち上がるが、北西コーナーにおいて掘り込みが確認できた。（覆土）北西コーナー掘り込みを中心として、炭化材・骨粉が検出された。

〔所見〕本土坑も前述した7・10号土坑のように平面形が長方形（方形に近い）を呈し、コーナーに掘り込みをもつという形態的な特徴を示す。又、7号土坑同様に掘り込みを中心として炭化材・骨粉が検出されたことにより墓壙と考えられる。

22号土坑（第116図）

〔位置〕（D－7）G。

〔構造〕17号住居址の南東コーナーをわずかに切る。（平面形）長方形。（規模）250×145cm。（深さ）45cm。（長軸方位）N－78°—W。坑底は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）ロームブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。

23号土坑（第116図）

〔位置〕（D－5）G。

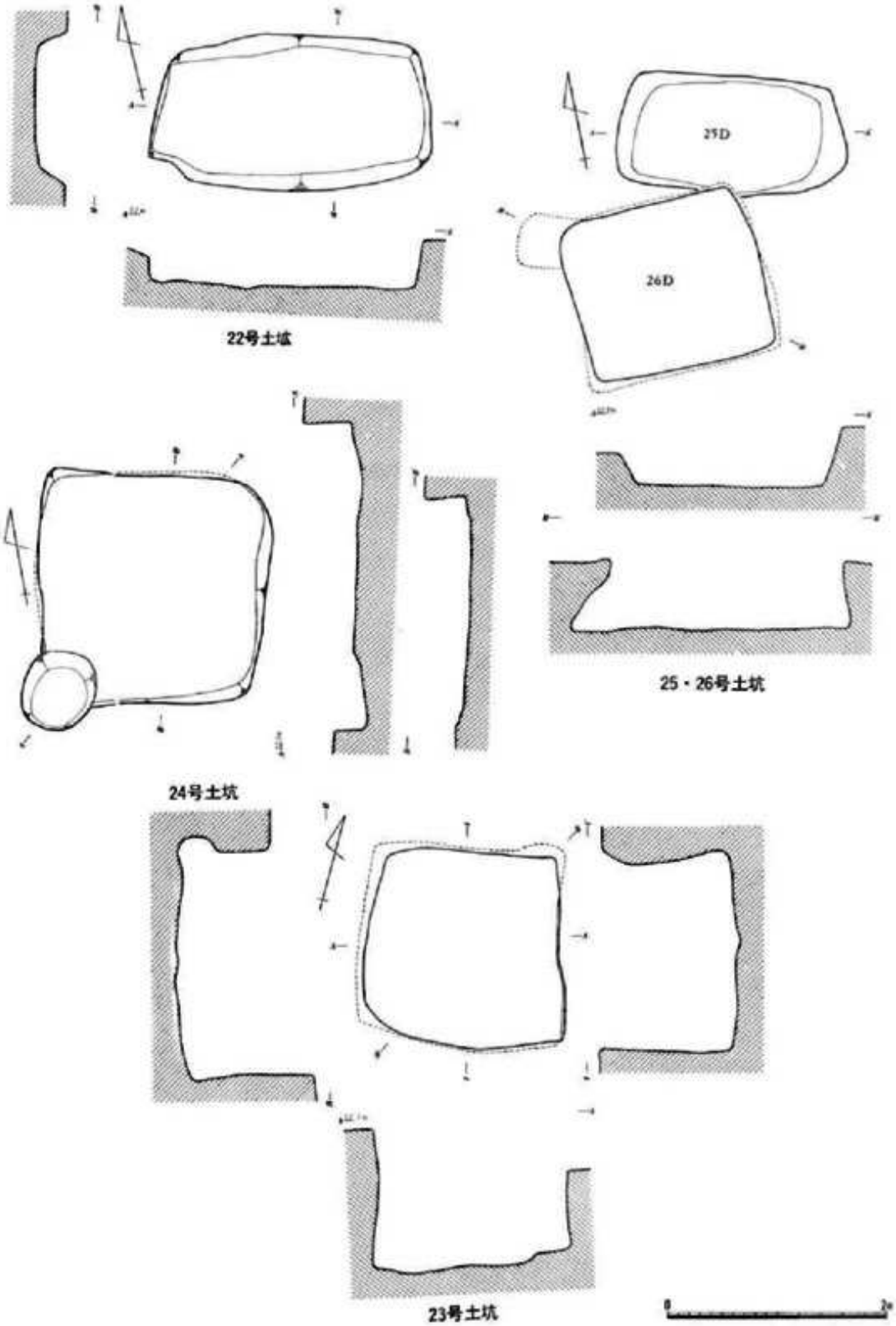
〔構造〕18号住居址を切る。（平面形）方形。（規模）180×170cm。（深さ）125cm。（長軸方位）N－10°－W。坑底にはやや起伏がみられる。壁は下方に行くにつれて奥に広がるようである。又、北東コーナーに横穴状の掘り込みが確認できた。（覆土）ロームブロックを含む暗褐色土を基調とするが、北東コーナーに掘り込みを中心として、炭化材・骨粉の集中域がみられる。

〔所見〕本土坑も形態的な特徴かつ掘り込みを中心とする炭化材・骨粉の検出により墓壙と考えられよう。

24号土坑（第116図）

〔位置〕（D－6）G。

〔構造〕17号住居址を切る。（平面形）方形。（規模）215×205cm。（深さ）45cm。（長軸方位）



第116図　22～26号土坑（1/60）

N－12°－E。坑底はほぼ平坦である。又、南西コーナーには掘り込みが確認できた。（覆土）ロームブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。

〔所見〕本土坑もコーナーに掘り込みをもつという形態的な特徴から墓壙の可能性がある。

25号土坑（第116図）

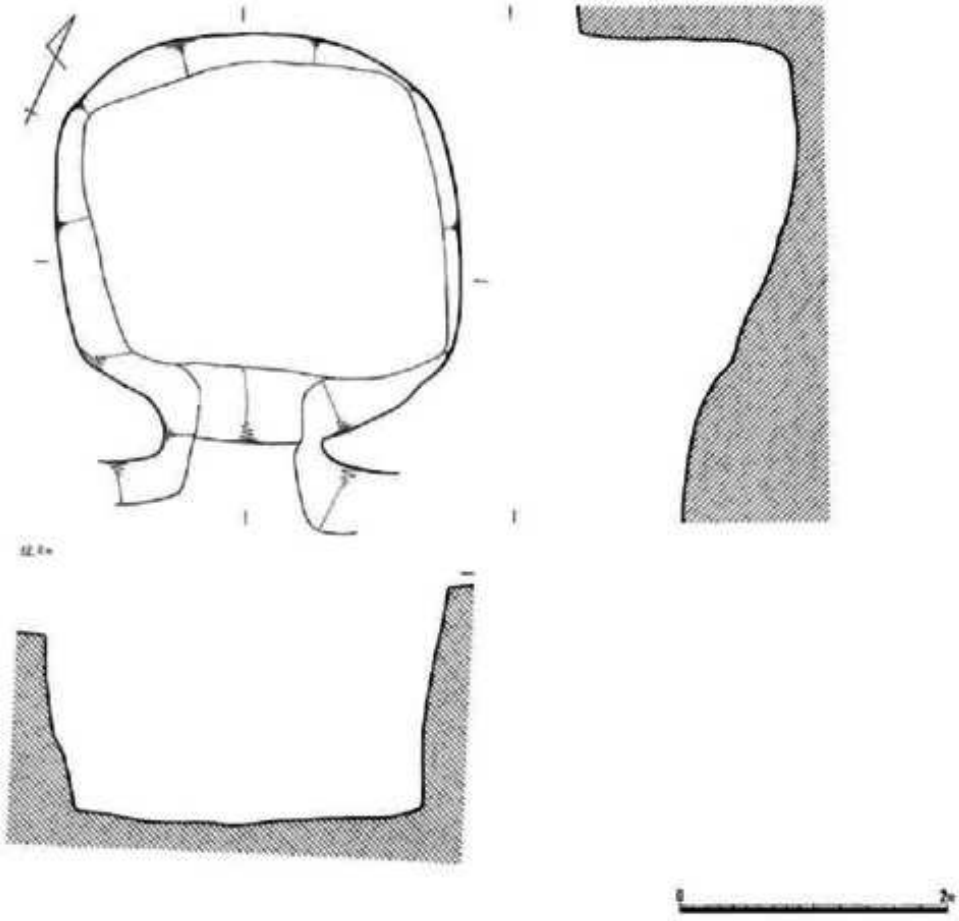
〔位置〕（D－7）G。

〔構造〕17号住居址を切り、26号土坑に隣接する。（平面形）長方形。（規模）210×110cm（長軸方位）N－75°－W。坑底は平坦である。（覆土）ロームブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。

26号土坑（第116図）

〔位置〕（D－7）G。

〔構造〕17号住居址を切り、25号土坑に隣接する。（平面形）方形。（規模）170×155cm。（長軸方位）N－88°－E。坑底はほぼ平坦で、壁は下方に行くにつれて奥に広がるようである。又、北西コーナーに横穴状の掘り込みが確認できた。（覆土）ロームブロックを多く含む暗褐色土を基



第117図　30号土坑（1/60）

調とする。

〔所見〕本土坑もコーナーに掘り込みをもつという形態的な特徴から墓壙の可能性がある。

27号土坑（第75図）

〔位置〕（E－7）G。

〔構造〕42号住居址を切る。（平面形）楕円形。（規模）80×76cm。（深さ）18cm。（長軸方位）N－4°－W。坑底はやや起伏がある。（覆土）暗褐色土の単一土層である。

〔遺物〕人骨、古銭6枚、数珠玉1個が出土した。

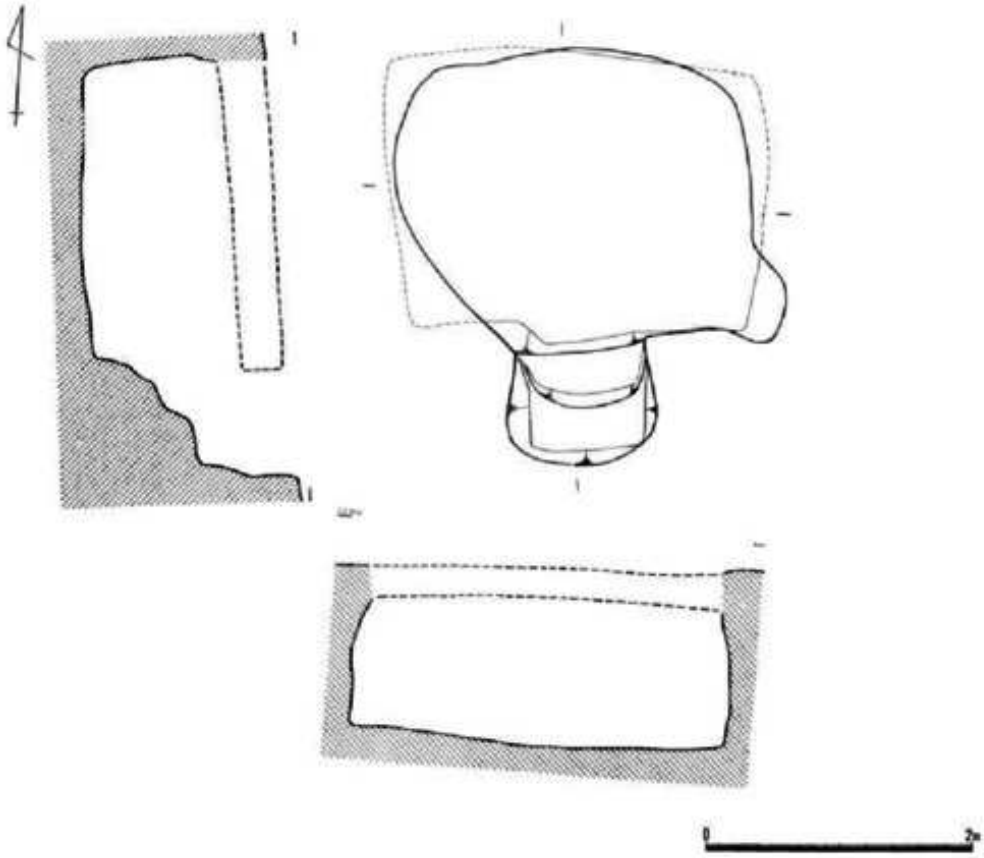
27号土坑出土遺物（第129図1～7）

古銭（1～6）

1・2は元豊通寶（北宋　初鋳1078年）、3は開元通寶（唐　初鋳621年）か。4～6は銹化が著しく判読できなかった。

数珠玉（7）

透明なガラス製の数珠玉である。孔は貫通しているものの他に、それに直交するように途中で止まっているものがある。



第118図　31号土坑（1/60）

28号土坑（第53図）

〔位置〕（D－2）G。

〔構造〕地下式壙で30号住居址を切る。（入口竪坑部）主体部の天井全体が陥没しているため入口部竪坑部と主体部が一体化してしまっている。底面は90×70cmの長方形を呈し、確認面からの深さは270cmを測る。主体部への連絡は比高差20cm程の段を形成している。（主体部）平面形態は430×310cmの長方形を呈し、主軸方位に対し横長の形態をとる。又、本土坑の特徴として、北西・南東コーナーのそれぞれに掘り込みを有することにある。北西コーナー掘り込みは115×105cmの方形を呈し、深さは45cmを測る。南東コーナー掘り込みは130×110cmの方形を呈し、深さは40cmを測る。（覆土）黒色土を基調とするが、天井部陥落によるロームが混入する。

28号土坑出土遺物（第128図17～20、第131図3～5）

瀬戸灰釉小皿（17）

口縁部の内外に灰釉を施した緑釉小皿の破片である。焼成温度が低かったためか釉が十分に発色しておらず、露胎部は火色に発色している。底面には回転糸切り痕を残している。

土師質土器皿（18～20）

18は体部の半分程を欠いている。底部は厚めに作られており紐作り成形とも思われる。体部は直線的に外反している。胎土は小石混じりで粗く、赤褐色を呈している。19は小破片である。20は半分ほどの破片である。紐作りと思われるが、焼き歪みが著しい。灰褐色を呈している。

石製品（第131図3～5）

石白である。3は上白、4・5は下白である。4は磨滅により目がほとんど消えかかっている。5は六分画主溝型のもの。

29号土坑（第85図）

〔位置〕（D－4）G。

〔構造〕47号住居址を切る。（平面形）長方形。（規模）130×75cm。（深さ）55cm。（長軸方位）N－75°－W。坑底はほぼ平坦で壁は垂直に近い状態で立ち上がる。

30号土坑（第117図）

〔位置〕（F－8）G。

〔構造〕地下式壙で1・4号溝址と重複する。（入口竪坑部）1号溝址との重複により詳細不明である。（主体部）平面形態は300×285cmの隅丸方形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、入口竪坑部に近い部分は傾斜角20°程の斜面となっている。天井はほとんど陥没し、四隅がわずかに残されているにすぎない。（覆土）黒色土を基調とするが、天井部崩落によるロームが混入している。

〔所見〕本土坑は南側入口竪坑部で1号溝址と北側で4号溝址と重複するが、前後関係については確認できなかった。しかし、機能面から考えると1号溝址の覆土中に構築することはロームと違って崩壊しやすく、かつ危険性を判う。つまり、1号溝址の構築以前に本土坑が構築され機能したとみる方が妥当ではないだろうか。

31号土坑（第118図）

〔位置〕（B－8）G。

〔構造〕地下式壙である。（入口竪坑部）開口部は110×85cmの長方形を呈し、深さ75cmで一度平坦面に達する。その後、主体部への連絡はやや不整をなすが概ね階段状を呈すると思われる。最上の平坦面と主体部底面との比高差は70cmを測る。（主体部）平面形態は280×210cmの長方形を呈し、主軸方位に対し横長の形態をとる。坑底はほぼ平坦で壁の立ち上がりも垂直である。天井はほとんど陥没している。（覆土）黒色土を基調とするが、天井部陥落によるロームが混入する。

31号土坑出土遺物（第129図8）

至大通寶（元　初鋳1310年）である。

第3節　井　戸　址

1号井戸址（第119図）

〔位置〕（C－7）G。

〔構造〕本址は西側において方形状の付設的な平坦面を有する形態のものである。平面形は不整円形を呈し、長径215cm、短径200cmを測る。断面形はN－S軸方向で見た場合、上端部は変形ながらロート状を呈しており、以下は若干すぼまりながら円筒形状に垂下し、さらに深さ400cm付近では急激な広がりをみせている。確証はないが、この広がりは本址が機能していた頃の水面に値し、その浸食作用による壁面の崩壊が考えられる。又、W－E軸方向では壁面に足掛穴と思われる多数の掘り込みが検出された。（覆土）ロームブロック及び礫が多く混入していることにより、埋め戻された可能性が強い。

1号井戸址出土遺物（第128図21～23、第130図3）

瀬戸・美濃系鉄釉皿（21）

削り込み高台で、口縁部が外反する稜皿である。釉は高台部を含め全面施釉されている。

瀬戸・美濃系擂鉢（22）

擂鉢の破片が数点出土している。口縁部には体部に直交して上下にのびた2cm程の縁帯をつくっている。全面さび釉が施されている。

内耳土器（23）

やや深めの製品で¼程欠いている。耳が口縁端部から体部中程にかけて付けられている。

その他、土師質土器や須恵器の甕などの小破片が出土している。小破片のため年代は決めがたい。比較的良好な残存状況を呈するものは、16世紀前半代の製品かと思われる。

石製品（第130図3）

板碑片である。月輪が2個接してみえるため、おそらく三尊種字の板碑と考えられる。残されている種字はサ（聖観音）と思われるので、阿弥陀三尊となるのであろう。

2号井戸址（第120図）

〔位置〕（D－7）G。

〔構造〕本址は1号井戸址とまでもいかないが西側上端部においてやや平坦面を有する。平面形は大略楕円形を呈し、長径310cm、短径270cmを測る。断面形は変形ながらロート状を呈しており、途中、壁面に掘り込みを有する箇所もみられる。下端部においては掘り下げ途中湧水してしまった。

（覆土）ロームブロック及び礫が多く混入していることより、埋め戻された可能性が強い。

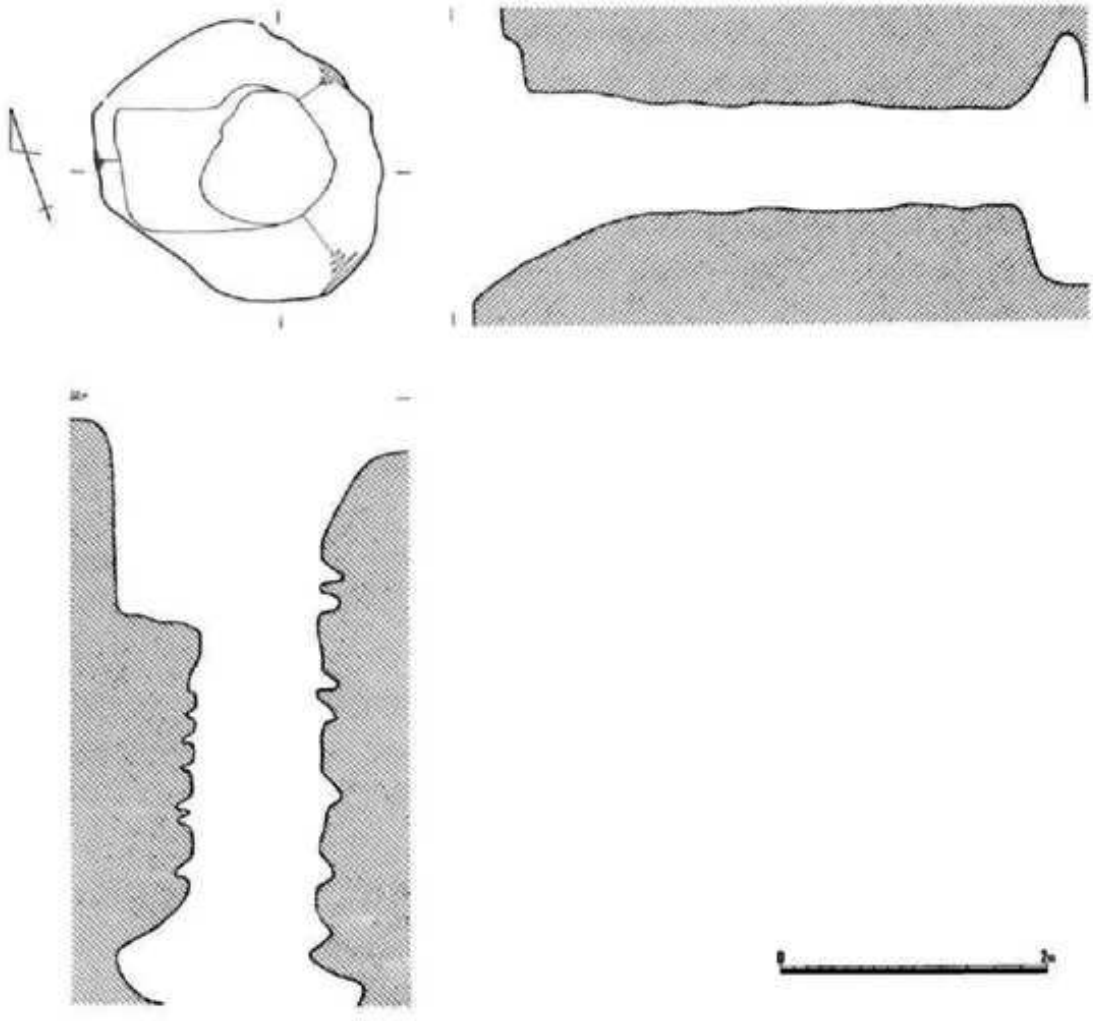
2号井戸址出土遺物（図版42）

近世後半から明治時代にかけての染付碗・皿が出土している。

3号井戸址（第121図）

〔位置〕（C－6）G。

〔構造〕平面形は不整円形を呈し、長径145cm、短径125cmを測る。断面形は上端部よりほぼ円筒形状を呈しているが、深さ350cm付近で一時的な広がりをみせた後、細くすぼまっている。（覆土）上



第119図　1号井戸址（1/40）

層部はロームブロック及び礫を多く混入しているが、下層部においては黒色土を基調としている。埋め戻された可能性が強い。

3号井戸址出土遺物（図版43）

古瀬戸灰釉瓶子

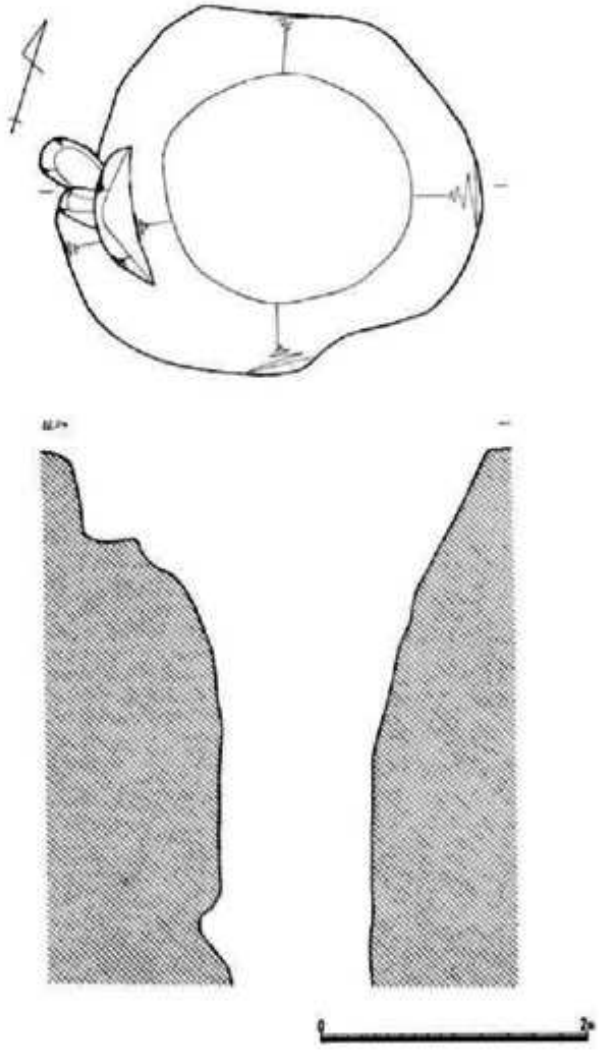
瓶子の肩部の破片である。胎土は緻密でよく、やや厚めの緑色の灰釉がかかっている。頸部に移行する箇所に沈線が施されている。14世紀中頃から後半にかけての製品と思われる。

この他、この遺構からは常滑甕の小破片や須恵器の坏・甕類の破片も多く出土しており、遺構の年代の限定はつけがたい。

4号井戸址（第122図）

〔位置〕（C－3）G。

〔構造〕38号住居址を切る。平面形は大略円形を呈し、直径100cmを測る。断面形は上端部よりほぼ



第120図　2号井戸址（1/40）

円筒形状を呈しているが、深さ400cm付近では急激な広がりをみせている。又、W－E軸方位で見た場合、壁面に足掛穴と思われる多数の掘り込みが検出された。（覆土）黒色土を基調とし、礫の混入がめだつ。

4号井戸址出土遺物（図版43）

常滑甕片が出土している。胴部の小破片のため時代は不詳である。

5号井戸址（第112図）

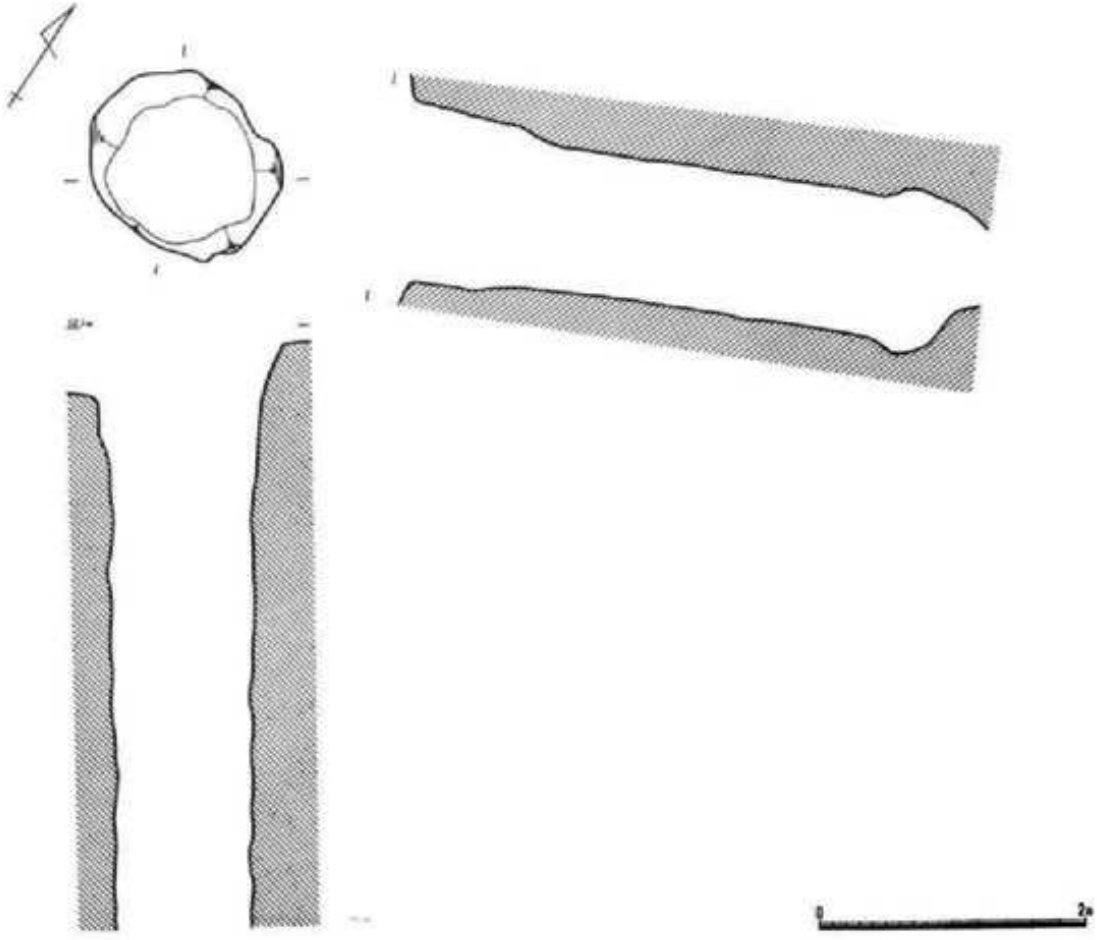
〔位置〕（C－2）G。

〔構造〕17号土坑を切る。平面形は大略円形を呈し、直径75cmを測る。断面形は上端部より円筒形状を呈し、垂下する。南壁面には足掛穴と思われる多数の掘り込みが検出された。（覆土）礫混じりの黒色土を基調とする。

6号井戸址（第123図）

〔位置〕（C－2）G。

〔構造〕平面形は円形を呈し、直径105cmを測る。断面形は上端部よりほぼ円筒形状を呈しているが、



第121図　3号井戸址（1/60）

深さ400cm付近で急激な広がりをみせている。又、N－S軸方向で見た場合、壁面に足掛穴と思われる多数の掘り込みが検出された。（覆土）礫を多く混入する暗褐色土を基調とすることより、埋め戻された可能性が強い。

6号井戸址出土遺物（図版43、第130図4・5）

常滑甕（図版43）

小破片が出土しているのみである。

石製品（第130図4・5）

板碑片である。4は蓮台の一部などがみられるが、風化が激しく不鮮明である。5の上部の文字

第122図　4号井戸址（1/40）

は「享」か。

7号井戸址（第124図）

〔位置〕（B－9）G。

〔構造〕平面形は楕円形を呈し、長径115cm、短径80cmを測る。断面形は上端部でややロート状を呈し、以下は円筒形状に垂下する。又、N－S軸方向で見た場合、壁面に足掛穴と思われる多数の掘り込みが検出された。（覆土）礫を多く混入する暗褐色土を基調とすることより、埋め戻された可能性が強い。

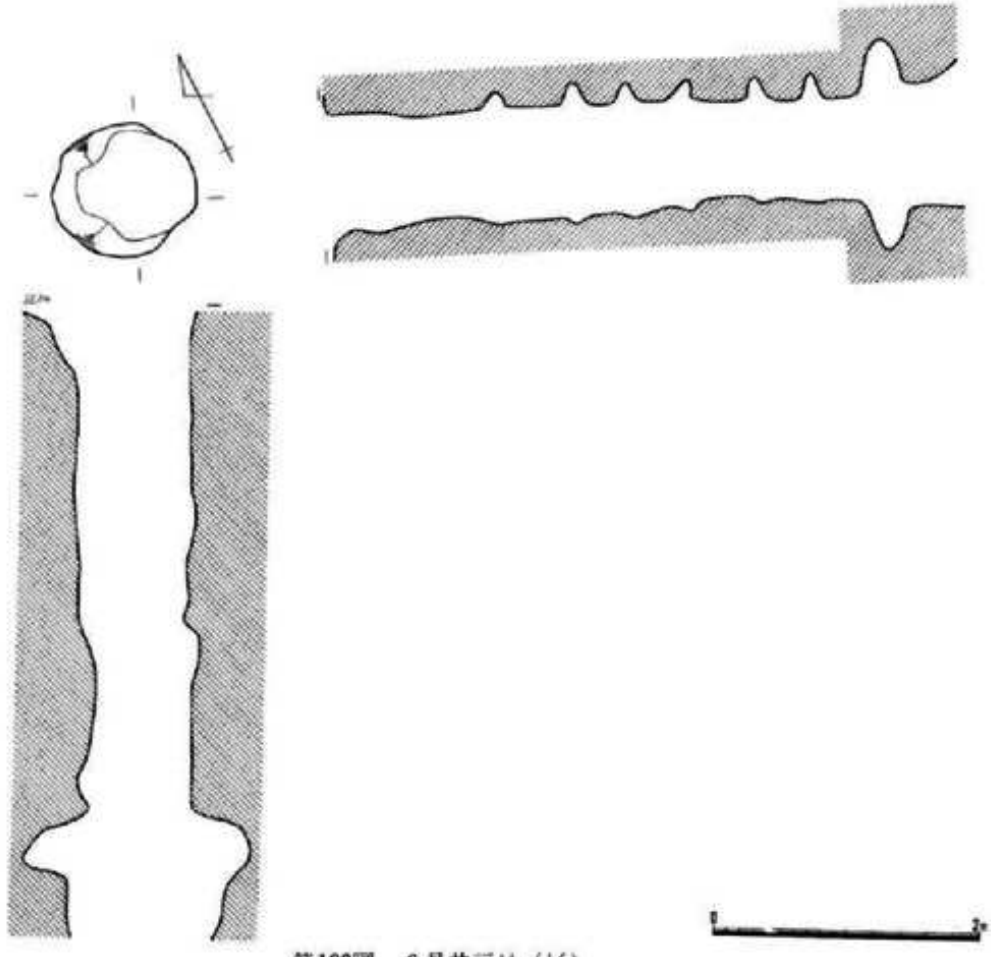
7号井戸址出土遺物（図版43、第130図6・7）

瀬戸美濃系灰釉皿（図版43）

灰釉皿の底部の破片である。緑に発色した灰釉が厚めにかかっている。16世紀前半代の製品と思われる。

その他、瀬戸・美濃系の擂鉢の口縁部の破片が出土している。16世紀後半から17世紀前半の製品と思われる。

石製品（第130図6・7）



第123図　6号井戸址（1/40）

いずれも板碑片。6は蓮台の一部が、7は枠線などがみえる。

8号井戸址（第57図）

〔位置〕（D－9）G。

〔構造〕32号住居址を切る。平面形は円形を呈し、直径120cmを測る。断面形は上端部より円筒形状を呈し、垂下する。（覆土）礫の混入した暗褐色土を基調とする。

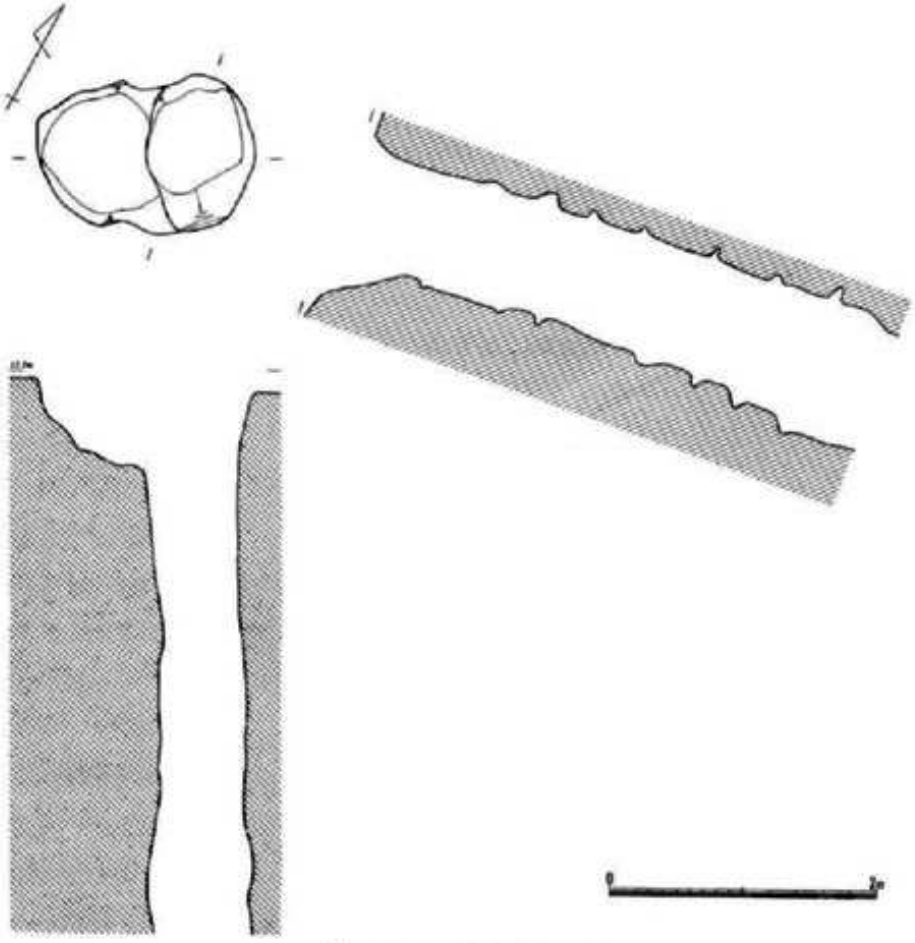
9号井戸址（第125図）

〔位置〕（C－3）G。

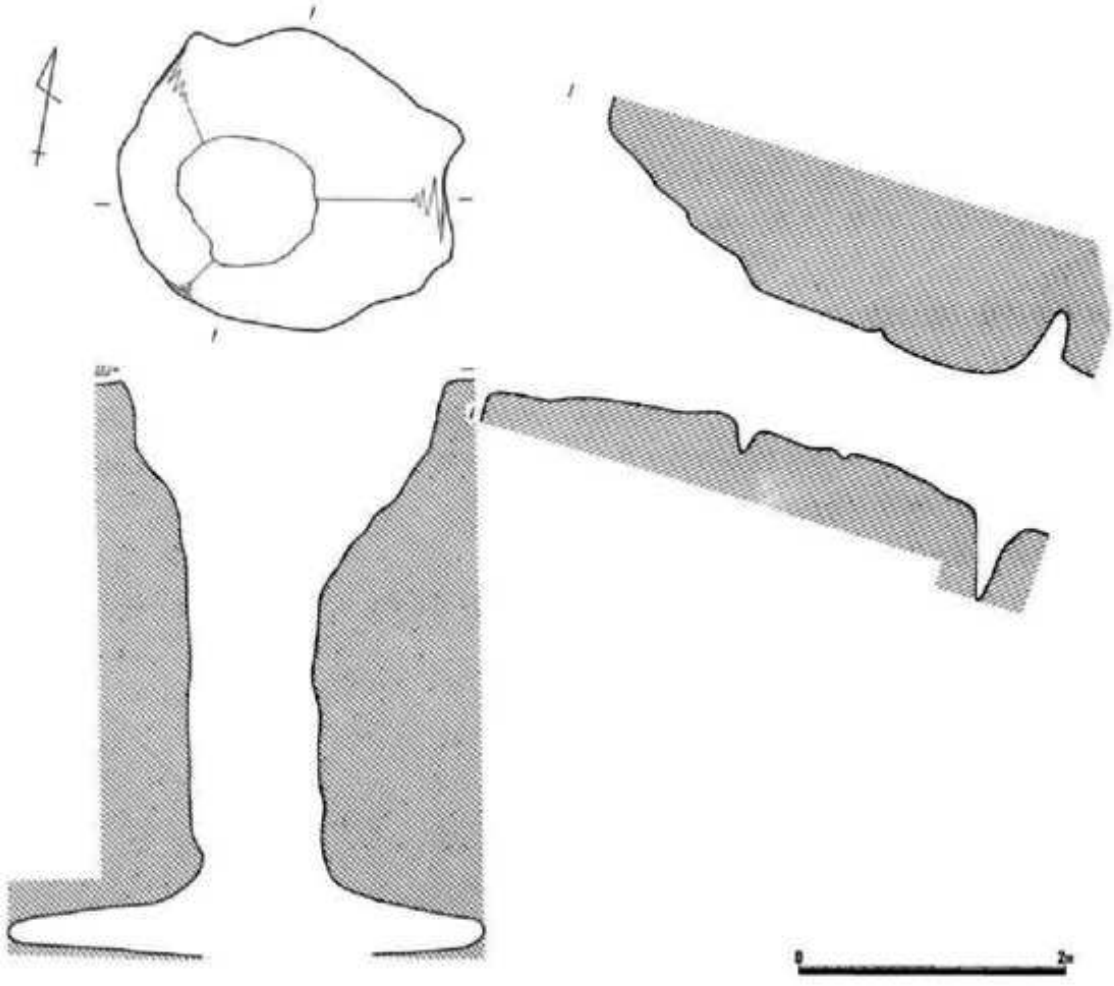
〔構造〕平面形は不整楕円形を呈し、長径240cm、短径220cmを測る。断面形は上端部で変形ながらロート状を呈しているが、深さ350cm付近で急激な広がりをみせている。壁面には所々足掛穴と思われる掘り込みが検出された。（覆土）暗褐色土を基調とし、礫の混入がめだつ。

9号井戸址出土遺物（図版43）

常滑甕片である。器表面は田土を使用したためか光沢があるものもある。中世後半代の製品と思われる。



第124図　7号井戸址（1/60）



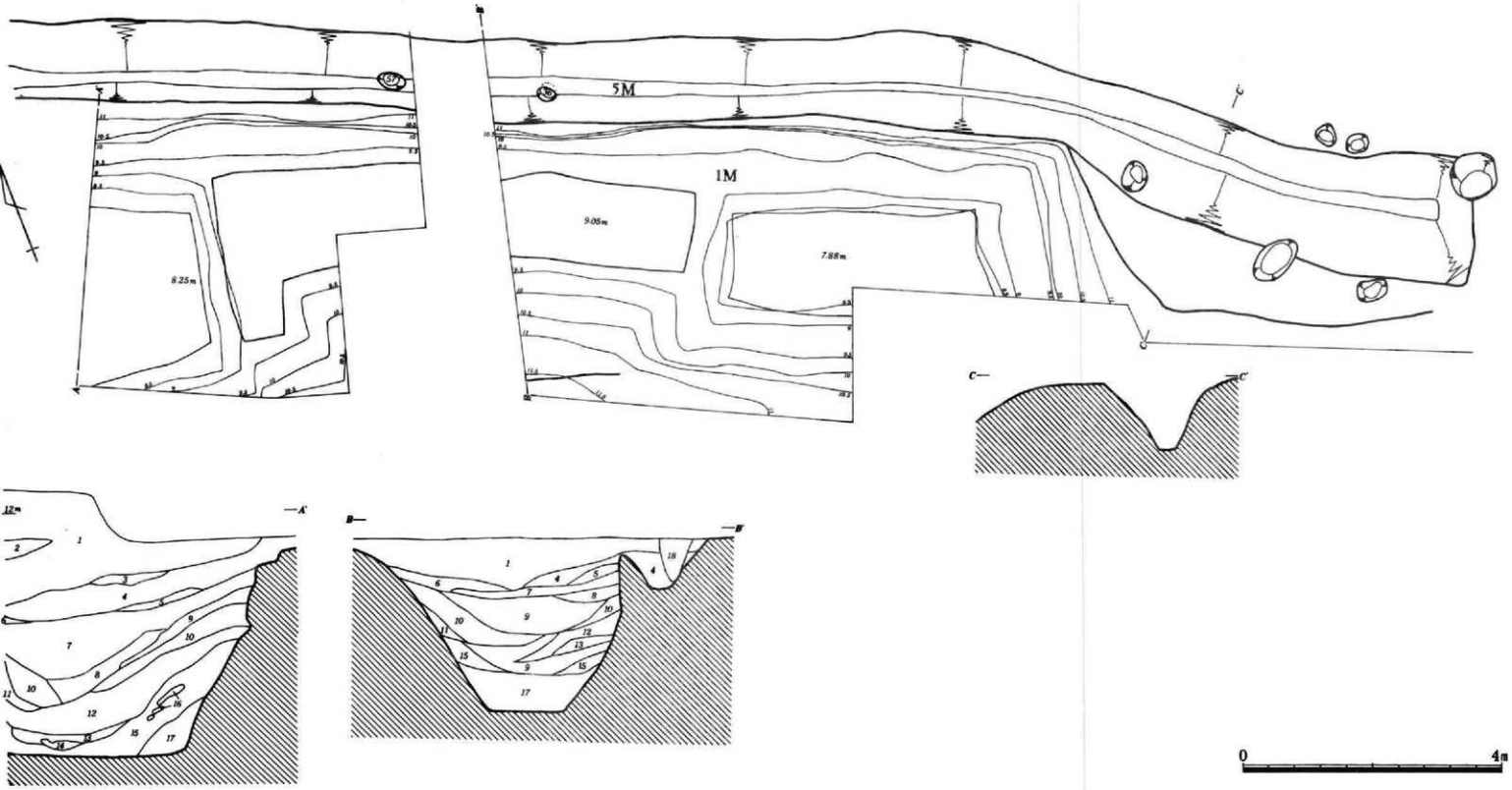
第125図　9号井戸址（1/40）

第4節　溝　　址

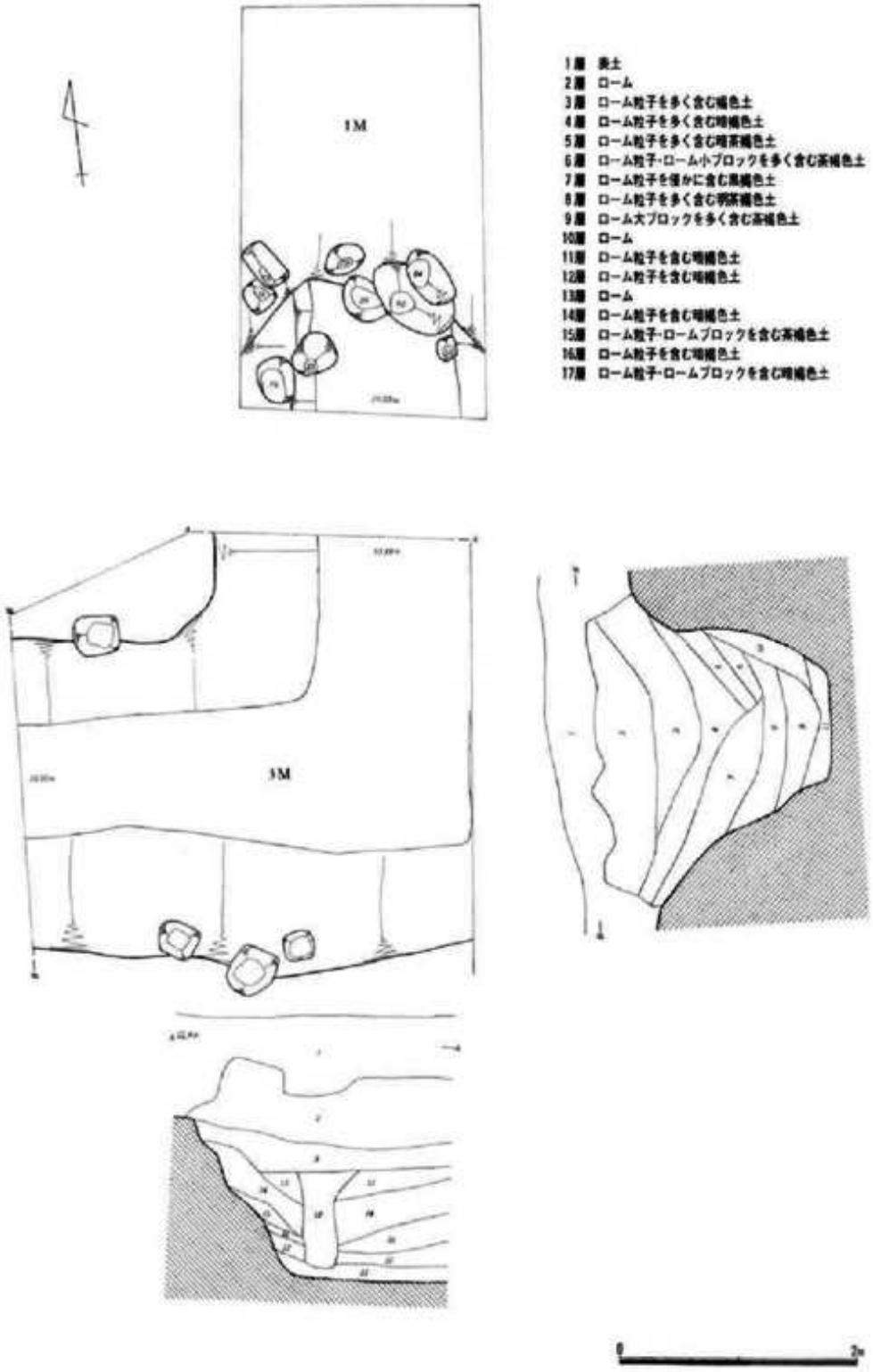
1号溝址（第126・127図）

調査区の南側に位置し、おおよそ東西に走る。41・50・51・53号住居址、30・32号土坑を切り、3号溝址が（G－5）グリッドで、4号溝址が（F－5）・（E－9）グリッドの2カ所でそれぞれ重複する。また、5号溝址は本溝址の北側に沿うように（E－1～4）グリッドにかけて存在する。

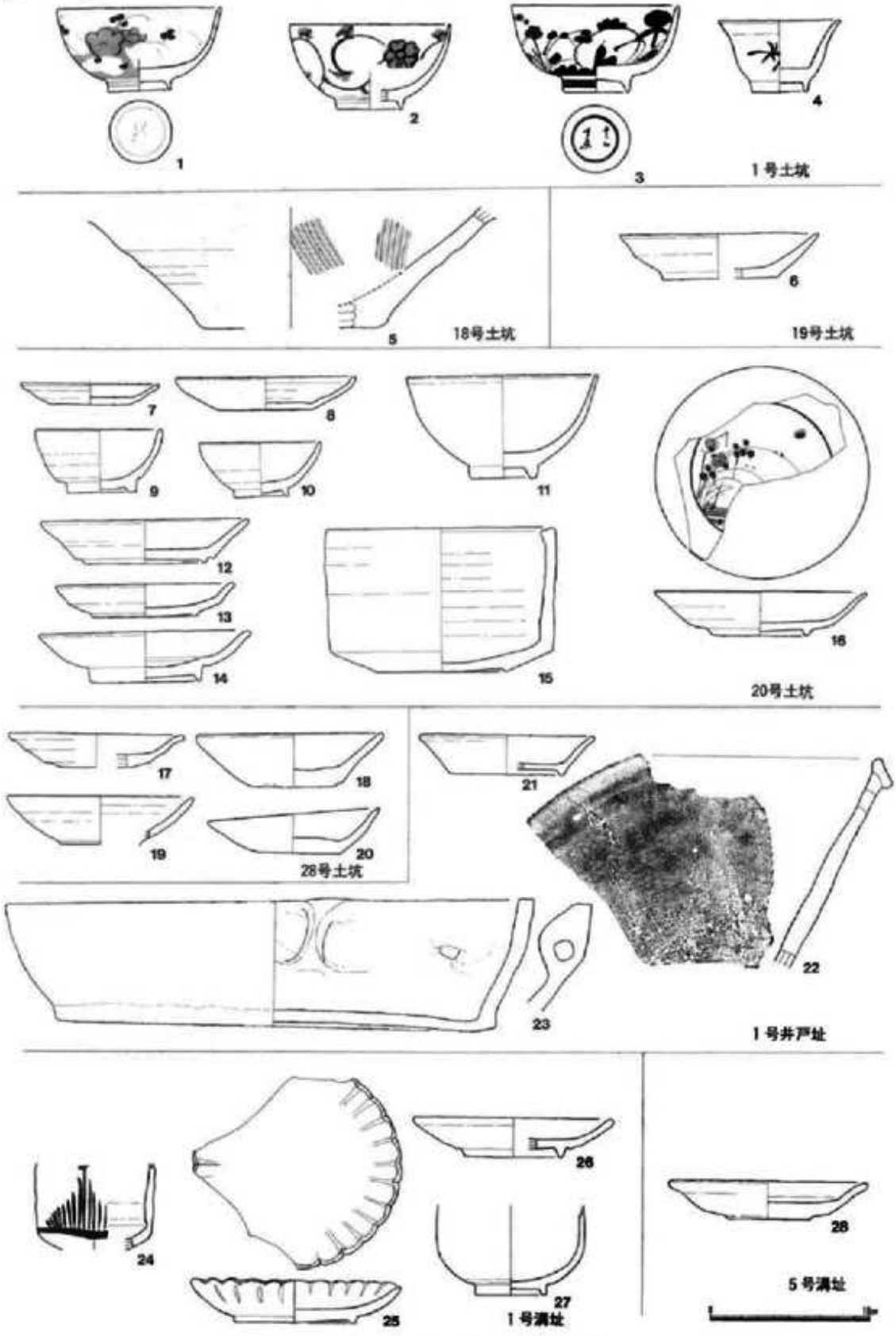
（E－2・3）グリッド区域は、本溝址で唯一南壁が確認されている。構造は縦断面でみた場合、確認面からの深さは西側で約3.2m（標高8.25m）、中央で約2.64m（標高9.05m）、東側で約3.6m（標高7.88m）を測り、中央部分に一段高い平坦面が構築されている。この一段高い部分の横断面をみると、上幅約4m、下幅約1.2mと他の部分より規模が小さくなっている。壁の立ち上がりは、南壁より北壁の方が比較的急斜面でオーバーハングぎみとなる。



第126図　1・5号溝址（1/40）



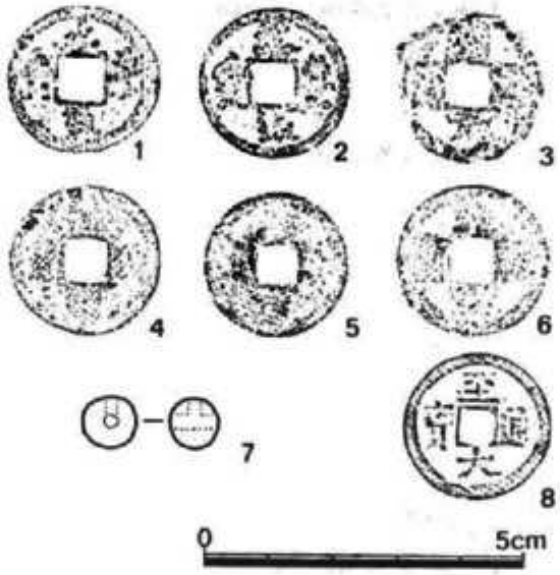
第127図　1・3号溝址（1/40）



第128図　土坑・井戸址・溝址出土遺物（¼）

（E－1～3）グリッドでほぼ東西方向に走っていた本溝址は、（E－2・3）グリッドで一旦南に屈曲し、（F－4）グリッドでさらに東に屈曲する。（F－5）グリッドで再度南に屈曲した後、また東に方向を変え僅かにカーブを描きながら伸びる。

（E－2・3）グリッド以外で本溝址の底面を確認できたのは（E－9・10）グリッドのみで、確認面からの深さ約4m（標高8.06m）を測る。溝底には高さ約1.2mの台形状の作り出し部が構築されており、さらに作り出し部上には4本のピット（深さ約70cm）が検出された。なお、昭和55年に実施した市史編さん室の発掘調査によれば、上幅12.2m、下幅1.6m、現地表面からの深さ4.7mを測る、箱薬研形の断面をもつものであることが判明している。



第129図　土坑出土遺物（⅚）

1号溝址出土遺物（第128図24～27、第130図8～11）

瀬戸・美濃系製品（24～27）

24は志野織部の向付と思われる。長石釉を施し、体部に鉄絵が施されている。25は灰釉菊皿である。これらの製品は、17世紀前半のものである。

26は灰釉稜皿、27は灰釉丸碗である。いずれも17世紀後半代の製品と思われる。

石製品（第130図8～11）

8は温石。滑石製でていねいに仕上げられている。一孔は両側からあけられている。それぞれの面には「道」「宥」の字が線刻されている。また、黒色の油脂状の物質が付着する。

9は硯のミニチュアか。

10・11は板碑片。10は二条線・月輪・真言の一部がみえる。11は紀年の部分である。

以上の遺物の中で、温石は（E－3）Gの溝底から、板碑片は（E－3）Gの覆土中の出土。他は3号溝址との接続部分の覆土上層から出土した。

3号溝址（第127図）

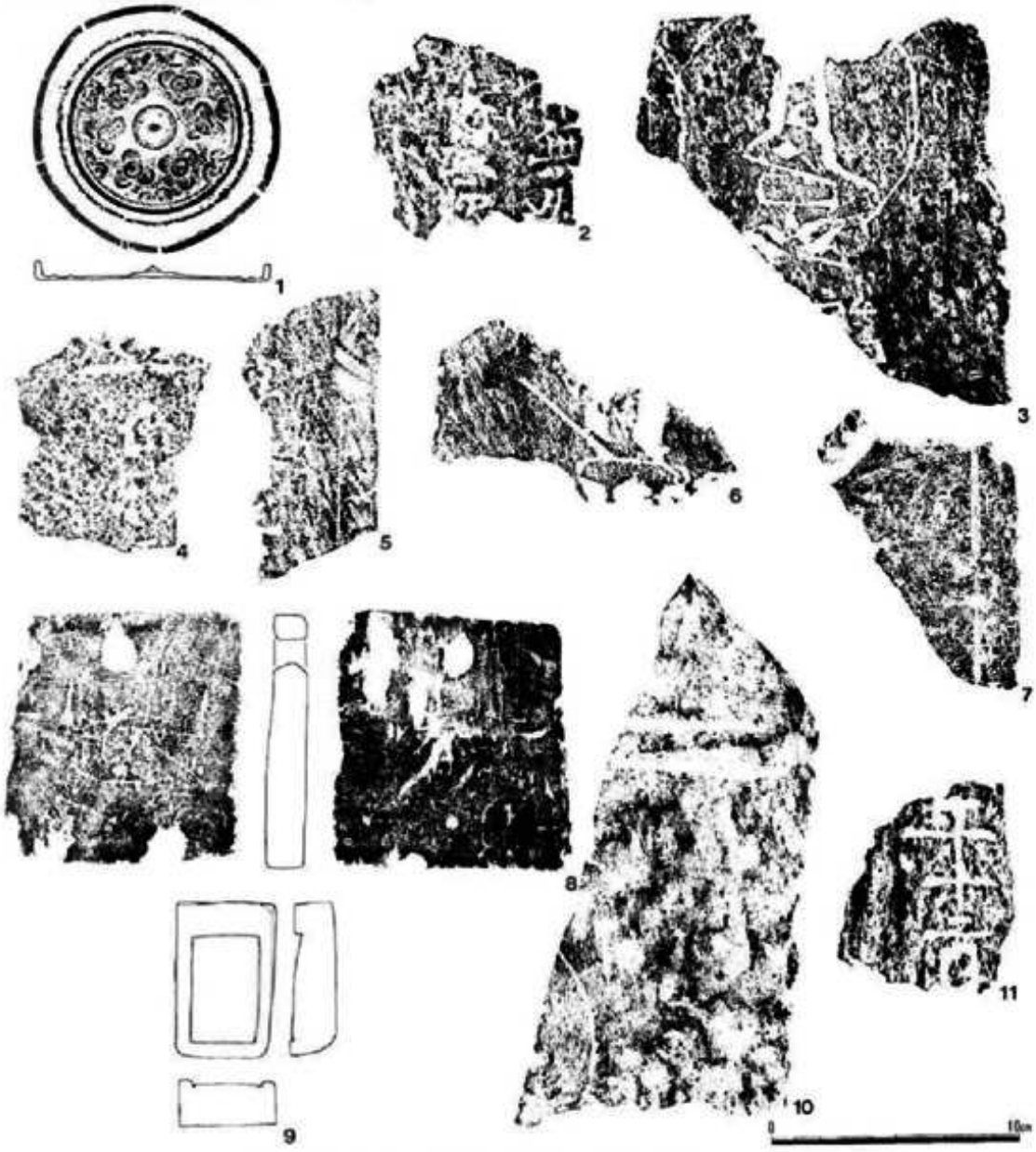
（G・H－5）グリッドで検出された。ほぼ東西に走向していた溝が、この部分で直角に屈曲し、北に向きを変えて1号溝址と合流する。規模は上幅約2.6m、下幅約1m、現地表面からの深さ約2.4m（標高10.3m）を測る。ただし、南北に走向する部分では下幅約1.4mと幾分広い。壁は北壁が急斜で、溝底は平坦である。断面は箱薬研形を呈する。覆土は全体的にローム粒子・ロームブロックを多く混入しており、また、堆積状態も不規則であるため、埋め戻された可能性が強い。なお、1号溝址と接する部分の覆土の堆積状態の観察では両溝址の同時埋没の状態が確認できた。

3号溝址出土遺物（図版44）

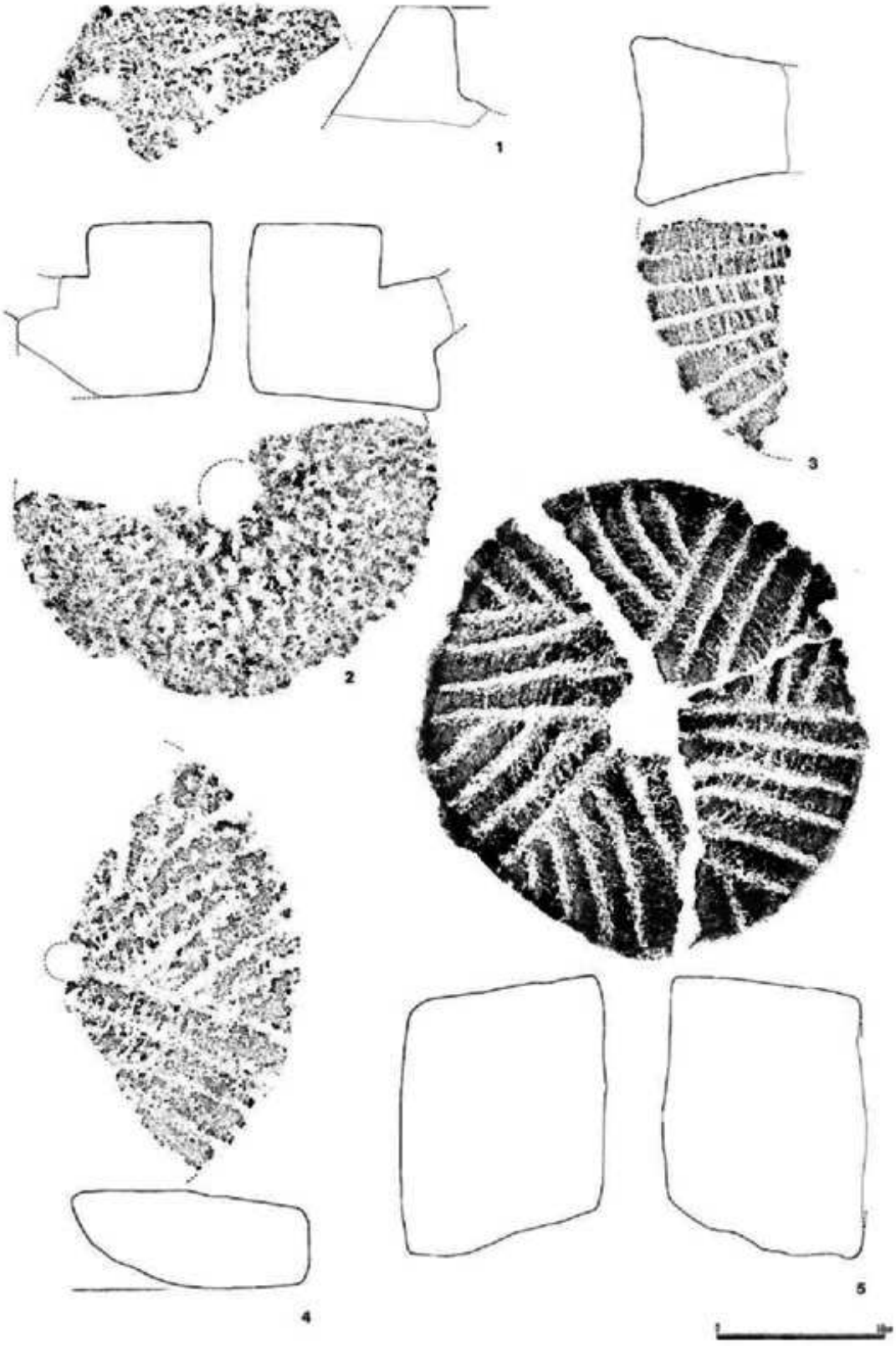
常滑の甕片が出土している。肩部の破片には緑色に発色した自然釉がかったものもある。

5号溝址（第126図）

（E－4）グリッドから始まり、1号溝址に沿ってほぼ西に伸びる。上幅1.2～1.9m、下幅0.2mを測る「V」字溝に近い形態をもつ。図示した土層図では明らかではないが、覆土堆積状態は1号溝址と同時埋没を示す。また、（E－4）グリッドで1号溝址が屈曲する部分では、それにあわせるように5号溝址も屈曲する。前述した3号溝址を含めて同時に存在したと考えられる。なお、1号溝址の幅の狭まる（E－2・3）グリッド部分では、5号溝址溝底に2本のピットが検出された。昭和55年に実施された市史編さん室の発掘調査でも、1号溝址の北側に沿って5号溝址の延長部分と思われる溝址が検出されている。



第130図　土坑・井戸址・溝址出土遺物（⅓）



第131図　土坑出土遺物（1/4）

5号溝址出土遺物（第128図28、図版44）

瀬戸・美濃系灰釉皿（28）

口縁部の内外に緑色に発色した灰釉を施した皿である。胎土は白色で砂っぽい。やや小さめの底部は回転糸切り痕を残している。15世紀後半代の製品と思われる。

常滑片口鉢（図版44－1）

片口鉢の小破片である。器内面は使用が激しく摩滅が著しい。口縁部は平らに作り外側に端部が突き出ている。茶褐色に発色している。14世紀代の製品と思われる。

このほか常滑甕・片口鉢の破片が出土している。

第Ⅲ章　ま　と　め

第1節　古墳時代後期の住居址

今回の発掘調査で検出された住居址は60軒を数えたが、その大部分の52軒は古墳時代後期のものであった。ここでは該期の住居址について若干のまとめを行いたい。

（1）住居址の平面形と規模

表2は、住居址の規模をグラフ化したものである。なお、横軸にはカマド主軸方向に平行する辺の長さを設定した。

まず平面形であるが、二辺の長さの差が50cm以下であるものが80%を越え、正方形に近い住居址が圧倒する。

次に規模についてみてみると、5m台・6m台のものが中心を占める。また、3m台の超小型のもの、8m台の超大型のものも僅かであるが存在する。なお、時期が下ると小型化する傾向がうかがえるようだ。

（2）炉・カマド・貯蔵穴

確実に炉をもつ住居址としては57Hがある。17Hはカマドをもつ住居址であるが、床面上に焼けた部分がみられた。14Hはカマド部分が破壊されていると思われる住居址であるが、これも床面上に焼けている部分がある。共に炉であった可能性がある。

カマド本体もしくは痕跡などが確認され、その方位が判明した住居址は34軒あった。カマドは北壁に構築されるものが圧倒的に多く25軒を数え、次いで東壁が7軒、西壁が2軒あった。ただし、24・45Hは北壁から東壁にカマドが移動している。

各壁に構築されたカマドはその中央になく、左右いずれかに寄るといわれ、貯蔵穴の位置とも密

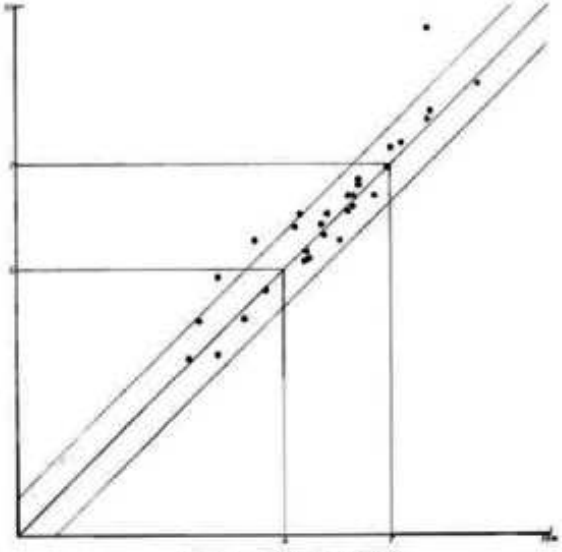
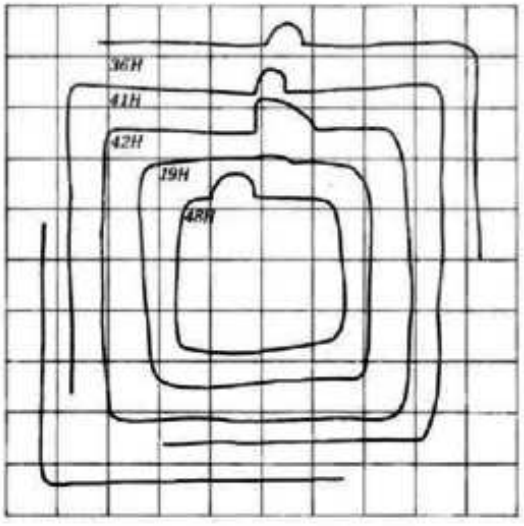


表2　住居址の規模



第132図　住居址の規模模式図

接な関係があるとされる（柿沼　1979）。本遺跡でその位置がわかるものは、北壁にカマドがあるものでは右寄り13軒・左寄り7軒、東壁にあるものは左右3軒ずつ、西壁では2軒とも左寄りであった。

カマドはすべて粘土により袖部・天井部が構築されるが、6・9・12・15・19・23・27・40・41・48・49・51・54Hではロームを馬蹄形状に隆起させ残し、その上に粘土を被覆させて袖部としている。また、15・41Hでは甕形土器を置いて袖部の補強としていた。

貯蔵穴は31軒の住居址にみられた。平面形は長方形が多く、楕円形もある。位置は、カマドの構築位置の判明している21軒の住居址では、カマドが右寄りのものはその右に、左寄りのものはその左にというように規則性がある。また、貯蔵穴の長軸はカマドの設置された壁と平行になる。これらのことからすると、カマドの方位・位置が不明の場合でも、貯蔵穴が検出されればカマドの方位・位置がわかることになる。つまり、7・18・28・30Hは北壁左、26・32・44・53Hは北壁右、40Hは東壁左、46Hは西壁左となる。

ここで、カマドの方位・位置をまとめると、

北壁右－3・8・11・13・17・19・21・23・26・31・32・36・41・42・44・49・53H

北壁左－1・7・12・15・18・28・30・33・47・56・58H

東壁右－16・45・54H

東壁左－20・24・40・51H

西壁左－6・46・48H

という結果になる。概して古期の住居址では左カマドが多い傾向にあるようだ。

（3）柱穴・壁溝

主柱穴は、大部分の住居址では各コーナー部の4本が基本となる。また、主柱穴以外の補助的な柱穴は存在しない。21・48Hといった小型の住居址にあっては無柱穴のものもある。

柱穴間の距離は、住居址の規模の大きさと比例して広くなるのが当然のことと考えられるが、細部では異同がある。例えば、柱穴間距離2.6m前後を測る45・56Hでは、住居規模が前者で520×544cm、後者で534×542cmとほぼ同規模であるのに対して、柱穴間距離約1.9mを測る9・33Hでは、400×？・514×540cm、柱穴間距離3mの23a・31Hでは694×696・572×584cm、柱穴間距離4.6m前後の36・41Hでは、850×864・700×730cmと住居規模に1m以上の差がある。つまり、柱穴間が同距離でありながら住居規模が小さな住居址は、柱穴がよりコーナーに寄っていることになる。表3は柱穴間距離、壁と柱穴の間の距離を表わしたものであるが、柱穴間距離が大きな変異幅をもつのに対して、壁－柱穴間

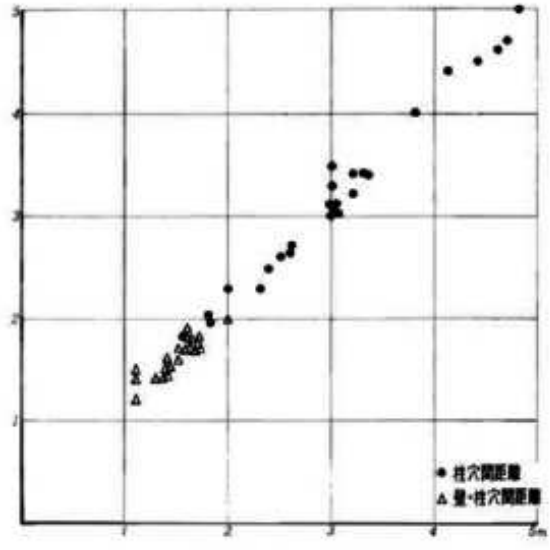


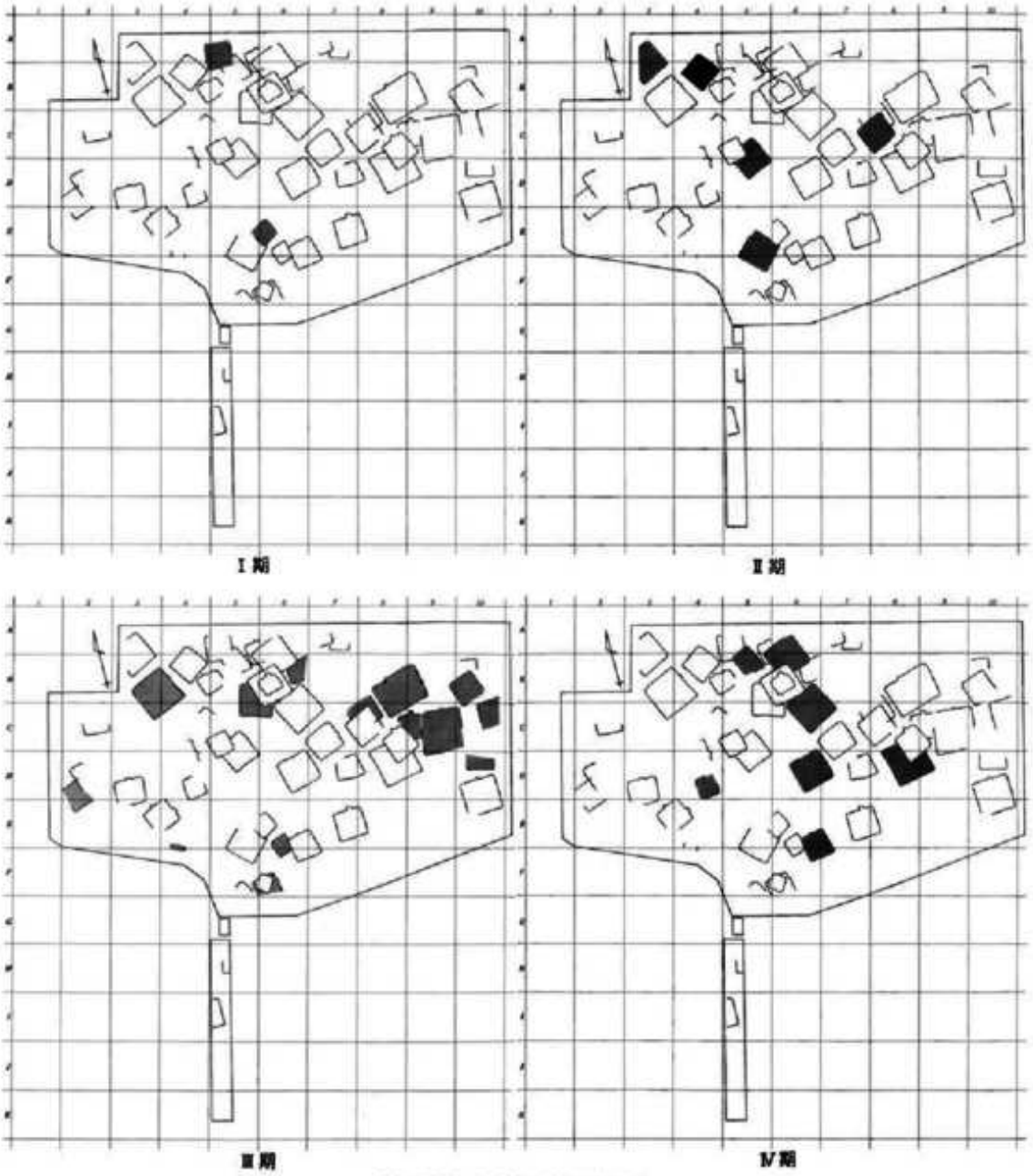
表3　柱穴間・壁－柱穴間距離

距離は変異幅が非常に小さい。このことから、柱穴の位置は住居規模の大小にかかわらず、壁からの距離に関してはさほど変化するものではなく、住居の大きさを決定するのは、柱穴間の距離であることがわかる。これらのことは、住居の上屋構造になんらかの影響を与えたと考えられる。今後の問題点としておきたい。

壁溝が全周するか部分的にでも巡る住居址は42軒あった。他は完掘できなかったり破壊が著しいもので、必ずしも壁溝がなかったとは断定できない。総じて壁溝が設けられるのが一般的である。

（4）住居址群の変遷

該期の住居址52軒中44軒については、切り合い関係や出土土器の検討から7期にわけることが可



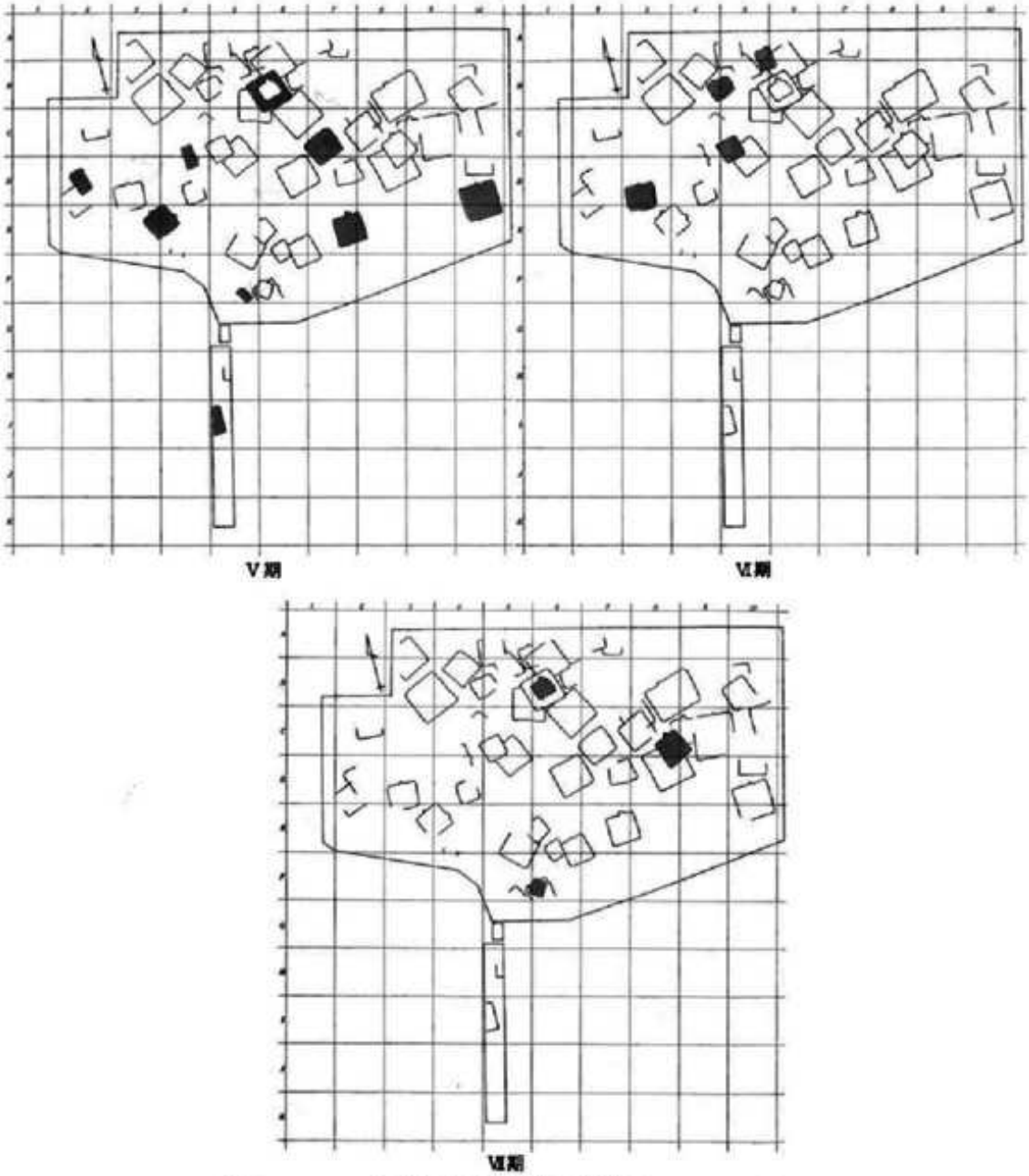
第133図　住居址群の変遷1

能になった。ここでは、各期の住居址群の変遷についてみていきたい。

Ⅰ期

11・57Hの2軒が該当し、調査区の南北に大きく離れて位置する。11Hは出土土器から和泉式期としてよいのかもしれない。57Hは炉をもつ住居址で、後続する時期に属する54Hに切られる。出土土器は非常に少ないが、当て板痕を磨り消した須恵器壺形土器の破片が出土している。また、大部分が破壊され詳細が不明な39Hには、小破片であるが格子目叩き目痕を残す須恵器がある。この住居址もこの時期に入る可能性がある。

Ⅱ期



第134図　住居址群の変遷2

12・18・22・28・54Hの5軒が該当する。調査区全域に散漫に分布し、住居規模は5～6mの中型のみで構成される。カマド位置は、確認できたものでは全て左カマドであった。なお、22Hはこの時期の中でもやや下る可能性がある。28HはⅢ期の8Hに切られるためにこの時期に入れた。

Ⅲ期

7・8・14・23・24・29・33～36・46・50・51・58Hの14軒が該当し、最盛期をむかえる。調査区の北側を東西に密に並ぶ1群と、南側にまばらに分布する1群がある。住居規模は3m台の超小型のものから8mを越える超大型のものまでバラエティーに富むが、北側の群により大型のものがそろう。カマド位置は、判明したものでは左カマドが優位を占める。なお、この時期は重複する住居址があることからもわかるように更に細分が可能で、7・14・36・58Hはこの時期でもやや後出するようだ。

Ⅳ期

3・6・17・20・32・47・56Hの7軒が該当する。調査区のほぼ中央に分布し、住居規模は大・中・小とあるが、北東側にあるものが大型化の傾向にあるようだ。カマド位置は、この時期になって左右がほぼ同数となる。

Ⅴ期

1・16・30・40～42・44・45・53Hの9軒が該当する。調査区全域に散漫に分布し、住居規模は中型のものが大勢を占める。カマド位置は、右カマドが優位となる。なお、この時期では16・44・45Hが後出的となろうか。

Ⅵ期

9・15・19・49Hの4軒が該当する。調査区西側に散漫に分布し、小型の住居址が多くなる。カマド位置は、右カマドが多い。

Ⅶ期

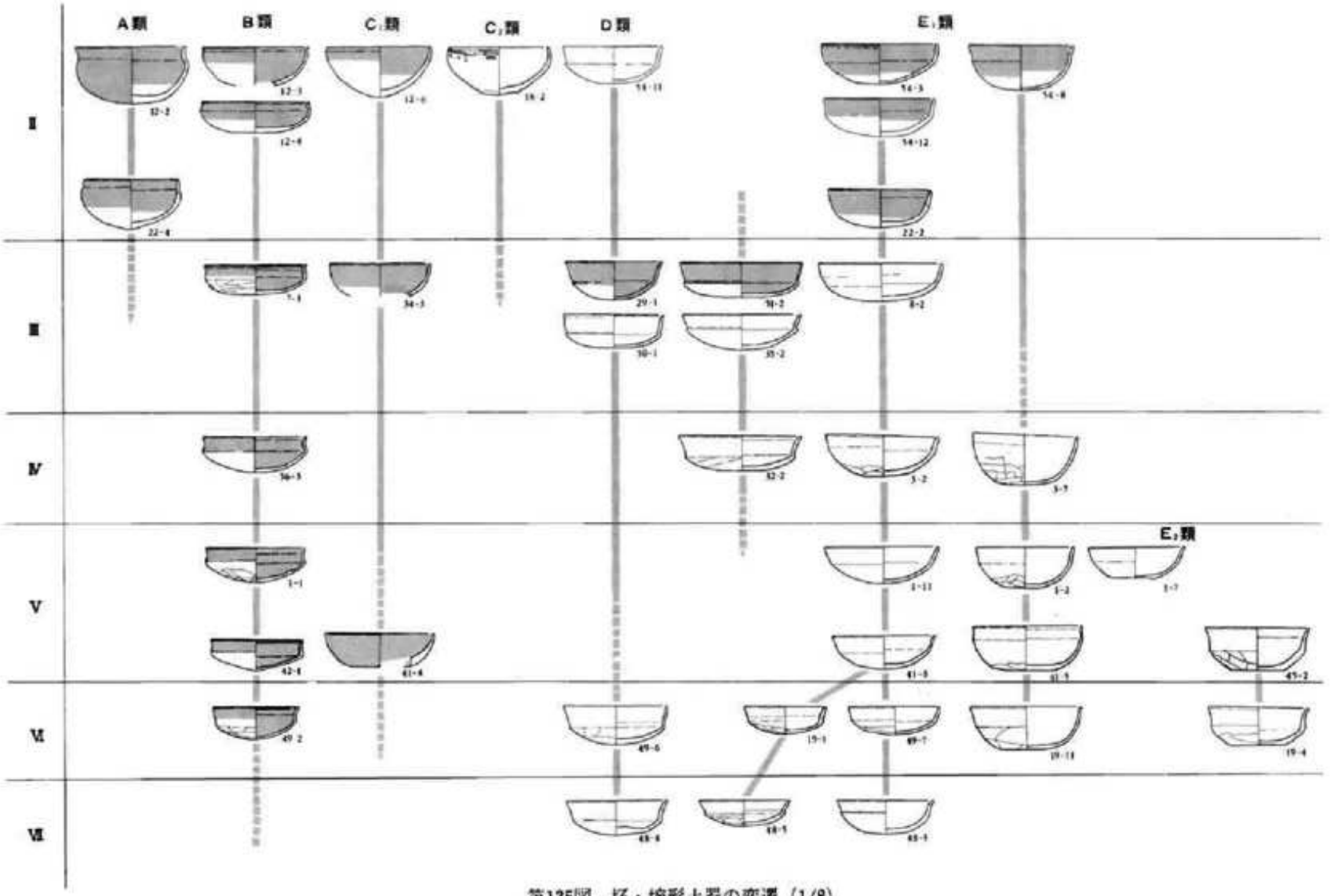
21・31・48Hの3軒が該当する。調査区にまばらに分布し、住居規模の小型化が著しい。カマド位置は、右カマドが優位を占める。

第2節　古墳時代後期の土器

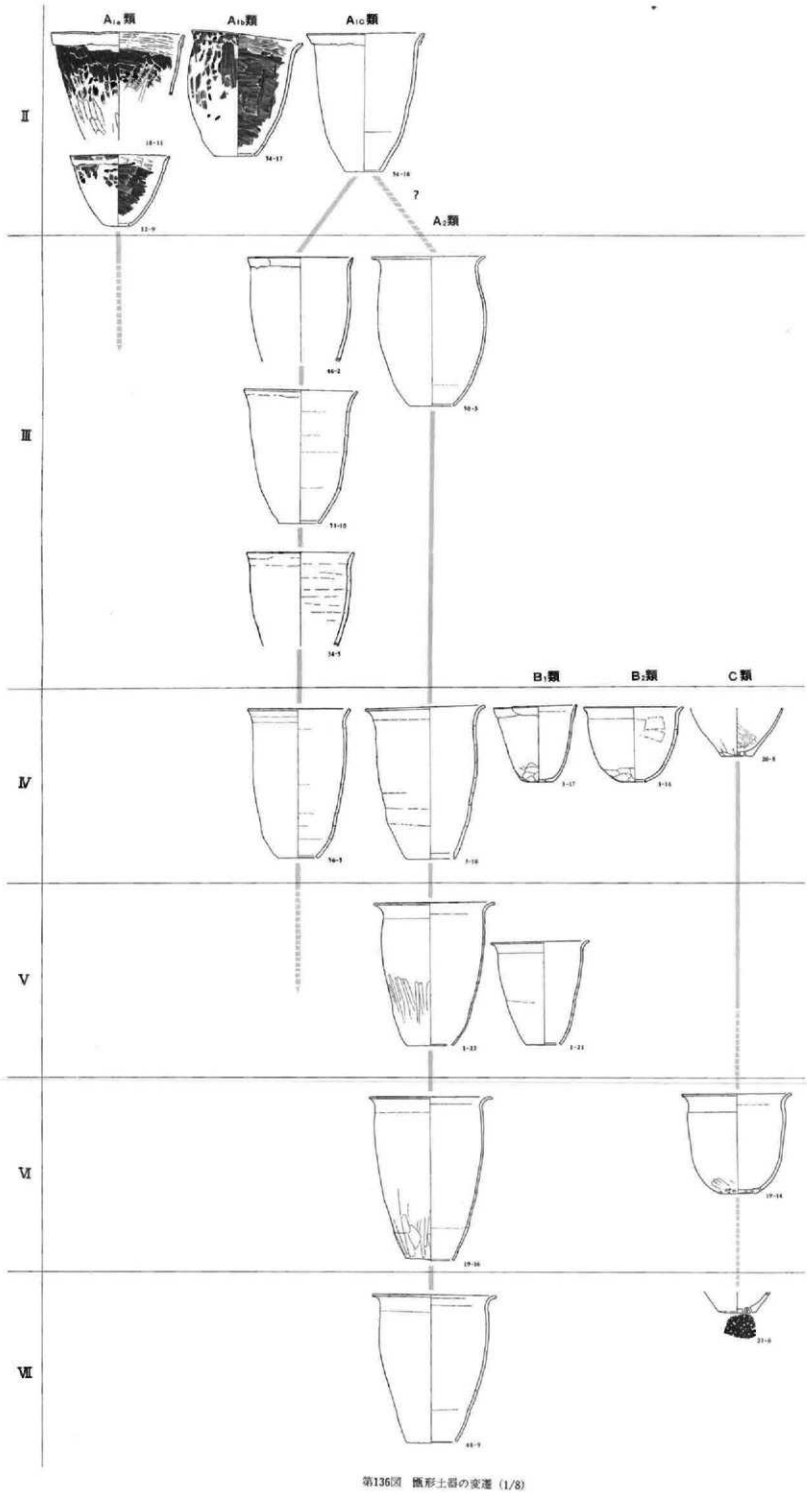
本報告城山遺跡では、総数60軒の住居址を検出した。中でも古墳時代後期の所産のものは52軒を数え、本遺跡の特徴を最もよく示していると言える。従って、本稿では古墳時代後期について的を絞り、住居址の切り合い関係で得られた良好な資料を基本縦軸とし、かつ各器種間における形態分類の成果を横軸に組み入れ、土器様相の変遷を試みるものである。

Ⅰ　土器の分類

本遺跡で出土した古墳時代後期の土器は、坏・椀形土器（以下、総称して坏）[註1]、高坏形土器（以下、高坏）、鉢形土器（以下、鉢）、甑形土器（以下、甑）、甕形土器（以下、甕）、壺形土器（以下、壺）、甑形土器（以下、甑）、蓋形土器（以下、蓋）に分類できるが、高坏・鉢・壺・甑・蓋の出土は坏・甑・甕に比べ、極めて弱体である。又、須恵器の僅少さに比べ、土師器は多量に出土し、さらに普遍性



第135図　坏・埦形土器の変遷（1/8）



第136図　甕形土器の変遷（1/8）

を兼ね備えている。よって、本遺跡で主要器種と思われる土師器坏・甑・甕に重点を置いて、以下分析を進めることにする。

1．形態上の分類

坏（第135図）

本遺跡で実測可能な坏の総数は、146点（そのうち須恵器は3点）を数え、その他小破片も数多く出土している。形態分類は、A～F類に大別し、8分類に分けたが、さらに細分の可能性が十分考えられる。

A類　頸部にくびれを有し、器高が高く丸底のもの。

B類　「S」字状の口縁を呈するもの。

C類　底部から口縁部にかけて、大きく内湾するもの。

1　丸底のもの。

2　平底のもの。

D類　有段口縁を呈するもの。

E類　有段口縁が不明瞭で、稜をなすもの。

1　丸底のもの。

2　平底のもの。

F類　その他。

甑（第136図）

実測可能な甑の総数は、30点を数える。又、C類多孔式のものについては、その特徴を有するものとして少数であったため、小破片においても実測した。形態分類は、底部形態の相異を基準とし、A・B・C類に大別し、7分類に分けた。

A類　筒抜け式のもの。

1　複合口縁を呈するもの。

a　口縁部から底部にかけて、大きく直線的にすぼまるもの。

b　胴部に張らみをもつもの。

c　長胴で、口縁部から底部にかけて、ゆるやかにすぼまるもの。

2　単純口縁を呈するもの。

B類　単孔式のもの。

1　複合口縁を呈するもの。

2　単純口縁を呈するもの。

C類　多孔式のもの。

甕（第137図）

実測可能な甕の総数は、109点（そのうち須恵器は2点）をかぞえる。形態分類は、胴部形態を基準とし、A～E類に大別し、7分類に分けたが、さらに細分の可能性が充分考えられる。[註2]

A類　頸部が「く」字状に屈曲し、胴部が球形状を呈するもの。

B類　胴部に張らみを有するが、長胴であるもの。

C類　胴部が直線的に長いもの。

D類　胴部に張らみを有するもの。

1　大型のもの。

2　中型のもの。

3　小型のもの。

E類　その他。

2　調整技法上の分類。[註3]

〈内面〉

a類　ハケ目[註4]

1　ナデが施される。

2　ナデが施されない。

b類　ナデ

1　ていねいに施される。

2　粗雑に施される。

c類　磨き（的）

1　密に細かい。

2　底部付近を中心として施される。

3　縦方向に細長く、間隔があいているもの。

〈外面〉

a類　ハケ目

1　ナデが施される。

2　ナデが施されない。

b類　ヘラ削り

1　ナデがていねいに施される。

2　ナデが粗雑に施される。

c類　磨き（的）

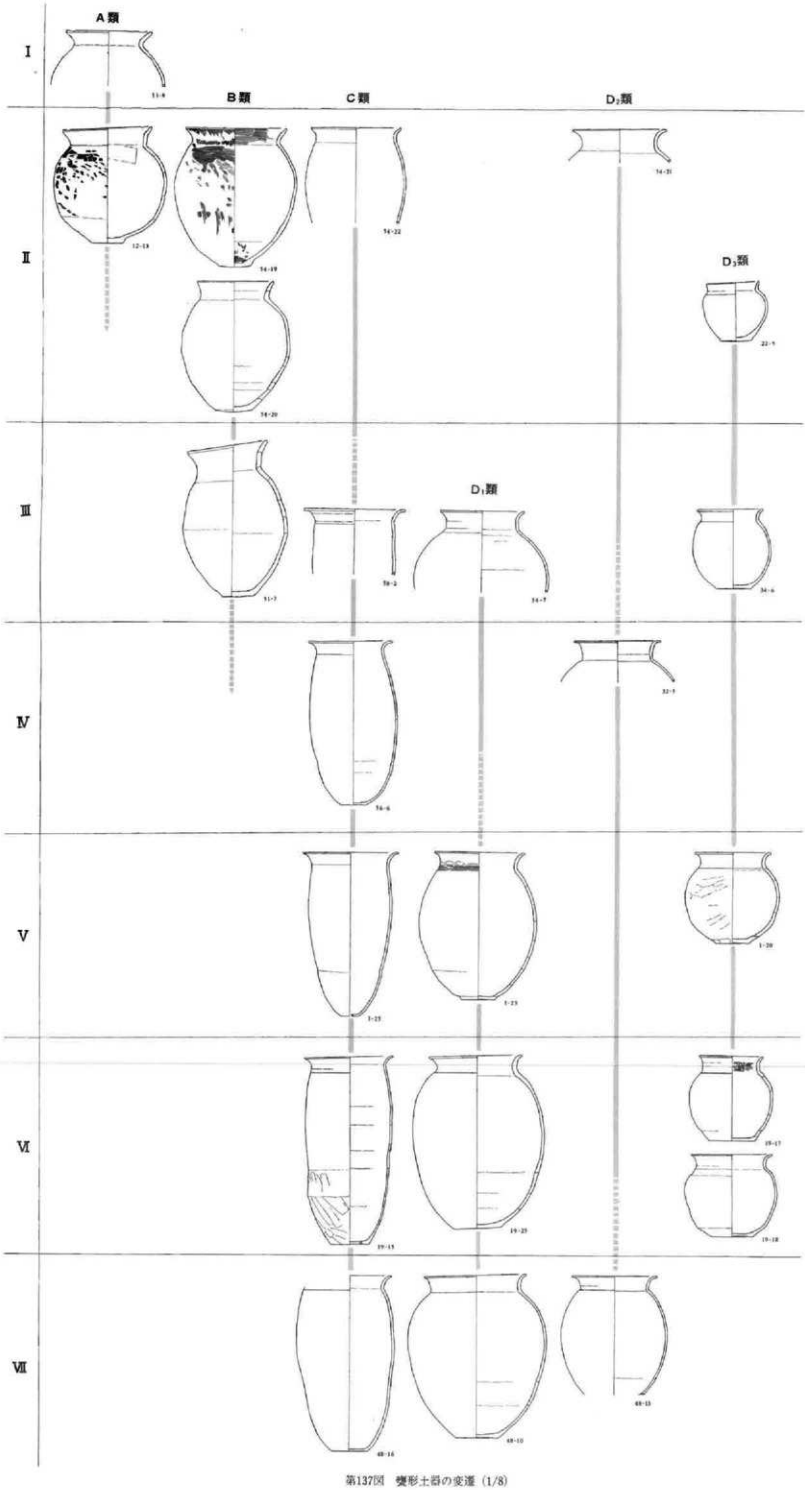
1　密に細かい。

2　底部付近を中心として施される。

3　縦方向に細長く、間隔があいているもの。

II．土器様相の推移

以上、大まかであるが、主要器種と思われる坏・甑・甕について形態上の分類を行った。又、本遺跡においては、幸いにも当該期における住居址間の切り合い関係が認められ、加えて分析上、欠くことのできない調整技法上の特徴を検討することにより、本遺跡当該期の土器を7つの時期に区分することができた。以下、各期に従い、高坏・鉢・壺をできるだけ含ませた上で、順次説明してゆきたい。



第137図　甕形土器の変遷（1/8）

Ⅰ期　11・57H

11・57H出土の土器は、前段階和泉式期の特徴を多分に有している。高坏・壺・甕が主なものである。

（1）坏

小破片のみで図示できなかった。

（2）高坏

11H－1は脚部である。脚柱部は裾部へ向かって直線的に開き、裾部は屈曲し、さらに外反する。内外面ていねいにナデられている。

（3）鉢

出土しなかった。

（4）甑

出土しなかった。

（5）甕

11H－6は球胴状のもので、A類であろうか。内b_1・外a_1が施される。

（6）壺

11H－2～4は胴部がいわゆる"算盤玉"状を呈する小型のもの、11H－5は有段口縁を呈した球胴の大型のものと2タイプに分けられる。2は内a_1・外b_1c_1、3は内b_2・外b_1、4は内・外b_1が施される。5は内b_1・外b_1c_1を基調とするが、特に有段口縁の内面にb_1c_1が施される。

Ⅱ期　12・18・22・54H

22H出土の土器は、やや後出的と思われる。

（1）坏

A類は前段階和泉式期の系譜下にあるもので、平底から丸底に変化したものと考えられる。[註5] B類はいわゆる「比企型坏」とする赤彩の施された土器である。又、形態上やや有段が薄れているが、須恵器坏蓋を模倣したと思われるいわゆる「模倣坏」54H－11が、この段階で確実に伴っている。

○A類　12H－2、22H－4、54H－5がある。12H－2は内b_2・外b_2c_1とやや粗い。22H－4はやや小型で頸部のくびれが弱く、内b_1・外b_2が施される。54H－5は内b_1・外b_1c_1で、内面には暗文がみられる。

○B類　12H－3は底部から体部にかけて半球状を呈するもの。[註6] 12H－1・4、54H－6は頸部に丸味を有するもの。18H－3は頸部に明瞭な稜を有するもの。と、さらに細分が可能である。しかし、この類については、時期を隔てたⅥ期においても基本として、内b_1・外b_1c_1と共通する。

○C類　C_1類としたものに12H－6がある。[註5] 内b_1・外b_2が施される。C_2類に18H－2があげられるが、1例のみで以後、小破片すらみられなくなる。内b_1・外a_1c_2が施される。

○D類　54H－11のみである。口唇部内面に1条の沈線を施すが、やや有段が薄れ、外面における調整も粗雑な観をもつ。赤彩が施されているかもしれない。内b_1・外b_2である。

○E類　22・54HからE類が出土している。口径は13cm前後を平均とするが、54H－3のように14cmを越える大型のものもある。又、54H－8は器高が高く、半球状を呈したものである。当該期では、外cを施した土器が顕著であり、同時に内・外a_1が散見できる。

（2）高坏

12H－8、18H－5～8、54H－16をあげられるが、すべて破片である。12H－8は「ハ」字状を呈する短かい脚部をもち、他は柱状の長い脚柱部に大きく外反する裾部をもつものである。前者はいわゆる「鬼高型」、後者は「和泉型」と呼ばれるものであろう。18H－6の脚柱部外面にはハケ目痕が僅かに残る。

（3）鉢

12H－7は体部から口縁部にかけて、大きく内湾するものである。器肉が薄く、端正に作られており、内b_1・外b_1c_1が施される。

（4）甑

A_1類に限られる。調整技法については、ハケ目痕を顕著に残すものと54H－18のようにハケ目を完全に消去してしまうものとがみられる。

○A_1a 類　18H－11は胴部下半を欠損しているが、一応大型のもの、12H－9[註7]、18H－9は小型のものとすることができる。18H－11は口縁部が粘土帯貼付けによる複合口縁を呈し、器面には非常に細密なハケ目痕がみられる。内・外a_2c_3が施される。12H－9、18H－9は口縁部下端にのみ粘土帯をまわし、複合口縁を作出している。18H－9の外面にはハケ状工具の先端で刺突したとみられる痕が残っている。

○A_1b 類　12H－10、18H－10、54H－17がある。複合口縁は口縁部下端にのみ粘土帯をまわし作出されたものである。12H－10は口唇上にうっすらと1条の沈線がまわり、内a_1c_1・外a_1が施される。18H－10は内・外a_1、54H－17は内a_2・外a_2c_2が施される。

○A_1c 類　54H－18がある。口縁部は粘土帯貼付けによる複合口縁を呈す。当該期においては唯一、ハケ目を完全に消去しているものである。内・外a c_1が施される。[註8]

（5）甕

当該期における甕は各期を通じ、最も多種多様である。特に、B類においては著しく、底部・口縁部といった細部にわたりバラエティーがある。調整は甑同様に、ハケ目痕を顕著に残すものとハケ目を完全に消去してしまうものとがある。

○A類　12H－13がある。和泉式期の系譜下にあると思われ、D類と区別した。外面には細密なハケ目痕がみられる。内b_1・外a_1c_1が施される。

○B類　細部にわたりバラエティーがみられ、こうした特徴をもつ土器群が当該期の主流となる。具体的に、底部にはやや窪みをもつもの・丸底ぎみのもの・平底のものがあり、口頸部においても「く」字状に屈曲するもの・口唇部のみ内傾するもの・「コ」字状を呈するものがある。[註9]

○C類　54H－22は胴部最大径が小さく、B類との差は明瞭であろう。口縁部外面には僅かに、粘土帯の貼付け痕がみられる。口縁部の強化を図ったものであろうか。内外面ともていねいにナデられている。

○D類　D_1類に54H－23が可能性としてあげられる。口唇上には面取りが施されている。D_2類に54H－21があげられ、大きく外反した口縁部に尖がった口唇部をもつ。D_3類は22H－5がある。小型であるが器肉が厚く、どっしりと重い。内b_1・外a_1が施される。

Ⅲ期　7・8・23・24・29・34・35・36・46・50・51・58H

7・36・58H出土の土器はやや後出的と思われる。

（1）坏

A・C類の弱体化に伴ない、大型有段坏[註10]の盛況をみる。当該期はD類（模倣坏を除く。）・E類に関する限り、製作技法上、各期を通じて群を抜いて精巧に作られている。又、Ⅱ期にみられたハケ目痕を残すものは全くみられない。

○A類　小破片であるが、34H－4があげられる。以後、全く姿がみられなくなる。

○B類　7Hに出土がある。Ⅱ期のものに比べ、器高が低くやや扁平になり、口唇部内面直下には1条の細い凹線がみられる。

○C類　小破片であるが、34H－3があげられる。Ⅱ期12H－6に比べ、内面の赤彩部位が底部付近にも及んでいる。

○D類　口径15cmを越える大型有段坏の盛況をみる。23H－1、24H－1、51H－2は一見、同一個体かと思えるほど、色調・胎土・調整は相似ており、内b_1・外c_1が施される堅緻な赤彩土器である。8H－3・4[註11]、23H－2・3、24H－2、35H－2～4は赤彩が施されないものである。23H－2・3、35H－3・4は特に、内b_1・外c_1が施されるが、すべて精巧なものばかりである[註12]。又、模倣坏が8H－1、29H－1、46H－1、50H－1にみられる。8H－1はⅡ期54H－11に比べ、有段が薄れ、さらに口唇部内面の沈線は消滅している。29H－1、46H－1は口唇部内面に鋭い面取りが施され、50H－1は口唇部内面直下に1条の細い沈線がまわる[註13]。模倣坏はすべて内・外b_1が施される。

○E類　E_1類のみ出土している。当該期では赤彩を施さないものを主流とする。又、D類同様に精巧なものばかりで、特に8H－2は内面にまでていねいに内c_1を施している。

（2）高坏

8H－5、22H－6は坏部、23H－6、51H－5は脚部が残存する。坏部は全体に器高が残く、ゆるやかに内湾するタイプと口縁部が僅かに外反するタイプがある。脚部は脚柱部が太身で短かく、裾部との境は不明瞭である。

（3）鉢

51H－3・4がある。3は底部がやや丸底ぎみのもので、内a_1c_3・外b_1c_2が施される。内面は暗文を思わせるようである。4は内b_1・外b_1c_1が施される[註14]。

（4）甑

Ⅱ期でみられたハケ目痕を顕著に残すものは消滅してみられない。又、複合口縁も明瞭なものから不明瞭なものへと推移していく傾向にある。その中で、単純口縁を呈するものが突如出現する[註15]。調整技法についても、前者が「ハケ目＋磨き（的）」手法を特徴とするのに対し、後者は「ヘラ削り＋ナデ」手法を特徴とするなど相違する。

○A_1c 類　34H－5、46H－2、51H－10がある。Ⅱ期54H－18の系譜下にあるもので、よく観察するとハケ目痕が僅かに認められる。内・外a c_1が施される堅緻な土器である。

○A_2類　50H－3がある。前段階にはみられなかったもので、調整上「ヘラ削り＋ナデ」手法を

特徴とする単純口縁の土器である。やや胴部に丸味を有するものの、以後普遍的にみられる大型甑の初源的なものであろう。

（5）甕

A類は消滅する。さらに、II期B類のバラエティーも減り、かなり収束された傾向にある。又、ハケ目痕の消去化に伴ない「ヘラ削り＋ナデ」手法を特徴とする土器が顕著になり始める。

○B類　口縁部がやや直立ぎみに外反し、底部が平底で、器肉が厚くどっしりしたものが目立つ。調整上、ハケ目痕の消去化がほぼ達せられたと言えよう。

○C類　58H－2がある。胴部最大径はII期54H－22と比べ、さらに小さくなっている。又、大きく外反する口頸部の途中に、僅かな稜を有する。内・外b_1が施される。

○D類　D_1類に23H－7を可能性としてあげられるが、未だ確かではない。しかし、34H－7にその確立をみることができよう。D_2類に34H－6がある。II期22H－5と比べ、やや大型で口縁部の外反が強い。内・外b_1が施される。

IV期　3・6・17・20・32・56H

（1）坏

III期において盛況した外c_1を特徴とする大型有段坏はみられなくなり、かわってE類が以後、普遍的に存在するようになる。又、当該期を境にして、外c_1が施されるものはB類のみに限定され、しかも、B類を除くすべてに、外b_2が顕著になる傾向がある。

○B類　56Hに良好な資料がある。いずれも相似ており、口径13cm前後を測る・口唇部内面直下にやや太めの沈線がまわる・頸部に稜を有する・底部が尖底状を呈するなど定型化の観がある。3H－1は底部が尖底状を呈することを除いては、56Hのものに類似している。

○D類　32H－2はIII期でみられた大型有段坏の名残りとも言える土器で、形態上の特徴は備えているものの、内b_1・外b_2が施され、精緻さの一かけらもない。

○E類　E_1類のみ出土している。3H－2はIII期D類の35H－2にやや類似するが、有段が不明瞭である。II期でみられた器高が高く、半球状を呈したものは、3H－7のように赤彩が施されていないものへと変化している。内b_1・外b_2が全体的に目立つ。

（2）高坏

3H－12の脚部のみ出土している。脚柱部は裾部へ向かって直線的に開き、裾部は僅かに稜をもって外反する。内・外b_1が施される。

（3）鉢

3・20Hから出土している。3H－14・15は口縁部が粘土帯貼付けによる複合口縁を呈している。20H－3は口唇部が平坦に作出されているもので、図示はしていないが、3Hに類似するものが出土している。調整はIII期までみられた外c_1が全くみられず、内・外b_1を特徴としている。3H－15の口縁部内面直下には、ハケ目痕が認められようか。

（4）甑

「ヘラ削り＋ナデ」手法を特徴とする単純口縁のものが優位を占めるものの、3H－17、56H－5のように未だ口縁部に古い要素を有するものも散見できる。又、初めて、多孔式のものが小破片

ながら出土している。

○A_1c類　56H－5はII・III期でみられた複合口縁を呈する土器の系譜下にあるものと思われ、口縁部がその名残りとも言うべき輪積み痕として残っている。

○A_2類　III期50H－3に比べ、胴部の丸味がとれ、以後、定型化しよう。調整技法上、内b_1c_1・外b_1が施されることに注意したい。

○B_1類　3H－17がある。IV期では唯一、複合口縁を呈するもので、さらに外面にはハケ目痕が僅かに残る。古い要素をもつ類であろう。

○B_2類　3H－16がある。孔はいびつな楕円形を呈し、3.5×4cmを測る。内b_1・外b_2が施される。

○C類　20H－8は胴部下半のみ残存する。小孔は外側から、ほぼ等間隔に9個開けられている。

（5）甕

当該期においては、B類が完全に消滅し、かわって、長胴で「ヘラ削り＋ナデ」手法を特徴とするC類が一般化する。

○C類　56Hに良好な資料がある。いわゆる"砲弾形"を呈しており、胴部下半にやや膨らみを有し、胴部から頸部への移行はスムーズである。外面の底部付近には斜位のヘラ削り痕がみられる。内・外b_1を特徴とする。

○D類　D_1類に32H－5を可能性としてあげることができる。器肉が非常に厚く、大型のものである。D_2類は32H－3にみることができる。内・外b_1が施される。

V期　1・16・30・40・41・42・44・45H

16・44・49H出土の土器はやや後出的と思われる。

（1）坏

大型有段坏の名残りと言える土器も姿を消し、E_1類に吸収されるようであるが、新たにE_2類が出現する。又、1Hよりも後出的なものとしては、小型化の傾向にある。

○B類　1H－1は口径13cm前後、16H－1、42H－1は口径12cm前後を測るもので、大きさの点では若干の相違をみる。いずれも、口唇部内面直下には1条の沈線がまわる。又、41H－1は口径14cm前後を測るやや大型のものであるが、器高が低く、扁平である。口唇部内面には沈線がみられない。

○C類　41H－4は全面赤彩が施され、口縁部には横ナデがみられる。II・III期のものとはかなり趣が違うようだ。内b_1・外b_2が施される。

○E_1類　IV期同様、1H－11[註16]、1H－2といった2タイプがみられる。前者は以降、41H－3のようにやや小型化が認められるが、後者においては依然、大型で器高が高いものである。調整上、外b_1・b_2が相半ばする形で存在する。

○E_2類　1H－7は器高が低く、45H－2は器高が高いものである。底部平底はヘラ削りにより作出されているために、外b_2を基本とする。

（2）高坏

1H－12・13がある。13は坏部が深く、半球状を呈している。両者とも以前のものに比べ、器肉

が厚くなり、粗雑さが目立つ。

（3）鉢

1Hに良好な資料をみることができ、Ⅳ期3Hとの層位的な関係をもとに、系譜上の参考になりえよう。1H－14～16はⅣ期20H－3と比べ、やや小型で、器肉が非常に薄く、口唇部は尖がっている。内・外b_3が施される。1H－17、42H－6は大小の差はあるが、概して浅鉢形を呈している。[注17] 1H－18・19は大小の差を除いては、相似た土器であり、Ⅳ期3H－14が複合口縁を呈していたのに対し、これらは単純口縁を呈している。ていねいに内・外b_1が施される。

（4）甑

Ⅳ期では未だ、複合口縁を呈したものやハケ目痕を僅かに残した古い要素をもつものもみられたが、Ⅴ期においては全くみられない。

○A_2類　当該期をもって爆発的に出土例が増えている。Ⅳ期と比べ、口縁部の外反が強く、全体的に器肉が薄くなる傾向にある。調整については、外面胴部下半のヘラ削り痕が顕著になり、内面には初めて、内b_1c_2が認められる。1H－21はやや小型のもので、内・外b_1c_2が施される。

（5）甕

今まで、断片的にしかみることができなかったD類も当該期以降、C類と対照的な形態として、安定した出土をみせている。調整については、C類の外b_2が顕著になり始め、粗雑化の傾向にあると言える。

○C類　Ⅳ期と比べ、それほど長胴化が進むわけではないが、胴部下半の張らみがとれて、全体的にすっきりしている。頸部にみられる稜がはっきりするのも当該期からであろう。又、42H－2、44H－4のように、さらに長胴化が進むものは後出的と考えられる。調整は基調として、外b_2が施される。42H－16は外面胴部下半において、斜位のヘラ削り痕を認めることができるが未だ、縦位のものの方が一般的なようだ。1H－26のように、内外面ハケ状工具による調整がぴっしりと施されているものは珍しい。

○D_1類　1H－23、41H－9はⅢ期34H－7と比べ、胴部上半の張りがゆるやかであり、卵形状を呈している。42H－8のように最大径を胴部上半に測るものは後出的と思われる。内・外b_1を基本とする。

○D_2類　1H－20、41H－6、42H－7がある。41H－6、42H－7は外b_2が顕著で作りも粗雑なものである。

Ⅵ期　9・19・49H

19・49H[注18]に良好な資料がある。

（1）坏

C類は消滅する。E_1類には口径10cm前後のものと口径12cm前後のもの、器高が高く、半球状を呈するものがみられる。又、Ⅲ期以降みられなかった模倣坏もその系譜下のものとして散見できる。調整については、Ⅳ期で顕著になり始めた外b_2がさらに進み、内b_2にまで及んでいる。

○B類　49H－1・2は口径11cm前後を測るもので、Ⅴ期16H－1、42H－1と比べ、さらに小型化が進んでいる。[注19] 1・2とも口唇部内面直下には1条の太い沈線が施される。

○D類　19H－3・5、49H－5・6は模倣坏の系譜下にあるものと思われる。内・外b_2が施される。49H－6は赤彩の可能性がある。

○E_1類　V期で小型化の傾向にあった一群は、当該期で口径10cm前後のものと口径12cm前後のものに分化する。前者に19H－1・2、49H－3が、後者に49H－7があげられる。9H－1、19H－11は器高が高く、半球状を呈するものである。調整は内b_1・外b_2を基本とする。又、注目すべきは、49H－4の口頸部外面と内面すべてが黒く煤けている点にあり、黒彩土器を想定することができる。口径10cm前後を測る、小型で器肉の分厚い土器である。

○E_2類　V期1H－7のような器高が低いものはみられない。19H－4はV期45H－2の系譜下にあるものと思われるが、成形・調整における粗雑さや底部に木葉痕を残すなどF類とした方がよいのかもしれない。

（2）高坏

出土しなかった。

（3）鉢

19H－13のみ出土している。平底の底部から全体的にゆるく内湾するもので、内・外b_1が施される。

（4）甑

多孔式で唯一、全体の器形を知り得る貴重な資料が出土している。A_2類は調整上、外b_2が顕著ですべてが粗雑なものと言っても過言ではない。

○A_2類　VI期では、形態上の衰退も顕著になり、特に口縁部はゆがんだものが多い。49H－8は19H－16、49H－9と比べ、器肉が厚く、横幅が広いものである。又、49H－8・9の外面胴部下半には、顕著に斜位のヘラ削り痕が認められる。後出的なものであろう。

○C類　19H－14がある。IV期20H－8よりも胴部下半に丸味を有している。又、小孔の開け方は20H－8が等間隔に9個開けられていたのに対し、19H－14は孔が重複したり、孔を途中で開けるのをやめたりし、多数が乱雑に開けられている。内・外b_2が施される。

（5）甕

バラエティーの面では、V期同様、C・D_1・D_3類と安定した構成を示すが、形態上・調整技法上で、相違がみられる。

○C類　当該期をもって、長胴化が最高潮に達したと言える。調整については、外面胴部下半におけるヘラ削りの方向が縦位のものより、斜位のものが一般化する。又、19H－22のように最大径を胴部上半に測るものもみられる。後出的なものであろう。

○D_1類　V期と比べ、大型化の傾向にある。19H出土のものは、胴部から頸部への移行にはっきりした段がみられ、口唇部は折り返し状に丸くめくれている。49H出土のものは、胴部上半に強い張りが認められる。後出的なものであろう。内b_1・外b_2を基本とする。

○D_3類　9H－3、19H－17・18がある。胴部から頸部への移行には段を有し、口縁部は直立ぎみに外反する。又、底部が大きく、安定感をもつものを特徴とする。内b_1・外b_2が施される。

VII期　21・31・48H

48Hに良好な資料がある。

（1）坏

B類はみられなくなる。又、E_1類では器高が高く、半球状を呈したもの、さらにE_2類が消滅する。模倣坏の系譜にあるものとして、48H－4があげられるが、原型からの忠実な模倣からは、かなりかけ離れたものになっている。

○D類　48H－2・5は口径11cm前後のもので、Ⅵ期E_1類の頸部にみられた稜が有段化したものかもしれない。内b_1・外b_2が施される。

○E_1類　48H－3は口径13cm前後を測るものである。内b_1・外b_2が施される。

（2）高坏

31H－3は脚柱部のみの破片で、器肉が厚く、粗雑な作りのものである。

（3）鉢

31H－4、48H－8は相似た土器である。前者は内・外b_1、後者は内b_1・外b_2が施される。又、31H－5は小型の鉢で、内b_1・外b_2が施される。

（4）甑

小破片ながら、多孔式のものがみられる。A_2類は口縁部が短かく、外反が強くなっている。

○A_2類　48H－9がある。外面胴部下半では斜位のヘラ削り痕が認められる。内b_1c_3・外b_1が施されるが、特に内b_1c_3については、Ⅵ期よりもさらに間隔が疎である。

○C類　21H－6はⅥ期19H－14より、孔が小さく、さらに乱雑に開けられている。

（5）甕

当該期においても、バラエティーの面では、Ⅴ期以降の安定した構成を示しているが、形態上・調整技法上で大きく相違する。又、図示はしていないが、48H出土のものに台付甕の台部と思われる小破片が認められる。

○C類　48H－14～16がある。Ⅴ期以降みられたスマートなものではなく、最大径を胴部上半に測る、ややずんぐりとしたものである。調整はヘラナデと思われるが、底部から胴部中位にまで、それが斜位に施されることを特徴とする。内・外b_1が施される。

○D_1類　Ⅵ期同様、大型のものであるが、最大径を胴部上半に測るものが主流となる。調整は外面ヘラ削り後、細長いナデが胴部全体を斜位にめぐらしていることに注意したい。

○D_2類　48H－12・13がある。器肉は非常に薄く、胴部から頸部にかけての段は明瞭である。内b_1・外b_2が施される。

Ⅲ　主要器種にみられる諸様相

以上、本遺跡出土の古墳時代後期の土器をⅠ～Ⅶ期に設定し、土器様相の推移として、順次説明してきた。次に、主要器種である坏・甑・甕を器種別に追って、その諸様相及び細部にみられる諸特徴について若干触れてみたい。

1．坏

（1）調整技法上のa・c類について（表4参照）

調整技法上の分類でa類とされるものは、本遺跡Ⅱ期に比定できる18・54H出土の土器に限られ

表4　坏にみる調整技法の推移　　◎はB類

		内面					外面				
		a_1	a_2	b_1	b_2	c	a_1	a_2	b_1	b_2	c
Ⅱ	12			○					○	○	◎
	18			○		○	○		○		○◎
	54	○		○			○		○		○◎
	22			○					○	○	○
Ⅲ	8			○		○			○		○
	23			○						○	○
	24			○					○		○
	29			○					○		
	34			○					○		○
	35			○					○		○
	46			○					○		
	50			○					○		
	51			○					○		○
	7			○							◎
	36			○					○		
	58			○							◎
Ⅳ	3			○					○	○	◎
	6			○						○	
	17			○					○		
	20			○	○					○	
	32			○						○	
	56			○							◎
Ⅴ	1			○					○	○	◎
	30			○	○					○	
	40			○					○		
	41			○					○	○	◎
	42			○						○	◎
	16			○							◎
	44			○							◎
	45			○					○	○	
Ⅵ	9			○						○	
	19			○	○					○	
	49			○					○	○	◎
Ⅶ	48			○						○	

る。18H－2は形態上C類であり、ハケ目は口縁部外面に縦位に施され、その後横ナデにより若干消されている。54H－1～3は形態上E_1類であり、ハケ目は1が口縁部内面に横位に、2が口縁部外面に斜位に、3が口縁部外面に縦位に施され、その後横ナデにより若干消されている。これらの土器がII期を境にIII期以降、姿を消してしまうということは、時間軸上における古い様相を呈する一要素と考えられる。そして、これは弥生時代以降、古墳時代前期・中期に至り"ハケ目調整"としてみられる在地的な「伝統性」の名残りとも言えよう。

調整技法上c類とされるものは、形態上B・D・E・F類がある。表4ではB類について◎印で示している。それを見ると、B類はすべて調整上外cを施しており、各期を通じて普遍性をもっている。又、B類を除いてc類について着目すると、II・III期に限られることがわかる。具体的に、II期では18H－2（E類）、54Hでは11を除く（E・F類）、III期では8H－2（E類）、23H－1～3・5（D・E類）、24H－1（D類）、34H－1（F類）、35H－1・3・4（D・E類）、51H－2（D類）があげられる。ここで注意すべきは、調整上c類を施したD類はE_1類よりも後出し、a類を施すものにII期E_2類があるなど、E_1類はIII期で出現する大型有段坏を暗示していよう。しかし、予察として、大型有段坏には細分の可能性があり、当然新旧の幅が広がるであろう。又、54H－11は前段階和泉式期にはみられない、鬼高式期に特徴的な口縁部が直立し、器高が高い有段の坏であるが、形態上・調整技法上やや粗雑であるため、その祖源はさらにさかのぼるものと思われる。つまり、54H－11のような有段坏、大型有段坏はE_1類からの系譜から産出したのではなく、伝統性を超越した（須恵器との関わり）ものによって突如出現したものと言える。これが、いわゆる「模倣坏」と呼ばれるもので、逆にII期E_1類としたものに何らかの影響を与えていたものと考えられる。ただし、III期E_1類とした35H－1が模倣坏とするならば、予想以上に数種の模倣坏が想定できる。本遺跡では次のタイプのものがあげられる。[註21]

○54H－11のような口縁部が直立し、器高が高い有段坏。

○大型有段坏と仮称するもの。

○35H－1のようなE_1類でも口唇部に鋭い面取りが施されるもの。

以上、D・E類は伝統性を超越した外的影響下での産物と言うことができ、伝統性を保持するものはA・C類に限られることになる。そして、外的影響を受けた時期は本遺跡II期にみることができるが、さらにさかのぼるものと思われる。つまり、こうした外的影響下で産出したD・E類（あるいはB類）こそが、当地域の鬼高式期の本来の姿なのかもしれない。

（2）II・III期にみられる形態上の中間形について

〈B類－C_1類〉については51H－1があげられる。これは底部から体部にかけて半球状を呈し、器高が高いものであるが、口唇部は内湾せず、直立ぎみに外反している。〈B類－E_1類〉については18H－4、22H－1、24H－3がある。いずれも、口唇部がやや外反し、体部から頸部にかけては口縁部横ナデにより弱い稜を有している。〈C_1類－E_1類〉については12H－5、22H－2、54H－2がある。12H－5は体部以下が粗いヘラ削りにより、頸部との境をつくり、口頸部は直立する。22H－2は体部から頸部への移行がスムーズであるものの、口縁部が内湾していない。54H－2は器高が高く、口縁部が内湾するものの、頸部に明瞭な稜線が認められる。以上、II・III期にみられ

る形態上の中間形は、D類の有段の作り出しの有無あるいは強弱といった面で分類したE類との問題を含め〈B類－C_1類〉、〈B類－E_1類〉、〈C_1類－E_1類〉間で中間形があることがわかった。そして、このような状況は、土器の出現・盛況・衰退・消滅といった一連の流れの中で、随所、様々な接触があったものと想定できよう。

具体的に〈B類－C_1類〉では、いわゆる「比企型坏」と呼ばれるものの祖源にII期12H－3があげられる。これは舞台遺跡の報告で『この「S」字状口縁の土器の系譜は、本遺跡で鬼高式期の最も古い段階に位置づけた半球状を呈する坏形土器にまで遡って考えられよう』に一致する。

〈C_1類－E_1類〉では、E_1類が前述した（1）で模倣坏との関連で触れたが、こうしたC_1類との関連も無視することはできない。さらにE_1類についてはIV期以降、A～D類をしのぎ、一般化と分化をみる。これは日常的な器であるがゆえに、多く消費され、形態上における変化が激しかったものと考えられる。又、A～D類は非日常的なものとして使われたために、機能と形態の不一致とは直面せず、あまり変化がなかったのではないだろうか。

（3）暗文について

3H－4・9・11、23H－2・3、32H－1、46H－1、54H－5を列記できるが、中でも明らかに暗文と言えるのは、46H－1、54H－5であり、他は放射状に施された引っ掻き痕のようなものである。3H－9と32H－1の内面には「＋」字状に暗文が、底部には木葉痕が付されるなど相似た土器である。

以上、本遺跡ではII～IV期にかけて、暗文をみることができる。そして、V期以降、空白の時期を置いて、次段階真間式の埦・皿にみられることなど、今後"暗文とは何か"という基本テーマに基づいて、その系譜あるいは施文意義について考えてゆきたい。[注22]

2．甑

（1）調整技法上の推移について（表5参照）

調整技法上の分類でa類は、II・III期にみられるが、特にIII期で顕著である。III期ではII期54H－18のようにハケ目をていねいに消去し、磨き（的）を施すC類が主流を占める。これらはすべて形態上A_1類に分類されるもので、複合口縁の消滅に伴ない、III期以降、この「ハケ目＋磨き(的)」手法の土器は全くみられなくなる。又、III期で新たに出現した「ヘラ削り＋ナデ」手法で単純口縁を特徴とする土器は、当初「ハケ目＋磨き(的)」手法のものと両立していたものの、以後盛況をふるう。さらに内cの推移に注意されよう。II・III期では外面を含め、a_1c_1類あるいはa_1c_2類が施されていたが、以後、内面ナデのものが主流を占め、同時にc類も施される。IV期ではb_1c_1、V期ではb_1c_1・b_1c_2・b_1c_3の存在、VI期ではb_1c_2・b_1c_3の両立、VII期ではb_1c_3というように「密→疎」の傾向にある。これは概して、手抜きの方向にあると言っても過言ではない。

以上、調整技法上の推移をかい間見てきたが「ハケ目＋磨き(的)」手法と「ヘラ削り＋ナデ」手法のものは、時間軸上の新旧として看取される中で、同一系統上の変遷の中にはないようである。前者については、弥生時代以降の「伝統性」の中で解することができるが、後者については「伝統性」からは捉えようがなく、坏同様に外的な影響が要因となったのではなかろうか。なお、54H－18を初源にIII期に至り、ハケ目を完全に消去する手法は、調整技法上で手抜きの方向にはないと考

表 5　甕にみる調整技法の推移

		内面							外面						
		a_1	a_2	b_1	b_2	c_1	c_2	c_3	a_1	a_2	b_1	b_2	c_1	c_2	c_3
Ⅱ	12	○	○			○			○					○	
	18	○							○					○	
	54	○	○			○			○				○	○	
Ⅲ	34					○			○				○		
	46						○							○	
	50				○						○				
	51	○				○			○				○		
Ⅳ	3			○		○					○	○			
	17			○							○				
	20			○							○				
	56			○							○				
Ⅴ	1			○			○	○				○			
	41			○							○				
	42			○		○					○				
	44			○							○				
Ⅵ	49			○			○	○			○	○			
	19				○			○			○	○			
Ⅶ	48			○				○			○				

表 6　甕にみる調整技法の推移

		内面							外面						
		a_1	a_2	b_1	b_2	c_1	c_2	c_3	a_1	a_2	b_1	b_2	c_1	c_2	c_3
Ⅰ	11			○					○						
Ⅱ	12	○		○					○						
	18	○	○	○					○					○	
	54	○		○			○		○					○	
	22			○					○						
Ⅲ	23	○							○						
	24	○				○								○	
	29														
	34														
	50			○							○				
	51	○		○			○		○				○		
	58			○							○				

		内面							外面						
		a_1	a_2	b_1	b_2	c_1	c_2	c_3	a_1	a_2	b_1	b_2	c_1	c_2	c_3
Ⅳ	3			○							○				
	20			○							○				
	32			○							○				
	56			○							○				
Ⅴ	1			○							○	○			
	40			○							○				
	41				○							○			
	42			○							○	○			
	44			○								○			
Ⅵ	9			○							○	○			
	19			○							○	○			
	49			○								○			
Ⅶ	31										○				
	48			○							○				

えられる。

3．甕

（1）調整技法上の推移について（表6参照）

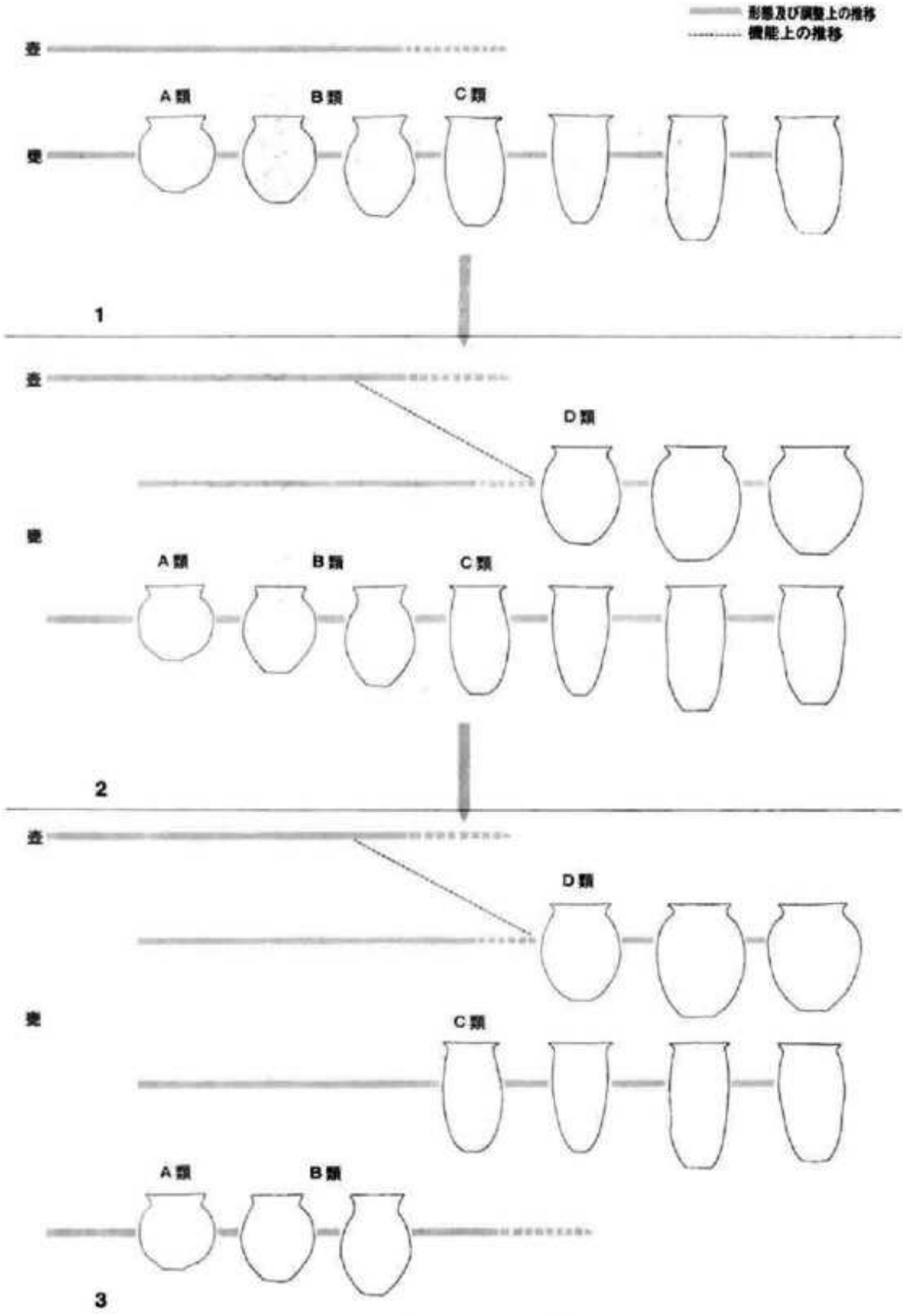
Ⅱ・Ⅲ期でハケ目痕を顕著に残すものとハケ目をていねいに消去するものがみられること、「ハケ目＋磨き(的)」手法と「ヘラ削り＋ナデ」手法のものの時間軸上の移り変わりの様子など、前述した甑によく似ている。さらに、Ⅴ期では外b_2が顕著になり、調整技法上の衰退化が認められる。

以上、甑と甕の調整技法上の推移が、基調として、ほぼ同様であることがわかった。これは、甑と甕のセットとしての働きが強いということが考えられる。形態上の推移でもⅣ期以降、甕C類・甑A_2類の出土の安定性に顕われている。

（2）Ⅱ・Ⅲ期にみられる形態上の中間形について

Ⅱ・Ⅲ期では、Ⅴ期以降のようにC類とD類を明確に区別するのは困難であり、両者の中間形にあたるB類が顕著である。従来、鬼高式期の甕については、カマドの導入により、前段階和泉式期の特徴である球胴の甕が長胴化したものと一般的に言われている。さらに、壺と甕については、形態上の分類を前提にその変遷を列記し、壺は消滅し、甕は長胴化にあると言う。これでは、貯蔵・煮沸の機能面で考えた場合、納得がゆかないものであろう。(第138図－1参照)。

Ⅱ・Ⅲ期では、形態上、A類・B類・C類・D類・12H－11のような壺と思われるものがみられる。つまり、従来通りにA類は、A類→B類→C類というように長胴化の傾向にあるようだ。おそらく、カマドの導入による効率的な対応の1つなのであろう。[註23] 言い換えれば、煮沸機能で考慮する場合は、A類→B類→C類の変遷は可能であると言える。又、貯蔵機能に関しては、12H－11の



第138図　甕形土器の変遷（概念図）

ような壺と思われるものとD類が存在することに注目したい。V期以降、C類とD類を比べれば、そこに形態差をみつけるのは容易であろう。

よって、鬼高式期における甕については、形態上、長甕と丸甕とに分類し[註24]、機能上では長甕が煮沸を目的とし、そして丸甕は壺の消滅に関連して、貯蔵機能の役割を果たしたと加味する必要があると考えられる。(第138図－2参照)。

しかし、調整技法について考えた場合、形態上A・B類とC・D類には大きな違いがみられる。基本的に、前者は「ハケ目＋磨き(的)」手法、後者は「ヘラ削り＋ナデ」手法が施され、巨視的な調整技法上の推移は前者→後者の傾向を示す。要するに、甑A_2類の出現同様「伝統性」の理解では察することができない甕C・D類はA類→B類の一連の流れとは異系統であるかもしれない。(第138図－3参照)。

（3）仮称「須恵器模倣甕」について

本遺跡でF類としたものの中に「須恵器模倣」を思わせる土器が散見できる。列記すると、14H－2・4、53H－1があげられる。特に、14H－4は口唇部の細部にわたり、須恵器甕を意識しており、土師器の範ちゅうでは理解することができない。又、時期については、14Hで甕B・C類、53Hで甕C類が伴出していることから、14HはⅢ期新段階あるいはⅣ期に、53HはV期に比定できようか。

Ⅳ．土器群にみる変化について

ここでは、本遺跡Ⅰ～Ⅶ期を通して、主要器種について概観し、さらにその中で、大きな変化が認められる時期を抽出したい。

坏はⅡ期で、形態上A～F類のすべてがそろっており、C_2[註25]・F類を除き、赤彩が施されているものばかりである。C_2・E_1類にはハケ目を残すものもみられる。D類は模倣坏のみ1点出土している。Ⅲ期では、A・C_2類が消滅し、C_1類も弱体化の傾向にある。D類には突如、模倣坏と並んで大型有段坏が出現し[註10]、盛況をみせる。Ⅳ期では、B類が口径13cm前後と定型化の観を示し、さらに大型有段坏が衰退し、かわってE_1類に主流が移行する。V期以降は、B・E_1類に小型化が生じ、B類はⅥ期で口径11cm前後と最小化を遂げ、以後みられなくなる。E_1類はⅥ期で分化がみられる。

甑はⅡ期で、ハケ目を顕著に残すものとハケ目を完全に消去するものがみられ、Ⅲ期では、後者に混じって「ヘラ削り＋ナデ」手法の土器が出現する。Ⅳ期では、未だB類に複合口縁とハケ目を特徴とする古い要素をもつものも散見できる。又、C類が初めて、認められる。V期以降は「ヘラ削り＋ナデ」手法のものだけとなり、A_2類では大きな違いはみられなくなる。Ⅵ期では、C類で唯一、全体の器形を知り得る貴重な資料が出土している。

甕はⅠ期で、ハケ目痕を僅かに残すA類と思われる破片が出土している。Ⅱ期では、甑同様に、ハケ目を顕著に残すものとハケ目を完全に消去するものがB類で特にみられ、同時にB類はバラエティーも多い。Ⅲ期では、B類のバラエティーが収束され「ヘラ削り＋ナデ」手法をもつC・D類が確実に存在している。Ⅳ期では、C類はいわゆる"砲弾形"を呈している。V期では、C・D類の出土は安定し、C類はⅣ期と比べ、胴部下半の膨らみがとれて、すっきりした観をもつ。D_3類は卵形状の胴部をもつ。又、基調としてヘラ削り痕が顕著にみられ、調整技法上の衰退傾向が認

められる。Ⅵ期では、C類が最長胴化にあり、D_1類は大型化する。D_2類は底部が大きくなり、安定感をもつ。成形・調整上、各期を通して、最も粗悪なものが多い。Ⅶ期では、C・D_1類の胴部上半に強い張りが認められ、さらに外面の底部から胴部中位にかけて、斜位のヘラナデが施されている。後出する真間式期の特徴に近似している。

次に、変化が認められる時期について検討してみたい。

まず、坏に関しては、Ⅲ期でみられる大型有段坏の出現と盛況があげられる。が、Ⅳ期では、B類が定型化し、E類に主流が移行する。さらに、大型有段坏の名残りとも言える土器が存在する。つまり、Ⅳ期という時期は、古い様相と新しい様相とが入り混じった、新旧の入れ替わりの時期であると考えられる。又、Ⅴ期以降、B・E_1類は小型化の傾向にあるが、Ⅶ期でB類はみられなくなる。従って、坏でみられる変化については、Ⅳ期とⅦ期に2大変化が認められよう。

甑に関しては、Ⅱ期以降、ハケ目痕が顕著でなくなり、複合口縁が不明瞭になる傾向にある。その流れの中で、Ⅲ期に「ヘラ削り＋ナデ」手法をもつ単純口縁のものが出現し、Ⅳ期まで両者は併存する。又、Ⅴ期以降、ヘラ削り痕が顕著にみられ、調整技法の衰退が認められる。従って、甑については、Ⅲ期新段階もしくはⅣ期に変化が認められよう。

甕に関しては、Ⅲ期でB類のバラエティーが収束し、Ⅳ期でB類は消滅し「ヘラ削り＋ナデ」手法をもつC類が優位を占める。さらにC類はⅥ期で最長胴化を遂げるが、Ⅶ期では、最大径を胴部上半で測るやや寸胴のものになっている。又、調整についてもⅦ期では、斜位のヘラナデが施されるなど、以前にはみなれない技法のものである。従って、甕については、Ⅳ期とⅦ期に変化が認められよう。

以上をまとめると、坏・甑・甕にはほぼ同時に、本遺跡Ⅳ期で、坏・甕にはⅦ期でも変化を認めることができた。このように、主要器種がⅣ期・Ⅶ期のほぼ同時期に2大変化を見い出すことは、当該期を3期に区分可能であるとする予察につながろう。そして、こうした2大変化の具体的な歴史的背景についてはよくわからないが、必らずしや歴史的な出来事と関連しての変化であったものと考えられる。

Ⅴ．須恵器の共伴例について

本遺跡では土師器に共伴して須恵器を僅かに検出している。ここでは特に坏・蓋について若干触れてみたい。坏は19H－2、29H－3、31H－1の3点を図示し得たが、29H－3については小破片のため推定復元した。類例として29H－3に埼玉県東松山市桜山窯跡群6号窯跡、31H－1に東京都狛江市岩戸八幡神社遺跡60号住居址、神奈川県横浜市熊ヶ谷東遺跡窯跡、舞台遺跡C－2号窯跡出土土器等をあげられる。なお、19H－2の類例についてはよくわからない。おそらく地方窯産あるいは在地色の強い土器であるためであろう。蓋は21H－1、29H－2の2点あるが、いずれも小破片である。類例として前者に東京都日野市落川遺跡25号住居址、岩戸八幡神社遺跡60号住居址、舞台遺跡C－2号窯跡、後者に坏同様、桜山窯跡群6号窯跡出土土器等をあげられる。

以上の土器を安直ではあるが陶邑編年に対比すれば、29H－2・3はⅡ型式第1～2段階、21H－1・31H－3はⅡ型式第6段階の特徴を備えているものと考えられる。よって、本遺跡Ⅲ期は6世紀第2四半世紀、Ⅶ期は7世紀第2四半世紀に位置づけられよう。

〔註〕

（1）坏・埦あるいは皿といったものを分類する場合には、形態上の相違、つまり器高の口径に占める割合で説明されようが、本遺跡では特に、坏・埦の中間形が顕著であるために、便宜上、総称として、坏として取り扱った。

（2）基本として、横軸には同一時期における器種の広がりを示し、縦軸にはその時間的な幅を加え、1つの型式的序列としての指針を検討すべきである。しかし、本遺跡II期の甕については、すでに横軸上で時間的な要素が組み込まれている危険性がある。

（3）例えば、19H－16の甑については、内面がていねいなナデの後、縦方向に細長く、間隔のあいた磨き（的）が施され、外面がヘラ削り痕を顕著に残す場合、内b_1c_3・外b_2のように表わす。ここで注意したいのは、坏については体部に、甑・甕については胴部に観察の中心を置いていることである。又、本稿でのハケ目・ヘラ削り・ナデ・磨き（的）は、土器製作上の調整であり、それらは狭義的には、働き・効果・調整過程の点で異なっている（佐原『弥生土器I』1983）が、ここでは調整痕とした痕跡でしか意味をもっていない。

（4）ハケ目については、ナデ調整との区別、さらに弥生時代に普遍的に用いられたハケ目調整のもつ施文意義・効果との関係で今後検討すべき必要がある。

（5）埼玉県児玉郡児玉町後張遺跡では、後張V期で丸底化が認められる。又、同東松山市舞台遺では、鬼高期の最も古い段階で丸底の坏形土器が出現している。

（6）鬼高I式の特徴を備えている埼玉県富士見市打越遺跡でも類似したものがみられる。

（7）12H－9については、底部がすぼまる器形であることを考慮してA類としたが、B類であるかもしれない。

（8）図示はしていないが、口縁部外面直下をよく観察すると、僅かにハケ目痕がみられる。

（9）18H－17の類例として、後張遺跡45号住－2、88号住－3・4、埼玉県本庄市夏目遺跡33号住－11があげられる。

（10）本稿で大型有段坏と仮称したものは、類例として多摩地域の方面で多く出土している。小川貴司・比田井克仁（『古墳時代土器の研究』1984）によれば、東京都八王子市中田遺跡C－5号址、B－6号址、同西野遺跡1～3号出土のものを須恵器模倣坏（坏E）とし、6世紀を4段階に区分し「○坏Eの口縁部が外反するようになり、器高も低くなるとともに、坏類の口径が全体に大きくなる段階」を3段階め「○坏Eの口縁部の外反が著しいものと、口縁部幅が比較的短かく、器高も低い坏が出現する段階」を4段階めと説明している。しかし、本遺跡54H－11のタイプの模倣坏がII～VII期を通して、基本的な形態を保持していることを考えれば、大型有段坏は別のタイプの模倣坏とした方がよいであろう。その他、本遺跡III期でE_4類とした35H－1も又、模倣坏と呼称できようが、模倣坏の細分についてはひとまず、今後の課題に譲るとして、本稿で模倣坏として呼称する場合、各期を通して比較的よくみられる54H－11の系統のものをさすことにしたい。

（11）8H－3・4は色調・胎土から搬入品と考えられる。3は白色、4は橙色を呈し、胎土は精

練された優品である。

(12) 精巧な作りの大型有段坏を本稿では、Ⅲ期に一括してまとめてしまったが、今後、容量・赤彩の有無・口縁部の形態差などの点から細分される可能性がある（註10参照）。ただし、本遺跡Ⅱ期の12H、18H、22H、54Hという坏A類及びC_2類を出土する住居址からは大型有段坏は皆無であるということを考慮する必要があろう。

(13) 以上、3種の口唇部形態の相違には、何らかの関係があるものと思われる。又、50H－1の類例としては後張遺跡から多く出土している。

(14) 51H－4の類例として、後張遺跡27号住－11、84号住－8、120号住－25などがある。

(15) 埼玉県所沢市椿峰遺跡ではⅡa期に、さらに中田遺跡C－5号址に両者の併存をみることができる。なお、椿峰遺跡では1～Ⅱ期を5世紀末～6世紀第1四半世紀に比定している。

(16) Ⅳ期3H－2とⅤ期1H－11を比べると、調整についてはむしろ、1H－11の方がていねいである。そうだとすると、両者の相異とは口縁部形態にみられる有段の作り出しの強弱ということがⅣ期とⅤ期の画期と言えようか。

(17) 類例として、舞台遺跡A－53号住－13があげられる。

(18) 19Hは舞台遺跡A－6号住居址出土の土器群と器種構成の面で近似している。

(19) B類については、本遺跡19・48Hからは出土していない。従って、当初は49H出土のB類をⅤ期新段階に比定できるものと考えた。しかし、Ⅴ期中でのB類が口径13cm・12cm・11cm前後のものと明確にその違いを指摘できることは、仮に口径の大小の差が時間軸上の新旧につながるものならば、短期間での変化が目まぐるしい。さらに、甑・甕に着眼してみてもⅤ期よりもⅥ期あるいはⅦ期の特徴を示していると言える。よって、本稿ではⅥ期として取り扱ったが、今後、住居址間の切り合いでみた層位的実証性をもつ資料の増加を待って検討していきたい。

(20) D類については、54H－11の系統の模倣坏を除く。ここでD類としたものは大型有段坏と仮称したものに限定される。

(21) 34H－1は土師器でありながら、須恵器坏身の形態を有している。

(22) 埼玉県大里郡寄居町甘粕原遺跡の報告では「暗文の施される器形は碗と皿に限られる」とあり、器形と暗文との密接な関係を説いている。甘粕原遺跡第4号住居址は7世紀終末に比定される。

(23) かつて、弥生時代後期から古墳時代前期の時期、甕に脚台が付されることがあった。これは、炉を効率的に用いるための最善策であったのであろう。

(24) ただし、A類とB・C類を一概に同次元で理解することはやや疑問が残るように思える。又、長甕にはB・C類が、丸甕にはD類があたり、A類に関しては、呼称名においてもD類と区別する必要があろう。

(25) C_2類の18H－2は、赤彩が施されていないが、口縁部付近に僅かな赤色塗料の付着がみられる。

第3節　土　　坑

今回の発掘調査で検出された土坑は32基を数えたが、出土遺物などから時期を決定できたものは非常に少なく、また、その機能を知り得たものも多くない。ここでは、何らかの特徴をもつ土坑についてのみ若干のまとめを行ってみたい。

（1）地下式壙

地下式壙は8基検出された。この中で、18・19・28・30～32Dの6基が1竪坑1地下主体部の一般的なものである。竪坑は方形を呈し、壁はほぼ垂直であるが、18Dのように壁面に足掛穴がみられるものもある。主体部底面は竪坑部底面より一段低くなっていて、境界部は18・28・31Dのように段になるものと他のスロープ状になるものがある。地下主体部は長方形を呈し、竪坑一主体部奥壁を主軸とした場合、長辺はそれと直交した形となる。主体部底面は平坦であるが、28Dのように対向するコーナー部に方形の掘り込みをもつものがある。壁は垂直に立ち上がり、主体部の断面形は、天井部の残存しているものをみるかぎり箱形を呈する。主体的底面の面積は、19Dの2.93㎡から28Dの13.3㎡まで大きな変異幅がある。出土遺物は非常に少なく、五輪塔・板碑・石臼といった石製品の他に陶器などの破片があるが、年代の判明したのは15世紀後半代の年代が与えられた19D出土の土師質土器皿1点のみであった。

1竪坑5地下主体部の地下式壙には20Dがある。竪坑は底面では方形を呈し平坦で、地下主体部底面とのレベル差はない。主体部平面形は羽子板状を呈し、竪坑部から放射状に構築される。底面・壁面とも平坦で、断面形は箱形を呈するものと思われる。壁面上部には棚のような施設を設けたと思われる小孔と、照明具を置いた三角形の掘り込みが認められ、貯蔵を目的とした遺構であることをうかがわせる。遺物は竪坑部から出土したもののみで、土師質土器皿や陶器などがある。年代はほぼ17世紀後半から18世紀前半に集中し、この地下式壙が江戸時代のものであったことは疑いなく、過去の他の遺跡の事例ともよく合致する（中田　1977）。

2竪坑1地下主体部の地下式壙には16Dがある。形態的には1竪坑1地下主体部の地下式壙に竪坑をもう1ヵ所設けた形となるが、その関連性については資料不足で明らかでない。

以上、8基の地下式壙についてみてきたが、江戸時代の年代が与えられた20Dのみが地下主体部の形態において他のものと大きく相違していた。それ以外の地下式壙については細部の違いはあるにしても、基本的な部分では共通するものをもっている。19D出土の土師質土器皿1点のみで年代を決定するには無理があるが、先学諸氏の分析・研究をふまえ、20Dを除く地下式壙の年代を、大雑把ではあるが中世の所産であると考えておきたい。

（2）墓壙

確実に墓壙とわかる例に人骨の出土した27Dがある。土坑の平面形は楕円形を呈し、土葬の状態であった。渡来銭と数珠玉を副葬している。中世の所産である可能性が強い。

7・21・23Dからは骨粉と炭化材が出土している。これらの土坑は形態的に共通する特徴をもっていて、平面形は長方形を呈し、壁は垂直に立ち上がり底面は平坦で単純な箱形となる。コーナー部底面に横穴状の掘り込みをもち、その部分に骨粉・炭化材が集中する。10・24・26Dは、骨粉などは検出できなかったが、土坑の形態的特徴は一致するため墓壙と考えてよいだろう。年代を決定できるような遺物の出土はなかった。

第4節　溝　　址

1・3・5号溝址は、前述したように少なくとも埋没する段階では同時に存在していたことは明らかである。ここで、溝址について現在まで知り得たことを上げてみると、

○市史編さん室で行った調査によると、1号溝址は上幅12mを越えるものであった。

○今回の調査で上幅の確認できた（E－2・3）Gでは、幅4mと部分的に狭くなっていて深さも減じている。

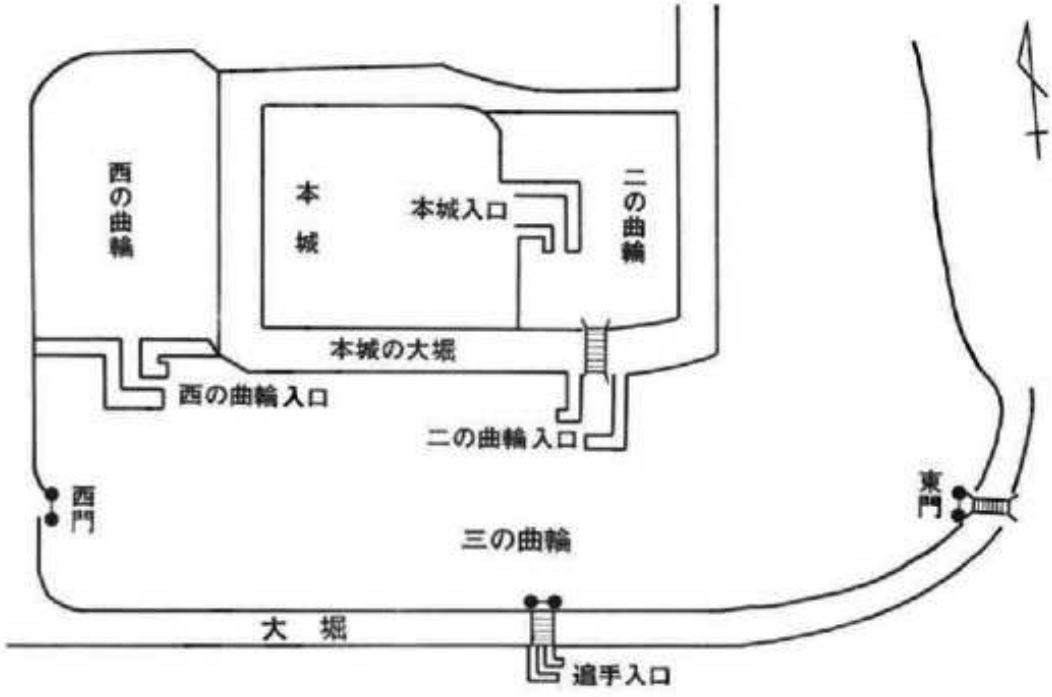
○1号溝址は（F－5）Gの部分でクランク状に屈曲している。

○3号溝址は（H－5）Gで鉤の手状に曲がっている。

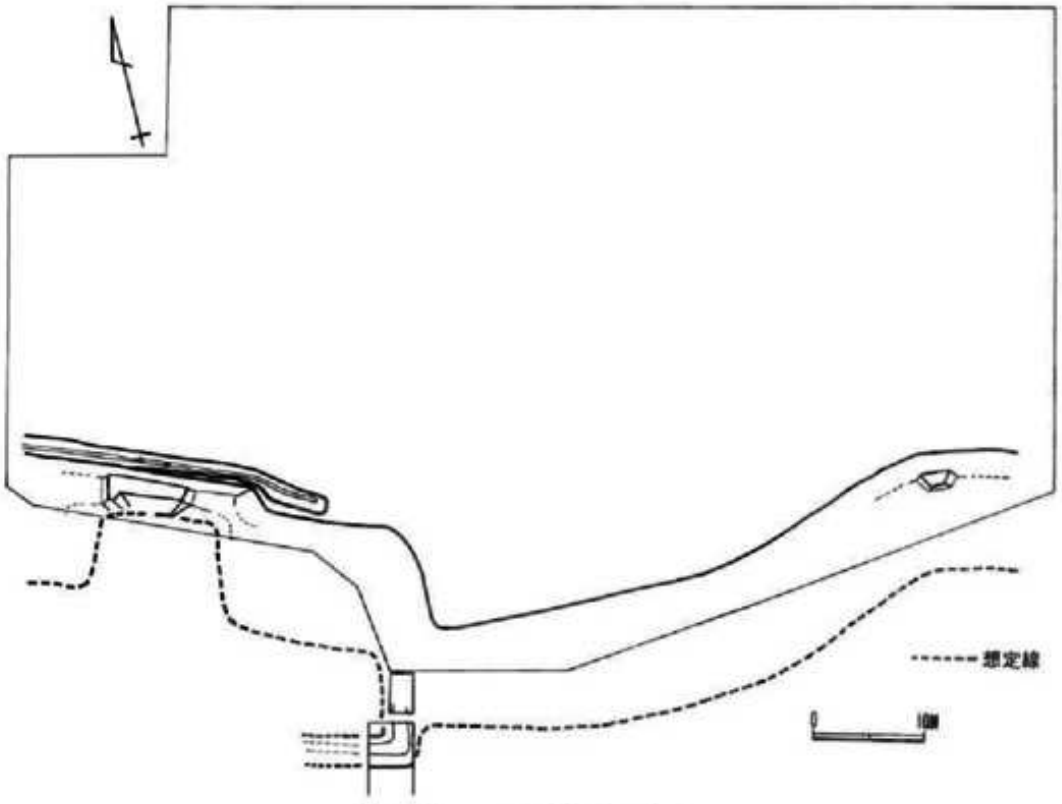
などである。

第139図は『館村旧記』[註1]に記載されている「柏の城」落城後の屋敷割図から城郭の部分のみ取り上げ図化したもので、今回の調査地点はほぼ三の曲輪の追手があった付近にあたる。

今回の発掘調査では、1号溝址は南側の限界の大部分を確認することができなかった。そこで、



第139図　柏の城城郭図



第140図　1・3号溝址想定図

市史編さん室の調査で判明した約12mという上幅の数値をもとに作成したのが第140図である。あくまでも想定であるが、1号溝址は（E－2・3）Gで幅を減じているので、この部分の南側は屈曲して袖となり、ここに虎口を開いたと考えられる。また、3号溝址は馬出しの堀とすることができよう。1・3・5号溝址は、その位置や追手のある部分など「柏の城」城郭図とほぼ一致し、「柏の城」の付属施設であったことは間違いない。

註1　『館村旧記』は、館村（現志木市柏町・幸町・館）の名主であった宮ヶ原仲右衛門仲恒が享保12（1727）年から同14（1729）年にかけて、正徳（1711～16）・享保年間の村の状況や村の歴史を記したものである。

第5節　「柏の城」について

「柏の城」については、当時の史料が皆無といってよいほど無く不明な点が多い。城名が記録の上で現われるのは『館村旧記』が初見であるが、その内容にどこまで信憑性があるかは別にして、関連のある部分をみてみると、「田面長者以来年数荒間敷之事」の部分で、

（前略）さて亦当初柏城、文明年中の比田面長者の住居ありし跡を城に築きて大石信濃守殿居城となれり。而も相州小田原北条家の幕下にして、小田原十一ヶ城の内也。（後略）

とある。これに関しては、

○大石氏で信濃守を名乗った者は、顕重・定基・照基の3名いて、文明年間（1469～86）に活躍したのは高月城主であった顕重が該当する。

○大石氏が北条氏に服属したのは天文15（1546）年の大石定久の時期からである。

次に「館柏之城軍の事」の部分で、

抑館柏之城は昔田面郡司長勝殿の住みたまふ跡也。此の城人皇百六代後奈良院の御守、天文年中の比は大石信濃守政吉殿の居城たり。（中略）時に越後の国の官領上杉謙信輝虎卿、小田原北条氏康卿を攻めんと大軍にて河越より武蔵野辺に押し寄せらる。その刻当城へ寄せ来たると聞へしかば、籠城の用意として兵糧を込め、或は堀を浚ひ仮り塀を掛けさせ城戸逆母木を引いてぞ待ちかけたる程なく、上杉勢押し寄せ来たりして鬨の声をあげたりける。城中には兼ねて期したる事なれば、同時に鬨をぞ合はせけり。（後略）

とあるが、これについては、

○大石氏系図には政吉という名はない。天文年中（1532～54）に信濃守を名乗ったのは定久の弟である定基が該当する。

○このような戦いがあったのかどうかも問題になるが、これにより「柏の城」は落城し、大石信濃守は討ち死する。しかし、上杉謙信が小田原の北条氏を攻めたのは永禄4（1561）年のことで史実と相違するし、定基の没したのは元亀2（1571）年とされる。

以上が『館村旧記』に現われる「柏の城」についての主な記述である。ここで、他の史料にあたってみると、まず『新編武蔵国風土記稿』では、

館迹　長勝院ノ東ノ方ニアリテ、同寺ノ境内ヘモ少クカヽレリ。今ハ畑トナリシカト、虚堀ノアト土手ノ状ナトワツカニ残リテ、当時ノサマ髣髴トシテ見ルヘシ。土人言、遠カラス世マテモ土手・堀ナト全ク存セリ。其後林ヲヒラキ畑ヲオコセシ時コホテリシニヨリ、右ノ状更に変セリ。今八幡祠ノアル所館ノアリシ所ナリトソ。イカサマ北ノ方ニ崖アリテ、広サ二町ニ二町半ハカリノ要害ノ地ナリ。昔大石越後守コヽニ居レリ。此人ハ小田原北条家ノ家人ナリシカ、天正十八年太閤秀吉ノ為ニ亡シト。按ニ大石越後守ハ多磨郡滝山城主大石信濃守カ一族ナルヘシ。天正九年北条武田両家ノ間和議破レケル時、駿河国分国境目ノ押ヘトシテ、同国獅子浜ノ城ニ越後守ヲ籠ヲシキコト、小田原記ニ載セタリ。同十八年上方ノ大軍小田原ノ城ヲ攻シ時モ、コノ人同シ城ニアリテ終ニ寄手ノタメニ城ヲ明渡シケルヨシ北条五代記等ノ書ニ見エタリ。サレハ此時ヲノカ館モ敵ノ為ニウチ亡サレシナラン。

とあり、

○『新編武蔵国風土記稿』の編さん段階では、堀・土塁などが僅かではあるが残っていた。

○大石越後守直久が最後の城主であった。

○大石越後守は天正9（1581）年に駿河国獅子浜（沼津市）城に入り、天正18（1590）年にはこの城について、寄せ手に城を明け渡しているから、館もこの時に滅んだのであろう。

としている。

次に、嘉永6（1853）年に書かれた渡辺渉園の『秩父日記』には、

十四日　はれ　館村長勝院といふハ　廻国雑記に見えたる大石信濃守の館の跡なるよし　十玉院より聞おきしかは、（後略）

とあり、

○長勝院が『廻国雑記』に載る大石信濃守の館跡であると十玉院から聞いた

というのである。

ところで、本山派修験の大本山聖護院の門跡である道興准后が、文明18（1486）・19年に書いた紀行文『廻国雑記』には、「柏の城」に関係するとおぼしき記述がある。つまり、

（前略）

さゝいをたちて武州大塚の十玉が所へまかりけるに、江山いくたびかうつりかはり侍りけん、其夜のとまりにて、

（中略）

あるとき大石信濃守といへる武士の館に、ゆかり侍りて、まかりてあそび侍るに、庭前に高閣あり。矢倉などを相かねて侍りけるにや、遠景すぐれて、数千里の江山眼の前に尽ぬとおもほゆ。あるじ盃を取出して、暮過るまで遊覧しけるに、

（中略）

十玉が坊にて人々に二十首よませ侍るに、

（中略）

河越といへる所にいたり、最勝院といふ山伏の所に一両夜やどりて、

（中略）

此さとに月よしといへる武士の侍り。いささか連歌などたしなみけるとなん、雪の発句を所望し侍りければ、言つかはしける、

（中略）

これにて百韻行し侍りけるとなむ。これより武士の館へまかりける道に、うとふ坂といへる所にてよめる、

（中略）

すぐろといへる所にいたりて名に聞し薄など尋ねてよめる、

（中略）

又野寺といへる所爰にも侍り。これも鐘の名所也といふ。

（中略）

此あたりに野火とめのつかといふ塚あり。

（中略）

これを過ぎてひざおりといへる里に市侍り。

（中略）

十玉が坊にて三十首の歌詠侍りけるに、

（中略）

ところ沢といへる所へ遊覧にまかりけるに、

（中略）

この所を過てくめ〳〵川といふ所侍り、

（中略）

武州大つかといへる所に住侍りける時、

（中略）

十玉が坊より紅梅の色こきをはじめて見せければ、

（中略）

野遊のついでに大石信濃守が館へ招引し侍りて、

（中略）

むさしの丶末に浜さきといへる里侍り、

（中略）

此ほどなが〳〵住なれ侍りける旅宿をたちて甲州へおもむき侍りけるに、

（中略）

かくて甲州にいたりぬ。

（後略）

とある。

道興が武州大塚の十玉坊賢承の所に来たのは太陽暦で文明18年12月末か翌19年の1月初め頃と考えられ、2月末か3月初め頃に甲州に旅立つわけであるが、この間十玉坊を基点にして近隣を訪ずれ歌を詠む生活を行う。

ところで、十玉坊のあった武州大塚については諸説があって、現川越市南大塚、現富士見市南畑・水子、志木市大塚（現幸町2丁目近辺）などがそれであるが、この3地点は距離的にもさほど遠くない。

次に「大石信濃守といへる武士の館」であるが、この時期信濃守を名乗ったのは顕重で、大石氏系図によると長禄2（1458）年から高月城（八王子市）に入っているので、「武士の館」とは高月城をさすのが妥当のようにみえる。

しかし、ここで道興が十玉坊に滞在してからの足取りをみると、地名のわかるものでは、

十玉坊―大石信濃守の館―十玉坊―河越―月よし（川越市）―うとふ坂（川越市）―すぐろ（坂戸市・鶴ヶ島町）―野寺（新座市）―野火とめ（新座市）―ひざおり（朝霞市）―十玉坊―ところ沢―くめ川（東村山市）―大塚（十玉坊）―大石信濃守の館―浜さき（朝霞市）―十玉坊―甲州

となる。これらの外出は、地名のわからないものを含めて大部分が野遊びのたぐいで遠出をしていない。文中に「野遊のついでに大石信濃守が館へ……」とあり、十玉坊と大石信濃守の館が近い距離にあった可能性が強い。十玉坊のあった場所を考えると、高月城のあった現八王子市高月はやや遠隔の地の感がある。

大石氏系図によると顕重は永正11（1514）年に死去し、その子定重が家業を相続するわけであるが、定重はこの時すでに満47歳である。

道興が十玉坊に滞在していたと同じ頃、当時の文化人である万里集久が江戸城に逗留していた。彼の執筆した詩文集『梅花無尽蔵』巻2に、大石定重が長享1（1487）年に館亭の命名を集久に依頼し、「万秀斎」の名を得たという下りがある。その中に、

（前略）武蔵目代大石定重請之、（後略）

また、巻6には

武蔵刺史之幕府、有爪牙之英臣、是日大石定重、廼木曾源義仲十葉之雲孫也、武之二十余郡悉属指呼、（後略）

とある。つまり、長享1年の段階では定重は武蔵目代であり、武蔵の二十余郡を支配していたのである。

大石信濃守の館が文明18・19年当時どこにあったかについては諸説があって、当「柏の城」もその候補にあがっている。想像の域を脱しないが、この時期顕重はすでに実権を定重に譲り、高月城を出ていたのではなかろうか。その場合、十玉坊に距離的に近い「柏の城」を居城にしていたことも十分に考えられる。

享保五庚子年八月生ル　幼名善五郎
又繁右エ門ト改
尾張殿御鷹場御預り御案内役
妻ハ宮原仲右ェ門娘リント云

とあって、庄蔵はイコール繁右衛門であり、なおかつ仲右衛門の婿であることが立証された。また、繁右衛門の名前が表面に出てくる他家所有の宮原家系図にも、繁右衛門の個所には「武右衛門三男、妻は宮原仲右衛門女子」、繁右衛門の嗣子として記されている龍左衛門の個所には、「庄蔵二女舞惣七、龍左エ門ニ改」とそれぞれ傍注が施されており、繁右衛門は仲右衛門の婿であり、庄蔵とも称していたことを明らかにしている。

従って、小川家文書中に現れる、宮原家としては二代目の御鷹場預り御案内役の繁右衛門は、今回宮原家跡から出土した境杭の保管理由説明書中にその名を現す庄蔵とは、紛れもなく全く同一人物であることが判明した。

なお、宝暦二年に三二歳で就任以来、明和元年に退役するまでの一二年間、御鷹場預り御案内役という重要なポストに就いていた庄蔵は、天明四年（一七八四）四月二九日に六四歳で死没している。法名は誓憲院芳蟬舜空居士。

さて、前述のように、大久保村武蔵野開に建てられていた鷹場境杭が折れ、新しい境杭にとって代われた後、御鷹場預り御案内役の宮原庄蔵がこの折れた古い境杭を保管することになるが、新しい境杭を建てた際に、大久保村の名主と組頭が、度々見廻り、毎年塚を築い、垣を結い直し、見苦しくないように大切に預ると誓約した、御鷹場預り御案内役宮原庄蔵宛ての証文が数年前に、市史編さん事業の一環として宮原家文書を解読していた長島偉夫氏により発見されたことは誠に喜ばしい。

最後に、本稿をまとめるにあたり、「尾張家御鷹場御預り御案内の推移―志木周辺を中心として」（『郷土志木』一二号所収）を始め、その学問的成果に負うところが大きかった故井田実氏（富士見市史編さん委員）のお名前を特に記し、感謝の意を表したい。

註一

奉ㇾ預御境杭証文之事

一、御境杭弐本
内壱本　渋井村境
壱本　武蔵野開
是ハ此度御立替被ㇾ下候御境石杭

右之通当村江御預被ㇾ成、慥ニ奉ㇾ預候、尤度々見廻り、年々塚相繕垣結直し、見苦無ニ御座一候様ニ、太切ニ相守り可ㇾ奉ㇾ預候、仍而証文如ㇾ件

宝暦十辰年　四月　大久保村
名主　治郎左衛門㊞
組頭　磯右衛門㊞

館村　宮原庄蔵殿

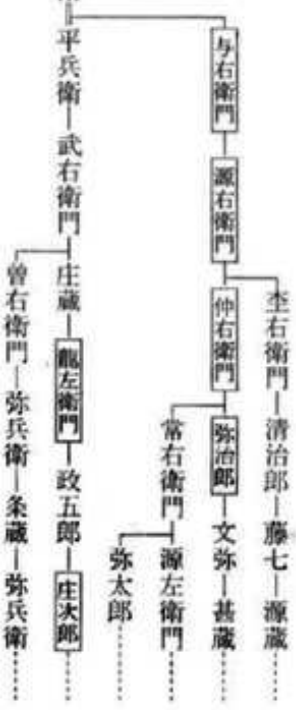
（『志木市史　近世資料編Ⅲ』四一一ページ所収）

立川市の小川家文書によれば、宮原家の人物が御鷹場預り御案内に任ぜられたのは、享保一八年（一七三三）から明和元年（一七六四）までの三一年間である。宮原仲右衛門が前任者の跡役を仰せ付けられたのは享保一八年に水子村の高橋孫三郎が病死した後、若年の倅大次郎では御役儀が勤めがたいという理由によるものだが、宝暦二年（一七五二）に同人の舅繁右衛門が仲右衛門の跡を襲ったものの、明和元年（一七六四）に退役し、入間郡北永井村舟津利右衛門が跡役に任ぜられることになったと、この文書は述べている。

ここで不思議なのは、前述のように宮原家では享保一八年から宝暦二年までは仲右衛門、宝暦二年から明和元年までは繁右衛門がそれぞれ御鷹場御預り御案内に任ぜられていることが明らかになったにもかかわらず、今回発見された境杭の保管理由説明書に出てくる庄蔵の名前は、前記文書中にいっこうに現れてこない。しかも説明書が刻まれた宝暦一〇年には、繁右衛門がこの大役を果たしていたことは、小川家文書によっても知られるところである。そうすると、繁右衛門と庄蔵とは同一人物なのだろうか。

昭和五年一一月に調製の『宮原家系図表』をもとに、昭和五七年三月に宮原詳一氏が調査した『宮原氏大系図表』（ここではもう一つの系図と区別するため、便宜上、系図Aとする）と、宮原家に江戸時代から伝わる『武蔵国新座郡舘住宮原家大系図』（便宜上、系図Bとする）。

宮原家系図A



宮原家系図B

□で囲んである人物は名主経験者

を見てみることにしよう。系図Aには仲右衛門の名前は出てくるが、繁右衛門の名前は全く見いだせない。また、確かに龍左衛門の父に庄蔵がいるが、仲右衛門と系統が違うようだし、庄蔵が仲右衛門の婿であることを裏付ける手掛かりがなに一つない。一方、細部に亘ると系図Aと微妙に違う系図Bにも、繁右衛門の名前は現れてこないようだが、幸いにして系図Bには一人一人の人物に傍注がついており、八代庄蔵春品の個所には、

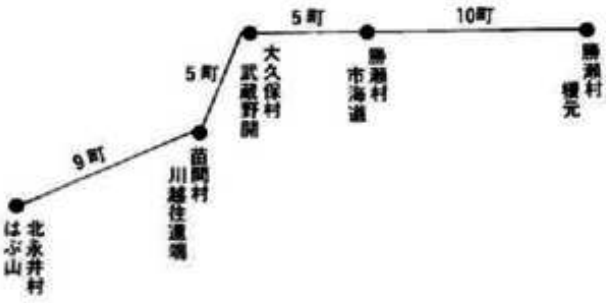
尾州藩下級家臣五十人衆並の扱いを受けるほどの待遇を受けていたが、元禄六年（一六九三）、生類憐れみの令によって一時中断した後、享保二年（一七一七）に再興されてからは、人数も一二名に増えると共に、士分的身分待遇が失われていくが、それでもこの役職に就くことは大変名誉なことであり、近隣の村々に対して特殊な地位を占めていたものと察せられると前田京子氏は『郷土志木』一一号の中で述べている。

御鷹場預り御案内の具体的な職務内容について、本間清利氏はその著『御鷹場』の中で、鷹狩りの際の道案内、御鷹役人の送迎、鷹場内の検分と監視、案山子の御免願い、村内鳥猟道具発見にあたっての取り調べ等を挙げているが、天保九年（一八三八）からは、家宅の普請願い、水車取立願い、人寄興行願い等も追加されていたようである。

さて、宮原庄蔵が御鷹場預りの任にあった時期は、その後を継承した船津利右衛門の担当地域二二ヶ村、即ち、北永井・竹間沢・藤久保・上富（現三芳町）、水子・針ヶ谷・鶴馬・勝瀬・上南畑・下南畑・南畑新田・大久保（現富士見市）、大井・苗間（現大井町）、中富・下富・南永井・神谷新田・北田新田（現所沢市）、上宗岡・中宗岡・下宗岡（現志木市）の諸村の他に、舘村・引又町・中野村も含まれていたはずである。また、そうでないと、舘村の名主の宮原庄蔵が大久保村を管理する必然性が全く失われてしまうことになるだろう。

ところで、この境杭が建てられていた場所は大久保村ではあるが、大久保村の本村ではなく、西南方向に約三・五km離れた同村の飛地の中にある。具体的にいうと、苗間村の北、勝瀬村の西にあたり、東武東上線の鶴瀬駅と上福岡駅の中間よりも上福岡駅にやや寄った辺りといって良かろう。ここには昭和二五、六年頃まで、農作業に本村からやって来る農民のために飲料水を置いたり、農具を預けておける番小屋が設けられており、その代償として畑の作物の一部刈り取りの特権を与えられた野番も常住していたという（東大久保　大沢正臣氏談）。

東大和市蔵敷の内野家が所蔵の『御鷹場御境杭控帳』によると、文政四年（一八二一）当時の尾張家鷹場の境杭八三本は、勝瀬村の榎元にある東向きのものを第一号とし、ここから西に一〇町行った場所の同村市海道に寅（東北東）に向いて立っているのが第二号、更にそこから西に五町行った大久保村武蔵野開に西北向きに立っているのが第三号、また、そこから未（南南西）に五町行った苗間村川越往還端に第四号が申（西南西）向きに立っているという位置関係にある（第一四四図）。なお、第三号が立つ大久保村の飛地は、武蔵野開という地名から推して、武蔵野台地開発が積極的に推進された享保年間（一七一六～一七三六）の開発による持添新田と見て間違いあるまい。



第144図　武蔵野開を中心とした境杭の位置関係

仰付右　御杭新座郡舘村御場（鷹か）預
御案内役宮原庄蔵所被下置也
宝暦十辰年四月

（読み下し文）

此石御杭、入間郡大久保村武蔵野
開境之有る所、折れるに仍り此度建替
仰付けられ、右御杭新座郡舘村御（鷹）場預
御案内役宮原庄蔵下し置かれる所なり

即ち、「この石の御杭は、入間郡大久保村武蔵野開（むさしのひらき）にあった境杭だが、折れてしまったので、新しく建て替えを命じられることになったため、不要になった古い石杭は、新座郡舘村に居住する御鷹場預り御案内役の宮原庄蔵に下し置かれることになった」旨を説明しているのである。

この説明文を読んで先ず興味を惹かれることは、宝暦一〇年（一七六〇）当時、入間郡大久保村（現富士見市東大久保）は、尾張家の鷹場としては、宮原庄蔵の管理下にあったことである。本来、御鷹場預り御案内は名主級の有力農民から選出されていたようだが、特にそれぞれの地域での土豪ないし郷士的存在の人物が任命されることが多かったと言われている。宝暦期より少し時代の下がった寛政四年（一七九二）五月当時は、狭山丘陵区（五三ヶ村）では小川村（現小平市）名主の小川東吾、新座野方領（三九ヶ村）では小榑村（現東京都練馬区大泉学園町）名主の高橋覚左衛門、所沢区（四三ヶ村）では下清戸村（現清瀬市）名主の粕谷右馬之助、拝島領（二七ヶ村）では砂川村（現立川市）名主の村野源五右衛門、川越領南部（二二ヶ村）では北永井村（現三芳町）名主の船津太郎兵衛といったそうそうたる人物がその任に当たっていたのである。従って、宮原家が二代に亘ってその任にあったことは、同家の出自を考える上でも重要な意味を持ってくる。

御鷹場預り御案内は、寛永一〇年（一六三三）に尾張家鷹場が設けられた当初に任命された三名は、苗字帯刀御免、五人扶持を給され、大勝手鹿下曲目での御目見得も許され、御成り先では直々の御達もあるなど、

第142図　石柱模式図

第143図　石柱銘文

第六節　宮原家から発見された尾張家御鷹場境杭について

宮原家跡の発掘調査によって得られた近世の遺物として最も注目されるのは、尾張家御鷹場の境杭の一部と、宮原家が破損した境杭を保管するに至った経緯を刻した石柱が発見されたことである。いずれも明治初期まで同家の囲炉裏の囲いとして使用されていたものだが、明治初期にそれまであった家を壊し、その上に最近まで利用されていた家を建築した関係で、結果的には土中から出土したものである。

境杭の長さ四九cmの断片には、「従是東南」までの凡ての文字と次に続く「尾」の上半分までが彫られていて、「尾」の下半分とこれに続く「張殿御鷹場」とが刻まれているはずの部分は欠けており現存していない。尾張家御鷹場の境杭は、長さ一〇〇―一一〇cmというのが一般的とみられているところからみて、二分の一強の部分が折れた後に失われてしまったものと思われる。なお、この境杭の横幅と奥行は共に約一五cmである（第一四一図）。

次に保管の経緯を記した石柱は、概ね次のような形状と寸法を持っている（第一四二図）。

石柱の中で経緯を記した部分は、上部三分の一の箇所にあたり、高さ二九cm、横幅一六cmの長方形で、上部左右のコーナーは「ろ」状に落してある。ここに記されている銘文（第一四三図）は左記のように読める。

此石　御杭入間郡大久保村武蔵野
開境所有之折仍此度建替被

第141図　尾張家御鷹場境杭

〔引用・参考文献〕

会田　明　1978『打越遺跡』富士見市文化財報告第14集

1983『打越遺跡』富士見市文化財報告第26集

井田　実　1983「尾張家御鷹場御預り御案内の推移―志木周辺を中心として」『郷土志木』12号

井上　肇他　1978『舞台（資料編）』埼玉県遺跡発掘調査報告書第17集

1979『舞台（本文編）』埼玉県遺跡発掘調査報告書第18集

井上　肇　1979「7世紀の坏形土器について～南比企地方を中心として～」『埼玉県立博物館　紀要－6』

今泉泰之他　1974『南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影』埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集

大谷　徹他　1986『武蔵・熊ヶ谷東遺跡』立正大学文学部考古学研究室

小川貴司・比田井克仁他　1984『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会

岡田淳子他　1968『八王子中田遺跡』八王子中田遺跡調査会

神奈川考古同人会　1978『シンポジウム　神奈川県内における古墳時代後期から平安時代土器編年試案』神奈川考古第5号

金井浩雄他　1984『椿峰遺跡群』所沢市文化財調査報告書第12集

金井塚良一　1968『番清水遺跡概報』埼玉県遺跡調査会報告第1集

酒井清治　1987「武蔵国における須恵器年代の再検討」『研究紀要第9号』埼玉県立歴史資料館

坂口　一　1987「群馬県における古墳時代中期の土器の編年―共伴関係による土器型式組列の検討―」『研究紀要－4－』群馬県埋蔵文化財調査事業団

坂詰秀一他　1981『日野市落川遺跡調査概要Ⅰ』日野市落川遺跡調査会

1982『日野市落川遺跡調査概報Ⅱ』日野市落川遺跡調査会

1983『日野市落川遺跡調査概報Ⅲ』日野市落川遺跡調査会

佐々木保俊　1987『城山遺跡長勝院地点発掘調査報告書』志木市の文化財第11集

佐々木保俊・尾形則敏　1985『西原大塚遺跡第3地点　中野遺跡第2地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第1集

1986『新邸遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第2集

1987『新邸遺跡第2地点　西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第3集

佐原　真　1983『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社

志木市史編さん室　1984『志木市史　原始・古代資料編』

1986『志木市史　中世資料編』

1987『志木市史　近世資料編Ⅲ』

田部井功・高橋俊男　1982『袋・台遺跡』吹上町教育委員会

高橋一男・中村倉司　1978『精進場遺跡』神川村教育委員会

立石盛詞他　1983『後張　本文編・図版編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集

谷井　彪・宮野和明他　1975『西原・大塚遺跡発掘調査報告』志木市の文化財第4集

利根川章彦　1982「古墳時代集落構成の一考察―児玉地方の5～8世紀の集落群の動態と土師器の変遷を中心として―」『土曜考古第5号』

中田　英　1979「地下式壙研究の現状について」『神奈川考古第2号』

中村倉司他　1980『臺遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第41集

中村倉司　1978『甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第35集

1979『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第38集

1980『瓦荘神社前遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第39集

中村　浩　1978『陶邑Ⅱ』大阪府文化財調査報告書第29輯

1981『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯

沼山源喜治・中山清隆　1985『大瀬戸東遺跡』朝霞市文化財調査報告書第13集

長谷川勇他　1983『二本松遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第5集1分冊

1985『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第5集2分冊

比田井克仁　1985「7世紀における多摩地方の土器様相―多摩ニュータウン地域の検討のために―」『研究論集Ⅲ』東京都埋蔵文化財センター

広田都巽　1974『和鏡の研究』角川書店

富士見市史編さん室　1985『富士見市史資料編3　古代・中世』

前田京子　1982「尾州家鷹場の一考察―御鷹場御預り御案内を中心に―」『郷土志木』11号

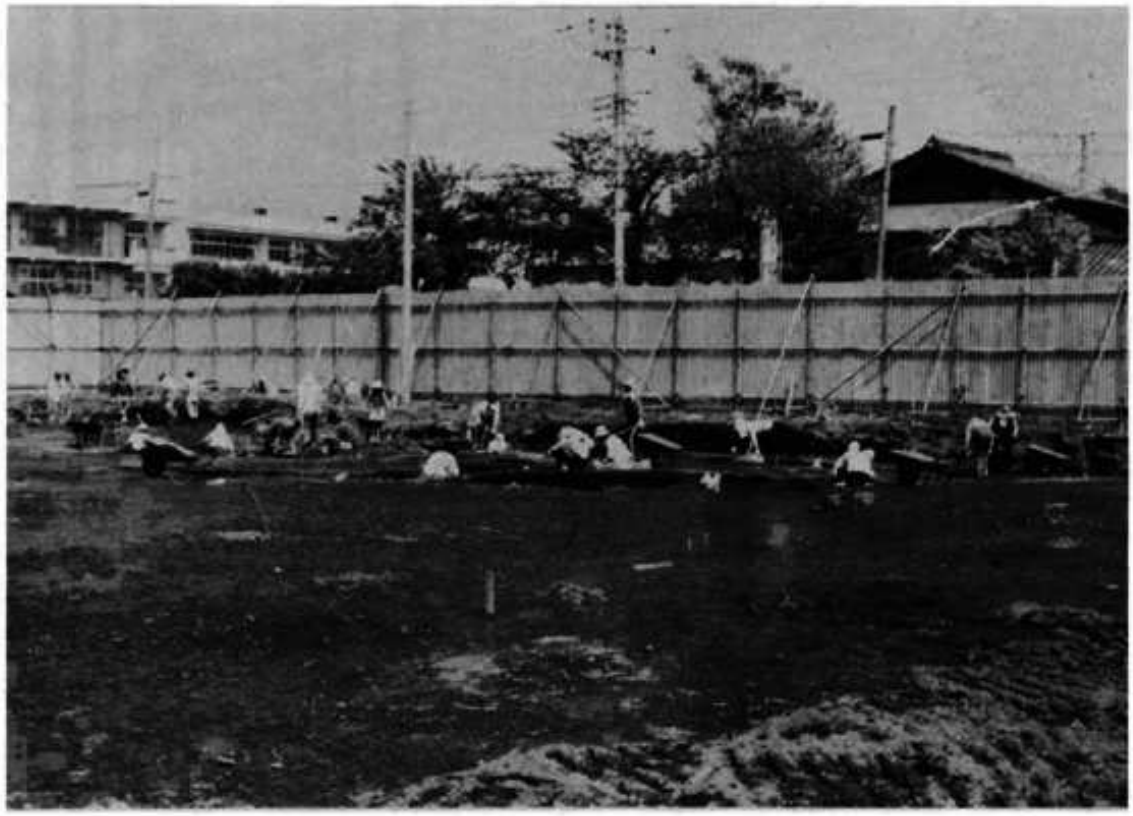
水野順敏・北原実徳　1981『東京都狛江市岩戸八幡神社遺跡』岩戸八幡神社遺跡調査会

水村孝行他　1982『桜山窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集

図　　版

湖　　図

航空写真（北より）



発掘風景

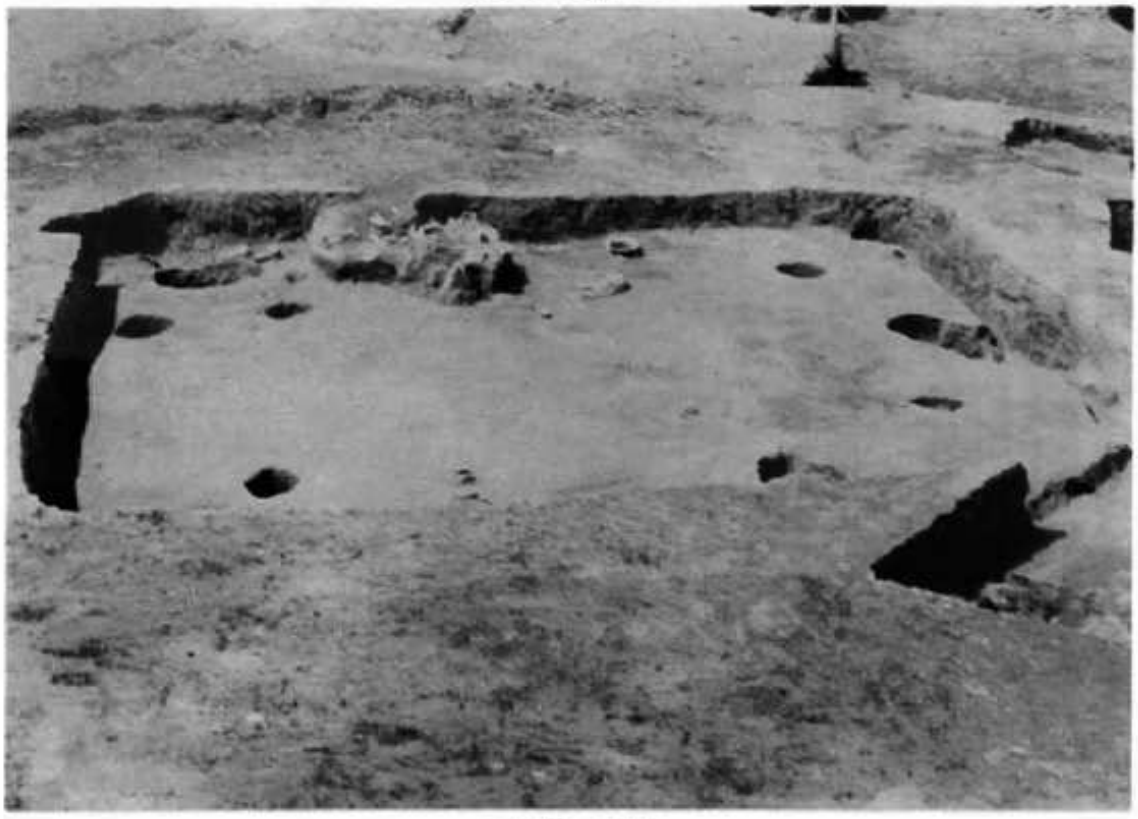
1・21号住居址

1号住居址遺物出土状態

3 号 住 居 址

6 号 住 居 址

14号住居址



15号住居址

18・19号住居址

19号住居址遺物出土状態

23号住居址

24号住居址

31・32号住居址

36号住居址

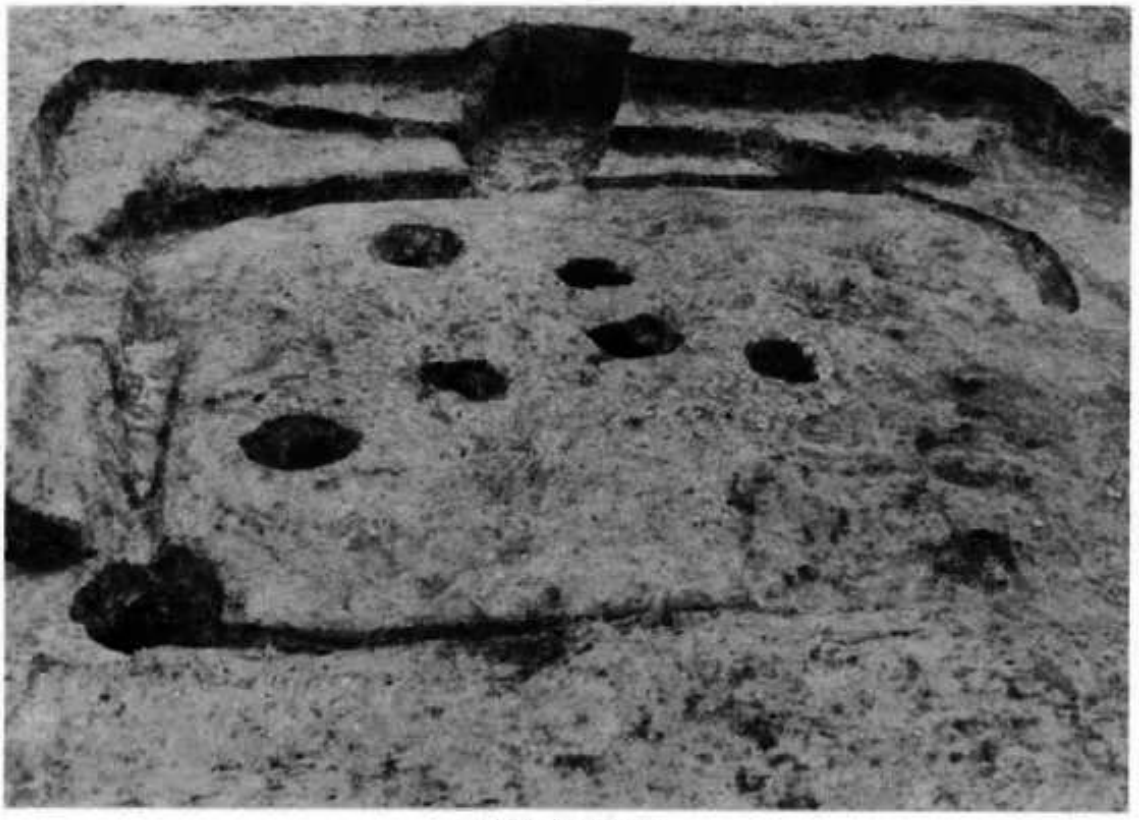
37 号 住 居 址

38 号 住 居 址

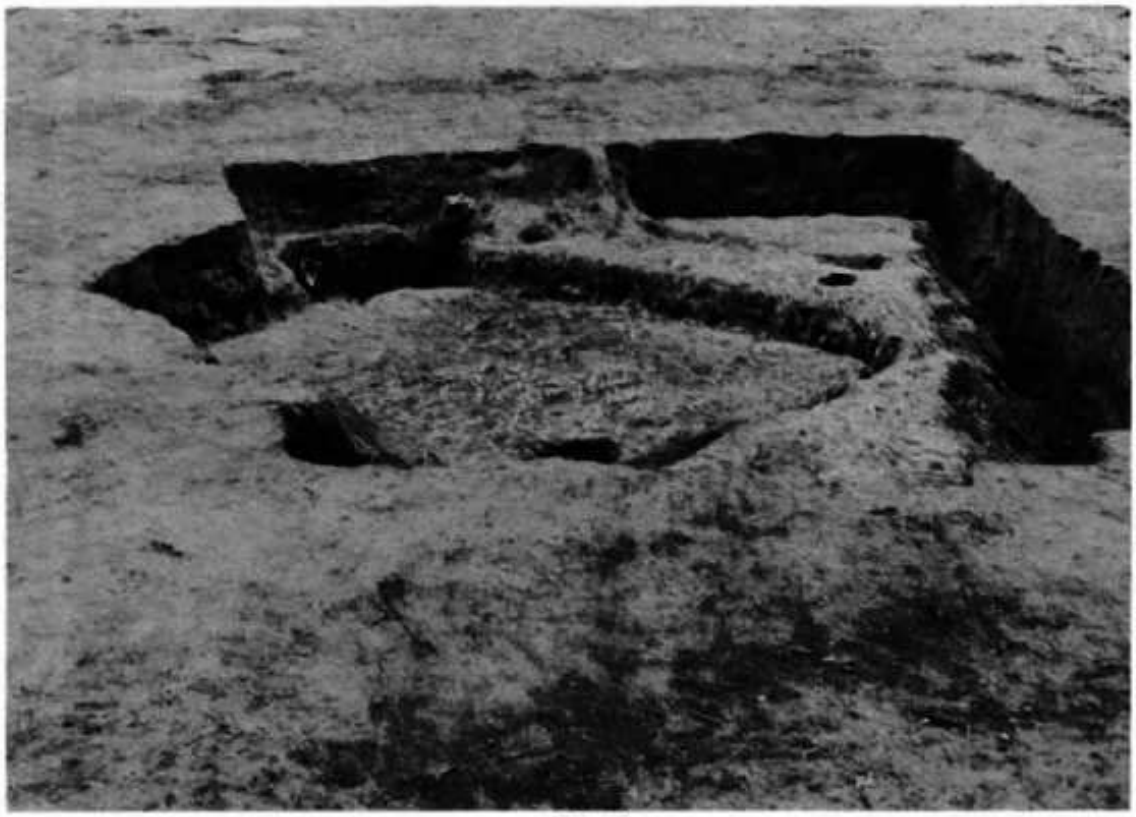
41号住居址

42・43号住居址

45号住居址

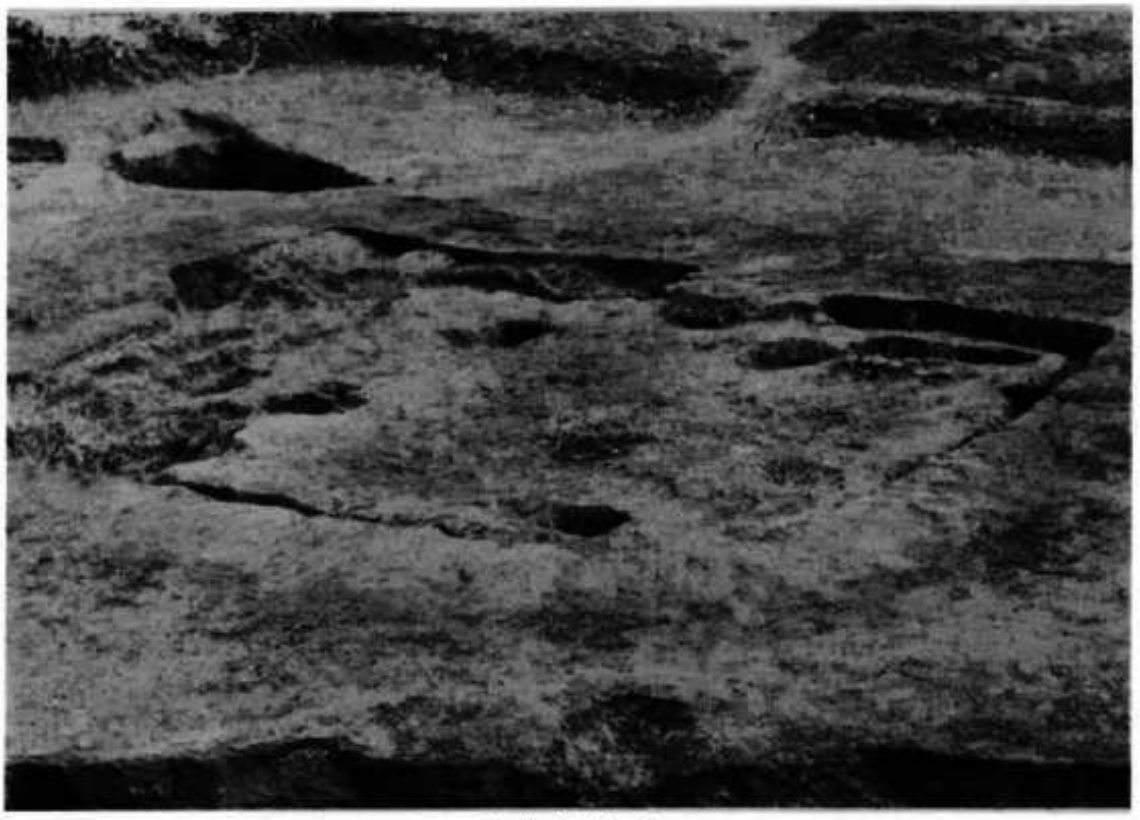


47号住居址



48・51号住居址

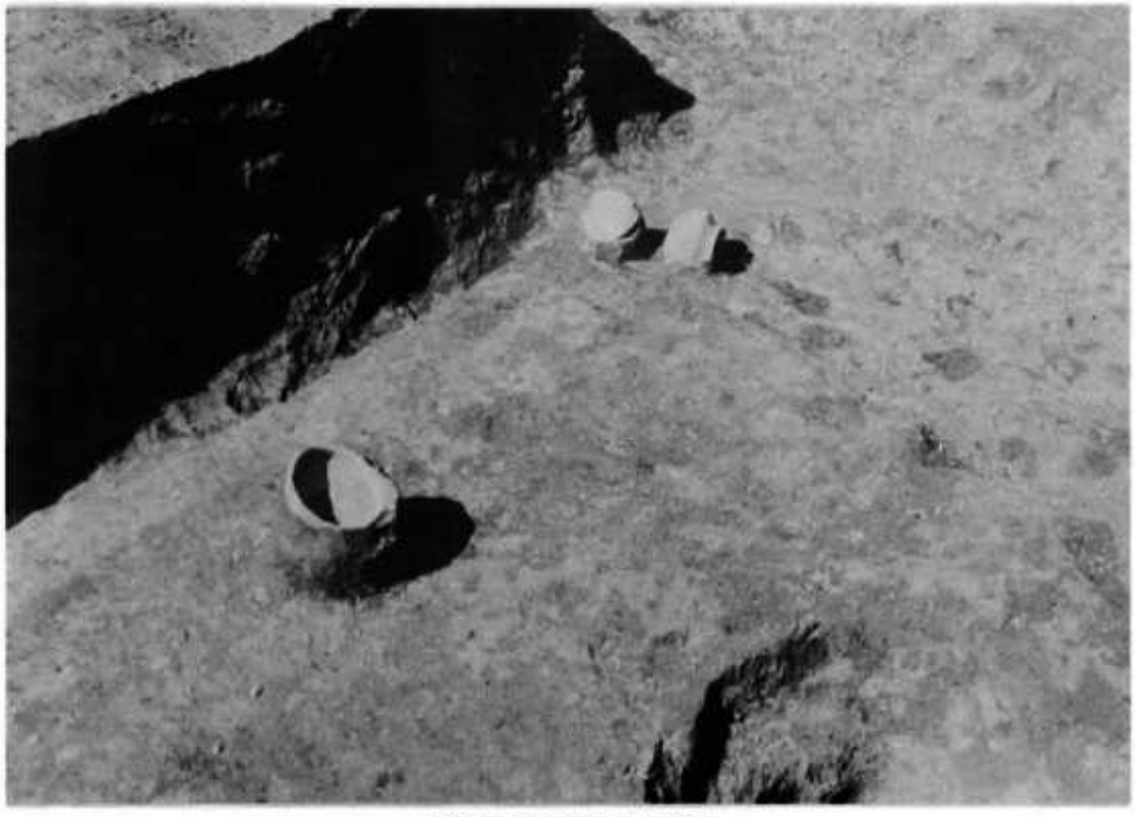
48号住居址遺物出土状態



49号住居址

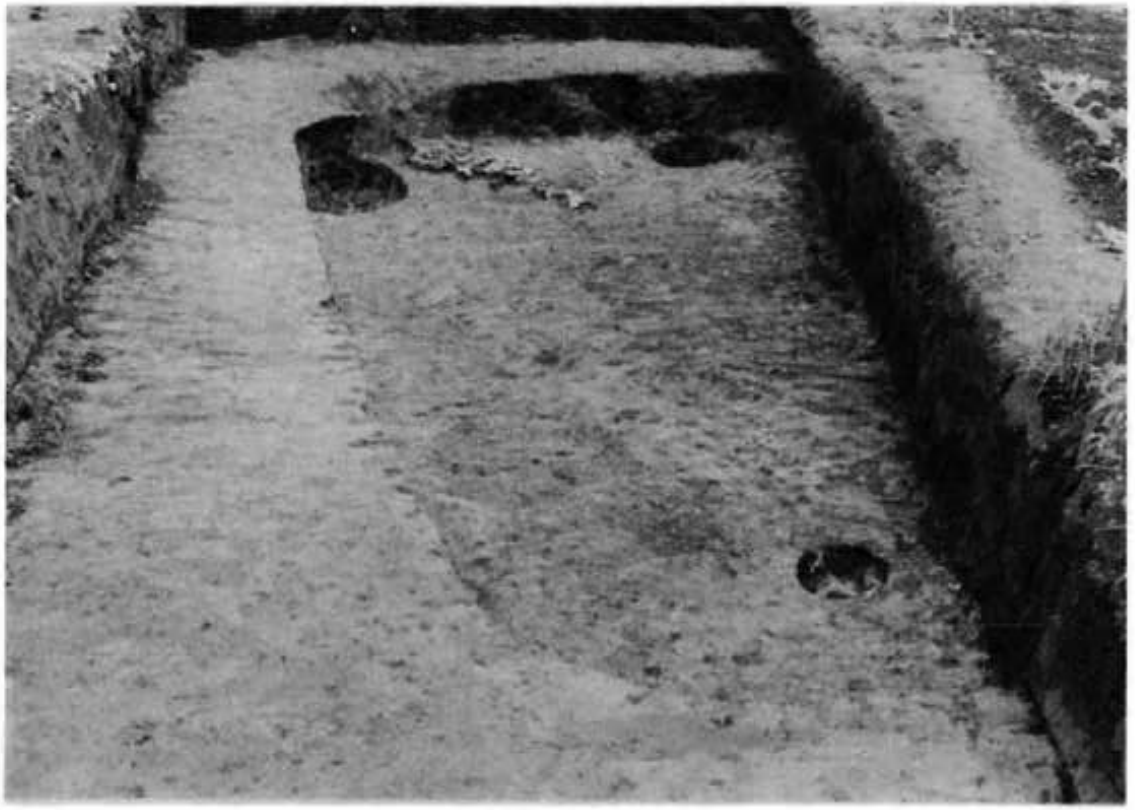
54号住居址

56 号 住 居 址

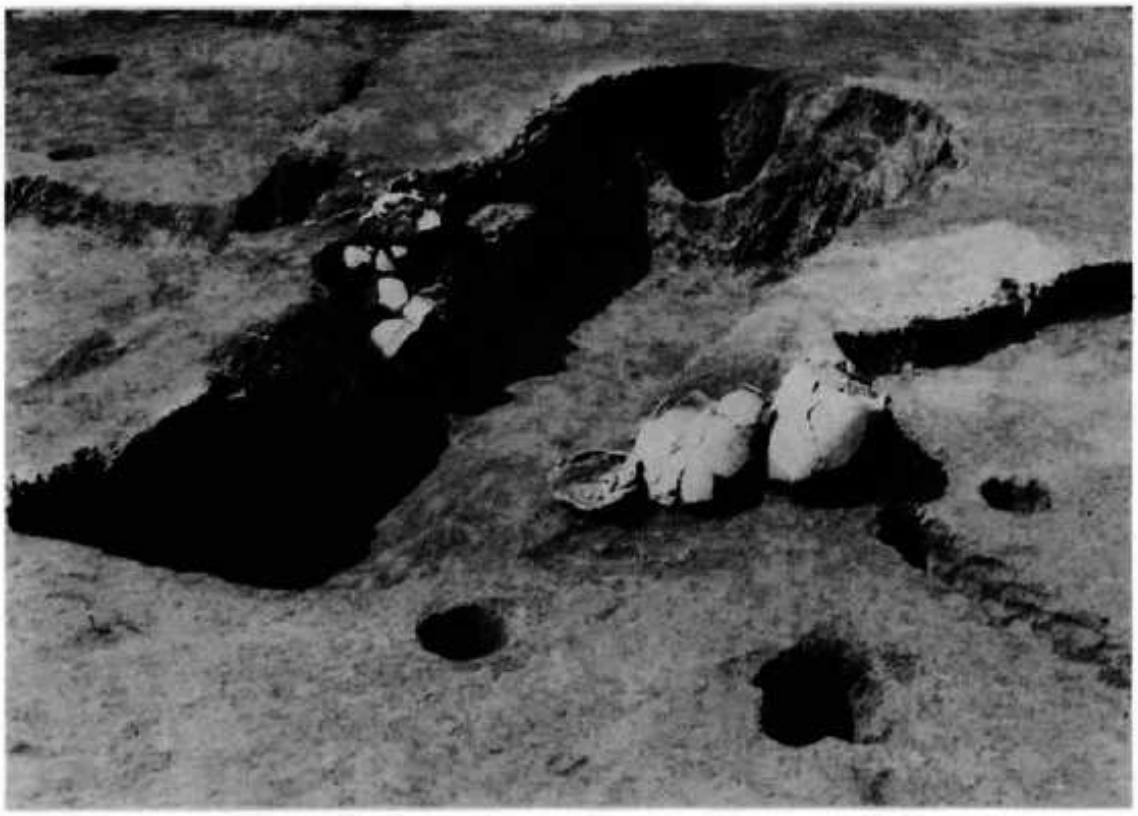


56号住居址遺物出土状態

57号住居址

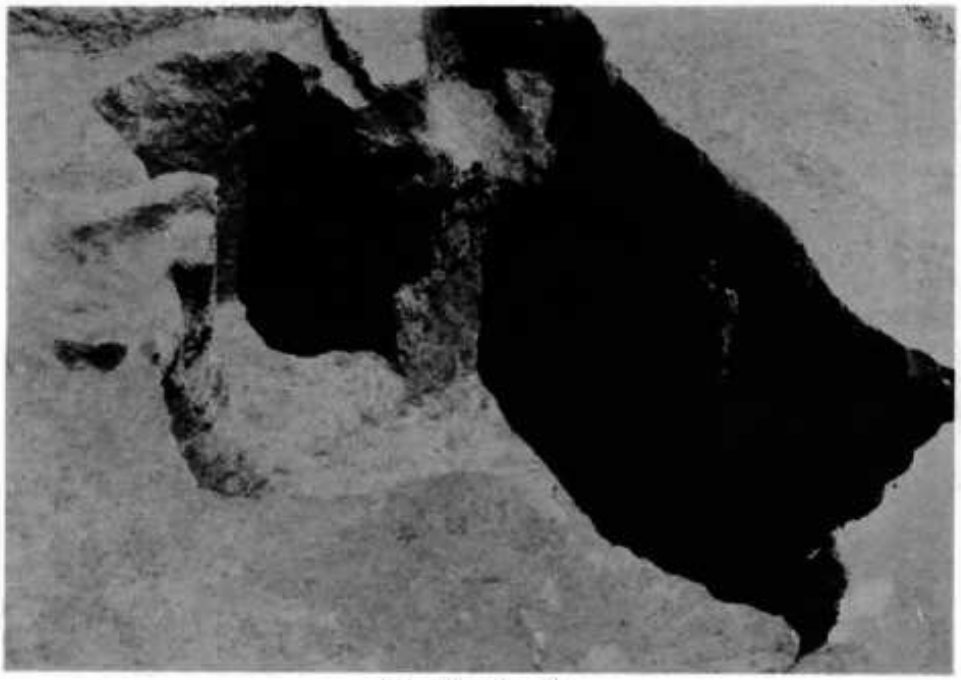


60号住居址

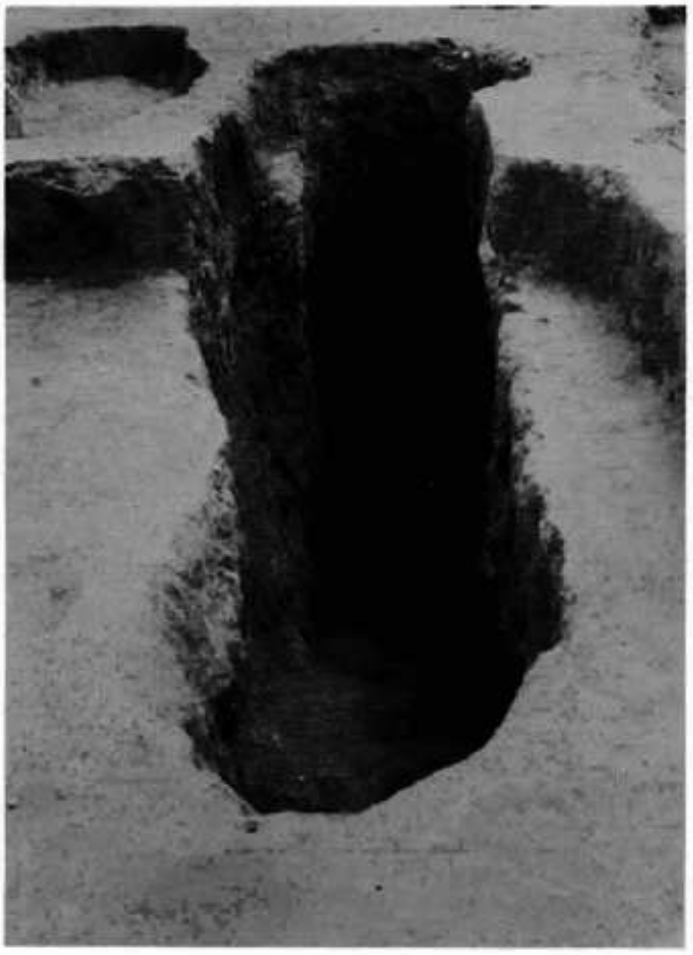


1 号 土 坑

10 号 土 坑



16 号 土 坑

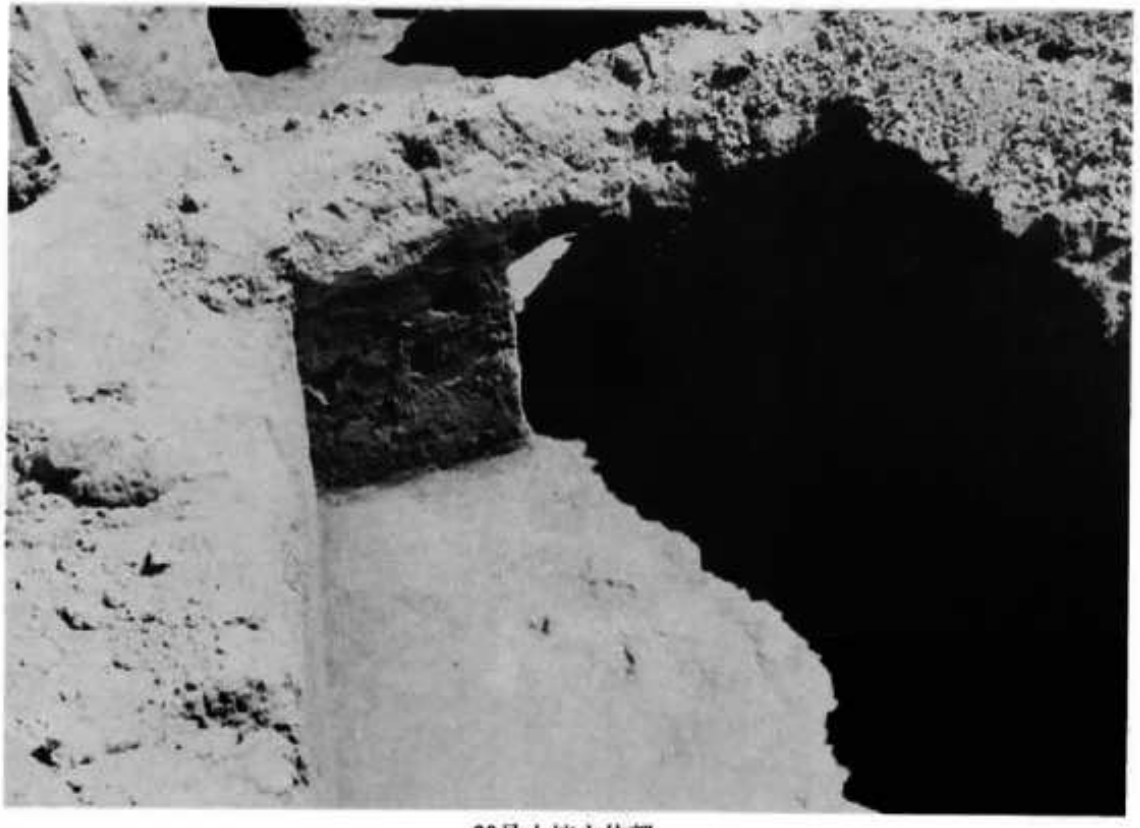


17 号 土 坑

18 号 土 坑

19 号 土 坑

20 号 土 坑



20号土坑主体部

21 号 土 坑

27 号 土 坑

28 号 土 坑

31 号 土 坑

1 号井戸址

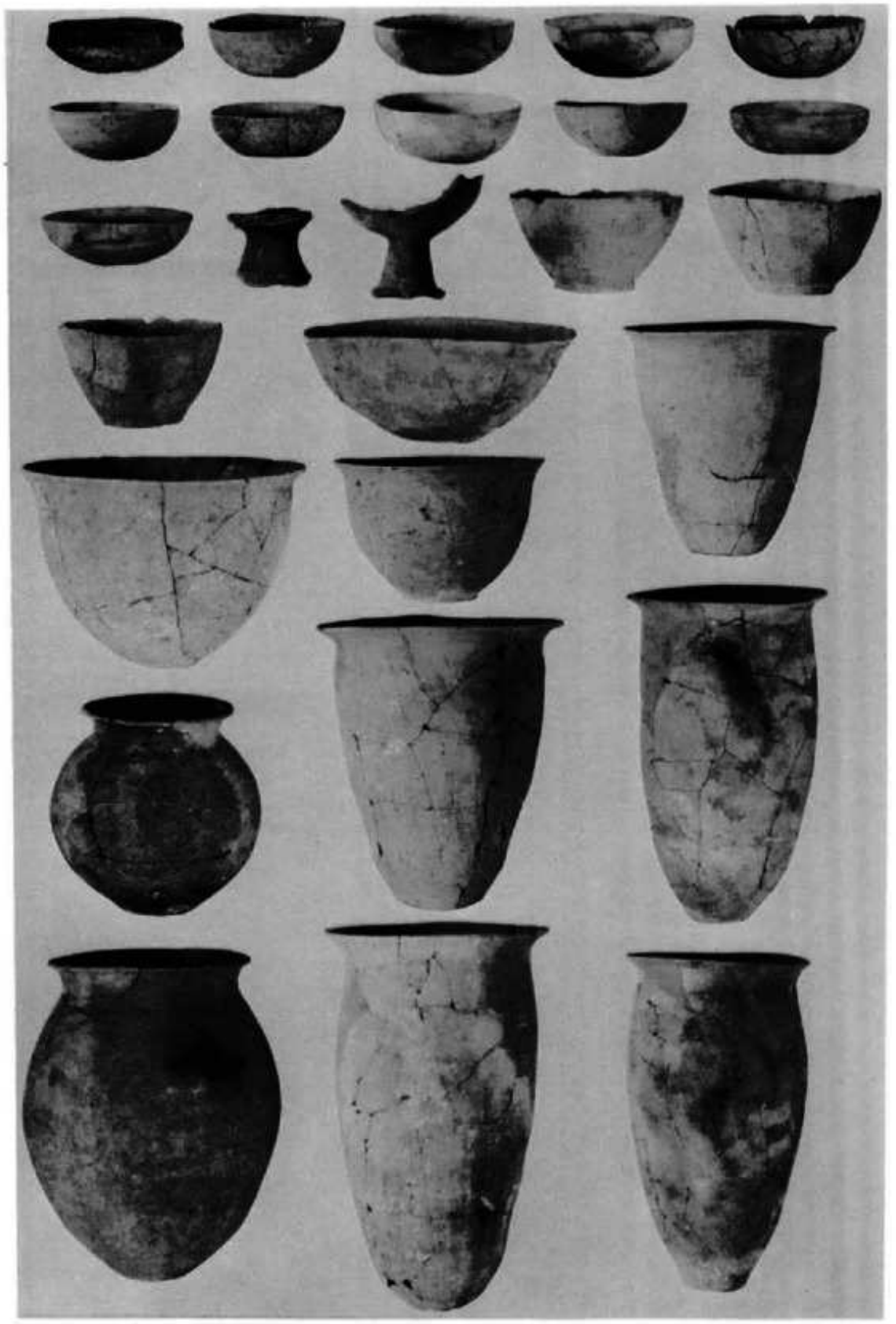
2 号井戸址

1号溝址（E－3グリッド）

1号溝址（E－10グリッド）

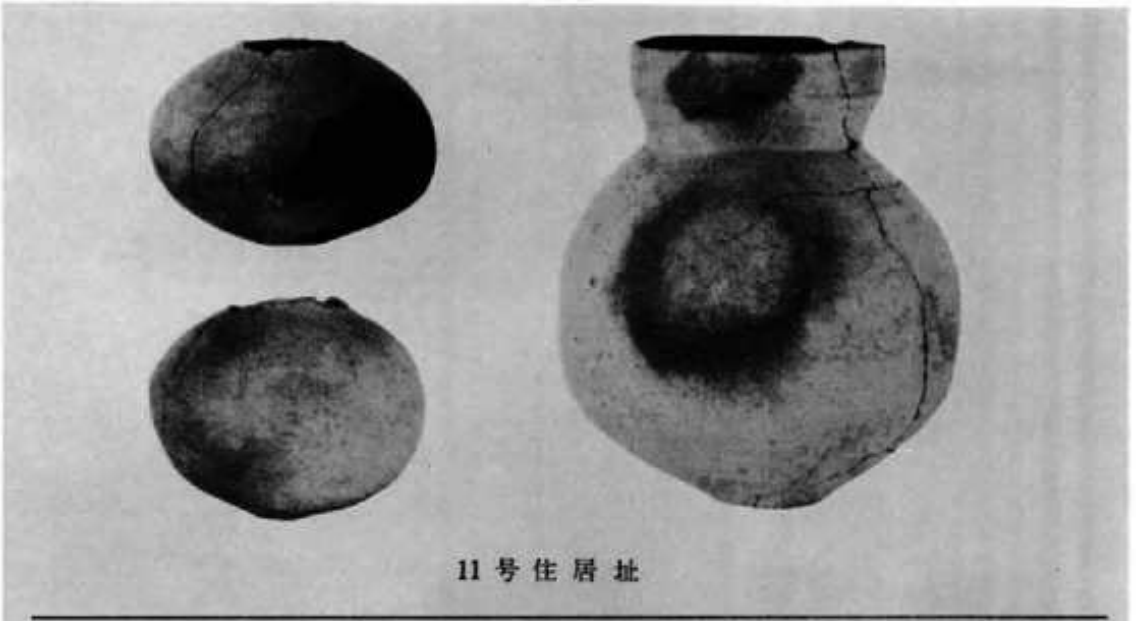
3 号 溝 址

3 号 溝 址

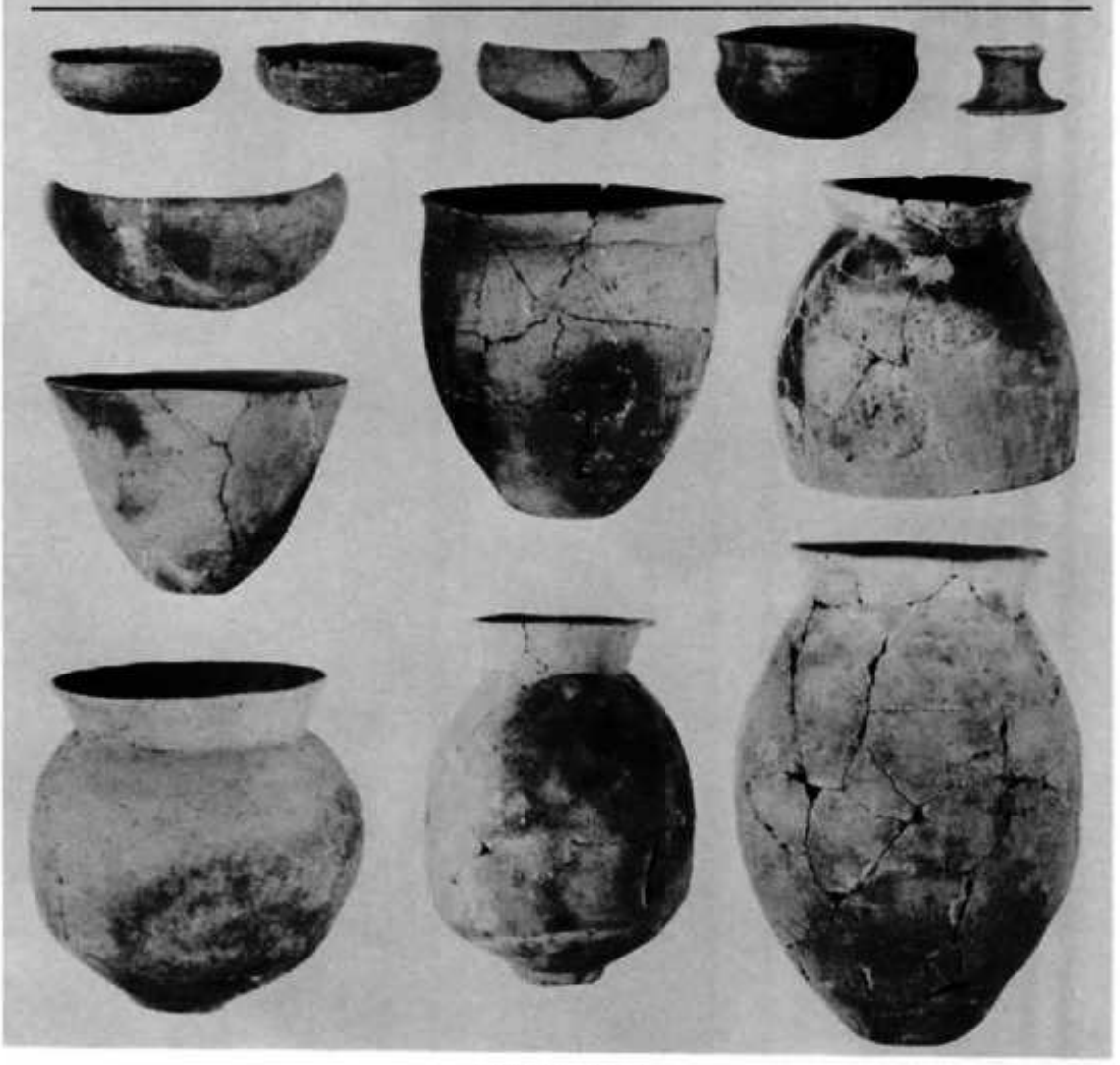


1号住居址

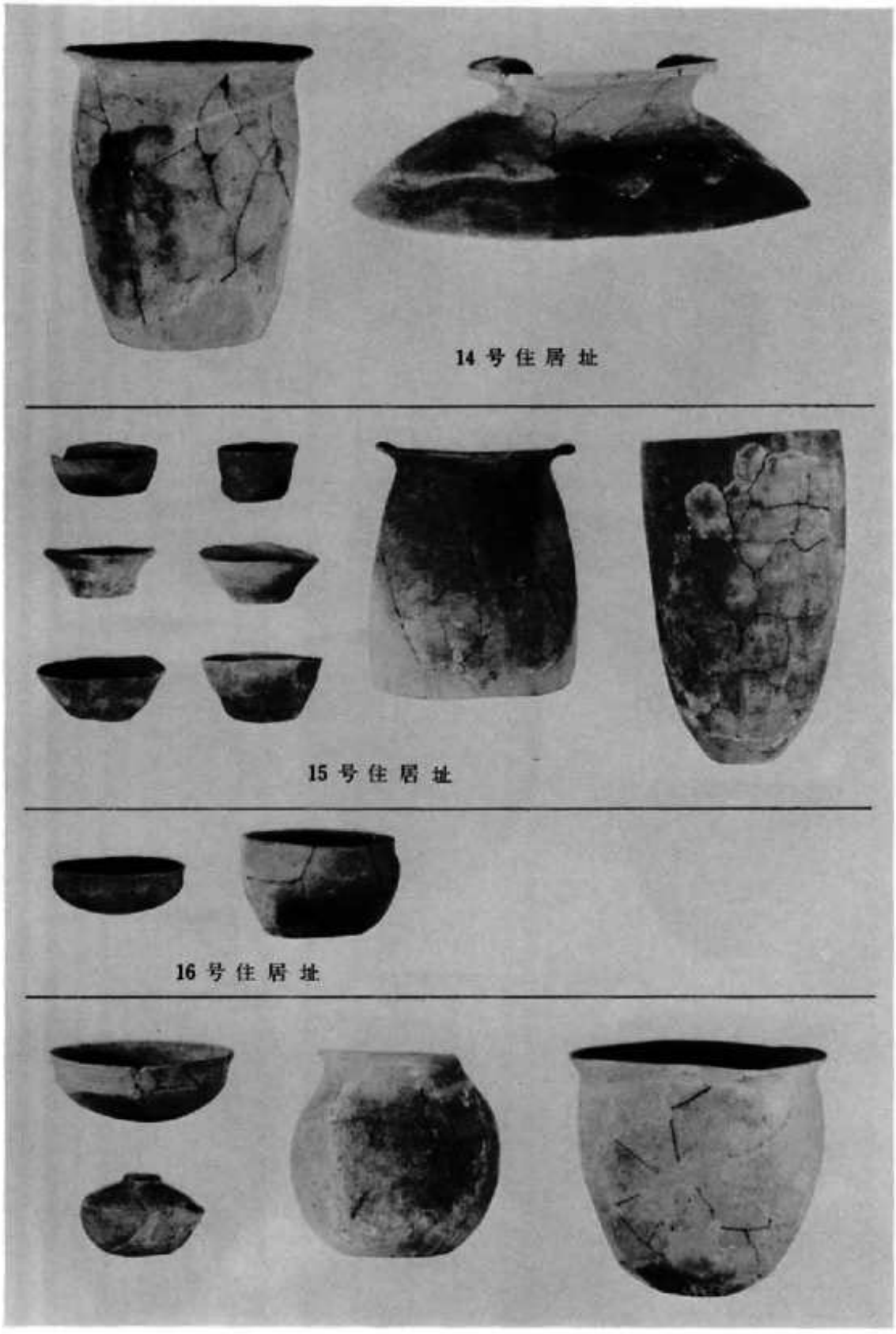
3号住居址
5号住居址
6号住居址
7号住居址
8号住居址
9号住居址



11号住居址



12号住居址

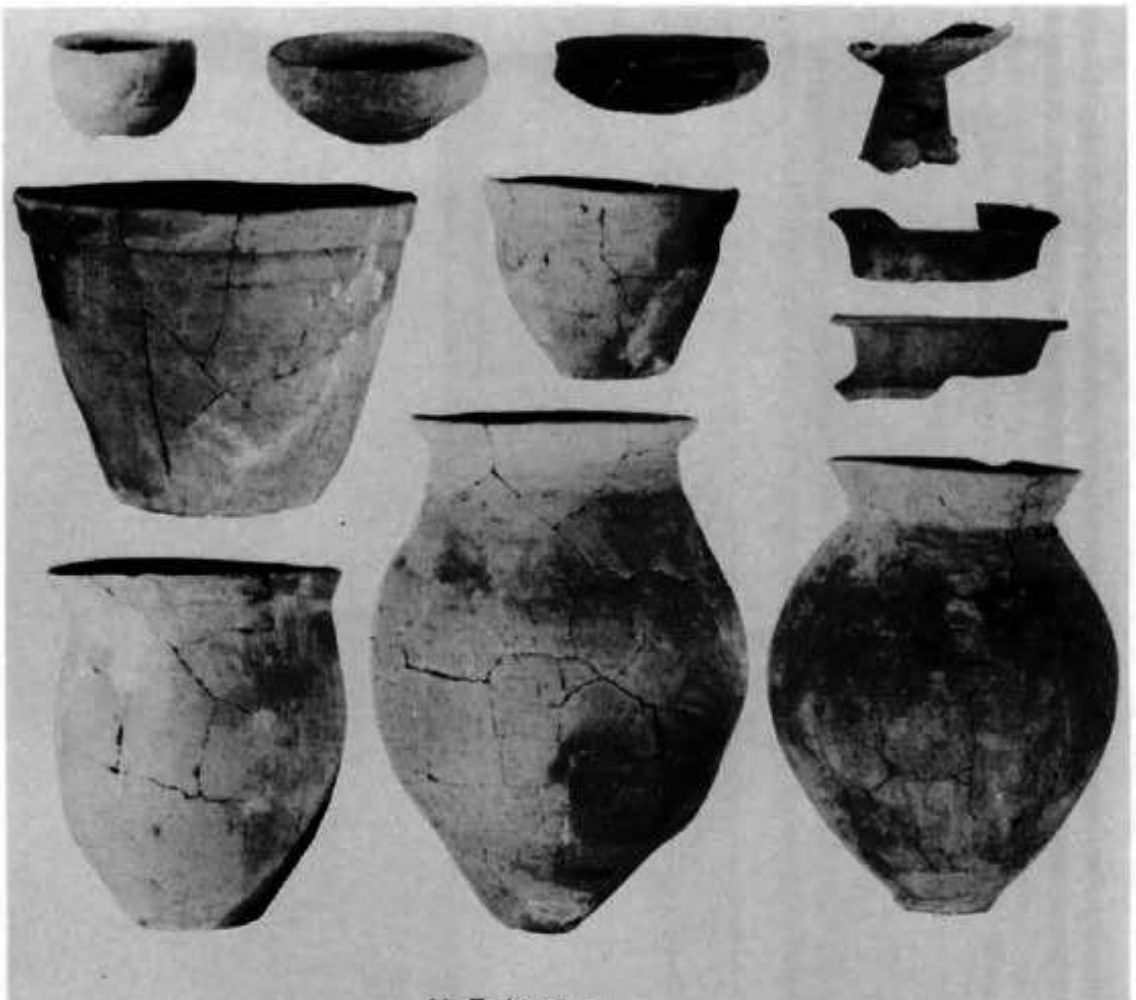


14号住居址

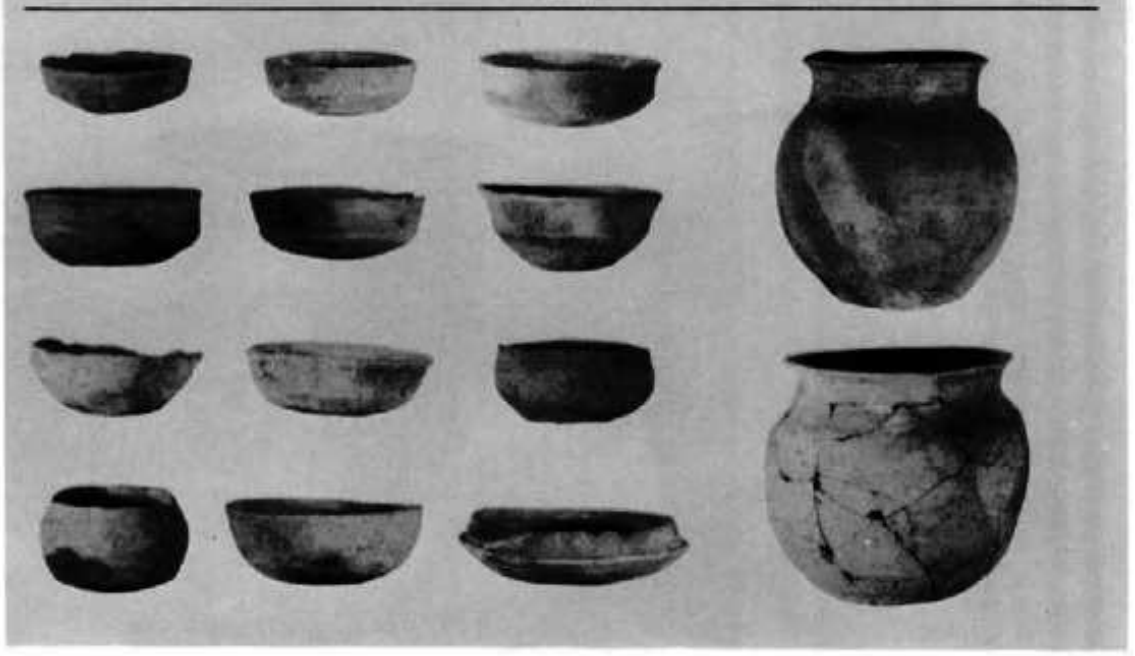
15号住居址

16号住居址

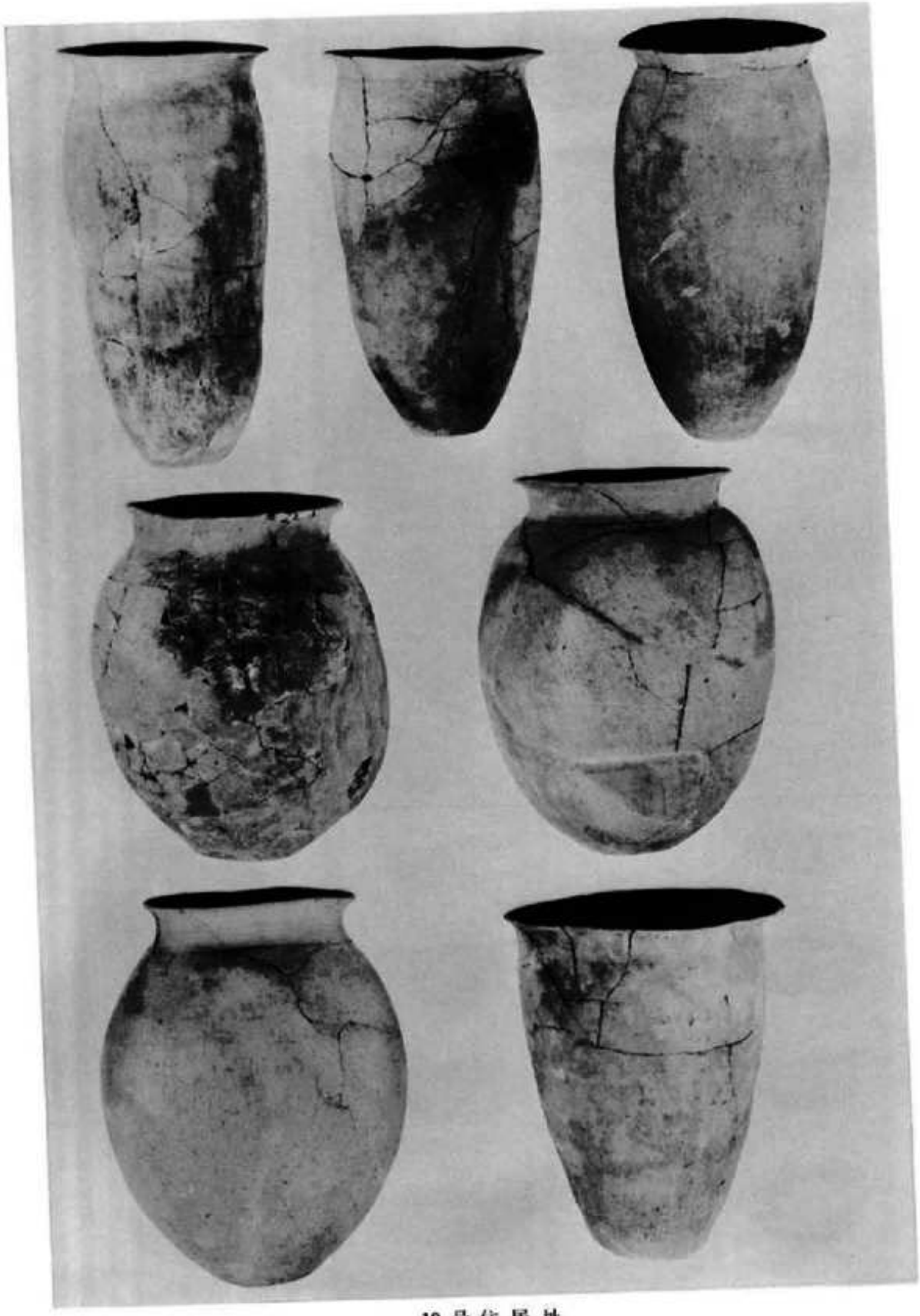
17号住居址



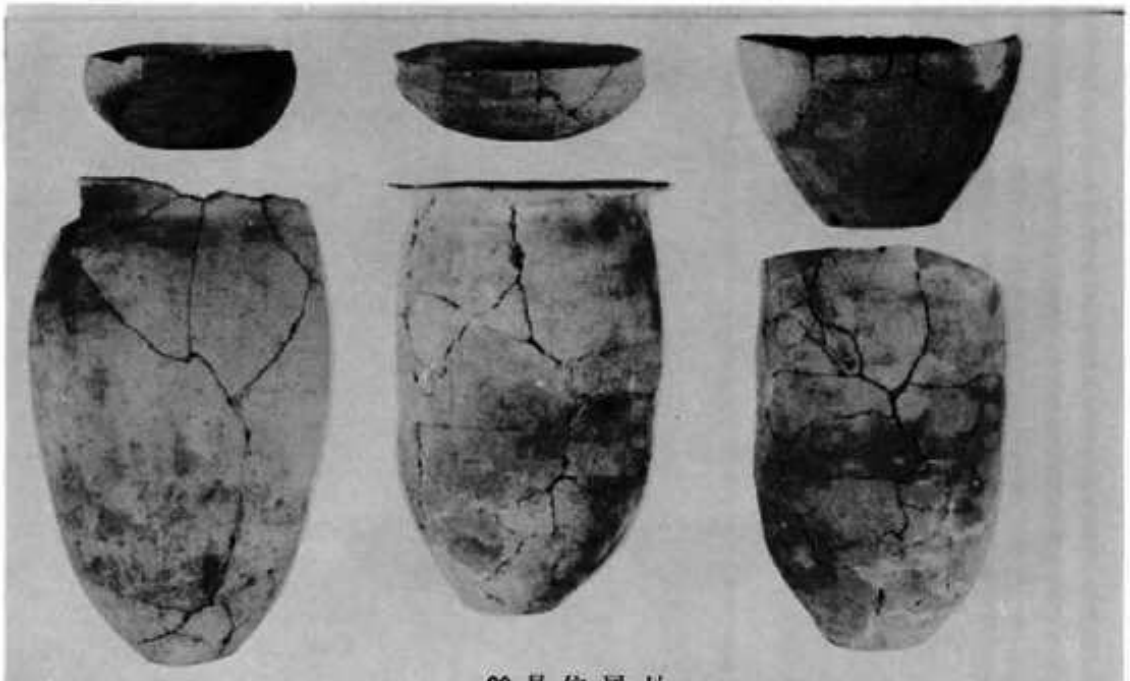
18号住居址



19号住居址



19号住居址

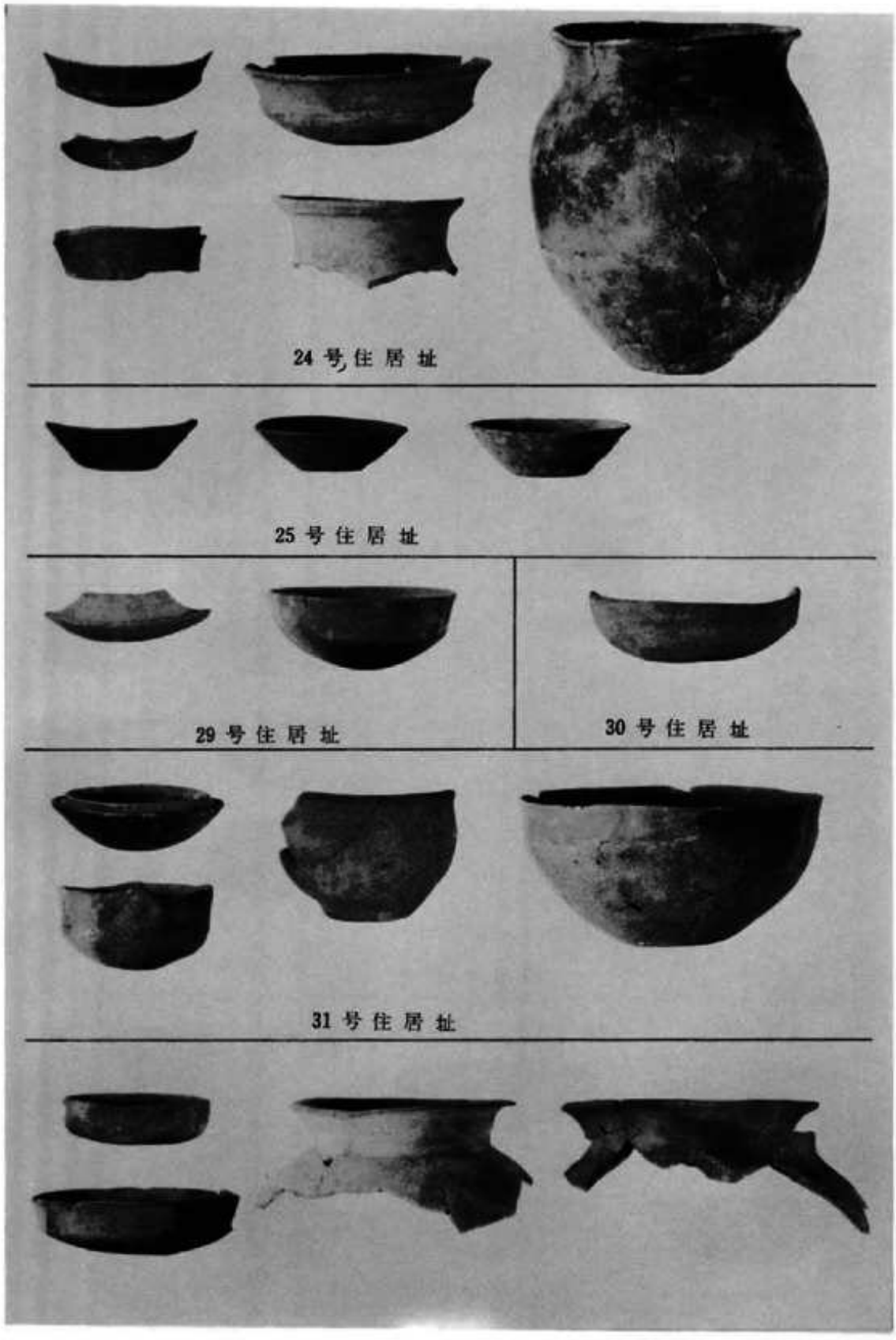


20号住居址

21号住居址

22号住居址

23号住居址



24号住居址

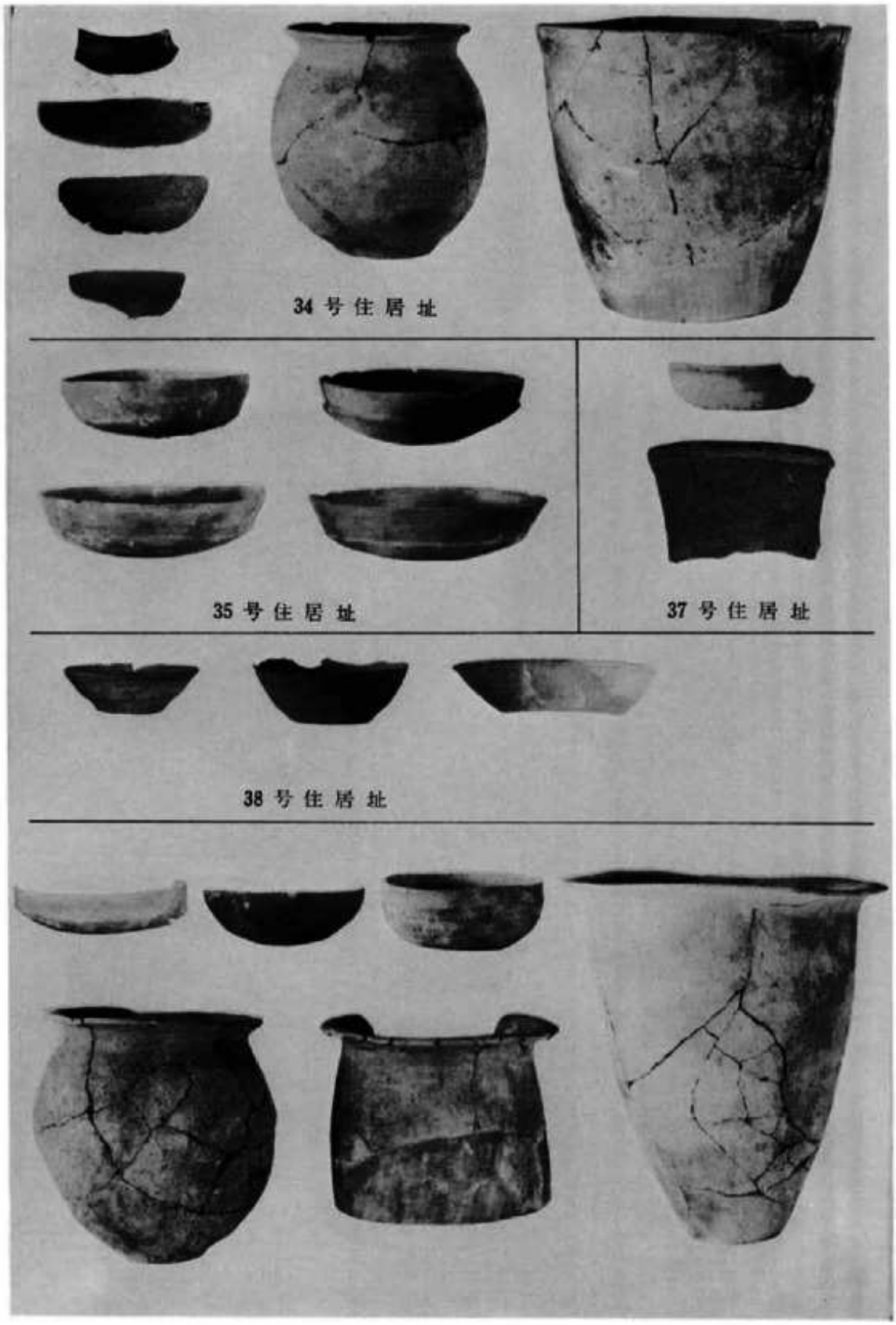
25号住居址

29号住居址

30号住居址

31号住居址

32号住居址



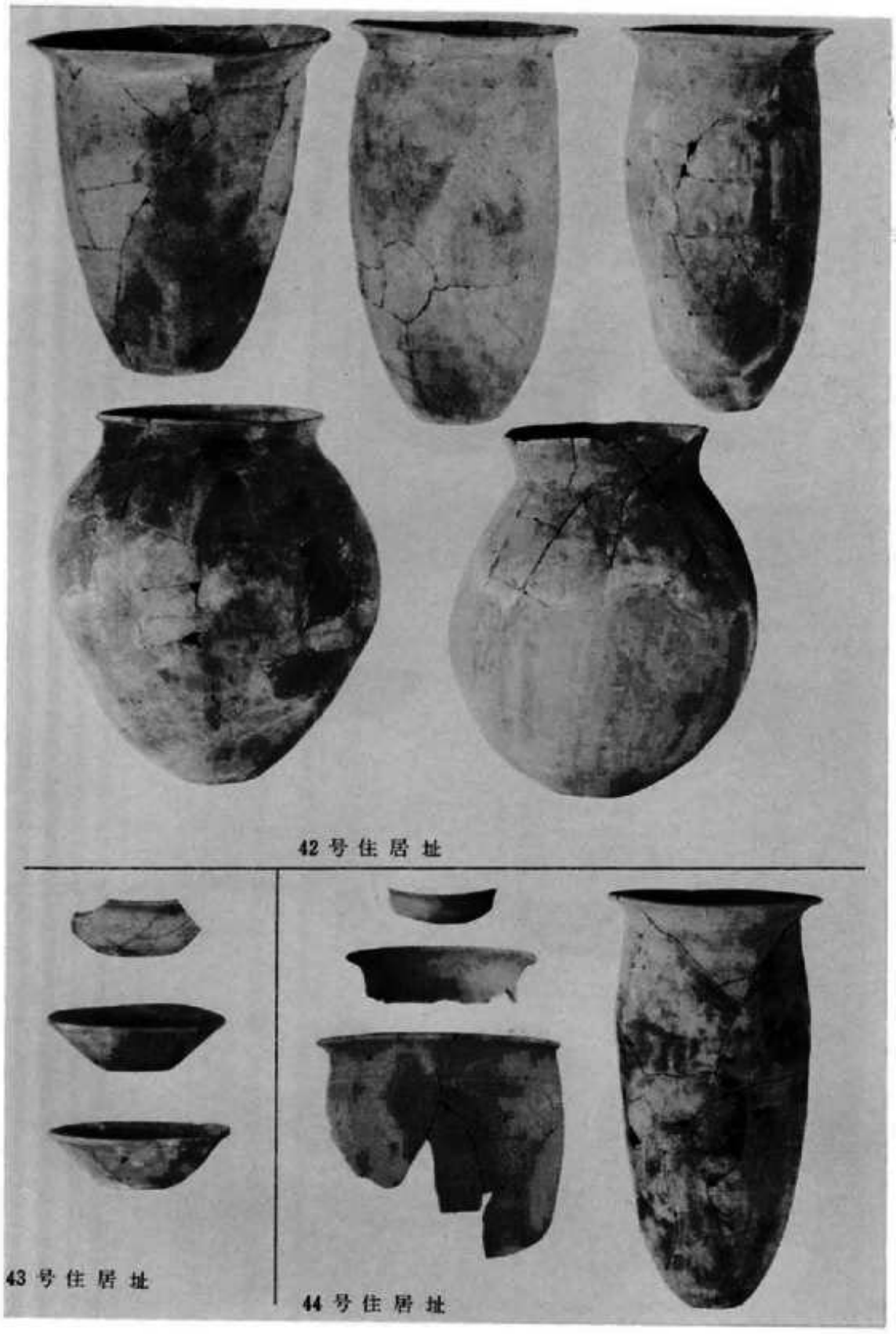
34号住居址

35号住居址

37号住居址

38号住居址

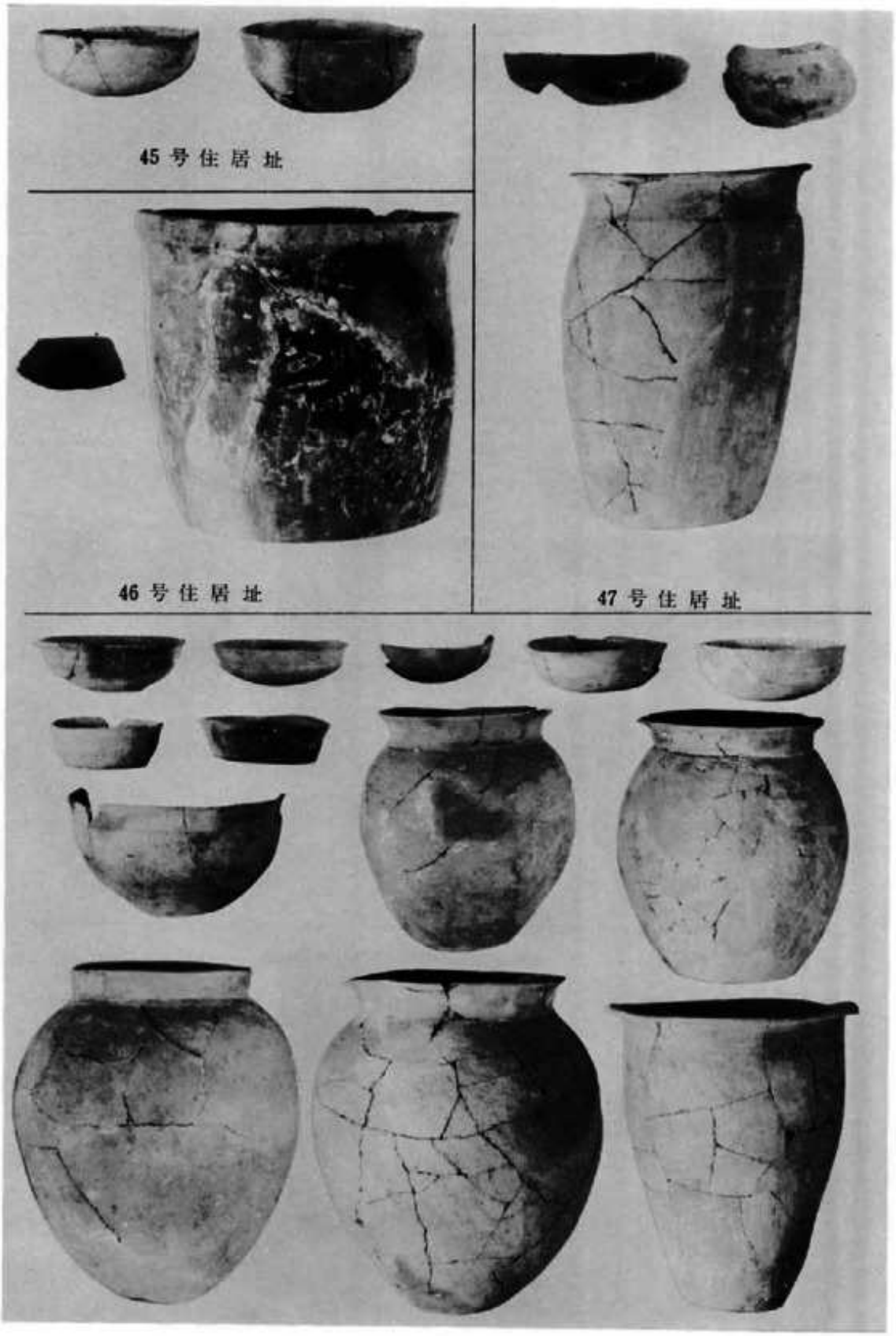
41号住居址



42号住居址

43号住居址

44号住居址

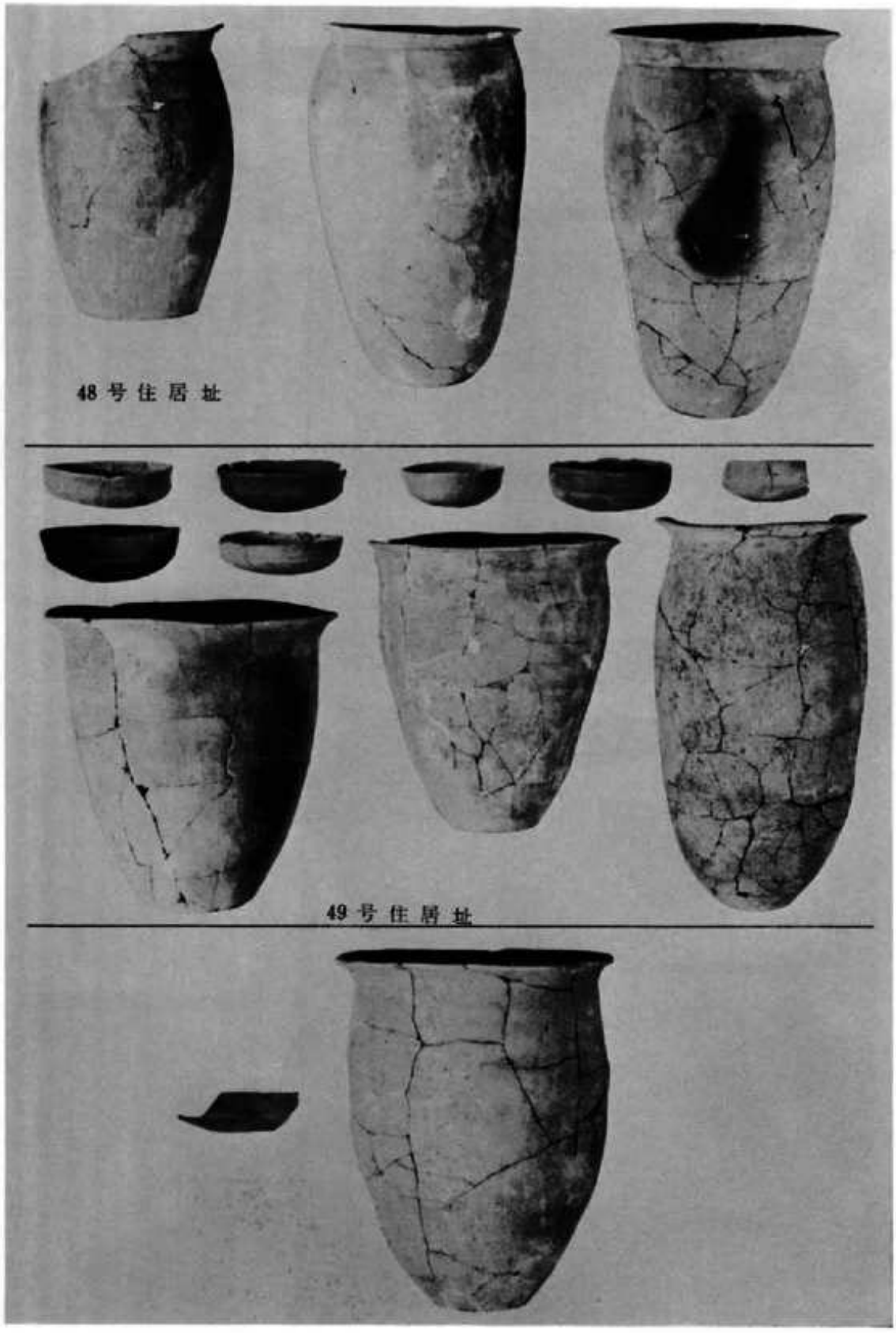


45号住居址

46号住居址

47号住居址

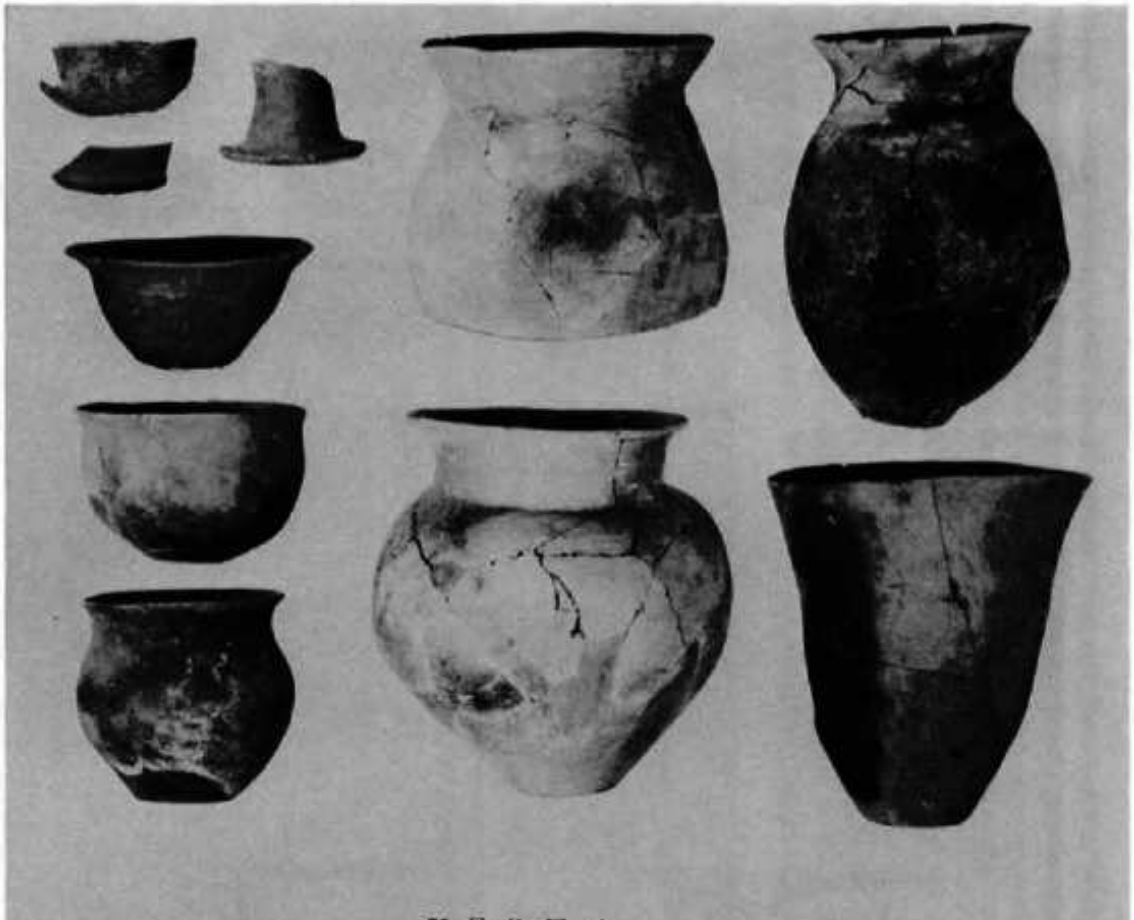
48号住居址



48号住居址

49号住居址

50号住居址



51 号 住 居 址

53 号 住 居 址

54号住居址

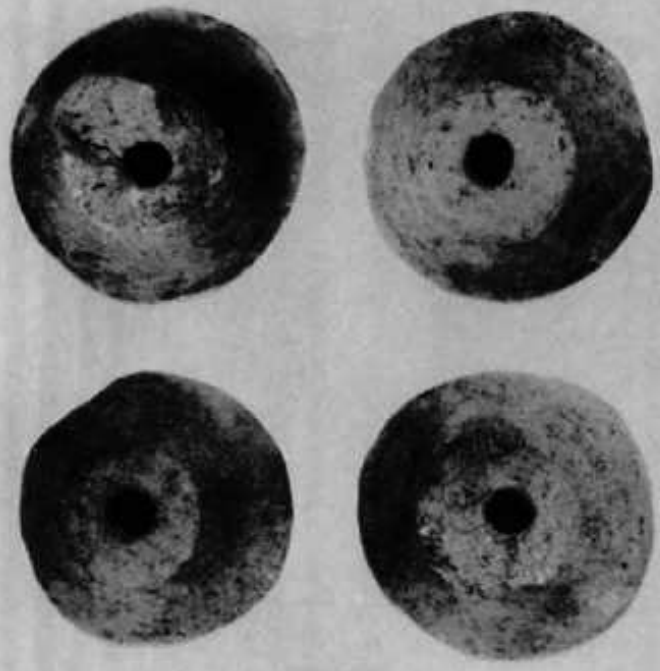
56号住居址

56号住居址

58号住居址

59号住居址

60号住居址



15号住居址

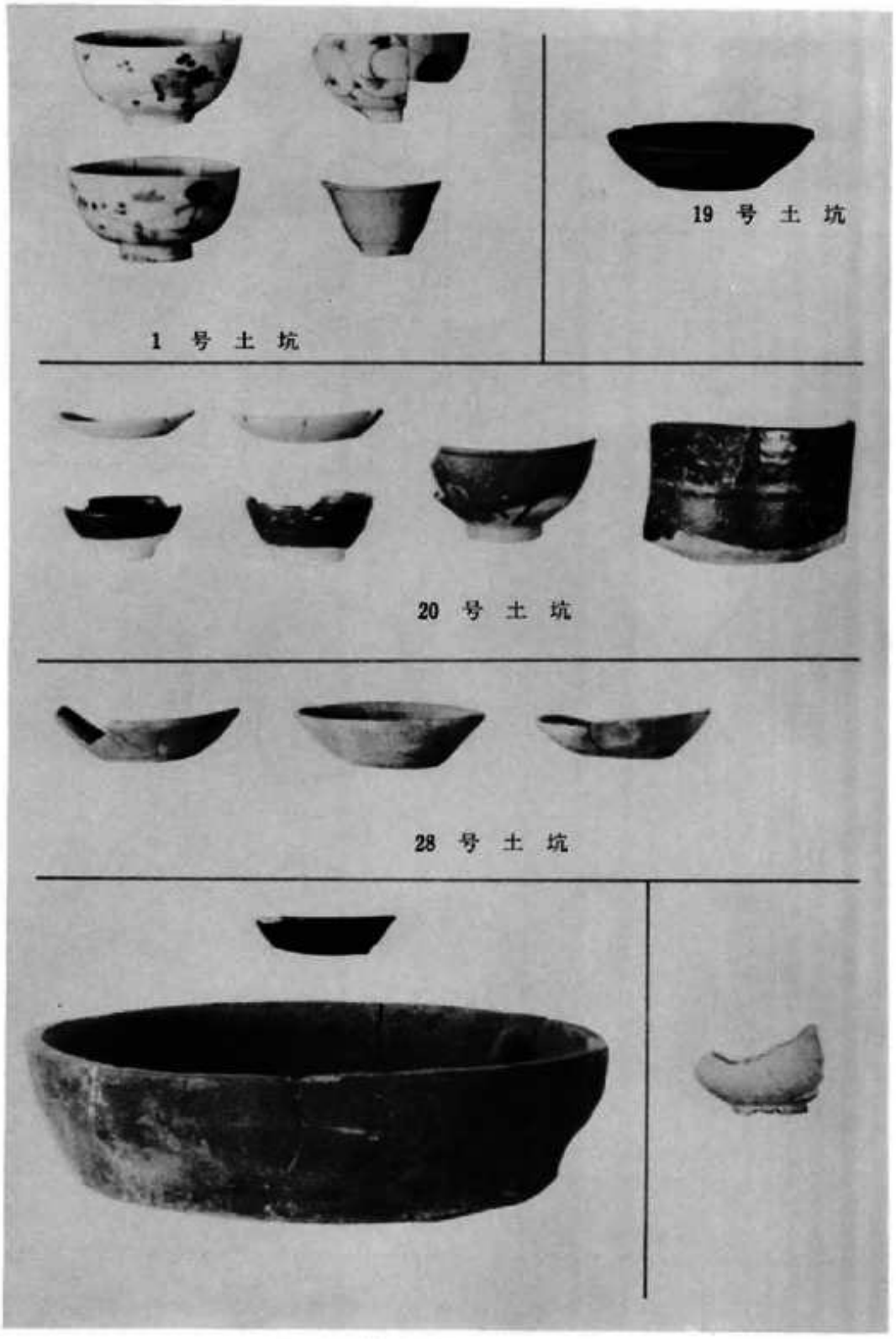
18号住居址

54号住居址

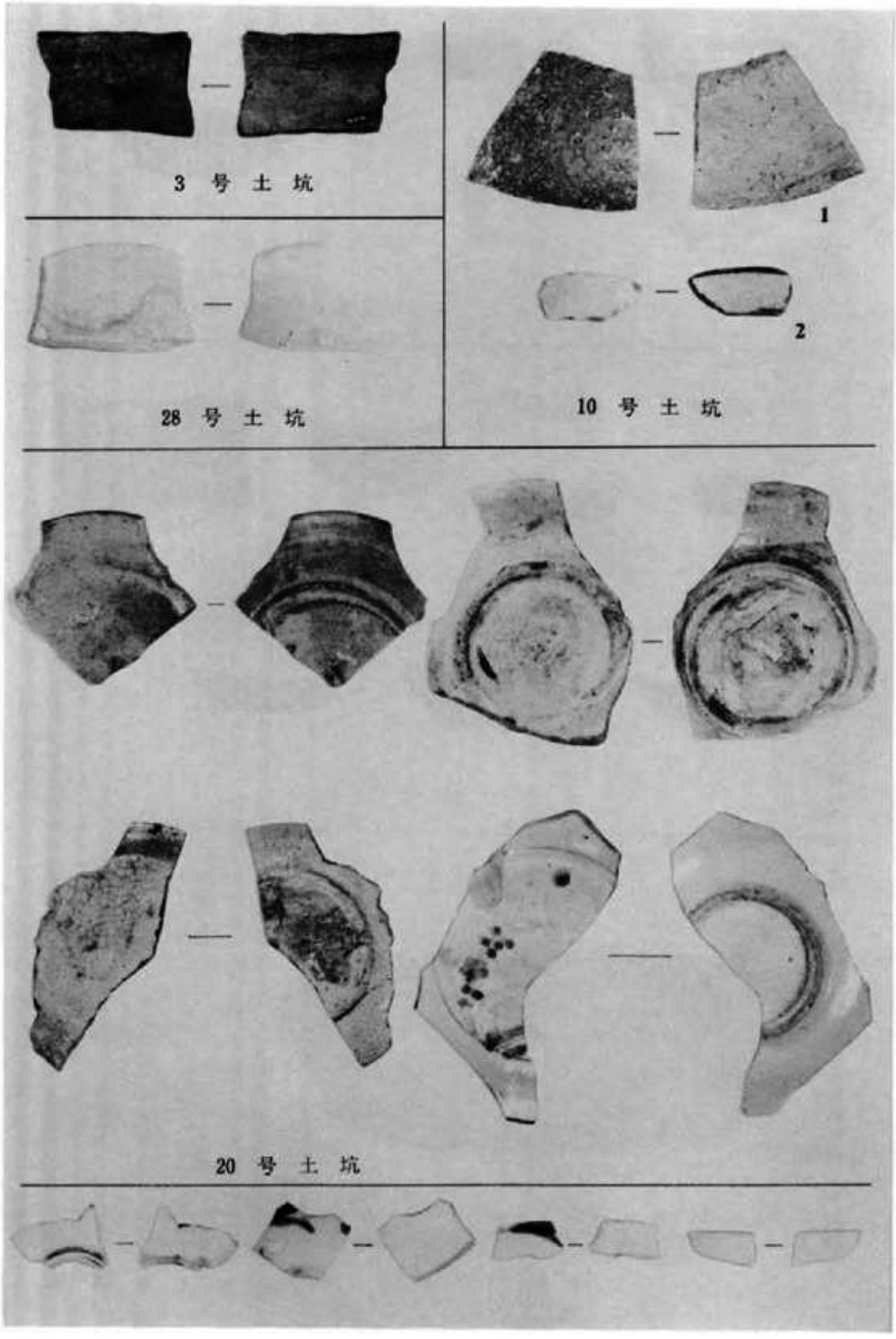
24号住居址

37号住居址

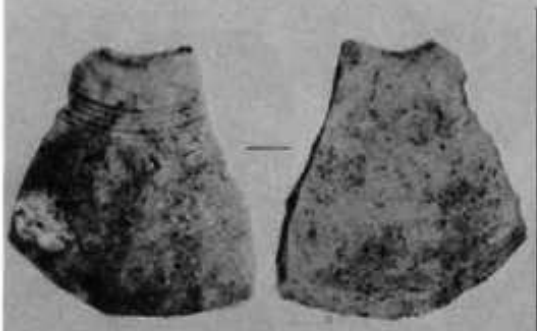
41号住居址



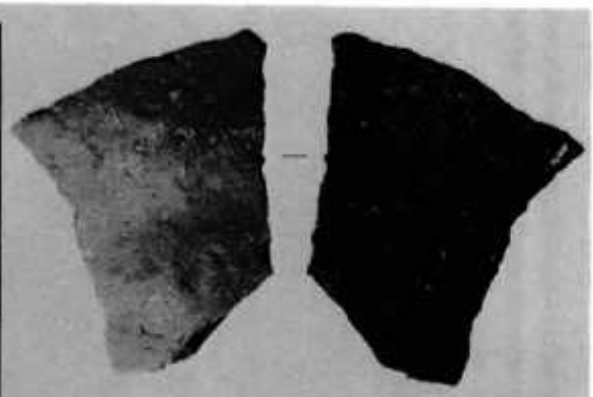
1 号井戸址　　1 号溝 址



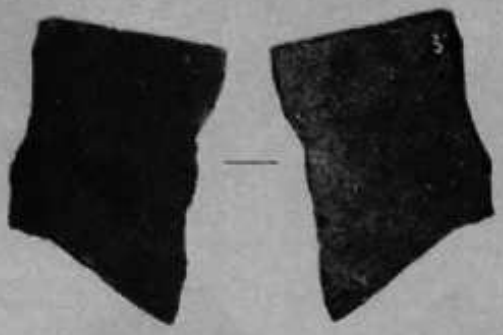
2 号井戸址



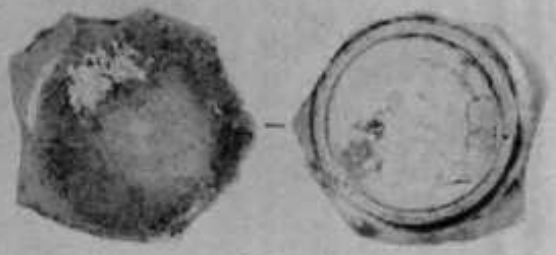
3号井戸址



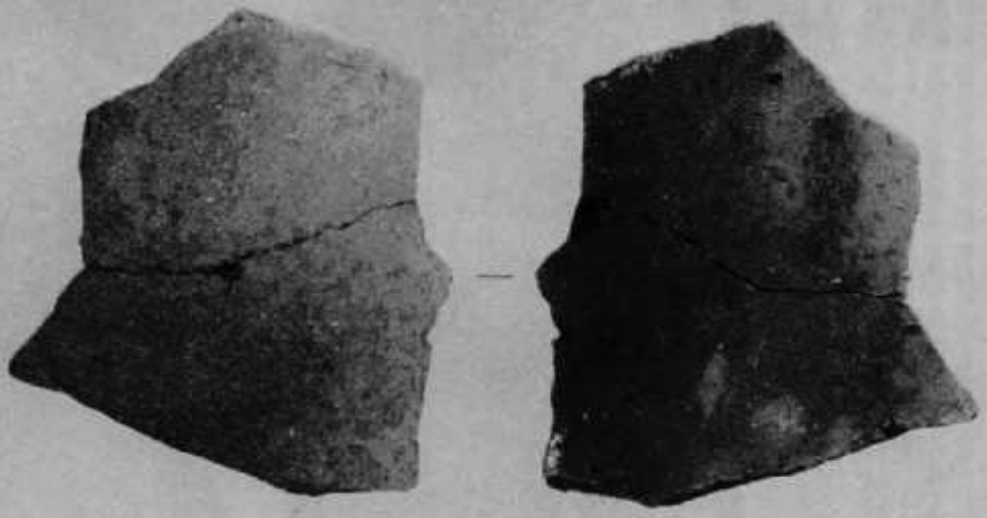
4号井戸址



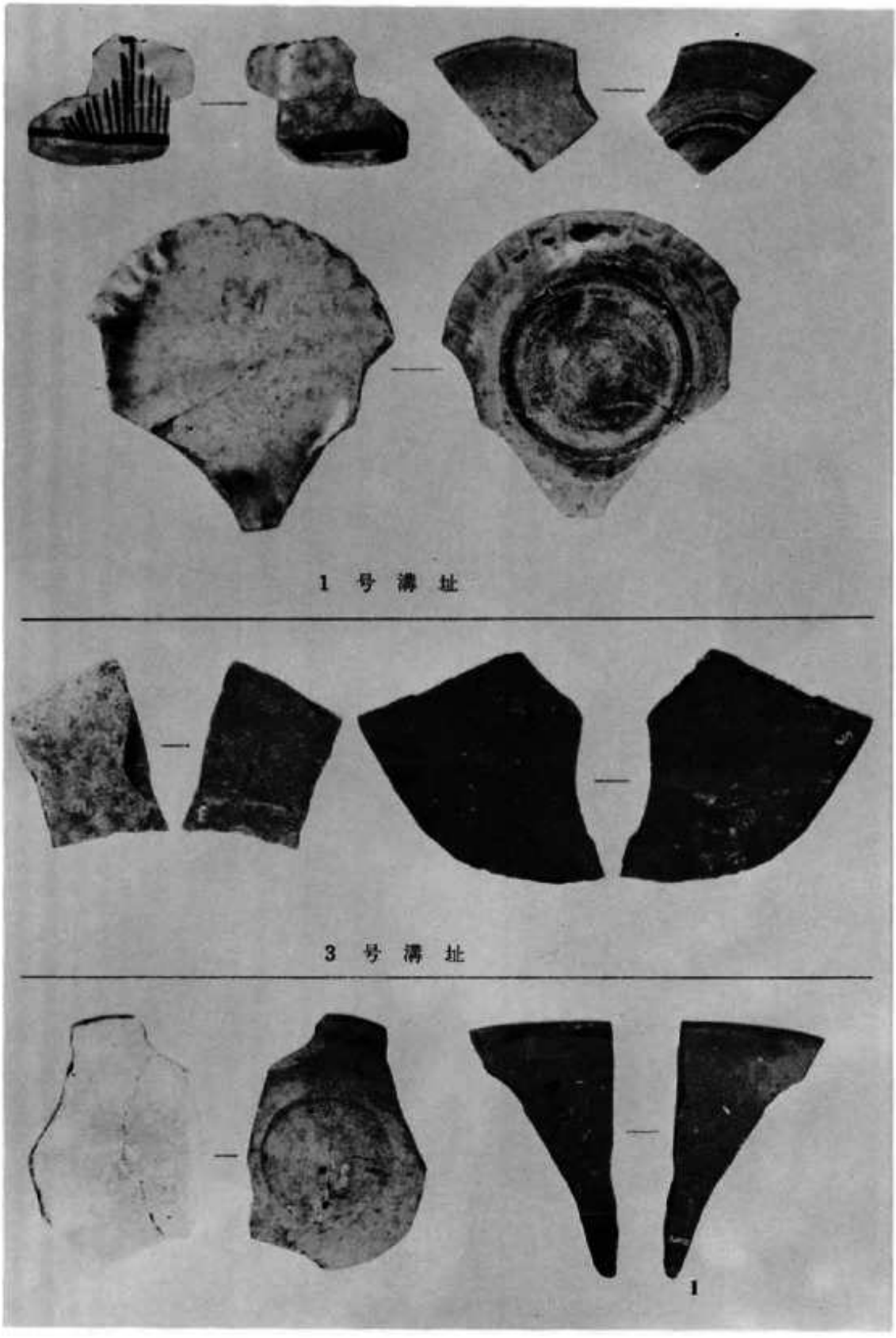
6号井戸址



7号井戸址

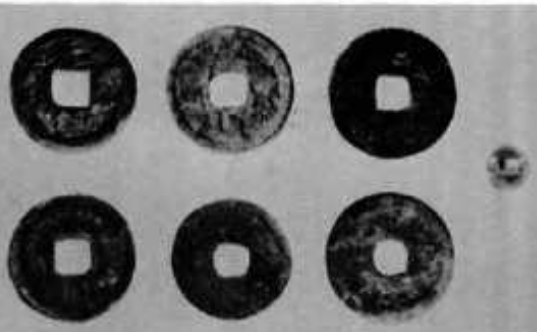


9号井戸址



5 号 溝 址

17 号 土 坑



27 号 土 坑

31 号 土 坑

1 号 溝 址

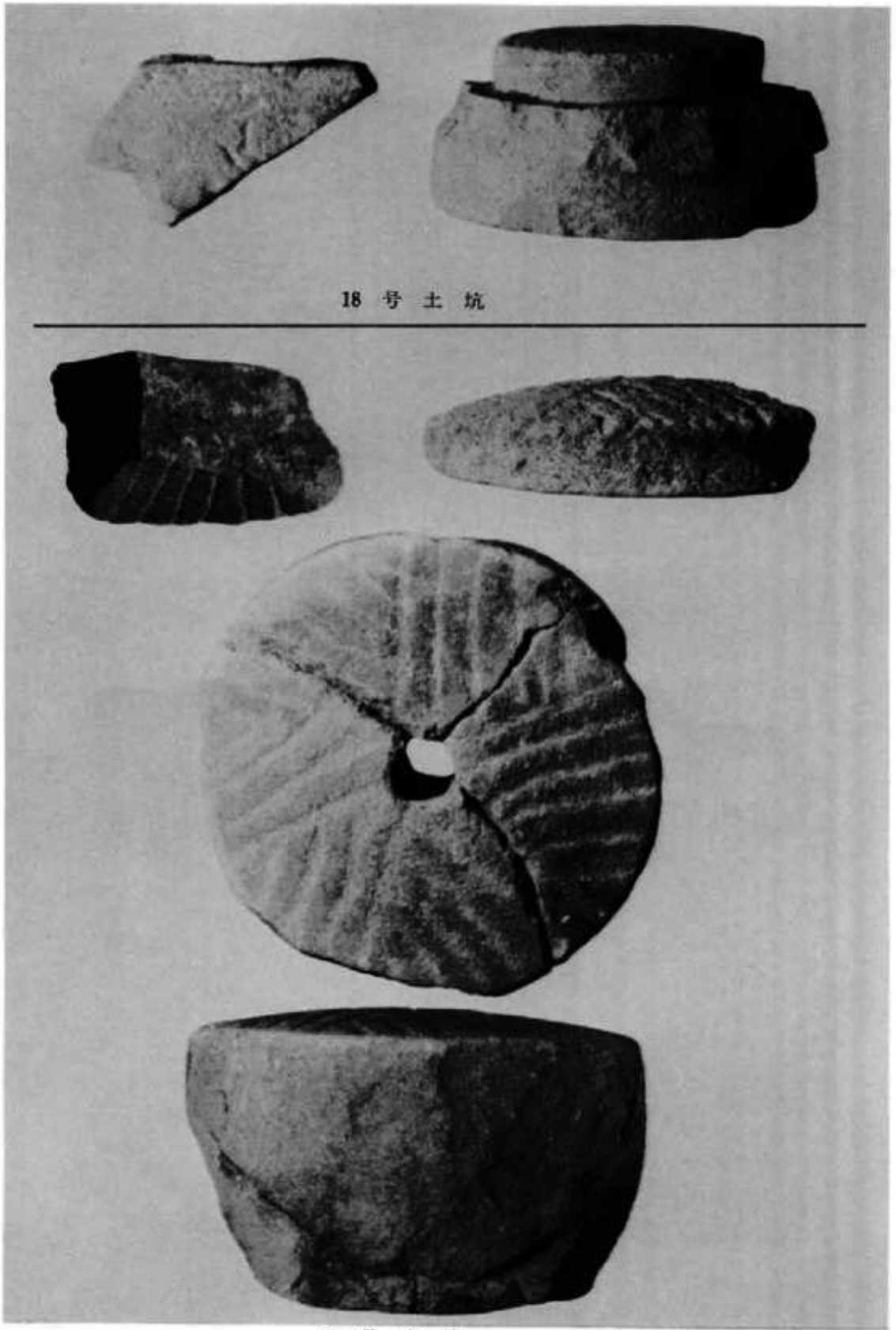
19 号 土 坑

1 号井戸址

6 号井戸址

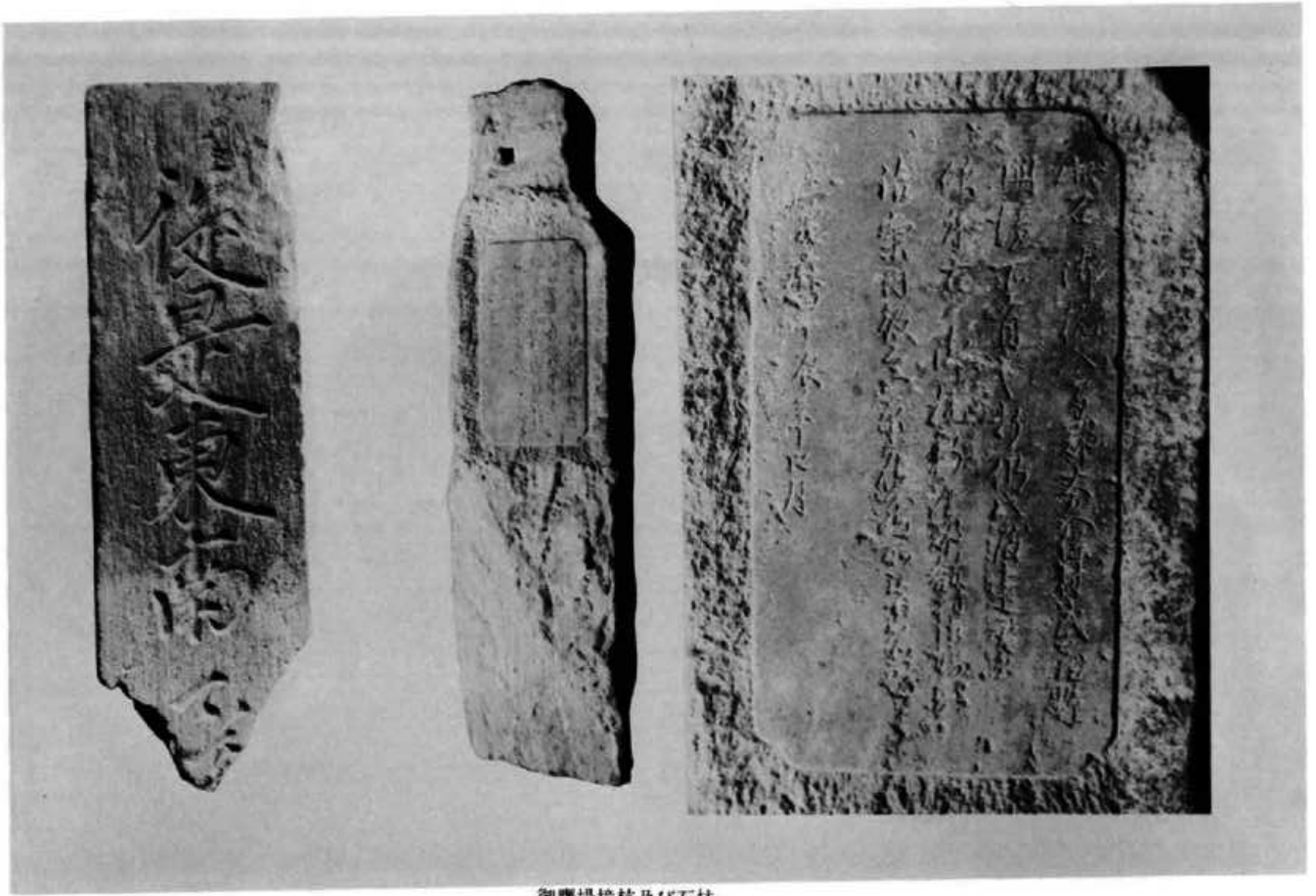
7 号井戸址

1 号 溝 址



18 号 土 坑

28 号 土 坑



御鷹場境杭及び石柱

志木市遺跡調査会調査報告第4集

城山遺跡発掘調査報告書

発　行　志木市遺跡調査会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日　昭和63年3月31日

印　刷　梅田印刷株式会社

H＝住居址
D＝土坑
W＝井戸址
M＝堰・溝址
T＝掘立柱建築遺構
20m